

恋姫無双～霸王の弟～

ホークス馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、華琳に優秀な弟がいたらのお話です。

恋姫無双で、魏が非常に好きで投稿しました。

とはいえ、こちらも更新が遅いと思いますので、ご了承ください。

※7／5 暫く修正するため、投稿を止めます。ご了承ください。

※7／10 修正完了致しました。

※1 / 6 完結しました。ありがとうございました。

目次

人物紹介

1話

2話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

10話

11話

1

5

12

20

28

40

46

64

72

90

112

126

1話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

10話

1話

2話

3話

4話

133

148

171

179

192

202

210

223

235

251

273

290

304

3 6 話	3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	曹 姉 弟 の 過 去	2 5 話

498 484 465 450 430 410 405 397 379 366 357 344 322

4 9 話	4 8 話	4 7 話	4 6 話	4 5 話	4 4 話	4 3 話	4 2 話	4 1 話	4 0 話	3 9 話	3 8 話	3 7 話

633 621 591 580 572 548 542 538 530 525 521 517 505

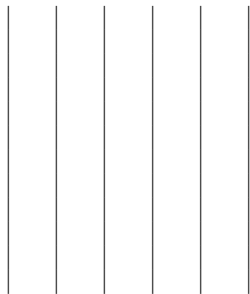
6 1 話
秋蘭の一日
6 0 話
5 9 話
5 8 話
5 7 話
5 6 話
5 5 話
5 4 話
5 3 話
5 2 話
5 1 話
5 0 話

770 766 755 739 728 717 709 698 690 685 681 674 654

7 4 話
7 3 話
7 2 話
7 1 話
7 0 話
6 9 話
6 8 話
6 7 話
6 6 話
6 5 話
6 4 話
6 3 話
6 2 話

883 878 867 862 846 838 831 824 820 811 806 794 781

最終話
79話
78話
77話
76話
75話



946 931 913 908 900 893

人物紹介

・曹和 字：子元 真名：純

曹家当主曹嵩の子である。華琳とは同じ年に生まれたが、腹違いであることと、華琳より1日遅く生まれたため、弟となった。

春蘭、秋蘭、華命、柳琳、榮華とは従姉妹である。

幼くして武芸、智略共に才気溢れており、特に武芸に関しては、他の追隨を許さないほどである。また、将兵の統率も非常に高い才能を有しており、彼の子飼いの兵も随一の精強さと結束力を誇り、後に魏の軍神と恐れられる。

また、一兵卒と共に苦勞を分かち合ったり、文官武官共に関わり、民とも接することが多く、また端正な顔立ちであるため、姉の華琳以上に人望が厚い。そのため、一時期華琳とは後継者問題で仲が悪かった（正確には華琳が一方的に張り合っていた）が、今は仲は改善されている。

得物は主に刀（むしろ日本刀）であるが、槍、戟、弓も扱えて、馬術も騎馬民族並みに操れる。最初の直属の家臣は秋蘭であったため、特に秋蘭と一緒にいる時間が非常に多い。

・曹操 字：孟徳 真名：華琳

曹家当主曹嵩の子である。純とは同じ年に生まれたが、腹違いであることと、生まれ
た日が純より1日早く生まれたため、姉となった。

春蘭、秋蘭、華命、柳琳、榮華とは従姉妹である。

英雄になり得る資質を持ち、霸王としての才器がある。

地位や身分に拘らず、才能ある者を見極め、適材適所にその人材を配置する能力に長
けており、その慧眼は天下一と言われている。

弟の純とは、一時期後継者問題で仲が悪かった（華琳が一方的に張り合っていた）が、
今は改善されている。恋愛感情は持っていないが、姉として主君として全幅の信頼を置
いており、自身にもしものがあれば、彼に従えと臣下に伝えてる程である。

・夏侯惇 字：元讓 真名：春蘭

夏侯家の娘である。秋蘭とは双子の姉であり、華琳、純、華崙、柳琳、榮華とは従弟
姉妹である。

武芸においては、華琳配下の中では、純に次ぐ強さを持ち、猪突猛進な性格も合わさ
り、常に先陣を切って突撃する姿から後に魏武の大剣と称される。

純に対しては、華琳同様恋愛感情は持っていないが、身内としても武人としても非常
に慕っており、いつか追いつき追い越したいと思っており、自身も鍛錬に励んでいる。

・夏侯淵 字：妙才 真名：秋蘭

夏侯家の娘である。春蘭とは双子の妹であり、華琳、純、華崙、柳琳、栄華とは従弟姉妹である。

武芸、智略共に秀でており、華琳、純と共に文武官をこなしどちらでも中枢を担える程である。

随一の弓の使い手であり、純も弓では秋蘭に負けると言わせる程である。その弓の腕が、純に認め、褒めて貰いたいの願いで、並々ならぬ鍛錬で身につけた事は本人しか知らない。

幼少の時から、純の直臣であったため、純に対して絶対の忠誠を誓っており、華琳に對しては、形だけの忠義である。しかし華琳はそれを受け入れている。

ただ、純に對しては、主従としてではなく、1人の女として純に想いを寄せている。

・曹仁 字：子孝 真名：華崙

曹家の1つに生まれる。柳琳の姉であり、華琳、純、春蘭、秋蘭、栄華とは従兄妹である。

天真爛漫であり、明るく素直である。まだ武人としては未熟であるが、純と春蘭の強さに憧れており、いつか2人のように強く頼りにされるような存在になりたいと思っ

ている。

・曹純 字：子和 真名：柳琳

曹家の1つに生まれる。華崙の妹であり、華琳、純、春蘭、秋蘭、榮華とは従兄妹である。

曹家一門の中では、比較的良識派であり、癒しの存在であり、我の強い面々が周りにいるため、気苦労が多い役回りである。

武芸はさほどでも無いが、彼女に心酔する最強の親衛隊『虎豹騎』は曹魏の中でも純の子飼いの兵に並ぶ程の強さを誇る。

純の事は、実の兄のように慕っている。

・曹洪 字：子廉 真名：榮華

曹家の1つに生まれる。華琳、純、春蘭、秋蘭、華崙、華華とは従兄妹である。

魏軍の輜重の全権を握る経理責任者の立場にあり、曹家の金庫番でもあるため、お金には非常にうるさい。

男嫌いであるが、純に対してはそういった感情を抱かず、実の兄のように慕っている。

1話

満天にどこまでも広がる青空の下、1人の少年が木の下で横になっている。

この少年の名は、曹和、字は子元、真名は純である。

真名とは、その人の誇りで相手が許可しない限りそれで呼ぶことが許されない名前である。

彼には同い年だが、腹違いかつ1日違いの姉がいる。その名は、

華琳「純！またそのような場所で横になって！」

彼女の名前は曹操、字は孟徳、真名は華琳である。そう、彼はあの三国志の英雄、曹操の弟である。ちなみに華琳は夏侯姉妹も連れている。

純「ああ、姉上。どうしたのですか？あつ、春蘭と秋蘭もいるし。」

春蘭とは、夏侯惇、字は元讓の真名であり、秋蘭は、夏侯淵、字は妙才の真名である。一応、赤い服で黒髪が春蘭、青い服で水色の髪が秋蘭である。

華琳「どうしたのですかじゃないわよ。また私塾を無断欠席して何してるの？」

純「別に良いじゃないですか。少しくらいずる休みしたつて。それに、今はもつと大切なことを考えていたんですよ。今現在のこの大陸の情勢を。」

華琳「……そう。」

そう言つて、華琳は純の横に座つたのである。

華琳「……確かにあなたの言うとおり、今の都はおろか大陸の情勢を見れば間違いないわね。」

純「でしょ。だから……」

華琳「でも、今はしっかり基礎を身に付けるべきよ。分かるでしょ。それにあなたは、私に匹敵するかそれ以上の才を持っているし、私以上に人を惹きつける魅力もあるわ。」

純「買いかぶりすぎですよ。」

華琳「そんなことはないわよ。ねえ、あなたたち。」

春蘭「はいっ!! 純様の強さは大陸一だと思えます!!」

秋蘭「私も姉者に同感です。純様の才は、一番だと思えます。」

そう言つて、華琳たちは純の才能を褒めた。

純「でもなあ……。」

華琳「それに分かっているとと思うけど、あの私塾に通つているのは名門の家系の子ばかり。そういった子達と縁を結んでおくのは大事よ。」

純「それは姉上がやれば良いじゃないですか。」

華琳「あなたはそうやって私を立てようとする。純、私はあなたにも私の隣に立つて

欲しいの。」

純「姉上、上に立つ者は1人です。2人は必要ありません。もしそのようになったら
いづれ曹家は2つに割れてしまいます。」

華琳「・・・そう。あなたは相変わらずね。」

純「でも、姉上の覇道を支えていきたいのは確かです。そこだけは分かってくださ
い。」

華琳「そう、分かったわ。それで、今日はどうするの?」

純「このまま帰ります。ちよつと体を動かしたくなつたので。」

華琳「そう。じゃあ、帰りましょう。」

純「はい。秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

そう言つて、純は立ち上がり、秋蘭は純の隣に行き、華琳たちと一緒に帰つたのであ
る。

その夜、純たち曹家一門で食事をしていたら、

華命「純兄ー! 今日私塾に行かずにどこに行つてたんすかー?」

柳琳「もう、姉さんったら食べ物をお口に入れたまま喋るのはやめて。」

栄華「柳琳の言うとおりですわ。はしたないですわよ華侖さん。お兄様が困っているではありませんか。春蘭さんも。」

春蘭「ふが？」

秋蘭「姉者……。」

純「ちよつと風に当たつてな。考え事をしてた。」

華琳「ええ。この大陸の情勢を考えながらね。」

華侖「そーなんすか？純兄は凄いつすねー！」

柳琳「姉さん。」

純「まあ柳琳。いつものことだから。」

柳琳「はい、お兄様。」

華琳「けど、純。明日はちゃんと私塾に出なさい。」

純「はあ、分かりました。」

華琳「ええ、それでいいわ。」

食後、

純「あつ、そうだ。秋蘭、この後大丈夫か？」

秋蘭「はい、大丈夫ですが、何か？」

純「ちよつと俺の部屋に来てくれない？お前にあげたい物があるんだ。」

秋蘭「はい、分かりました。」

そう言つて、秋蘭は純について行つたのである。

栄華「相変わらずお兄様と秋蘭さんは仲が良いですわね。」

華琳「ええ、そうね。」

純の部屋

純「さつ、入つて入つて。」

秋蘭「はい。それで純様。私にあげたい物とは？」

純「待つて。おつ、これこれ。」

すると純の手にあるのは、木箱だった。

秋蘭「これは？」

純「開けてみて。」

そう言われて、秋蘭は木箱を開けた。

秋蘭「これは、首飾り？」

純「そ。俺特製の。」

その首飾りには『秋』と彫つてある石がついてあつた。

純「受け取つてくれる？」

秋蘭「はい、ありがとうございます。」

そう言つて、秋蘭は首飾りを胸に抱きしめた。

純「どれ、付けてあげるよ。」

純は、秋蘭の手から首飾りを取り、秋蘭の後ろに立ち、首飾りを付け、鏡の前まで秋蘭の手を引いて促した。

純「うん、凄いい合つてるぞ。」

秋蘭の肩口から鏡をのぞき込みながらそう言った。秋蘭はそつと首飾りに手を触れて具合を見てみた。

秋蘭「ありがとうございます。大切にします。」

少し涙ぐみながら、秋蘭は礼を述べた。すると、後ろに純がいるため、純の匂いを感じ、心が安まったのか、秋蘭は振り返り、純の背中に手を回し、胸に顔を埋めた。

純「秋蘭？」

秋蘭「少しの間、こうさせてください。」

純は少し戸惑ったが、優しく受け入れ、秋蘭の頭に手を置き、撫でた。
翌日、秋蘭が首飾りを付けている姿を見て、皆が微笑ましく思ったのは内緒である。

2話

あれからしばらくが経ち、純たち曹一門は、苑州の陳留に住んでいる。

それは、純の姉である華琳が、陳留の太守になったからである。

そして、陳留の治安維持や財政回復、または、賊の討伐などを行った。そして今、陳留は、非常に住み心地の良い街になったのである。

そんなある日のこと、

副官「曹和様、引き揚げの準備が出来ました。」

純「ああ、分かった。引き揚げるぞ！」

副官「はっ！総員、撤退だ！」

純「それと、姉上に使いを送れ。全て完了したと。」

副官「御意！うん？曹和様、あちらに賊に襲われてる者がおります。」

純「本当だ。すぐに助けるぞ！」

副官「御意！」

??「はあ、はあ、はあ、風もう少し速く走れないのですか？じゃないと追いつかれま

すよ!」

眼鏡をかけた少女が頭に人形を乗せてある少女に必死に言った。

?? 「そんなこと言われても、キャ!」

すると、頭に人形を乗せてある少女が転んでしまった。

?? 「風!」

眼鏡をかけた少女が駆けつけたが、その時には彼女らを追っていた連中が追いついていた。

賊A 「やつと追いついたぜ。ほらさつきとオレ達と着いてきな。」

?? 「嫌!」

眼鏡をかけた少女が抵抗してるが、腕を捕まえられ身動きできなくなった。すると、

賊B 「おい、大変だ!! 後ろから官軍らしき集団が来たぞ!!」

賊A 「何!! くそ、なかなかの上玉だって言うのに。おい、逃げるぞ。」

賊B 「ああ!!」

そう言つて、2人の賊は2人の少女を置いて逃げていったのである。

副官 「曹和様。賊は逃げたようですな。この2人を置いて。」

純 「そのようだな。2人とも、怪我はなかったか?」

?? 「ええ。危ないところでしたが、ありがとうございます。」

?? 「はい。おかげさまで。」

?? 「もし宜しければ、あなたの名前を聞いても宜しいでしょうか？」

純 「いいが、まずは自分から名乗るのが筋じゃないか。」

?? 「失礼しました。私の名前は戯志才。そしてこつちが」

?? 「程立ともうします。」

すると、

純 「戯志才とやら、その名は偽名だろう？」

稟・風 「!?!」

すると、2人は驚愕の表情を浮かべた。

稟 「な、何故！偽名だと……！」

純 「だって、自分の名前を言う際、一瞬思考する素振りを見せたじゃん。」

稟 「そ、それは……。」

彼女は動揺した。しかし、

純 「まあ、このご時世だ。偽名を使わねばならん理由があるのだろう。俺は気にして

ねーから。」

稟 「そ、そうですか……。」

そう言った戯志才であったが、目の前の男の雰囲気流すことが出来ないでいる。す

ると、

風「それで、お兄さんの名前は？」

純「ああ、すまん。俺の名は曹和、字は子元だ。」

稟「あなたがあの曹和様ですか!!」

純「おお、そうだが。」

戲志才の驚きように純は戸惑う。すると程立が戲志才をからかうように言った。

風「稟ちゃんは曹和様の噂を耳にして、ずっと興味を持っていましたからー。その本人に会えたのがとても嬉しいのでしよう。」

稟「ちよつ、風!!」

すると、戲志才が顔を真っ赤にしながら止めようとした。

純「でも、俺より姉の曹孟徳の方に興味に向くと思うんだけどなー。太守でもあるし。」

稟「いえ！確かに曹操殿も素晴らしいお方ですが、その弟君である曹和様は、遙かに素晴らしいお方です!!なぜなら、曹和様は幼くして、智と武において圧倒的な才能を見せ、部下の統率力にも長けている。まさに覇者の器たるお方!!」

純「分かった分かった。まあ落ち着いて。」

風「稟ちゃん。いくら憧れの方に出会えたからって、ちよつと興奮しすぎなのですよ

く。」

稟「ごほん。失礼致しました。」

純「まあ、何だ。俺これから陳留に帰る予定なのだが、お前達は どうするの?」

稟「はい。もし宜しければ、私をあなた様の軍師として雇っていただけませんか?」

風「稟ちゃん、抜け駆けはするいですよ。風も曹和様について行きますよ。」

純「いいのか。俺、太守でもねーんだぞ。」

稟「はい、それでもかまいません。」

風「風もですよ。」

純「そっか……。分かった。じゃあ改めて、歓迎する。俺の真名は純だ。宜しく。」

稟「ありがとうございます。では改めまして、私の名は郭嘉、字は奉孝と申します。真名は稟です。」

風「風の真名は風なのです。それとこの際、名を程立から程昱と名を改めます。日輪を支えるという意味で。」

すると稟が、

稟「風、それって。」

風「はい。風、先日夢を見ました。それは、風の目の前に太陽が落ちてきて、それ

を風が持ち上げる夢です。これは風が純様という日輪を支えろというお告げだと思います。」

稟「まさか、風も私と同じ夢を見るとは……。」

風「おお、稟ちゃんもですか？」

稟「はい。私も風と同じです。私が日輪を持ち上げる夢を。」

2人が驚きと興奮で言葉が告げられなくなっていたので、純が

純「分かった。2人の真名、受け取ろう。では、共に陳留に行こう。」

稟「はっ!!」

風「はい。」

純「つと、その前に。おい、誰か。」

兵士A「はっ!」

純「道中、軍師を雇ったと姉上たちに伝えておいてくれ。」

兵士A「御意!」

純「よし、行くぞ!!」

そうして、純たちは陳留に向かったのであった。新たな仲間を加えて。

場所は変わって、陳留。

華琳「純からの報告は？」

秋蘭「はい。全て滞りなく完了したとの知らせが。」

華琳「そう。相変わらずね、純は。」

春蘭「流石純様です！」

華命「純兄、また手柄挙げたんすかー!! 凄いっすー!! そうっすよね、柳琳!!」

柳琳「ええ、そうね姉さん。」

栄華「しかし、こうも遠征ばかりでは、お兄様の負担が掛かりすぎのような気がしますが……。」

華琳「それは仕方が無いわね。純に全て押しつけるつもりはないけど、我が軍で最も戦に長けているのは純なのだから。それに純がこうして引き受けてくれるからこそ、私は国事に集中できるわ。」

栄華「そうですね。」

秋蘭「それと華琳様。もう一つ報告が。」

華琳「何かしら？」

秋蘭「道中、軍師を雇ったとの事です。」

華琳「そう、分かったわ。」

秋蘭「はっ。」

すると、

栄華「お姉様。それって、まさか……。」

華琳「ええ。あなたが考えてる通りね。私の予想だと、そこにいる秋蘭同様、純以外の命令は聞かないかもしれないわね。」

栄華「やはり……。」

華琳「でも、構わないわ。純の為に働くというのならばね。」

栄華「そうですね。」

華琳「さて。純が帰ってくるまで、私達は出来ることやりましょう。それに紹介したい子もいるし。」

そう言って、1人の少女に目を向けた。

香風「？」

華琳「では、解散!!？」

そう言って、解散となった。

3話

謁見の間

兵士A「申し上げます。曹和様、城門前に着きました。」

華琳「分かったわ。城門を開けなさい。」

兵士A「はっ!!」

そう言つて、兵士は下がった。

秋蘭「華琳様。迎えに行つても宜しいでしょうか?」

華琳「良いわ。あなた、待ちくたびれたでしょう?」

秋蘭「はっ。ではすぐに。」

そう言つて、秋蘭は城門に向かった。

城門前、

純「着いた着いた。」

稟「これが陳留ですか。」

風「曹操さんの政が善いことが伝わりますね。」

すると城門が開き、出迎えたのは、

秋蘭「純様。お帰りなさいませ。」

秋蘭であった。

純「ただいま、秋蘭。いつもそうだが、わざわざ出迎えに来なくても良いんだぞ。」

秋蘭「いえ、私にとって、純様は私の主でもありますので。」

純「そっか。でも、お前の主は今は姉上だ。そこは、はき違えるなよ。」

秋蘭「御意。」

純「そうだ。着いてからも紹介するが、軍師を2人雇ったから。稟、風、自己紹介しな。」

稟「はっ！」

風「はい。」

そう言つて2人は秋蘭の前に立ち、

稟「お初にお目に掛かります。私は郭嘉、字を奉孝と申します。」

風「風は程昱、字を仲徳と申します。」

秋蘭「そうか。分かつた。私は夏侯淵、字を妙才、真名を秋蘭と言う。以後宜しく頼む。」

稟「真名まで。宜しいのですか？」

秋蘭「ああ、純様と真名を交換したのだろう。なら私も交換せねば不公平だ。」

稟「はい！私の真名は稟です。」

風「風は風ですよ。」

そう言つて、3人は真名を交換し合つたのであつた。

謁見の間

純「姉上、ただいま戻りました。」

華琳「秋蘭、出迎えご苦労だつたわね。」

秋蘭「はっ。」

華琳「それで純、首尾は？」

純「万事滞りなく。暴動を鎮圧致しました。」

華琳「そう。流石ね。よくやったわ。」

純「ありがたき幸せ。しかしそれらは全て俺の部下の働きのおかげです。」

華琳「そう。相変わらね、純。」

純「ところで姉上、遣いの者から聞いたと思いますが、軍師を雇いましたので、その紹介をしたいのですが。」

華琳「構わないわ。」

純「ありがとうございます。稟、風、前に。」

そう言つて、秋蘭の時と同様、前に立ち、

稟「私の名は郭嘉、字を奉孝と申します。」

風「風は程昱、字を仲徳と申します。」

華琳「そう。今後とも純をしつかり支えていくように。私は曹操、字を孟徳、真名は華琳よ。」

風「はい。風は風と申します。」

しかし、

稟「私は純様に忠誠を誓っております。曹操殿には申し訳ありませんが、真名を預ける気にはなれません。」

そう言って、稟は華琳を睨むような視線で対応した。

栄華「なっ!!」

春蘭「貴様ーっ!!」

稟が華琳に対しての対応に、栄華や春蘭は激怒したが、

純「よせ!!春蘭!栄華!」

純が覇気のもった一声で黙らせた。

春蘭「し、しかし・・・。」

栄華「この方は、お兄様に恥をかかせただけでなく、お姉様に対して無礼を働いたのですよ。」

純「言いたいことは分かる。今は下がれ。」

春蘭「は、はい。」

栄華「承知致しましたわ。」

そう言って、2人は渋々下がったのであった。

純「申し訳ございません。姉上。」

華琳「構わないわ。純の為に働くというのなら。」

純「はっ、ありがとうございます。それと、姉上の方も紹介したい子がいると聞きま
したが…。」

華琳「そうだったわね。香風、前へ。」

そう言われて、1人の少女が、純の前に立った。

香風「シヤンは、姓は徐、名は晃、字は公明、真名は香風です。」

純「ほう。徐晃って、あの徐晃か。姉上、なかなかの逸材を見つけましたね。」

華琳「ええ。ただの偶然なんだけどね。」

純「そうですか。では、俺は曹和、字は子元、真名は純だ。以後よろしく。」

香風「はい。宜しくお願いしまゝす。」

華琳「それで、褒美なんだけど。」

純「それでしたら、俺の部下にお与えください。」

華琳「そう。分かったわ。」

純「はい。ではまた後で。」

すると、

秋蘭「純様。」

そう言つて、秋蘭は腕を絡めてきた。

純「お、おい秋蘭。今の俺、汗臭いぞ。」

秋蘭「構いません。私は気にしませんので。」

純「つたく……。しよーがねーな。」

すると、

稟「ああ、純様はこれから秋蘭様と……ぶうくくく。」

純「えっ、稟!」

秋蘭「何と……!」

華琳「何っ!」

稟が突然何かつぶやいたかと想うと、盛大に鼻血を出して、倒れてしまったのであった。他の皆も呆然としている。

風「おお、とうとう出ましたか。」

純「風、コレは一体。」

風「稟ちゃんは妄想が過ぎると鼻血を出す体質でして。稟ちゃん、トントンしますよ。トントン。」

稟「ふが……、風ありがとうございます。純様、そして皆様もお恥ずかしいところをお見せしました。」

純「いや、大丈夫なら良いよ。」

稟「ありがとうございます。その……。」

純「稟、どうしたの?」

稟「いえ……、その……。」

風「稟ちゃん、自分の体質で純様に嫌われてしまうと想ったのですよ。」

稟「ちよつと！風！」

純「その程度、気にしないから安心して稟。」

稟「はい、純様。」

すると、秋蘭が純の腕をつねってきた。

秋蘭「純様……。」

純「ちよつ、ちよつと秋蘭!!腕が痛い！痛いから！」

と、謁見の間であつた話なのであつた。

4話

純の部屋

純「なあ、稟。」

稟「なんですか、純様？」

純「・・・いや、なんでもねー。」

稟「なら、手を動かしてください。」

純「ああ。」

謁見の間での出来事から数日後、今純は事務処理を行っている。そして目の前には先日軍師となつた稟がいる。

どういう訳か、稟は華琳とは仲が悪く、未だに真名を交換していない。もう一人の軍師である風はあの時華琳と真名を交換したが、稟はまだだ。一悶着あつた春蘭と栄華とは真名を交換している。

純「なあ、稟。」

すると、

文官A「曹和様。曹操様がお呼びです。すぐに謁見の間まで。」

純「分かった。稟行くぞ。」

稟「はい、純様」

謁見の間

純「姉上、お呼びでしょうか。」

華琳「来たわね、純。あら、郭嘉も来たの。」

稟「ええ。純様と一緒にしたから。」

華琳と稟の会話が始まった途端、周りの空気が重くなった。丁度華琳の傍にいた秋蘭も、

秋蘭（またか・・・。）

と呆れていた。

純「それで、何のようですか？」

華琳「ええ。実はこれなんだけど。」

純は、華琳に渡された書類を見た。

純「これは警備報告書。当然治安維持には努めておりましたが、それでもかなりの事

件数ですね。しかも昨日現場に行けた警備隊は半分以下……。」

純「それで、これを俺にですか。」

華琳「ええ。あなたに任せたいの。仕事を増やすようで申し訳ないけど。」

純「……稟。明日の分任せても良いか？」

稟「私は純様が命じられれば構いません。」

純「助かる。姉上、警備隊の件、引き受けましょう。ただし条件があります。」

華琳「条件？何かしら？」

純「はい。それは俺を明日から警備隊に入れて欲しいのですが。数日で良いので。」

華琳「それはどうして？」

純「実際に現場に行ってみないと分からないこともあるので。ましてや触れてない案件なので尚更。」

華琳「分かったわ。秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

華琳「警備部隊長に、明日から10日間、純を警備隊に入れることを報告しなさい。」

秋蘭「御意。」

華琳の命令を受けた秋蘭は、すぐさま近くの兵に報告に向かわせた。

純「では、これにて。まだ少し仕事が残っているので。」

華琳「分かったわ。それと水路工事の視察の報告は。」

純「朝に風が視察に行ったので、明日には報告が出せると思います。」

華琳「そう。なら良いわ。」

純「では、また後で。稟行くぞ。」

稟「はい、純様。」

そうして、2人は謁見の間を後にしたのであった。

華琳「秋蘭。あなたは郭嘉に焼き餅を焼いているのかしら。」

秋蘭「そのようなことはありません。稟は共に戦う仲間。それ以外の何物でもありません。」

華琳「・・・そう。なら良いわ。」

秋蘭「はっ。」

このとき華琳は、秋蘭の僅かな感情の揺れを密かに感じたのであった。

翌日、

純「えー、今日から10日間警備隊員として働くことになった曹和だ。宜しく頼む。」
純の挨拶が終わると警備隊員の皆が動揺していた。

隊長「そういうことだ。曹和様は警備隊の改善をするために来てくださった。」

隊員「はあくっ！」

隊員達はあまり納得していなかった。

隊長「よし、これより警邏を始める。」

隊員「はっ!!」

隊長の一言で警邏が始まった。

夜

純「ふう〜。」

稟「お疲れ様です。」

純が椅子に座ると、稟が濡らした布を持ってきてくれた。

純「おお、ありがとう稟。それと風、頼んだことやってくれてる?」

風「ぐう〜。」

稟「起きなさい、風。」

風「おお!」

純「おはよう風。で、頼んだことは?」

風「えくとですね。孫策さんですが、孫堅さんの死後今は袁術さんのところで客将になっていきます。孫策さんの所の将達も袁術さんの命で散り散りになっていきますので、現在孫策さんの所にいるのは軍師の周瑜さんと陸遜さん、将は黄蓋さんと程普さん、そして太史慈さんだけです。」

純「そっか。」

稟「純様。どうして、この者達の情報など。今はどう見ても袁紹と袁術の袁家の2人の方では。」

純「これは秘密だが、俺は過去に孫策を見たことがある。といつても、俺は彼女とは実際に話したことはねーがな。俺が見たときは、まだ孫堅は生きていたが、孫堅はあの当時から凄まじい武勇を持っていた。『江東の虎』の名に相応しい程のな。その娘の孫策も、その虎の娘に相応しい器の持ち主だった。今は袁術の下にいるが、あのまま終わるような奴ではない。そして、その者の側には、周瑜、陸遜、黄蓋、程普、太史慈、また張昭という者もいる。これは将来いずれ大きな敵になると思ったからね。」

稟「なるほど。」

純「うん。風はそのまま情報を集めてくれ。稟は北方あたりで少し情報を集めてくれないか。」

稟「分かりました。情報が入り次第、報告致します。」

風「了解です。それで純様。」

純「ああ、はい。約束の飴。」

純は風に飴を渡した。

純「そうだ。稟、明日って空いてる？」

稟「え、明日ですか？」

純「うん、明日。」

稟「明日でしたら昼ごろには仕事も終わると思うので、午後でしたら。」

純「だったら明日の午後、俺と一緒に警邏に出ないか？」

稟「じ、じ、純様と一緒に、ですか!？」

純「うん。稟から見た警邏についての意見も聞きたい。嫌か？」

稟「べ、別に嫌ではありませんが、その・・・、ふ、2人きりですか？」

純「うん、2人で。」

純（秋蘭同様、いつも冷静だから。なんかこういうの、可愛いな・・・。）

純がそう思っていると、

稟「あ、ああ・・・。」

純「えっ、稟？」

稟「ぶう~~~~。」

純「り、りくくくん！」

稟「ああ、純様は私を……。」

純「何言つてんだ稟は。おい風、稟の鼻血を止めてやって。」

風「ぐう。」

純「起きろ！」

風「おお。純様が稟ちゃんを口説いている現実から逃げるために寝てたのですが。」

純「口説いてねーよ。速く稟を助けてあげて。」

宝慧「おいおい、さつき可愛いなんて言ったのはどの口だ。」

風「こら宝慧。純様はそんなこと一言も言つてないですよ。」

純（何故心が読めた……。）

風「そりやく風は一流ですから。」

純「悪い。人の心を読まないでください。」

その後、風は稟の鼻血を止めそのまま部屋を出たのであった。

翌日、昼

純「稟いる〜？」

稟「あ、はい。純様」

純「丁度良い。昨日話した警邏の件だけど、大丈夫？」

稟「はい、大丈夫です。」

純「じゃあ、行こうか。」

稟「はい。」

警備隊詰所

稟「それで昨日の今日ですが、警備隊の改善案はどのようなものですか？」

そう言われた純は、陳留の街の地図を広げた。

純「えーと、まずここに4町から5町毎に警備隊の詰所があるだろ。これを1町毎に作って、兵を常駐させ、瞬時に対応できるようにする。そうすれば事件が起きてもすぐ駆けつけられるようにできるだろ。」

稟「確かに良い案ですが、それだと人手も経費もかなり必要になります。」

純「それは、募集しかないと。それと、ここの警備員は愛想が無さ過ぎ。もう少し街の人々と触れ合うべきだと思う。そうじゃないと、街の人たちが道を聞きたいとき、何か落とし物を拾ったとき、怖くて聞きにくいと思う。」

稟「確かにそうですが、どうすれば良いのですか？」

純「そうだな。まずは、挨拶からかな。」

稟「挨拶ですか？」

純「うん。挨拶するしないで大きく違うと思うんだよ。だからまずは挨拶かな。街の
人との距離を縮めるには。」

稟「そんなものなのでしょうか。」

純「そうだと思うよ。よし、それじゃあ、行こうか。」

稟「はい。」

こうして、純と稟は街のあちこちを歩き回った。子供達が純を見つけると、

子供A「曹和様だ。」

子供B「曹和様、遊ぼ。」

と近寄ってきては純に抱きついてくる。それを見ていた稟だったが、純が、
純「あのお姉さんも一緒に遊んでくれるよ。」

と言い、子供達が近寄ってきたので少々困っていた稟であった。

一刻後、

純「どうだった。子供達と遊んでみて。」

稟「そうですね。楽しかったですよ。この街がどれだけ平和なのかよく分かりましたし。」

純「そうだろ。あの子達の笑顔を見ると、この平和がこれからも続くように俺は頑張ろうと思うんだ。」

稟「私も同じ意見です。だから、あなたについて行こうと決めたのですよ。純様。」

純「ありがとう、稟。」

それから2人の警邏は何事もなく終わっていったのであった。

そして、期日の10日が経った。

謁見の間

純「これが、俺の考えた改善案です。」

華琳「へえ、どこにそれを設置するかも詳しく書いてあるし、よくやったわ。」

純「ありがとうございます。」

華琳「ねえ純。この改善案、私が頼んだときには、ある程度考えていたでしょう？」

純「はい、そうですが。」

華琳「なら何故警備隊に入りたかったのかしら？」

純「その理由は2つあります。まず1つは、詰所の設置場所を何処にするか、2つめは、警備隊員には、街の人達と距離を縮めて欲しかったからです。」

華琳「1つめは分かったけど、2つめはどういう意味かしら？」

純「はい。警備隊には、街を守るだけでなく、その街の案内などして欲しかったので。それにはまず、街の人と距離を縮め話しやすくしないといけない。だから警備隊に入つてそれを教えたかったのです。」

華琳「そう、それなら良いわ。ご苦労だったわね。」

純「はっ。」

華琳「また、警備隊に関してはおあなたに任せるわ。仕事は増えるかもしれないけど、頼むわね。」

純「はっ。お任せください。」

そして、純は警備隊の隊長も兼任したのであった。

5話

ドカン

純「な、なんだっ!？」

突然ノックも無しに部屋の扉が開けられ、驚いた純。足音高く入ってきたのは、

春蘭「純様!私と手合わせをして下さい!」

春蘭であつた。

純「春蘭。今日は警備隊の仕事があるから無理だぞ。」

春蘭「大丈夫です。華琳様の許可を得ましたので。」

純「そうなのか?」

すると、

華琳「ええ、そうよ。」

純・春蘭「姉上／華琳様。」

華琳が秋蘭と一緒に入ってきた。

華琳「春蘭が久しぶりに手合わせしたいって聞かないのよ。」

純「そうなのですか。」

華琳「ええ。」

純「秋蘭も見たいの？」

秋蘭「ええ。私も純様の武を久しぶりに見たいです。」

純「そっか……。分かった。勝負を受けよう。どこまで強くなったか見てやるよ。」

春蘭「はっ！」

そして、中庭に行き、純と春蘭はそれぞれ得物を構えた。

華琳「2人とも良いわね。」

純「大丈夫です。」

春蘭「はい。」

華琳「では、はじめ！」

純・春「はああああーっ!!」

ガチン

両者の刃と刃がぶつかり合った。

春蘭はもう一度剣を振り抜いたが、純はそれを受けず、後ろに下がり、次々に来る春

蘭の攻撃をあしらっていた。

華琳「相変わらずの強さね。」

秋蘭「はい。しかし、純様の強さはまだまだです。」

華琳「そう。貴女がそう言うのならそうでしょうね。」
すると、

稟「どこにいるかと思えば、ここにいましたか、純様。今春蘭様と手合わせですか。」
風「そうですね。噂では聞いておりましたが、ここまでの強さだとは。」

華琳「あら、風に郭嘉。あなた達も来たの。」

郭嘉「はい。純様に報告したいことがありましたので。」

華琳「・・・そう。」

秋蘭「・・・またか。ここまで徹底するとは。私以上だな・・・。」

風「そういえば、純様が皆を、特に秋蘭ちゃんの為にもっと強くなるって言ってますね。」

秋蘭「それは本当か？風？」

風「はい。純様は自分に関わる全ての人、特に秋蘭ちゃんを守るためにもっと強くなるんだって言ってましたよ。」

秋蘭「・・・そうか。」

その時秋蘭の顔が少し赤くなったのであった。それを見た稟は、胸が締め付けられるような思いがした。

華命「ああーっ！純兄と春姉えの手合わせっすかー!!」

柳琳「姉さん。あまり大声を出さないで。」

栄華「柳琳の言う通りですわよ。」

香風「あつ、純様と春蘭様だー。」

華命と柳琳、栄華、そして香風もやって来た。

華琳「あら、あなた達も来たのね。」

栄華「はい。中庭で金属音が聞こえたので。」

華命「それでそれで、どっちが勝ってるんすかー!？」

華琳「今のところ、両者互角ね。しかし、純はまだ底を見せてはいないわね。」

華命「そーなんすかー。」

香風「シヤンも手合わせしてみたい。」

そして、手合わせにも終わりが近づいてきていた。

春蘭「はあ、はあ、はあ。」

純「どうした春蘭。もう終わりか？」

春蘭「ま、まだやれます。」

純「そうか。しかし、次でけりを付ける。」

そう言つて、純は刀を鞘に収めた。

春蘭「何のつもりですか、純様。」

純「良いからかかって来な、春蘭。」

春蘭「なら!!」

そう言つて、春蘭が剣を振り上げた途端、

カチヤ

春蘭の首には、純の刀が突きつけられていたのであつた。

春蘭「な！」

純「俺の勝ちだ、春蘭。」

華琳「そこまで!!」

そう言われて、純と春蘭は得物を下ろした。

春蘭「ううう。もう1回やりましょう、純様。」

純「ダメダメ。俺今から警備隊の仕事があるから。」

春蘭「はい・・・。」

純「しかし、また腕を上げたな春蘭。流石だ。これからも励めよ。お前はまだまだ強くなれる。」

春蘭「はっ!!精進してまいります!!」

そう言つて、春蘭は拱手した。

華琳「流石ね2人とも。純、相変わらざるの強さね。」

純「恐れ入ります。しかし、春蘭も腕を上げました。あいつも褒めてやって下さい。」
華琳「ええ、分かったわ。春蘭、負けたとは言え、良くやったわ。これからも励みなさい。」

春蘭「はっ!!」

すると、

華命「純兄！春姉え！凄いつすー!!あたしも2人みたいにもっと強くなるつすー!!」

純「はは。期待してるぞ!!」

秋蘭「純様、こちらを。」

秋蘭は、純に手拭いを渡した。

純「おつ、気が利くなあ秋蘭。」

純は手拭いで汗を拭った。すると、

稟「純様。警備の仕事前に少し報告したいことが。」

純「ああ、分かった。じゃあ秋蘭、これ洗って返すね。」

秋蘭「はっ。」

そう言つて、純と稟は中庭を後にしたのであった。

春蘭「しかし、後もう少しですね。」

純「そうだな。多分、俺1人だと流石にキツかったかも。ありがとな、春蘭。」

春蘭「いえ、とんでもありません！華琳様か純様のご命令だったら、例え火の中水の中どこへでも！」

純「ははっ！頼もしいな。よし、次行くぞ！」

春蘭「はっ！」

陳留城内

秋蘭「そちらの整理は後で構わん。まずは必要なものを必要な場所へと整えろ！もう時間がないぞ！」

兵士B「はっ！」

兵士C「夏侯淵様、城内の兵の配置計画が上がってまいりました。ご確認ください。」

秋蘭「分かった。・・・ほう、これは見事なものだな。最低限の人数で必要な所に配置出来ている。栄華の仕事か？」

兵士C「いえ、曹洪様はお忙しいとのこと、曹和様の軍師の郭嘉様が・・・」

秋蘭「・・・なるほど、あいつか。ならばそれは純様と姉者にも回しておいてくれ。急

げよ。」

兵士C「はっ！」

栄華「まったくもう……。」

栄華「どうして皆さん、何でもかんでもこんな急に言ってきましたの。私だって、別に暇ではありませんのよ……。」

栄華「ほら、準備を急いでくださいまし！方に一つにでも失礼があつては、この陳留……、ひいてはお姉様とお兄様のお名前に傷が付きましてよ！」

女官A「かしこまりました！」

柳琳「栄華ちゃん。ちよつとお姉様について、街に出てくるね。」

栄華「分かりましたわ。護衛は？」

柳琳「私の警護のみんながいるから大丈夫。」

栄華「あ、ああ……、あのかたたちですね。なら、気をつけて行つてらして。」

柳琳「うん。お昼頃には戻るから。」

栄華「……ふう。時間もお金も人手も何もかも足りませんわ。どうしてこう予定のない事ばかり起きるんですの。」

華命「あ、香風！探したつすよー！」

香風「華命様、どーかした？」

華命「今日つてなんでみんなこんなバタバタしてるんすか!？」

香風「・・・シヤンも聞こーと思つた。」

華命「香風も分かんなかつたんすか？」

香風「今日、朝から良いお天気だったから・・・、ふああ。
すると、

稟『沛国の相が謁見を求める。もう済陰に逗留。至急行かせて欲しい。』ですよ、あなたちたち。」

その時後ろから平坦な声だったので振り返つてみると、稟と風がいた。

香風「稟・・・、風・・・。」

稟「まったく、大事な朝議を何一つ聞いておらず、理解していないとはどういうこと
です！華命殿に至つては純様と同じ曹家の一門！もう少ししっかりしてはどうです
か。」

華命「うう、稟が怖いっす。」

稟「香風！あなたは朝議の最中に寝るなど、あるまじき行為ですよ！」

香風「うゝ朝から良いお天気だったからつい……。」

稟「つい、じゃありません！」

香風「うゝゝつ。」

ぐうの音も出ない正論であつたので、何も言えない香風。

風「まあ稟ちゃん、それくらいにしたらどうですか。」

宝慧「そうだぞ姉ちゃん。あんまり怒りすぎると小じわが増えてしまうぜ。」

稟「何を行っているのですか、風！」

風「風が言ったわけではないですよ。稟ちゃん、最近純様とお話しできていないか

らって、イライラしては駄目ですよ。」

稟「誰がイライラしてるか！」

風「違うんですかー？」

稟「うっ……。まあ、そうですね……。」

風「ぐゝゝゝ。」

稟「寝るな！」

風「おお。珍しく稟ちゃんが素直だったのてつい……。」

華命「えっと……、つまり、稟は純兄の事が好きなんすか？」

稟「えっ!?それは、その……。」
すると、

栄華「何廊下の真ん中で騒いでますの!?こんな所で油を売って!」

栄華「……相をお迎えする支度に手が足りませんの。この際猫の手でも構いませんから、手伝ってくださいまし!」

香風「はい。」

華命「分かったつすー!」

稟「すいません、栄華様。私と風は、純様に頼まれた仕事があるので。」

栄華「そうですか。分かりましたわ。後、城内の兵の配置計画、ご苦労でしたわ。」

稟「はっ、ありがとうございます。では。」

栄華にそう伝えた稟は、風と共にその場を後にしたのであった。

栄華「ええつと、まずは……。」

数日後、

栄華「いよいよですわね……。」

華琳「柳琳。支度は?」

柳琳「もちろん、万全です。」

純「秋蘭は？」

秋蘭「滞りなく。」

純「そつか。お前が言うなら、大丈夫だろう。」

華琳「結構。純、春蘭。警備に抜けは無いわね。」

純「問題ありません。」

春蘭「純様と一緒にだったので、当然です。猫の子一匹通しません。」

華琳「そう。それじゃあ、予定通りね。」

そして、陳珪、陳登親子を迎えたのであった。

謁見の間

華琳「……ふむ。豫州で賊が暴れているという事は理解したわ。しかしそれは、既にそちらの問題ではなくて？ 陳珪殿。」

華琳「……そもそも私達は、あの3人の賊を豫州との州境まで追い詰めていたのよ。それこそあと一步のところまで、そちらへと逃げられてしまった。」

華琳「そして逃亡した賊の件はそちらに報告し、引き続き追跡の許可も求めたわ。……

拒絶されたけれどね。」

純（ま、姉上としては、逃げられた事實は認めても、その非は認めるつもりはねーな。まあそうか。そこで謝っちまったら、話は謝罪の方向に行くだけだからな。しかし、この手の話は苦手なんだよな・・・。肌が合わねーっていうか・・・。）

燈「重要な物を追っているという情報を隠して？」

華琳「・・・どういう事。」

燈「南華老仙の残した書物・・・、太平要術の書、というそうね。」

燈「書物のことはこちらで調べさせてもらったけど、それを追っていることを陳留からは聞いていないと報告があったわ。」

華琳「それが？」

純（さすが姉上。これは想定内の話か。）

華琳「確かに盗まれた一番の品は、太平要術の書だったわ。けれどそれは、莊周の遺した貴重な古書というだけの話。盗品という点では、金の塊や錦の反物と変わらないわ。」

華琳「それとも豫州では、盗品の明細を作らなければ兵一つ動かせないと？」

燈「ふふっ。それはないわね。」

華琳「それよりもこちらとしては、豫州の州境を越えて兵を動かせなかった事を問題

にしたいのだけれど？」

華琳「我が軍が領内で賊を捕まえられなかつた非は……、まあ、認めざるをえないわ。」

華琳「しかしそちらで捕まえると言つたものを捕まえられなかつた事に關しては、こちらに責任を転嫁される謂われはないのではなくて？」

燈「あら。ならば、同じ事が逆の立場であつたらどうするかしら。豫州から逃げた賊を追うために、我々の兵が陳留へ踏み入る許可を求めたら？」

華琳「通すわけがないでしょう。その賊には、そちらでの罪の前に、我が領に足を踏み入れた報いを受けてもらう必要があるもの。」

華琳「そちらには責任を持って、賊の首と盗品だけを送り返させていただくわ。……ああ、その時は確かに盗品の明細があると便利かもしれないわね。」

すると華侖が小声で、

華侖「……華琳姉えとあの人、ケンカしてるんすか？」
と尋ねると、

榮華「まさか。ただの挨拶ですわよ、あんなもの。」

柳琳「もう……、皆さん、お姉様とお兄様に叱られますよ。」

燈「ならば此度の件、孟徳殿は私達豫州の兵があなたたち陳留の兵を通さなかつ

た・・・、そこが問題の全てだというのね。」

華琳「ええ。我が領内から賊を逃がした報は、既にそちらには伝えたもの。さらに言えば、責任を持つて追跡するともね。」

燈「なら・・・、改めて、賊を逃がした責任を取ってもらおう、と言ったら？」

華琳「・・・責任？報を伝え、こちらの申し出を断つておいて・・・、先程も言ったはずだけれど、既にそれはそちらの問題でしょう。」

燈「身内の恥を晒すようで何だけれど・・・、残念ながら、豫州には陳留ほどの精兵を持つ郡はわずかなの。」

燈「今、その連中は何をどうしたのか、手勢を増やして小さな廢城を根城にしているわ。規模は数百か、千に及ぼうとする・・・、といったところかしら。」

華琳「・・・初めから我々に追わせておけば3人で済んだものを・・・。」

華琳「3人を追えというだけならまだしも、そうなる前に手を打たなかった事はこちらの責任ではないわよ。」

華琳「それを曲げて頼むというなら、相応の態度というものがあるのではなくて？」
純（そうさせるか、姉上・・・。）

華命「華琳姉え、なんとかの書は取り返したくないんすかね？」

秋蘭「華琳様のことだ。向こうから出来るだけ良い条件を引き出そうとするおつもり

なのだろう。」

燈「ふむ。まあ、どうしても言うなら、頭を下げてでも聞で尽くしても構わないのだけれど……。」

燈「陳留の太守殿とその弟殿は、私ごときの頭と安い懇願一つで機嫌を良くなさるお方なのかしら？」

華琳「……。」

純「……。」

燈「私としては、正直、どちらでも良いの。貴女が動いても、動かなくても。」

陳珪は、今でも穏やかなという名のポーカーフェイスを浮かべたまま表情を変えず、それがハツタリなのか事実なのか分からず、ただ空恐ろしく感じるのであった。

燈「ただ、一度逃がした賊を再び捉える機会をあげようと思っただけ。……孟徳殿が、こちらに賊が逃げた報を送ってくれたようにね。」

華琳「……。」

燈「孟徳殿の助けが借りられないなら、我が豫州の東方、徐州にいらつしやる陶謙殿に礼を尽くすという手もあるし……。」

燈「ここからさらに北上して、南皮の……、何と言ったかしら。いま頭角を現わしつつある、汝南袁氏筆頭の……。」

純「何と……!?!」

華琳「……まさか。袁紹を頼るにしても、南皮から豫州に兵を入れるなど……、どうするつもり。」

燈「あのあたりの相や太守にはいろいろ貸しがあつてね……、済陰に寄る前にあちこち足を伸ばして、既に話は通してあるの。まだ袁紹殿ご自身には持ちかけていないけれど。」

華侖「あちゃー。袁紹の名前が出てきたつすよ。」

榮華「ええ。お兄様はともかく、お姉様とは仲が悪いですからね。」

燈「……いずれにしても、太平要術の書は取り戻すつもりなのでしよう? 今なら、貴女達に優先的にさせてあげると言っているの。」

純(こいつ……。)

華琳「……貴女、国を売るつもり?」

華琳「義理にうるさい陶謙はまだしも、袁紹は野心の塊よ。その提案を受け入れるのは間違いないけれど、その後になんか分からない貴女でもないでしょうに。」

燈「あら。それこそ他国の話など、陳留太守の曹孟徳殿には関係ないでしょうに。」

燈「それとも……、先に買っておきたいのは貴女だったかしら?」

華琳「……。」

純（さすがにこんなに分かりやすい挑発には乗らねーか。）

燈「言ったでしょう。逃がした賊を再び捉える機会をあげる、と。」

華琳「助けてあげるのはこちらよ。」

燈「……。」

華琳「……。」

そして、時間だけがゆつくり過ぎていき、

華琳「……いいわ。同盟という事なら、引き受けてあげる。」

華琳「それと、遠征にかかる費用はそちらに出してもらうわ。賊を千人も余分に退治してあげるのだから、当然よね？」

燈「……。」

純（陳珪、姉上の金額面まで入れた具体的な申し出に面食らってるな……。）

すると、陳桂は小さくほうつと息を吐き、

燈「……ええ。その条件で結構よ。」

華琳「半月保たせなさい。それで、その賊とやらは1人残らず駆逐してあげるわ。」

燈「準備に半年かかると言われなくて助かったわ。こちらも州内の根回しをもう少ししておきたいから、その時点で改めて遣いを送るわ。」

華琳「……終わりっすか？」

秋蘭「・・・みたいだな。」

華命「ふはー。息が詰まったつすー。」

栄華「ほら、もう少しですから、静かにしていなさい。」

燈「さて、なら私は帰るわ。今日は実のある話が沢山出来て光栄だったわ、曹孟徳殿。」

華琳「あら、会食の支度をしていただいたのだけれど。」

燈「申し訳ないのだけれど、辞退させていただくわ。・・・戻つてすべき事が、山のようにあるの。」

華琳「そう。」

純「そういえば、さつきから気になっていたのだが、そちらにいる子は？」

純（というか、ずっと見られてる気がすんだよな・・・。気になって仕方が無かつた・・・。）

燈「ああ、この子は私の娘よ。見聞を広めさせるために同行させたの・・・。喜雨、ご挨拶なさい。」

喜雨「・・・姓は陳、名は登、字は元龍と申します。まさか曹和様に会えるなんて思わなかつた。」

そう言われて、純は少し驚いたが、

純「そうか。確か君は、沛の米や麦の収穫量の増加に大きく貢献したと聞いた。」

華琳「ええ。私も聞いたことがあるわ。」

燈「あら、お耳が早い。この子は政事よりも、そちらの方が好きなようなのよ。」

純「へえ。俺も米や麦は非常に大切であると説いてはいたのだが、俺は根つからの武人だからその収穫量の増加をどうするのか、なんて考えても思いつかねーんだよ。でも、それを出来る者に出会えるなんて、本当、尊敬するよ！」

そう言つて、純は饒舌に喜雨の事を褒めたのであつた。普段鉄仮面のように表情を崩さない喜雨は、もう大慌てである。

喜雨「そ、尊敬だなんて……。僕は土と水に正面から誠実に向かい合つただけだよ。それに答えてくれたのは作物達。その大切さを常に説いていて、なおかつ戦に勝つ曹和様と比べたら……。」

純「そんなことねーよ。それも立派な才能だ。胸を張つても良いと思うぞ！」

華琳「純、まだ話の途中なのだけど……。」

純「ああ、申し訳ございません。姉上。」

そう言つて、純は少し下がった。

華琳「弟の非礼、お詫びするわ。でもその知識、いつか我々の所で役立ててほしいものね。」

燈「あら。それは人質ということかしら？」

華琳「まさか。同盟国を相手にそんな無粋な真似はしないわよ。」

華琳「正式な依頼よ。我が陳留にも、これから手を付けなければならぬ土地がそこそ山のようにあるの。」

華琳「沛で振るつた手腕を生かしてくれると光榮だわ。むしろ、純は絶対に快く迎えてくれるわ。」

喜雨「・・・曹和様からの依頼だったら、考えておくよ。」

そして2人は頭を下げ、静かに、謁見の間を出て行つた。

栄華「・・・お疲れ様です、お姉様、お兄様。」

華琳「この程度、大したものではないわ。」

純「どうぞ。朝廷に顔を出すことに比べたら、まだマシな方だ。」

華琳「そうね、魑魅魍魎の跋扈する蠱毒壺よ、あそこは。」

純「確かに。それと比べれば、先程のは可愛いものですな。」

柳琳「ですが、あのお方・・・どこまでが本心だったのでしょうか。いくら戦力が心許ないとは言え、他国の兵を自領に引き入れるなど・・・。」

華琳「さあね。けれど、これで貸しを作っておくのも悪くはないでしょう。もちろん、向こうに良いようにされないよう、色々と根回しは必要だけれど。」

華琳「猫にも爪の一つくらいあるものね。それよりも栄華。」

栄華「はい。お風呂は用意させてありますわ。ゆっくり、汗をお流し下さいませ。」

華琳「それと、遠征に出す兵の支度も調べておいて頂戴。既に城下の商人には話を付けているし、費用は向こう持ちだから、あまり額面は細かく言わないように。」

純「やはり、やっておりましたか。」

華琳「ええ。やってたわ。任せるわよ、栄華。」

栄華「もちろんですわ。遠征部隊は他国に見られても恥ずかしくないよう、万全整えさせていただきます。」

一方、

喜雨「・・・なるほど。本当に、手の入れがいがありそう。」

燈「あら。曹子元から誘いの依頼が来る前に、もうこちらに来る気になっているじゃない。」

喜雨「僕は母さんとは違うよ。考える必要があるから、考えるって言っただけ。」

燈「そう。・・・けれどあの曹孟徳と言う子、噂に聞くよりずっと自製の効く子だったわね。その弟の曹子元も殆ど喋らなかつたけど、姉同様、自制が効いてたし。」

燈「袁家の名を出せば、もう少し楽にこちらの誘いに乗ってきてくれるかと思ったのに……。」

燈「おかげでこちらの仕込みが台無しだわ。」

喜雨「……。」

燈「もつとも、これなら……、ふふつ。」

喜雨「……そういう所が嫌いなんだよ。政治家って。そんな会話をしていた親子であった。」

7話

あれから数日後、

純「姉上、お呼びですか。」

華琳「ええ。純、これから新しい文官希望者の面接があるんだけど、純は秋蘭と一緒に面接官になって欲しいの。」

純「分かりました。なら稟も連れて行っても良いですか。」

華琳「何故かしら？」

純「稟も文官なので、俺よりも上手く出来ると思うので。」

華琳「分かったわ。貴方に任せるわ。」

純「はっ。ではこれにて。」

そう言つて、純はその場を後にしたのであつた。

執務室

純「稟、いる〜?」

稟「あ、はい純様。」

純「丁度良かった。頼みがあるんだけど。」

そう言つて、稟に面接官の手伝いが出るか尋ねた。

稟「なるほど。文官希望者の面接官をですか。」

純「ああ。俺より稟か風が上手く出来ると思つて。何か悪いな」

稟「別に構いませんよ。純様のご命令でしたら、何処へでも付いていきます。」

純「そつか。ありがとう、稟。じゃあ、行こ。」

そう言つて、純と稟は面接場所に向かった。

そして部屋に入ると、そこには秋蘭と2人の文官がいた。

純「悪い、遅くなった。」

秋蘭「構いません。では、始めようか。」

そして途轍もない長い時間が始まった。半分が終わり一時休憩し、また再開した。

休憩室

?? 「やっと、次は私の番ね。って、あなた大丈夫？」

文官候補A 「え、ええ。少し気分が悪くなってる。」

そう言ってる、その人は医務室へと連れて行かれたのであった。

?? 「私だけになったわね。けど良かったわ。そのほうが自分を売り込めるもの。」

一方、

純 「ふわぁ〜。」

稟 「・・・純様。」

その時、稟はジトツとした目で純を見た。

純 「ああ、悪い。こういうのは慣れてねーんだ。秋蘭、次で最後だよな。」

秋蘭 「はい。ところで純様。何人に丸を付けましたか？」

純 「俺は10人くらいかな。」

秋蘭 「手厳しいですね。私はその倍は違うのですが。」

純 「そうなんだ。稟は？」

稟「私も秋蘭様と同じくらいです。」

そして、最後の組が入ってきて、その者は猫耳の頭巾を被っていた。

?? 「失礼します。」

?? (何と、曹和様自ら面接官をしていたなんて!でもこれは、売り込める絶好の機会よ!夏侯淵様もいらっしやるようだし……)

そう思い、彼女は純達の前にある椅子に座った。

純「ええつと、名前は荀彧か……。以前は南皮の麗羽に仕えていたんだな。」

桂花「はい。袁紹の下で軍師として仕えておりましたが、袁紹は少し……えつと、名門である事を理由にその……。」

荀彧が言葉に詰まっているのを気にした純は、

純「正直に言つて良いぞ。此処は別に麗羽の事をどう言おうと別に気にしねーから。」

桂花「……分かりました。袁紹は名門である事を理由に偉ぶり、尚且つ馬鹿である事に愛想が尽き、辞めさせていただきました。」

そう言つて、麗羽をバツサリと切り捨てた。

桂花「そして、前々から仕えてみたいと思つておりました曹操様と曹和様の下に行きたいと思ひ、任官を希望致しました。」

純「……なるほど。」

そう言った純は、秋蘭と稟に尋ねた。

純「秋蘭。稟。俺の独断で採用か否か決めて良いか？」

秋蘭「え、ええ。構いませんが。」

稟「私も構いません。」

純「分かった。苟彘。では明日から我が姉であり、主でもある曹孟徳に軍師として仕えよ。」

桂花「え？宜しいのですか？」

純「ああ。今回の面接以外で、筆記試験があつただろう。その答えと今回の面接で判断した。なかなかの才能の持ち主だ。一文官などもつたいないと判断した。」

桂花「そ、そうですか。よろしくお願いします。」

秋蘭「ではこれにて解散！純様、また後で。」

そう言い、秋蘭はその場を後にした。

そして、

桂花「あの、ありがとうございます。おかげで、憧れの方の下で働けます。」

純「なに、気にすんな。その代わり、戦の時は期待してるぞ。」

桂花「御意っ!!」

純「俺の真名は純だ。よろしくな。」

桂花「真名まで！宜しいのですか!？」

純「ああ。仲間になるんだから当然だ。」

桂花「では、私の真名は桂花です。」

純「ありがとう。で、こっちが俺の軍師の」

稟「郭嘉です。真名は稟です。」

桂花「よろしく、稟。私は桂花よ。」

稟「はい、桂花。」

そして、3人はその場で少し話し合い、別れたのであった。

稟「純様。」

純「ん？どうした、稟。」

稟「面接で言えなかったのですが、ちよつと気になった情報がありましたので、ご報告が。」

純「良いよ。何。」

稟「幽州で、劉備という者が義勇軍を率いたという情報です。」

純「劉備。お前が気にするというのは、その者はただ者ではないと言うことか。」

稟「はつ。その者は、実際に智も武も大した者ではありません。しかし、溢れんばかりの人徳とその魅力、そして、彼女の側に仕えている関羽と張飛も一騎当千の豪傑。また、他にも見慣れない衣を着ている男がいました。」

純「見慣れない衣？」

稟「純様は、天の御遣いの噂は聞いておられますか？」

純「ああ。確か、管路と申す占い師が流布していたな。ただの噂だと気にとめなかったが。」

稟「恐らくその者ではないかと。」

純「そうか。引き続き劉備達を探れ。」

稟「はつ！」

純「それと、風にも孫策以外に気になる情報があったら、すぐに報告してくれと伝えてくれ。」

稟「ご心配なく。そう言ってくると思つたので、風には伝えておきました。」

それを聞いた純は笑みを浮かべ、目を閉じ黙考した後、口を開いた。

純「我が子房なり。」

それを聞いた稟は一瞬驚いた表情をした。

稟「もったいない、お言葉にございます。」

彼女は感動しているのか震えた声で返事をしたのであった。

純「さて、稟。他にも相談したいことがあるんだ。」

そう言つて、純は稟の手を取つて、自身の部屋に向かつた。その後の稟の機嫌が非常に良かったと後に風は語つていたのであった。

その後、純は秋蘭に声を掛けるが、秋蘭は少し不機嫌そうにそっぽを向き、どこかに行つてしまった。その埋め合わせに後日純と秋蘭は一緒に買い物に行つたのだが、その時秋蘭は、終始純の腕に抱き付き、最後は純の背中に手を回し、純の胸に顔を当てて匂いを堪能していたのである。

8話

豫州の汝南

純「しつかし、本当にすんなり通れたよ。」

秋蘭「はい。前回あれほど苦労したのが嘘のようです。」

純「そうだな。香風。都で鳴らしたその武勇、期待してるぞ。」

香風「うん。シャン、頑張る。」

秋蘭「そう力むな。普段通りにやれば良いんだぞ。」

そう秋蘭は答えた。

純「しかし、兵糧の量を少なくするなんて思い切ったことしたな、桂花。」

桂花「いえ。今の我が軍の実力なら、これくらい出来ると思っただけです。」

純「まあ、俺も姉上もこういう強行を実戦で試すのは初めてだけだな。」

秋蘭「そうですね。華琳様もこのようなことはしませんからね。」

桂花「訓練の報告書と、今回の兵数を把握した上での計算です。これでも余裕を持たせてあるので、ご安心下さい。」

純「そうか……。まあその辺りの手並み、期待してるぞ。稟と風もな。」

桂花「御意!!」

稟「はっ!!」

風「はいっ!!」

その時、

春蘭「おお、純様、そして秋蘭達、こんな所にいましたか。」

純「どうした春蘭、急ぎか？」

春蘭「はい。前方に何やら大人数の集団がいるらしく、華琳様がお呼びです。すぐに来て下さい。」

純「分かった。お前ら、行くぞ。」

香風「はい。」

秋蘭「はっ。」

桂花「分かりました!」

稟「はっ!」

風「はい。」

本陣

純「・・・遅くなりました。」

華琳「丁度偵察が帰ってきた所よ。報告を。」

柳琳「はい。行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は分かりませんが、格好もまちまちですし、どこかの野盗か山賊だと思われます。」

華琳「・・・そう。さて、どうするべきかしら？桂花。」

桂花「はっ！もう一度偵察隊を出し、状況次第で迅速に撃破すべきかと。」

桂花「将の選抜までお任せいただけるなら・・・、純様、春蘭、香風。この3名を中心に据えるのが良いでしょう。」

春蘭「おう！」

香風「まかせて。」

純「ほお、何となく察したが、俺を偵察隊に入れる理由は何だ？桂花。」

桂花「はい。柳琳はお戻りになったばかりですし、秋蘭と栄華は本隊の指揮があります。」

すると、

華命「なら、あたしが行きたいっすー！」

そう華命が答えたが、

桂花「せめて春蘭の抑え役くらい、してちょうだい。」

と桂花は答えた。

純「やはり、そういうことか。分かった、引き受けよう。」

純（まあ、華侖は春蘭と一緒に突撃してしまうところがあるし、そうなる俺に抑え役が回る。）

春蘭「あの、何を納得しているのですか！それではまるで、私が敵と見ればすぐ突撃するようではないですか！」

桂花「違うの？」

純「違うのか？」

華琳「違わないでしょう？」

春蘭「うう、華琳様と純様まで・・・。」

そう言つて、春蘭はいじけてしまったのであつた。

華琳「冗談よ。ならその策で行きましょう。どう対処するか判断は純、貴方に任せらわ。」

純「はっ。」

香風「なら華琳様、行つてきまーす。」

すると、

秋蘭「……姉者、香風。純様にもしもの事があつたら、分かつているな。」

秋蘭が、禍々しい殺気を出しながら春蘭と香風に対して、そう言った。それに対して、春蘭「う、うむ。分かつているぞ、秋蘭。」

香風「コクコクコク」

2人は青ざめながらそう対応した。

偵察隊

純「春蘭、今回は偵察が第一だ。通りすがりの商人とかその護衛とかだったら、後が面倒だからな。」

春蘭「分かつております純様！そこまで私も迂闊ではありません。」

純（いや、その迂闊がありえるから俺が付けられたんだよ……）
すると、

香風「春蘭様、あそこー。」

春蘭「よし！と」

純「突撃禁止だぞ！」

春蘭「わ、分かっております・・・!と、とりあえず、とりあえず・・・、私は何を言おうとしたのでしょうか、純様!」

純「お前なあ・・・。しかし・・・、何だ?ありや、行軍してる感じじゃねーぞ?」

春蘭「何かと戦っているようですね。」
すると、

香風「あ、何か飛んだー。」

純「ありや、人だな。」

春蘭「何だ、あれは!」

兵士A「誰かが戦っているようです!・・・その数、1人!それも子供の様子!」

春蘭「何だ?!」

すると、その報告を聞いた春蘭は、馬に鞭を当てて、一気に加速させてその集団へと向かっていった。

純「おい、春蘭!」

すると、

香風「純様は、後で来て下さい。」

そう言った香風も、春蘭が向かった方向へ馬を走らせたのであった。

兵士A「曹和様・・・。」

純（あいつら、何しに来たんだよ……。）

純「しよーがねー。お前は20騎程率いて春蘭達の援護に行け。ただし、全滅させるな。一部は逃がし、そいつらを残りの俺が追跡する。恐らく敵の本陣かもしくは本隊に逃げ込むはずだ。」

兵士A「はっ！承知しました！」

そう言つて、その兵士は20騎程率いて、春蘭達に向かったのであつた。

一方、

??「でえええええいっ！」

野盗A「ぐはあっ！」

??「まだまだあつ！でやああああああつ！」

野盗B「がは……っ！」

野盗C「ええい、テメエら、ガキ一人に何を手こずつて！数で行け、数で！」

野盗D「おおお！」

??「はあ……はあ……はあ……。もう、こんなにたくさん……、多すぎるよう……

！」

その時、

野盗E 「ぐふうっ！」

1人の野盗が倒れた。

?? 「・・・え？」

春蘭 「だらあああああっ！」

野盗F 「げふうっ！」

香風 「はあああああっ！」

野盗G 「ぐはあああっ！」

春蘭 「大丈夫か！勇敢な少女よ！」

?? 「え・・・？あ・・・はいっ！」

春蘭 「貴様らあっ！子供1人によってたかって・・・、卑怯というにも生温いわ！て

やああああああっ！」

野盗C 「うわあ・・・っ！退却！退却ーっ！」

春蘭 「逃がすか！全員、叩き斬ってくれるわ！香風、回り込め！」

香風 「了解。」

するとそこへ、

兵士A 「夏侯様！徐晃様！お待ち下さい！」

先程の兵士が止めに入ったのであった。

春蘭「ぼっ……！貴様、何故止める！」

兵士A「我々の仕事は偵察です。その子を助けるために戦うのは良いですが、敵を全滅させるのが目的ではありませんっ！」

香風「桂花、流れ次第で全滅させて良いって……。」

春蘭「そうだぞ。敵の戦力を削って何が悪い！」

兵士A「それは確かにそうですが、もっと良い作戦があります。」

春蘭「……例えば何だ？」

兵士A「逃がした敵をこっそり追跡して、敵の本拠地を掴むといったのです。」

春蘭「……おお、それは良い考えだな。誰か、おおい、誰かおらんか！」

兵士A「……曹和様が既に偵察に向かわれました。」

香風「さっすがー、純様。」

春蘭「うむ、そうだな。」

兵士A「はあ……。」

一方純達は、

純「よし、一部を逃がすことは出来たようだな。あの集団を追うぞ！」

兵「はっ!!」

そう言つて、純達は逃げた敵を追い、盗賊団の本拠地を見つけ、華琳の本隊に戻つたのであつた。

その頃、

華琳達本隊がやつて来た。

華琳「春蘭。謎の集団とやらはどうしたの？戦鬪があつたという報告は聞いたけど？」

春蘭「私と香風の一当てで総崩れしました。一部は逃がし、追跡させているので、本拠地はすぐに見つかると思います。」

華琳「あら、なかなか気が利くわね。恐らく純の指示でしょう？」

春蘭「はい、そうです。」

するとそこへ、

秋蘭「ところで姉者、香風。純様と一部の騎馬兵はどうした？」

秋蘭が春蘭達に尋ねた。

春・香「……。」

2人は沈黙の後、しまった！と言う顔をし、少し青ざめた顔をした。

秋蘭「姉者、香風……。」

すると、秋蘭が禍々しいオーラを出したので、

兵士A「そ、曹和様は、自ら一部の兵を率いて、本拠地を探っておられます！」

代わりに春蘭達を止めた兵が答えたのであった。

秋蘭「姉者！香風！純様にもしもの事があつたらどうするつもりだ！」

すると、秋蘭が珍しく語気を荒げながら春蘭達に言つたのであった。

春蘭「秋蘭。純様は我が軍最強の武人だぞ！この程度の連中に遅れを取るものか！」

秋蘭「しかし……。」

華琳「秋蘭。純の事を慕っているのなら、信じなさい。春蘭の言う通り、そう簡単にはやられないわよ。」

華琳がそう答えたので、

秋蘭「……御意。」

秋蘭も怒りを静めたのであった。

?? 「……!」

華琳「この子は?」

?? 「お姉さん、もしかして、国の軍隊……っ!」

春蘭「まあ、そうなるが……ぐっ!」

その時、春蘭と一緒に戦っていた少女は、鉄球なぎ払い、春蘭に攻撃したのであった。

春蘭「き、貴様、何をつ?!」

?? 「国の軍隊なんか信用できるもんか! 僕達を守つてもくれないクセに、税金ばかりどんどん重くして……ッ!」

?? 「てやああああああつ!」

春蘭「……くうっ!」

?? 「僕は村で一番強いから、僕がみんなを守らなきゃいけないんだつ! 盗人からも、お前達……役人からもつ!」

香風「……。」

春蘭「くっ! こ、こやつ……なかなか……っ!」

華琳「……。」

柳琳「……お姉様。」

?? 「でええええええええええええええええええいっ！」
春蘭「ぐう．．．！仕方ないか．．．いや、しかし．．．。」
するとそこへ、一人の影が2人の間に立った。

数分前、

純「よし、敵の本拠地も割り出せたし、姉上の本隊に合流すつか。」

そして、

純「ん？あの少女、さつき野盗の集団と戦ってた子だな。本気が出せないとは言え、あの春蘭を押しとは．．．。とは言え、止めなきやな。」

そして後ろを振り返り、

純「俺、あいつらを止めるから、お前らは後で来い。」

そう言って、純は2人に向かって行っただのであった。

現在

純「お前ら、そこまでだ。」

純は、春蘭と少女の間に立った。それぞれ大小の刀を向けながら。

??「え……っ?」

春蘭「純様!」

純「剣を引け!そこのお前も、春蘭も!」

??「は……はいっ!」

純の覇気に当てられて、少女は軽々と振り回していた鉄球を、その場に取り落としたのであった。

純「……。」

その様子を見た純は、刀を鞘に収め、華琳の傍に立ったのであった。

華琳「……春蘭。この子の名は?」

春蘭「え、あ……。」

季衣「き……許緒と言います。」

華琳「そう……。」

そして華琳が取った行動は、

華琳「許緒、ごめんなさい。」

季衣「・・・え？」

許緒に頭を下げたのであった。

桂花「華琳、様・・・？」

春蘭「何と・・・。」

純以外の皆は、華琳の行動に驚いていた。

季衣「あ、あの・・・っ！」

華琳「名乗るのが遅れたわね。私は曹操。あなたを止めたのは、弟の曹和。山向こう

の陳留の地で太守をしている者よ。」

季衣「山向こうの・・・？あ・・・それじゃっ!?こ、こちらこそごめんなさいっ！」

春蘭「な・・・？」

季衣「山向こうの噂は聞いてます！向こうの太守様は凄く立派な人で、悪いことはないし、税金も安くなつたし、後、その太守様の弟様のおかげで、盗賊も凄く少なくなつたって！」

季衣「・・・あ！もしかして行商のおじさんが言つてた、陳留の太守様がこつちの悪い賊を討伐に来るっていうのが・・・!!」

華琳「……。」

許緒の言葉を聞いた華琳は、黙って頷いた。

季衣「そんな……。そんな人達に、僕……僕……！ごめんなさい！僕達を助けて来てくれた人に……。本当にごめんなさい！！」

華琳「……構わないわ。今の政事が腐敗しているのは、太守の私が一番よく知っているもの。官と聞いて許緒が憤るのも、無理のない話だわ。」

季衣「で、でも……。」

華琳「だから許緒。あなたの勇氣と憤り、この曹孟徳に貸してくれないかしら？」

季衣「え……？僕の……？」

華琳「私はいずれこの大陸の王となるわ。けれど、今の私の力はあまりに小さすぎる。」

華琳「だから……村の皆を守るために振るったあなたの力と勇氣。この私に貸して欲しい。」

季衣「曹操様が、王に……？」

華琳「ええ。」

季衣「あ……あの……。だったら。曹操様が王様になったら、僕達の村も、治めてくれますか？盗賊も、やっつけてくれますか？」

華琳「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでもなく……この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの。」

季衣「この大陸の……みんなが……。」

桂花「ああ、華琳様……。」

華琳「ねえ、許緒。」

季衣「は、はいっ！」

華琳「これから、あなたの村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。まずそこだけでいい、あなたの力を貸してくれるかしら？」

季衣「はい、それならいくらでも！じゃない、僕の方こそ手伝いさせて下さい!!」

華琳「ふふっ、ありがとう……。春蘭、香風。許緒はひとまず、あなた達の下に付けるわ。分らないことは教えてあげなさい。」

香風「はい。」

春蘭「了解です！」

季衣「あ、あの……。ええつと……。」

春蘭「既に華琳様には謝つたのだろう。ならば、それで良い。」

香風「それより……。ごめんなさい。」

季衣「ほえ……。？どうして君が僕に謝るの？」

香風「シヤンも、前は都の役人だった。・・・何も出来なかった。」

季衣「あはは。僕は悪い役人は大嫌いだけど、曹操様みたいに良いお役人様は大好きだよ。それより、さっきは助けてくれてありがとう。これからよろしくね！」

香風「うん。シヤンは、香風だよ。」

春蘭「ならば、私の事も春蘭でいい。」

季衣「えええっ!?でもそれって、真名じゃ・・・僕なんかが、畏れ多いです！」

春蘭「あれ程の使い手なら、名を預ける価値もあると言うものだ。先程の猛攻、恐れ入ったぞ。」

香風「うん。今度、シヤンともやろう。」

季衣「は・・・はいっ！なら、僕のことでも季衣って呼んで下さい！春蘭様、香風、よろしく願います！」

春蘭「うむ。季衣、その力、華琳様のためにしっかり役立ててくれよ。」

季衣「はいっ！もちろんです！」

華琳「純。」

純「はっ。偵察した結果、盗賊団の本拠地はすぐそこです。」

華琳「そう。分かったわ。・・・では総員、行軍を再開するわ！騎乗！」

純「総員！騎乗！騎乗っ！」

9 話

盜賊団の砦は、山の影に隠れるようにひっそりと建てられていた。

純「見つけた時思ったが、メンドーなトコに隠れやがって。」

稟「そうですね。先程の場所からはすぐ近くでしたが、山の影に隠れてますし、ここだと絶好の隠場ですね。」

風「盜賊団にとっては、非常に良い場所ですね。」

純「そうだな。」

そんな話をしていると、

華琳「許緒。この辺りに他に盜賊団はいるの？」

季衣「いえ。この辺りにはあいつらしかいませんから、曹操様が探してる盜賊団っていうのも、此処だと思います。」

華琳「敵の数は把握できている？」

秋蘭「はい。およそ三千との報告がありました。」

栄華「数百か、せいぜい千という話ではありませんでしたの？こちらは千ほどしかいませんわよ……？」

春蘭「おのれ。あの女狐め……」

純「いや、三人から千まで膨れ上がった期間を考えるなら、三千でも少ねーくらいだぞ。」

華琳「そうね。純の言う通りだわ。」

桂花「とはいえ、連中は集まっているだけの烏合の衆。統率もなく、訓練もされておりませんゆえ……我々の敵ではありません。」

華命「じゃあ、このままとつげきー！って突っ込んで、わー！って一気にやつつけるっすか？」

華命の問いに対し桂花は、

桂花「まさか。それなら、春蘭でも出来るでしょう。軍師のいる意味がないわよ。」

春蘭「なんだと！私でも出来るとは、どういう事だ！」

しかし、

華琳「……して、策は？糧食の件も忘れてはいないわよ。」

華琳は春蘭の発言をスルーしたのであった。

春蘭「か、華琳様あ……。」

純「まあまあ春蘭。」

春蘭「うう、純様あ……。」

桂花「はい。まず華琳様と純様は少数の兵を率い、砦の正面に展開していただきます。その間に春蘭・秋蘭の2人は、残りの兵を率いて後方の崖に待機」

桂花「本隊が銅鑼を鳴らし、華琳様の朗々たる名乗りをもって挑発すれば、怒り狂った敵はその誘いに応じ、間違いなく外に飛び出てくる事でしょう。」

桂花「その後に華琳様と純様は兵を退き、十分に砦から引き離れたところで・・・」

純「春蘭と秋蘭で敵を横合いから叩くつてわけか。」

桂花「はい。お二人にさらに香風と許緒を加えれば、三千の敵とて羊の群れに等しくなりましょう。」

香風「わかった。」

季衣「うん！僕、頑張るよ！」

純「稟、風。どう思う？」

稟「悪くない策かと思えます。」

風「風も同じ意見です。」

純「そうか。」

すると、

春蘭「・・・おい待て。」

春蘭が口を開いた。

純「何か問題があるのか？春蘭は攻撃に回る方が良いだろう？」

春蘭「そこは構わないのですが・・・その策は何か？華琳様と純様に囲をしると、そういうわけか！」

華琳「そうなるわね。」

純「そうなるな。」

桂花「何か問題が？」

春蘭「大ありだ！華琳様と純様にそんな危険なことをさせるわけにはいかん！」

桂花「反対を口にするなら、反論をもって述べていただけると助かるんだけど？春蘭。」

春蘭「ど、どういう意味だ。」

純「反対するのなら、他にもっと良い作戦を提案しろって事だよ。」

春蘭「烏合の衆なら正面から叩き潰せば良からう。」

この答えに、

華琳「・・・。」

桂花「・・・。」

華琳と桂花は呆れてしまった。

純「お前なあ、それ、説明の一番最初の所で否定されたばかりだからな？」

華命「え、そうなんすか!？」

柳琳「姉さん……。」

純（否定された張本人も気付いてねーし、コイツは相変わらずだな……。華命もだけど。）

桂花「油断した所に伏兵が現れば、相手は大きく混乱するわ。それに乗じれば、烏合の衆はもはや衆ですらなくなるのよ。」

桂花「貴重な我が軍の兵と、もつと貴重な華琳様と純様のお時間を無駄にしないためには、この案を凌ぐ策はありません。」

春蘭「な、なら、その連中が誘いとやらに乗らなければ……?」

桂花「……ふっ。」

春蘭「な、なんだ! その馬鹿にしたような……っ!」

桂花「華琳様。純様。相手は志も持たず、武を役立てることもせず、そのちっぽけな力に溺れる程度の連中です。間違いなく、春蘭よりも容易く挑発に乗ってくるものと。」

春蘭「……な、ななな……なんだとおー!」

華琳「ふふっ。春蘭、あなたの負けよ。」

純「ああ、お前の負けだ。」

春蘭「か、華琳様あ……。純様あ……。」

純「……。とはいえ、春蘭の心配も一理ある。次善の策はあるだろう。」

桂花「この近辺で拠点になりそうな城の見取図は、既に揃えてあります。もちろんあの城の見取図も確認済みですので、万が一こちらの誘いに乗らなかつた場合は……」

桂花「城を内から攻め落とします。」

華琳「方策は。」

桂花「残つた城をすぐに新たな拠点として転用出来るものから、向こう百年ネズミ一匹立ち入れなくするものまで、ざつと三十。」

純「そうか……。分かつた。なら、まずはその策で行こう。」

春蘭「純様っ！」

純「これだけ勝てる要素しかない戦いに、囀のひとつも出来ねーようじゃ……。姉上が許緒に語つた霸道など、とても歩めねーよ。」

華琳「ええ。純の言う通りだわ。」

桂花「その通りです。ただ、単に賊を討伐しただけでは、誰の記憶にも残りません。せいぜい、近くの村の者に感謝される程度です。」

桂花「ですが、他国から請われて遠征し、そこで公明正大な振る舞いをし、万全の成果を上げて凱旋したとなれば……。曹孟徳の名は一気に天下に広まります。」

桂花「栄華、柳琳、華命。3人は、本隊の華琳様と純様の援護を頼むわ。」
柳琳「承知しました。」

栄華「ええ。分かりましたわ。」
しかし、

華命「ぶー。あたしも春姉え達と一緒に暴れたいすー!」

華命がわがままを言ってきたのであった。

華琳「華命。わがままを言わないの。」

と華琳がたしなめたが、

華命「でもでも、今回あたしし出番が全然ないすよー。季衣の時も何もしてないし。

せつかくの遠征なのにー。」

と言ってきたのであった。すると、

季衣「なら、僕が曹操様の護衛に入るんじやダメですか?」

と季衣が言ってきたのであった。

香風「えー。季衣と一緒に戦ってみたいなー。」

春蘭「それは私も同じだな。」

桂花「華琳様、純様・・・いかががいたしましょう?」

華琳「純、あなたならどうする?」

純「良いんですか？俺が決めて。」

華琳「ええ、構わないわ。戦に関する全権はあなたが握ってるのだから。」

純「そうですか。なら華命、お前は許緒と交代しろ。最前線に立つ経験を積むのも、たまにはいいだろう。」

華命「やったっす！」

純「そして許緒。お前は集団での戦がどういふものか、本陣でそれを見届けな。今までと同じように最前線で敵を倒すよりも、得るものは多いはずだ。」

華琳「もちろんこちらにも賊は来るだろうから、それを追いつ返すのは純と共に任せるわよ。」

純「良いんですか？俺が出ても？」

華琳「ええ、構わないわ。あなたも久しぶりに暴れたいでしょうし。」

純「お気づきでしたか。分かりました。」

季衣「は・・・はいつ。頑張ります。」

柳琳「そう緊張しなくても大丈夫ですよ。」

栄華「そうですわ。私達もいるのですし、気持ちを楽しみなさいませ。」

純「では作戦を開始する！各員持ち場につけ！」

そして、それぞれが作戦で決めた持ち場に行く準備を始めたのであった。

その途中、

純「秋蘭、ちよつと良いか。」

秋蘭「はい。」

純は秋蘭を呼び、ある事を伝えたのであった。

純「いつものことだが、春蘭の手綱はしつかり握っておいてくれ。後華命もな。」

秋蘭「分かりました。お任せ下さい。」

純「後最近お前の働きを見てないからな。久しぶりに見させてもらうぞ。ただし、力むなよ。」

秋蘭「はっ！」

純「しつかり役目を果たしたら、1つだけお願いを聞いてやるからな。期待してるぞ！」

秋蘭「・・・はい!!」

純からのご褒美に、秋蘭はあまり普段見せない満面の笑みを零しながら返事をしたのであった。

本隊

華琳「あなたって、相変わらず秋蘭に甘いわね。」

純「そうですか？俺はあいつのことを信頼してるからこそ、褒美を提案しただけですよ。」

華琳「そう。まあ、あの子は基本あなたの言うことしか聞かないから。」

純「それを言うなら、俺の子飼いの兵もですよ。後稟も。」

華琳「そう言えばそうね。」

純「何かすいません。」

華琳「構わないわ。あなたのために働くというのならね。」

純「御意。」

戦いの野に激しい銅鑼の音が響き渡ったのだが、

華琳「……。」

純「……。」

栄華「……。」

柳琳「……。」

相手は銅鑼の音で勘違いをした賊は、城門を開けて飛び出してきたのであった。

華琳「・・・桂花。」

桂花「はい。」

純「連中、今の銅鑼を出撃の合図と勘違いしたんじやねーか？」

桂花「はあ。恐らくは。」

栄華「所詮、臭くて汚いオスの振る舞いでも。お手どころか、待ても躡けられないに決まっていますわ。」

純「栄華の意見に同感だな。ホイホイ挑発に乗りすぎだ・・・。」

柳林「・・・挑発も名乗りも必要ありませんでしたね。」

純「姉上、挑発の言葉って、考えてましたか？」

華琳「ええ。そういう作戦だったもの、一応ね。大した内容ではないから、次の賊討伐にでも使い回すことにするわ。」

純「次の討伐の時も同様、銅鑼鳴らすだけで出てくれたら楽ですね。」

華琳「それもそれで良いわね。」

その時、

季衣「曹操様！曹和様！敵の軍勢、突っ込んで来ましたっ！」

華琳「ふむ・・・まあいいわ。多少のズレはあったけれど、こちらは予定通りにする

まで。」

桂花「総員、敵の突撃に恐れをなしたように、うまく後退なさい！距離は程々に取
つつ、逃げ切れないように！」

一方春蘭達別働隊は、

華命「華琳姉えと純兄の本隊、下がりはじめたつすー！」

春蘭「やけに早いな……。ま、まさか……。華琳様と純様の御身に何か……。!?」

秋蘭「心配しすぎだ、姉者。隊列は崩れていないし、相手が血気に逸りすぎて、作戦
が予想以上に上手くいった……。そういう所だろう。」

春蘭「そ、そうか。ならばそろそろ……。。」

華命「突撃つすか？突撃するつすか？」

香風「まだ。相手をちゃんと引き付けてから。」

華命「おー。みんな勢いよく逃げてるつすねー。」

香風「あ、純様だ。おーい。」

秋蘭「見ろ姉者。あそこに華琳様と純様も健在だ。季衣もちゃんとお2人を守る位置にいるぞ。」

春蘭「おお……。良かった……。」

華命「あ、次が来たつす！」

春蘭「……。これが、敵の盗賊団とやらか。」

秋蘭「隊列も何もあつたものではないな。」

華命「秋姉え、もう突撃つすか？」

秋蘭「まだだ。慌てるな。」

春蘭「しかし、ただの暴徒の群れではないか。この程度の連中、やはり小難しい作戦など必要なかったな。」

秋蘭「そうでもないさ。作戦があるからこそ、我々はより安全に戦うことが出来るのだからな。」

華命「うう、もう我慢出来ないつすー！突撃したいつすー！」

香風「根性の、見せ所。頑張つて。」

春蘭「ううむ。これだけ無防備に突撃しているだけだと、思い切り殴りつけたくなる衝動が……。」

秋蘭「気持ちは分かるがな……。あと一息だ。」

そして、

春蘭「この辺りなら良いだろう！ちようど横腹だぞ！」

秋蘭「うむ。遠慮なく行ってくれ。」

春蘭「ならば行くぞ、華命、香風！」

香風「うん！」

華命「わかつたつすー！」

春蘭「秋蘭、後は任せるぞ。」

秋蘭「応。夏侯淵隊、撃ち方用意！」

春蘭「ようし！総員攻撃用意！相手の混乱に呑み込まれるな！平時の訓練を思い出せ

！混乱は相手に与えるだけにせよ！」

秋蘭「敵前衛に向け、一斉射撃！撃ていつ！」

春蘭「統率の無い暴徒の群れなど、触れる端から叩き潰せ！総員、突撃いいいいつ！」

本隊

柳琳「お姉様、お兄様。後方の崖から春蘭様の旗と、矢の雨が！敵の足が一気に止まりました！」

純「流石秋蘭。上手くやった。」

華琳「ええ、そうね。」

季衣「春蘭様は？」

桂花「華命と一緒に突撃したくてうずうずしている所を、秋蘭と香風に抑えられていたんじゃないの？」

純「そうだな。」

華琳「さて、おしゃべりはそこまでになさい。この隙を突いて、一気に畳みかけるわよ。」

桂花「はっ！」

華琳「季衣。あなたの武勇、期待させて貰うわね。」

季衣「分かりましたーっ♪」

華琳「純。あなたの力、久しぶりに見せて頂戴。」

純「御意。稟！風！指揮の一部は任せたぞ！」

稟「はっ!!」

風「はいっ!!」

柳琳「では、私達も出ます。」

純「おお。虎豹騎の出番か。」

柳琳「はい。隊の皆さんが、任せて欲しいと。」

栄華「・・・柳琳の隊は、打撃力ならお兄様の隊と夏侯惇隊にも負けませんからね。」

純「確かに。ならば、そこは任せたぞ。総員反転！衆ですらない烏合の者どもに、本物の戦が何たるか、骨の髄まで叩き込んでやれ！」

純「総員、突撃っ！」

兵士「「「おおおおおおお!!」」」

盗賊討伐は、快勝に終わった。

桂花「逃げる者は逃げ道を無理に塞ぐな！後方から柳琳の部隊で追撃を掛ける、大人しく力尽きるのを待って良い！」

桂花が兵にそう指示をしていると、

純「ただいま戻りました。」

純が戻ってきた。

華琳「ご苦労様、純。相変わらず見事な働きだったわ。」

純「ありがたきお言葉。これも全て、俺の部下の働きのおかげです。」

華琳「そう。貴方らしいわね。」

純「いえいえ。しかし桂花、なかなかえげつねーな。」

桂花「正面からヘタに受け止めて、噛みつかれるよりはマシです。」

純「そうだな。稟！風！此度の戦の指揮、良くやった！おかげでやりやすかったぞ！」

稟「はっ！！ありがたきお言葉！！」

風「はいく！！ありがとうございます！！」

純「今後、俺の隊の指揮の一部はお前らに任せる。頼んだぞ。」

その時、稟と風、特に稟に至っては、全身が熱くなるように感じた。自身が慕っている主からの信頼に歓喜したのだ。

稟「はっ！！お任せ下さい！！」

風「風もですよ！！」

すると、

秋蘭「純様。ご無事でしたか。」

秋蘭が本隊に来たのであった。

純「見事な働きだったぞ、秋蘭。」

秋蘭「はっ！！ありがたきお言葉！！」

純「それで、春蘭はどうした？」

すると桂花が、

桂花「どうせ追撃したいと思うので、季衣に春蘭と追撃に行くよう指示しておきました。」

純「ほお・・・、やるな。」

華琳「そうね。見事な作戦だったわ。負傷者も殆どいないようだし、上出来よ。」

桂花「あ・・・ありがとうございます！華琳様！純様！」

華琳「後は、栄華。」

栄華「はい。事後処理に関しては、お任せ下さいませ。」

純「よし。秋蘭、桂花。本陣を前に移す指揮をしろ。このまま一気に砦も落とすぞ。」

秋蘭「はっ！」

桂花「承知致しました！」

そして、砦は陥落したのであった。その帰り道、

純「しかし、見つかりませんでしたね。姉上が気に掛けていた古書。」

春蘭「はい。大変用心の書ですよね。」

華琳「……太平要術よ。」

純「……つたく。」

柳琳「……。」

桂花「……。」

春蘭「言いましたよね！私、そう言いましたよね！」

純「稟と風は、あの古書について聞いたことある？」

稟「ええ。噂程度で、危険な書物であると。」

風「風も、稟ちゃんと同じ意見ですね。」

純「そっか……。」

香風「あの3人の盗賊も見つからなかったし、良く分かんかったです。」

華琳「無知な盗賊に焚き付けにでもされたか、落城の時に燃え落ちたのか……。まあ、代わりに桂花と許緒という得難い宝が入ったのだから、それで良しとしましょう。」

純「そうですね。季衣、姉上の警護、任せたぞ。」

季衣「はい！それに僕の村も、しばらくは曹操様が治めてくれることになりましたので！」

季衣「税もずっと安くなるし、警備の兵や曹操様の信用してる役人も連れて来てくれるっていうし、それが一番嬉しいです。」

季衣「だから今度は僕が、曹操様をお守りするんだー!」

純「そうか。しかしそれは・・・」

栄華「しばらくは今回の件の後始末も必要ですし、警護の名目も兼ねて沛国のあの方に申し出ておきましたので。」

純「そうか。まあ、あくまでも一時的な預かりであつて、返せと言われればすぐに返すと約束してありますからね。」

華琳「ええ、そうよ。」

季衣「えー。僕、曹操様がずっと村を治めてくれるほうが嬉しいんですけど。」

純「はは。しかし、問題は桂花のことですね。」

華琳「そうね。」

そう言つて、華琳と純は桂花を見た。

桂花「か・・・華琳様、純様。」

見られた桂花は表情を少し硬くしたのであつた。

華琳「桂花。城を目の前にして言うのもあれだけど、私・・・とてもお腹が空いているの。分かる?」

桂花「……はい。」

桂花「ですが華琳様！言い訳を承知で言わせていただければ、それはこの季衣が……」
季衣「ほえ？」

純「お前は気にするな。」

純「姉上。此度の件、こういつた予測に対処できなかつた桂花に責任はあります。しかし、此度の遠征の功績は無視できません。如何でしょう、此処は一旦減刑して、どういつた処分にするか、姉上がお決めになるといふのは。」

華琳「……いいわ。純の意見を汲んで、桂花、貴女の件、お仕置きだけで許してあげる。」

桂花「華琳様……っ！」

華琳「城に戻つたら、私の部屋に来なさい。たつぷり、可愛がつてあげる。」

桂花「ああ、華琳様。」

春蘭「……いいなあ。」

華侖「ね、柳琳。華琳姉え達、何の話してるんすか？」

柳琳「そ、それは……その……あうう。」

純「はは。後秋蘭、此度の戦の件、誠に良くやった。何か欲しいのある？」

秋蘭「はい。では今晚、純様の部屋に行つても宜しいでしょうか？」

純「ああ、良いぜ。」

秋蘭「ありがとうございます。では、今晚。」

純「分かった。それと秋蘭……」

そう言つて、純は秋蘭と轡を並べて、秋蘭は純に寄り添うように会話をしたのであつた。

それも見た華琳らは微笑ましく見つめていたが、唯一稟だけ以前と同じように、胸が締め付けられるような思いで、2人の様子を見ていたのであつた。

10話

陳留に帰還したその日の夜、

純の部屋

秋蘭「純様、秋蘭です。」

純「おお、ちよつと待って。」

そして、純は扉を開けた。

純「おう、秋蘭。入って入って。」

そう言つて、純は秋蘭を部屋に入れた。

そして、2人は向かい合つて座つた。

秋蘭「それで純様、褒美の件ですが。」

純「ああ、何かお願いある？何でも良いよ。」

秋蘭「はい。純様、今日私と一緒に寝て欲しいのですが？」

純「・・・はつ？えつと、秋蘭、もう一度今なんて言つた？」

秋蘭「はい、私と一緒に寝て欲しいと言ったのです。」

と、秋蘭は先程と同じ事を言った。

純「えっ、何で？」

秋蘭「最近一緒に寝ることがなかったの。・・・駄目ですか？」

秋蘭は上目遣いで純を見つめた。

純「いや、駄目じゃねーけど・・・、お前そんなに良いの？」

秋蘭「はい、私は純様と一緒に寝ることが最大の褒美なのです。」

純「しかし、俺もお前もいい年だろう？」
すると、

秋蘭「ふふ、私達の間は関係ありませんよ。」

クスクスと口元に手を当てて笑いながら秋蘭は言った。その表情は女性の妖艶さが
滲み出ているのである。

純「・・・しょーがねーな。」

そう言った純は立ち上がり、寝床に身体を向け、

純「好きにしろ。」

と言ったのである。すると、

秋蘭「・・・はい！」

と言った秋蘭は、純の腕に絡み、一緒に寝床に入ったのである。

純「つたく。お休み、秋蘭。」

秋蘭「お休みなさい、純様。」

暫くが経ち、

秋蘭「ふふ。」

夜が更けてきた頃、秋蘭は目の前で寝ている純の頬を撫でていた。

秋蘭「・・・純様、大好きです。」

純の寝顔を見てそう言い、その想いが溢れてくる。

片腕で純の腕を抱き、足も純の足を絡めている。秋蘭は純に親愛以上に想いを寄せている。

純の寝顔を見ながら、秋蘭は昔のことを思い出していた。

回想

2人の初めての出会い、今から10年近く前であった。その頃から、華琳と純は既に才能を発揮していた。

そのため、当時曹家の当主であった曹高は、2人を公私共に支えてくれる股肱の臣として仕えてくれる者として春蘭と秋蘭を呼び、華琳と純にもそれを伝えたのであった。

秋蘭「私は、姓は夏侯、名は淵、字は妙才と申します。」

純「おお、来たか！話は聞いてるか？」

秋蘭「はっ！この夏侯淵、心身の全てを捧げ、曹和様をお守りし……」
すると、

純「堅苦しい。『曹和様』はよせ。もっと砕けて呼んで良いぞ。俺より1個年上だけど、『純さん』とか。」

秋蘭「め、滅相もございません!!これから仕える主にそのような呼び方は!!しかも真名をいきなり預けるなど!!」

すると純は、少ししよんぼりした顔で見つめた。

秋蘭「……。そ、それでは……。『純様』とお呼びしても宜しいでしょうか？」

純「まあ、それでいいか。」

秋蘭「後、私の真名は秋蘭です。真名を預けられたので、私も純様に真名を預けます。」

純「おお、そっか。分かった。秋蘭、これからよろしく。」

そう言つて、純は秋蘭の前に行き、手を取つた。

純「秋蘭。早速だけど、何の武器が得意？」

秋蘭「えつ。弓が得意ですが・・・。」

純「ホント！じゃあ、早速狩りに行こう。」

秋蘭「えつ！宜しいのですか!？」

純「大丈夫だつて。ほら、行こ。」

そう言つて、純は秋蘭と一緒に狩りに出かけた。その道中、

春蘭「おお、秋蘭！どこか出かけるのか？」

秋蘭「ああ、姉者。ちよつと純様と狩りにな。」

すると、

純「お前が、秋蘭の姉か？確か姉上に仕える事になつた・・・」

春蘭「はっ！姓は夏侯、名は惇、字は元讓と申します。」

純「そうか。俺は曹和、字は子元、真名は純だ。」

春蘭「真名まで!?!宜しいのですか!?!」

純「ああ、お前もこれから共に戦う仲間。真名を預けなければ。」

春蘭「では、私の真名は春蘭です。」

純「そつか。春蘭、よろしく頼む。後俺のことは『純さん』で良いぞ。」

春蘭「そんな！そのような呼び方、畏れ多いです!!」

純「そつか……。まあ、秋蘭にも同じ事言われたなあ。まあ、好きに呼べ。」

春蘭「はっ！では、『純様』とお呼びします！」

すると、

華琳「あら、子元。早速仲間作りかしら？ご苦勞な事ね。」

華琳が現れ、純に対して嫌味を言った。

春蘭「華琳様……。」

純「姉上。別に俺はそのようなつもりで……」

華琳「でも子元、例えあなたがどんなに戦で私より手柄を挙げて、人々があなたについて行っても、私は負けないわ！必ず私が曹家の当主になってみせるわ！」

そう言つて、華琳はその場を後にしたのであつた。

純「……。」

秋蘭「純様……。」

純「あつ、ああ、気にすんな。悪いな、嫌などこ見せちまつて。」

秋蘭「いえ。」

純「よし、早速行くか！」

秋蘭「は、はい！」

純「春蘭はどうする?」

春蘭「申し訳ありません。私は華琳様の臣下でもありますので、今日は華琳様のお側にいたいと思います。」

純「そつか……。分かった。何か機会があつたら、一緒に行こう。」

春蘭「はい!」

そう言つて、春蘭は華琳が向かつた先に行つた。

純「よし、じゃあ行こ。」

そう言つて、純は秋蘭の手を取り、狩りに出かけ、大物を取つて皆にご馳走を振舞つたのである。

それから、純と秋蘭は寢食を共にし、絆を深めていった。その時秋蘭は、前から聞いていた通り、純は武人としても指揮官としても抜きん出た才能を持っており、一兵卒や文武官、そして民にまで慕われており、その人望は、姉の華琳を凌いでいると感じていた。

そのためか、姉である華琳は、純に対して一方的に嫌つていた。しかし、純は姉のことは嫌つておらず、むしろ寂しそうであつた。

そんな姿を見ていた秋蘭は、自身の主にそのような顔をさせている華琳が許せなかつた。しかし、純はその度に

純「気にすんな。」

と声をかけてくれた。その表情がとても無理をしているように見え、秋蘭は、いつも胸が締め付けられる思いがした。

そんなある日、

純「お呼びでしょうか。父上。」

純は、父である曹嵩に呼ばれていた。秋蘭を連れて。

曹嵩「うむ。近くの村が賊に襲われているとの情報があつてな。お前たちに任せたいのだが。」

純「分かりました。では、すぐに出陣します。」

曹嵩「うむ。頼んだぞ。」

純「はっ。ではこれにて。行くぞ、秋蘭。」

秋蘭「御意。」

そう言つて、純達はその場を後にし、出陣したのであつた。それと入れ替わりに、

華琳「お父様!!?」

曹嵩「おお、華琳か。どうしたそんなに慌てて。」

華琳「どうしたではありません。どうして今回の賊討伐の件、子元に任せただのですか？？」

曹嵩「お前も初陣以来、場数を踏んでおるし、戦の才もある。けど、お前より遙かに彼奴の方が戦の才がある。故に彼奴に任せただのだ。」

華琳「しかし、私と春蘭でも……。」

曹嵩「華琳！いつまでも下らない妬みで純を悲しませるな！純は純。お前はお前であらうが！」

華琳「……っ！」

そう言われた華琳は、唇を噛みしめながらその場を後にした。

曹嵩「……華琳。いつまでもそのような態度では、いずれ曹家は2つに割れてしまおうぞ……。ただでさえ華琳の派閥と、純の派閥に別れかけておるのに……。」

そう呟いた曹嵩であつた。

一方純達は、

純「秋蘭。部隊を2つに分ける。1つはお前が率いる。もう1つは俺が率いるから、2つの部隊で挟み撃ちをする。1人も逃がさず殲滅しろ。」

秋蘭「御意。」

そして2人はそれぞれ率いる部隊に別れ、村に向かう街道を駆け下りる。それに気付いた賊であったが時既に遅く、

純「死ね。」

純の一刀で賊の首が宙に舞う。それが皮切りで、賊との戦いが始まった。

一方の秋蘭の方も、賊とぶつかり、戦いが始まった。秋蘭はただただ純に褒められた
いの一心得賊を射抜いていた。しかし、

賊A「このアマー！死ねー！」

そう言った賊は、秋蘭に剣を振り下ろそうとした。

秋蘭「……っ！」

突然のことで身体が動かず、目を閉じたが、その衝撃が来ず、むしろ、

賊A「ぐはあっ!？」

秋蘭「……っ!？」

賊のうめき声が聞こえたので目を開けると、賊の身体に矢が貫いていて、その先には
純が弓を構えていたのである。

純「気を抜くなー！徹底的にやれー！」

そう言つて、純は馬を駆け抜けた。そして賊は、全滅したのであった。

そして、村人達から感謝された純達は、帰る準備をしていた。その時、

秋蘭「純様。」

秋蘭が純を呼んだ。

純「おお、秋蘭。先程は大丈夫だったか？」

秋蘭「はい。申し訳ありません。」

純「ん？何故謝る？」

突然謝ってきたので、困惑する純。

秋蘭「お支えするはずが、逆に助けられてしまつて……。」

すると純は、

純「気にすんなつて。これから経験を積めば、お前は凄い將軍になるつて。大丈夫。」

秋蘭「……はい。」

純「よし、引き揚げるぞ。」

秋蘭「……御意。」

そして、純達は引き揚げて、曹嵩に報告をしたのであった。

その夜、

秋蘭は一人、弓の鍛錬をしていた。

秋蘭「くっ！こんなことで純様のお助けになるか！」

しかし、いつもの秋蘭ではなく、鬼気迫るような感じであった。

秋蘭「こんなことで！」

すると、後ろから純が秋蘭の背中に付き、

純「いいか秋蘭。弓はこう構えた方が良いぞ。」

そして、純は秋蘭に指導していた。

純「これで打ってみな。」

その声に従って、打ってみた。すると、先程よりも打ちやすくなっていたのである。

純「そうそう、そんな感じ！この感じを忘れんなよ。」

すると、秋蘭は跪き、拱手した。

純「そう思い詰めるな。お前は良くやっている。」

秋蘭「いいえ。まだ足りません。」

秋蘭は純の言葉を否定した。

秋蘭「純様をお支えするには、まだ力が足りません。いえ、何もかもが足りませぬ。」

すると、純は秋蘭の頭を撫で、

純「もう良い。」

そう言った。

秋蘭「純様……。」

純「お前のそんな姿、俺見たくねーよ。お前は俺にとって、大切な人なんだから。」

秋蘭「私にそのようなお言葉、もつたいない。」

すると、純は秋蘭の膝の上に頭を置いた。

純「だからもう良い。見ろ。今日は満月だぞ。」

そう言われて、秋蘭は空を見上げた。すると、純が言っていたとおり、満月があつた。

秋蘭「……はい。」

すると、純は秋蘭の膝の上で静かな寝息を立てながら眠つたのであつた。秋蘭は、彼の寝顔を見て、純に対して別の感情を抱いていた。そして純の頭を撫でながら、

秋蘭「いつまでも、お側でお支えます。いつまでも……。」

そう言った。すると、

純「ああ、約束だぞ。」

恐らく純の寝言であろう台詞に驚いた秋蘭であつたが、すぐに穏やかな顔になり、顔を屈め、純の顔に近づき、

チュッ

純の唇にキスをしたのであった。

秋蘭「大好きです。純様……。」

優しい夜風が秋蘭の頬を撫でていた。

回想終了

この日以来、秋蘭は一人の女として、純に強い想いを寄せた。その日以来、少しずつ純に触れ合う回数を増やしていった。

そして、時々見せる純の少なからず動揺を見せる姿が堪らなく嬉しかった。

秋蘭「……今はまだ、これだけ……。」

そう言つて、秋蘭は純の唇を奪う。もつと、もつと触れたいという気持ちをどうにか抑え込み、唇を離す。

触れ合った唇に純の余熱を感じる。純と床を共にする事は少なくない。その度に秋蘭は純には内緒でこの秘密の行為を行っている。

秋蘭「……こんな可愛らしい無防備だといつか、貴方を襲いますよ。」

クスツと笑い、両手で純の腕を抱く。今日もまた、純の匂いに包まれながら眠る幸せを噛みしめながら目を閉じた秋蘭であった。

11話

☒州・陳留

季衣「むぐむぐ……。すごい！美味しい！」

季衣「陳留のご飯って、何を食べても美味しいよね……。僕ビックリしちゃった。」
純「そっか……。それは良かった。」

華侖「ここはあたしオススメのお饅頭屋さんなんすよ！ほら、純兄も食べるっすー！」
純「俺はもう良いから、2人で食べな。」

季衣「え!?!良いんですか!?!」

そう季衣が答えたのだが、

純「ああ。」

純はそう答えたのであった。

華侖「純兄、ありがとうっすー!!」

季衣「おじさーん。おかわりー！」

純「え、お前まだ食うの!?!」

すると、大通りから賑やかな声が聞こえてきた。

純「ん？何だ？」

季衣「むぐむぐ・・・、純様、お仕事？手伝いませようか？」

純「いや、季衣が出るほどじゃねーと思うけど・・・。」

純（多分ケンカとかの類じゃねーな・・・。）

華侖「とりあえず、行ってみるっすー！」

そして、3人は大通りに行っただけであつた。

大通り

純「なるほどね。恐らく春蘭だな。」

大通りに顔を出すと、遠征から帰ってきた兵士達が行進をしているのであつた。

季衣「きつとそうですよ！おーい！おーい！」

華侖「おーい、おーい！あうう、これじゃ向こうから見えないっすー！」
すると、

季衣「純様。肩貸しても良いですか？」

と言つてきたので、

純「ああ、良いよ。」

そう言つて、純は季衣に肩を貸したのであつた。

華命「あーっ。季衣だけずるいつすー！純兄、あたしもだっこして欲しいつすー！」

純「お前なあ、さすがに2人は厳しいぞ・・・。」

華命「欲しいつすー！して欲しいつすー！」

そう華命が我儘を言つたので、

純「しようがねーな。」

そう言つて、純は華命の脇に手を入れて、出来る限り持ち上げたのであつた。

華命「おおー！さすが純兄つすー！よく見えるつすー！」

純「つたく・・・。」

すると、

季衣「あ、春蘭様だー！」

華命「香風もいるつすー！おい、おい！」

春蘭「純様、ただいま戻りました。季衣！今戻つたぞ！」

香風「純様も華命様も、ただいま戻りました。」

純「2人ともご苦労だつたな。その様子じゃ、平定は上手くいったようだな。」

春蘭「はっ！全て完了致しました。」

純「そうか。良くやった。しかし、最近お前らに任せてしまつて申し訳ない。」

春蘭「いえ、これも華琳様と純様の御為！頼られるのは嬉しいことです！」

純「そうか。」

すると、

香風「春蘭様、列がつかえる。」

春蘭「そうだな。ではまた後で。華命！季衣！お前達も仕事に励めよ！」

純「ああ。では、後で武働きを聞かせてもらうぞ。」

春蘭「はっ！」

そして、馬上の2人を含む本隊は城に向かったのであつた。

季衣「すごいなあ、春蘭様。」

華命「それより2人とも、早くお城に戻るつす！春姉え達から活躍のお話、聞かせて

もらうつすよー！」

純「はは。こつちの仕事は終わったから、戻るか。」

謁見の間

華琳「・・・そう。山陽の平定は上手くいったのね。」

春蘭「はっ。ひとまず暴れていた賊は下しましたので、しばらくはあの辺りも平和になるかと。」

香風「それで、山陽の太守が・・・、これからも、守ってって。」

栄華「・・・またですか？」

春蘭「うむ。またなのだ。」

純「そっか・・・。しかし、メンドーだな。これゼツテー秋蘭と柳琳が行っている泰山もだろ、きつと・・・。」

春蘭「はい。恐らく純様のおっしゃる通りかと。」

純「それに泰山って、結構ヤバイよな、稟。風。」

稟「はい、その通りです。」

風「そうですね。風も調べたとき、驚きましたよ。」

華命「それって、どういう意味ですか？」

稟「あそこの地域は、役人の不正が他の所以上に横行していたのです。」

桂花「だから、秋蘭にその証拠の資料をいくつかね・・・。」

純「さすが桂花。まあ、それが良いだろう。」

華琳「ええ。綱紀肅正を言い渡すだけだもの。それを聞く気がないなら、大人しく軍を退くだけよ。」

純「そうですね。この苑州は姉上頼みですからね。」

桂花「はい。不正を行わないだけで領地を守ってもらえるので、安いものです。別に賄賂を送れと言っているわけでもないですし。」

華琳「ええ。腹を探られて痛いなら、腹を痛くしなければいいのよ。」

榮華「何より、州各地でのお姉様とお兄様の人気は相当なものですもの。今さら私達を追い返したところで、民の不満は高まるだけですわ。」

純「まあ、今までの賊退治の応援に気持ちよく応えてたのは、この時のためだからな……。」

榮華「はい。世の中に、タダより高いものはありませんから。」

純「しかし、桂花も稟も風も榮華も大変だったろ。今までの仕事に加えて、そういう調査や情報収集までとか……。」

桂花「それこそ望む所です。華琳様と純様の霸道が着々と進んでいるという事ですから。軍師冥利に尽きるというものです。」

稟「私は、純様のお役に立てるなら何でもします。」

風「風も稟ちゃんと同じ意見ですよ。」

純「そっか……。そう言えば姉上、前に州牧から感謝状が届きましたよね。」

華琳「ええ。前に一枚そういつたのが届いた気がするわね。一層の奮起を期待するつて書いてあつたわ。」

純「そうですか。でも、姉上の振る舞い程度で奮起するような州牧なら、とつくに☒州は良くなつてますよね。」

華琳「ええ。貴方の言う通りね。」

華琳「……。さて。なら、後の報告は香風に任せるわ。いつものように報告書に纏めておいて頂戴。」

香風「はい。」

栄華「お姉様。午後からは……。」

華琳「ええ。陳登の所に視察に行つてくるわ。季衣、午後の予定は空けてあるわね?」

季衣「大丈夫です!」

華琳「結構。純、後は頼んだわよ。」

純「お任せ下さい。」

そして華琳は、視察に行つたのであつた。

1 2 話

謁見の間

泰山郡に遠征に出ていた秋蘭達が戻ってきて少し経った朝議でのこと。

秋蘭「・・・純様、それは本当ですか？」

純「ああ、本当だ。姉上が□州の州牧になった。」

華琳「それも正式にね。」

すると、

春・華・季「「おめでとうございます、華琳様／姉え！」」

春蘭と華侖、そして季衣がそれぞれ即答して祝いの言葉を述べた。しかし、

秋蘭「・・・。」

柳琳「・・・。」

桂花「・・・。」

稟「・・・。」

風「・・・。」

即答した3人以外は、なんとも言えない微妙な表情を浮かべていたのであった。

季衣「はれ？秋蘭様達は、賛成じゃないんですか？」

華侖「えー。華琳姉えが州牧になったほうが絶対いいですよー！柳琳はイヤなんすか。」

柳琳「うん……。それ自体は、すごくいいお話だと思うんだけど。」

桂花「……。それは、一体誰からの申し出ですか？とても□州の現州牧が華琳様に申し出るとは思えませんか……。」

その質問に華琳は、

華琳「陳珪よ。」

そう答えたのであった。

桂花「……。やはりですか。」

純「しかし、これは姉上しか得しねーな。」

栄華「はい、お兄様の言う通りですわ。」

稟「はい、私もそう思います。どう考えても、曹操殿しか得しません。」

風「風も稟ちゃんと同じ意見ですね。」

純（これ以上姉上を持ち上げる必要が見当たらない。何を企んでいる、陳珪……。）
栄華「□州と何かしらの同盟を結ぶつもりでも、今の無能な牧を好きに操る方が何か

と都合が良いでしょうに……。」
すると、

季衣「ねえねえ、香風。ちよつと良い？」

香風「んー。」

季衣「陳珪つて人、確か豫州の沛国の相だよね？」

香風「そう。」

季衣「なんで、他の州の人が□州の州牧を決められるの？」

季衣がそう質問すると、

香風「それが……、政事の闇。」

香風がそう答えたのであつた。

季衣「まつりごとのやみ……。」

春蘭「……秋蘭。」

秋蘭「私にも分からん。豫州の州牧が口添えというならまだしも、一国の相がそこま
で力を持てるとも思えんが……。」

純「姉上、恐らく朝廷にも繋がりがあるのでは。」

華琳「ええ、そうかもしれないわね。」

華命「じゃあ華琳姉えはどうするつすか？州牧にはならないつすか？」

華琳「当然、引き受けるに決まっているわ。」
しかし、

桂花「反対です！せめて、もう少し情報を集めてから……。」

栄華「それに、泰山での綱紀肅正の噂も既に出回っています。今州牧を引き受ければ、民草はまだしも他の太守からより多くの反感を買うことに……。」

桂花と栄華が時期尚早であると反対したのであった。

華琳「反感など、いつ牧になったとしても起こるものよ。だとしたら、早い方が良いでしょう。」

桂花「それはそうかもしれませんが……！」

華琳「たとえこの先に陳珪の策が控えていたとしても、食い破れば良いだけ。そこで陳珪の策に潰えるなら、私の器もそこまでという事だわ。」

桂花「……。」

華琳「……さて、他に異論の有るものはある？」

そう華琳が問うと、

柳花「……お姉様がそこまでのお覚悟なら。」

栄華「ですわね。私達の命、既にお預けしていますもの。」

桂花「その策を食い破る策は、私が献じさせていただきます。」

皆それぞれそう言ったのであった。

華琳「・・・純は？」

純「異論はありません。ただ、命の懸け所は見誤らないで下さい。」

華琳「それは貴方達の働き次第ね。」

華琳「桂花、陳珪に遣いを出しなさい。その申し出、慎んで受けさせていただく、とね。・・・人選は任せるわ。」

桂花「・・・はっ。承知致しました。」

あれから数日後、

純「・・・暇だ。」

稟「仕方ありません。気長に待つしかありませんよ。」

風「ぐうぐ。」

稟「寝るな！」

風「おお！気持ちよくて遂・・・。」

稟「全く・・・。」

すると、

春蘭「おお、純様。早かったですね。」

春蘭と桂花が来たのであった。

純「ああ、春蘭か。姉上と秋蘭は？・・・あれか？」

春蘭「はい。髪の毛のまとまりが悪くて、今榮華と柳琳に整えさせています。」

純「そうか・・・。しかし、もし髪がまつすぐになれる物が出てきたら、ゼッター姉

上は買うだろうな。」

春蘭「そうですね。しかし、そのような物、大陸のどこに探してもありませんよ。」

純「それもそうか・・・。しかし、姉上ももう州牧か・・・。」

春蘭「どうかなさいましたか？」

桂花「何か気になることが。」

純「ああ。これからメンドーな問題が起きると思つてな。その時は、頼りにしてるぞ。」

春蘭「お任せ下さい！先日華琳様がおつしやつたように、食い破るだけですから。」

桂花「・・・その食い破る策を考えるのは私なんだけどね。」

春蘭「どうした、華琳様のお役に立てるのだ。誇らしい事ではないか。」

桂花「そこは否定しないけど。」

稟「まあ、私はもし陳珪が純様に害をなす者であつたら、この手で始末しますが。」

風「おお！稟ちゃんもなかなかえげつない事を言いますね。」

純「はは。」

桂花「後は、情報収集に努めるしかないわね……。あまり借りは作りたくはないのだけれど、中央の知り合いに当たってみるしかないか。」

桂花「まあ、今は中央も×州周りの情報は欲しがらうし、それをエサにすれば何とかなるかしら……。」

純「まあ、お前の家は名門だからな。それ繋がりもあるか。」

桂花「はい。しかし、それだけではありません。前所属していた袁紹の所は、扱いは悪かったのですが、中央との繋がりも作ることが出来たので。」

純「なるほどね……。」
すると、

華命「お待たせつすー！」

純「……。」

華琳「……何？」

純「いえ、春蘭から髪のみとまりが悪かったとお聞きしたので……。大丈夫でしたか？」

華琳「雨でも降るのかしらね？いつもと違うようにしかまとまらなかったのよ。……」

どう？貴方から見て変ではないかしら？」

純「栄華と柳琳が見て大丈夫なら、大丈夫だと思えますよ。それに、俺から見ても、特に変ではありませんし。」

栄華「当然ですわ。ちゃんとお手入れさせていただきましたもの。」

柳琳「はい。いくらやっても御髪が思うように落ち着かなくて、大変でしたけど。」

華命「・・・あたしは何が違うのか全然わかんなかったっす。」

純「そ、そっか・・・。ところで、季衣と香風は？」

その問いに、

秋蘭「今朝、この辺りで怪しい人物の目撃証言が入ってきたのです。調査は私と姉者がするから街を見てこいと言ったのですが、聞かなくて。」

秋蘭がそう答えたのであった。

純「ほお、怪しい人物・・・？」

華琳「太った大男と、痩せた小柄な男と、髭面の男の3人組だそうよ。」

純「ほお・・・。」

栄華「・・・流石にあの根城の壊滅から時間も経っていますし、可能性は限りなく低いでしょうけれど。」

華琳「それに珍しくもない外見だし、この陳留に戻ってくる理由も思い当たらないし

ね。」

純「確かにそうですね。」

純「そんじや、頑張つてる2人に土産を買つて帰つてもバチは当たるまい。」

春蘭「なんだ、考えることは同じでしたか……。」

桂花「春蘭、別に観光に行くわけじゃないのよ。」

稟「そうですね、純様。」

純「分かつてるよ。視察をちゃんとやり、その上で土産を買うんだから。別に構いま

せんよね？姉上。」

華琳「仕事をちゃんとするならね。」

春蘭「はいっ！」

桂花「……返事だけにならなければいいけど。」

華琳「さて、揃つたのなら出かけるわよ。桂花、留守番、よろしくお願いね。」

桂花「華琳様あ……。なんで私はお留守番なんですかあ……？」

華琳「貴女を信頼してるからこそよ。」

柳琳「桂花さん、私も残りますから。」

稟「桂花。私と風もいます。」

桂花「はあ……。稟と風はともかく、柳琳は、街に行つてもいいんだけど。」

華侖「そうっすよ。あたしも柳琳と一緒にきたかったっすー!!」

柳琳「でも、誰かが残らないとでしょ？今度また、一緒にお買い物に行きましょ、姉さん。」

華侖「約束っすよ!!」

華琳「何かあったときの判断は貴女達に任せるわ。いいわね？」

桂花「はあい。」

純「稟、風。頼んだぞ。」

稟「はっ!!」

風「はい。」

そして、視察に行ったのであった。

城郊外

??「あれが陳留か・・・。」

??「やっと着いたのー。凧ちやーん、もう疲れたのー。」

凧「いや、沙和・・・、これからが本番なんだが。」

沙和「もう竹カゴ売るの、めんどくさいのー。真桜ちゃんもめんどくさいよねえ・・・。」
真桜「そうは言うてもなあ・・・、全部売れへんかったら、せつかくカゴ編んでくれた村のみんなに合わせる顔がないで。」

凧「そうだぞ。せつかくこんな遠くの街まで来たのだから、みんなで協力してだな・・・。」

沙和「うー。わかったのー。」

真桜「最近はなんや、立派な太守さんとその弟さんがおるとかで治安も良うなつとるみたいやし、いろんな所から人も来とるからな。気張つて売り切らんと。」

凧「ああ。その太守様も州牧に格上げになつたと聞いたし、街もずつと賑やかになつてはるはずだ。それにその弟さんは間違いなく曹和様だ・・・。」

真桜「凧はその曹和様に憧れとるからなあ。」

沙和「そーなのー。凧ちゃんつたら、曹和様の活躍を聞きたびに、恋する乙女みたいな顔になつてるのー。」

凧「お、おい！別にそんな意味で聞いてはいないぞ！曹和様は武人の鑑。私の目標であるだけだ。」

真桜「そんなこと言うて、本当はそんな関係になりたいいくせに。」

凧「ま、真桜……！」

真桜「はは！冗談や、凧！」

沙和「ねえねえ。そんなことより、この街がそんなに賑やかならみんなで手分けして売った方が良くない？」

凧「……なるほど。それも一利あるな。」

真桜「それじゃ、3人で別れて一番売った奴が勝ちつて事でええか？負けたヤツは晩飯、オゴリやで！」

凧「こら真桜。貴重な路銀を……。」

沙和「分かったのー！」

凧「沙和まで……。」

真桜「よっし。二対一で、可決つてことで！凧もそれでええやろ？」

凧「はあ……、やれやれ。仕方ないな。」

真桜「ほな決まり！」

沙和「おーなのっ！」

凧「……なら、夕方には門の所に集合だぞ。解散！」

陳留城下

?? 「はい！それでは、次の曲、聞いていただきますよう！」

?? 「姉さん、伴奏お願いね！」

?? 「はい。お姉ちゃんに、お任せだよーっ♪」

秋蘭 「ほう。旅芸人も来ているのか……。」

純 「ああ。あれは東の歌か……。あちらからは来なかつたしな。」

秋蘭 「はい。そういう意味では、我々の働きが認められたのかもしれないね。」

純 「そうだな。」

栄華 「特にあの方達は女性だけのようですし。道中は煩わしい男どもに絡まれる事も多いでしょうから……。武芸に相当の自信があるか、よほど安全な道がないと来ないでしょうね。」

?? 「ありがとうございますー！」

?? 「それでは次、もう一曲、いつてみましょうか！」

すると、

華琳 「まあ、腕としては並という所ね。それより、私達は旅芸人の演奏を聴きに来た

ワケではないのよ？」

純「そうでしたね。狭い街ではないので、手分けして見ていくのはどうですか？」

華琳「そうね。それで、どう分けるのかしら？」

純「そうですね……。では、姉上は俺と。春蘭は栄華と。秋蘭は華命と組むというのはどうでしょう？」

すると、

秋蘭「……。純様。私と一緒に駄目ですか？」

少し不満そうな顔をした秋蘭が言ったのであった。

純「お前と2人で視察に行くんだつたらまだしも、今回は別だ。違う視点で見ることもある。それに、もし春蘭と華命が組んだら、終わる視察も終わらなくなる。だってらこうやって組んだ方が良いと俺は思ったんだ。」

秋蘭「……。そうですね。」

説明を聞いた秋蘭は、納得しつつも少ししよんぼりした感じになったのであった。それを見た純は、

純「そんな顔をするな、秋蘭。今度一緒に行けたら、一緒に買い物に行こ。なつ。」

そう言つて、純は秋蘭の頭を撫でてやったのであった。秋蘭は目を細め擦ったそうにしているが、もつとしてくださいとばかりに擦り寄ってきたのであった。

栄華「ところでお兄様。私は春蘭さんですか？」

純「ならどっかの男と一緒に見るか？」

栄華「ううう……、確かに、まだ春蘭さんの方がマシですわ。」

春蘭「むう、栄華。それは私を馬鹿にしているのか。」

華琳「なら、決まりね。では、後で突き当たりの門の所で落ち合いましょう。」

純「分かりました。じゃあ秋蘭、また後でな。」

秋蘭「……あ……。んんっ、はい、分かりました。」

その時、秋蘭は一瞬寂しそうな表情をしたが、すぐに咳払いをして、いつものクールな顔に戻ったのであった。

そして、それぞれ別れて視察を始めたのであった。

13話

陳留城下裏通り

純と華琳が担当する街の中央部は、真ん中を走る大通りと、そこに並ぶ市場がメインであった。

純「あの、姉上。」

華琳「何？」

純「大通りは見て回らなくていいのですか？」

華琳「大通りは後でいいのよ。大きな所の意見は、黙っていても集まるのだから。」

純「なるほど……。」

華琳「それより純。……この辺りを見て、貴方はどう思う？」

純「そうですね……。野菜を置いてる店もあり、肉を置いてる店もある。後干物もあるな。そういった食材が売っているの、料理屋も多いですね。」

華琳「そうですね。それで？」

純「えっと……、鍛冶屋があれば儲かりそうですね。」

華琳「鍛冶屋？」

純「ええ。食材を切るのに包丁が要ります。後調理器具も。とは言え、鍛冶屋は3つ向こうの通りに行かないと無いですよね。」

華琳「ええ、そうね。また、その向こうには料理屋は無かったわね。」

純「流石姉上。詳しいですね。」

華琳「街の地図を見ていたからね。それに、街の空気は地図や報告書だけでは実感出来ないし。」

華琳「たまにはこうして自分の目で確かめておかないと、住民達の意にそぐわない指示を出してしまいかねないわ。」

純「なるほど。確かにそうですね。」

華琳「ええ。それにああいう光景も、執務室に座っているだけでは分からないもの。」

華琳は露店の前の人だかりを見てそう言ったのであった。

真桜「はい、寄ってらっしゃい見てらっしゃい！」

そこには露天商らしき少女がおり、その狭いスペースには、竹カゴがずらりと並べられていたのであった。そして、

純「・・・何だこれ？」

華琳「カゴ屋のよう・・・だけれど？」

純「いえ。カゴではなく、こちらの方です。」

そうやって純が指さしたのは、少女の脇に置いてあるなんとも言えない物体があった。

純「これは一体何の装置でしょう？」

華琳「・・・さあ？」

すると、

真桜「おお、そこのお二方、なんともお目が高い！コイツはウチが発明した、全自動カゴ編み装置や！」

そう答えたのであった。

純「全自動・・・」

華琳「カゴ編み装置・・・？」

真桜「せや！この絡線の底にこう、竹を細う切った材料をぐるーつと一週突っ込んでやな・・・、その兄さん、こっちの取っ手を持って！」

純「ああ・・・。」

純は、言われるがまま、機械の取っ手を手に取る。

真桜「でな。こうやって、ぐるぐるーつと。」

純「回すんだな。」

言う通りにぐるぐる回していくと、セツトされた竹の薄板が機械に吸い込まれていき、暫くすると、装置の上から編み上げられた竹カゴの側面がゆつくりとせり出してきたのであった。

真桜「ほら、こうやって、竹カゴの周りが簡単に編めるんよ！」

純「ほお……。」

華琳「……底と枠の部分はどうするの？」

真桜「あ、そこは手動です。」

華琳「……そう。まあ、便利と言えば、便利ね。」

純「全然全自動じゃないじゃん。」

そう言つて、純は取っ手から手を離れた。

真桜「う。兄さん、ツツコミ厳しいなあ……。そこは雰囲気重視、つちゆうことで

ひとつ。」

純「あ、そう……。」

少し呆れてしまった純であった。

純「まあ、いつか。面白いもんが見れたし。そのカゴ、2つ貰おうか。」

真桜「お兄さん、ホンマか！」

純「ああ。いいですよね、姉上。」

華琳「ええ。構わないわ。けど、なんで2つなのかしら？」

純「以前豫州の賊討伐で、稟と風も手柄を挙げたのですが、その褒美を与えておりませんので、代わりにカゴでもあげたら喜ぶかなつと。」

華琳「そう。構わないのではなくて。特に郭嘉は大喜びするわよ。」

純「そうでしょうか。流石にカゴというのは・・・。」

華琳「どのような物でも、褒美であれば臣下は嬉しいものよ。」

純「そうですか・・・。そうですね。では、2つ貰おう。」

真桜「毎度あり！」

そうして、純はカゴを買い、視察を再開したのであった。その際、季衣と香風に土産を買ったのであった。

その頃、春蘭と栄華達は、

春蘭「この辺りは、服屋ばかりか・・・。」

栄華「ちよつと。今日は視察なのでから、お買い物はナシですわよ。無駄なお金は

使わないようにして下さいまし。」

春蘭「そんな事は分かつている。服などどうでも良い。」

しかし、

栄華「あら。この服、可愛らしいですわね……。季衣さんや香風さんに着せたら似合ひそう。」

栄華が服の誘惑に負けていたのであった。

春蘭「言う端からなんだ、栄華。今日は視察に来たのだから、買い物はナシなのだろう。」

栄華「わ、分かっていますわよ。私物を買いに来るのなら、ちゃんと日を改めて参りますわ。」

春蘭「やれやれ。本当は華琳様と2人で視察をしたかったのだが、純様の命令だしな……。」

栄華（……うう。やつぱりさっきの服、気になりますわね。）

すると、何か良い服を見つけた春蘭は、

春蘭「むう……。これは。」

春蘭「この華麗な装い……。華琳様がお召しになつたらさぞお似合ひになるだろうな。」

そんなことを言ったのであった。

栄華「・・・ごほん。春蘭さん？」

春蘭「わ、分かっている！買いに来るのなら、日を改めてだろう。」

春蘭「だが、1着しかなさそうだし、取り置きだけでも・・・。」

栄華「・・・お取り置きまでするのなら、もう買うのと同じではありませんの。」

春蘭「・・・。」

栄華「・・・。」

春蘭「・・・なあ、栄華。」

栄華「・・・なんですの。」

春蘭「街の賑わいを確かめるなら、自身でも体感してみるのが一番だとは思わんか。」

栄華「あら。春蘭さんにしては、良い事をおっしゃいますのね。」

栄華「それに街にお金を回すのも、時には必要な事ですわ。」

春蘭「・・・なんだ、金は使わないのが一番ではなかったのか。」

栄華「世の中には、使ってはならないお金と使うべきお金がありますの。使うべきお金を使うのは、世間にお金を回すための健全な行いですよ。」

春蘭「お前の言っていることはよく分からんが、私はひとまずこの店を視察してみようと思う。」

栄華「視察ですよ。あくまでも、これは視察ですからね……。」

そう言つて、2人は服屋に入ったのであつた。

店員A「いらつしやいませー！」

春蘭「おお、これはなかなか……。」

栄華「これも可愛らしいですわ……。」

店員A「あのう、お客様。失礼ですがこの辺りは、お客様よりも少々小さめの……。」

お客様に合うものでしたら、あちらの棚に。」

春蘭「私の物など買つてどうするのだ。」

店員A「え、お客様……?」

栄華「申し訳ありません。私達、知り合いの服を買いに來ただけですので……。」

店員A「そうでしたか。でしたら、何かありましたらお声掛けくださいませ。他の大

きさまもご用意出来る物がありますので。」

栄華「ええ。その時はお願い致しますわ。」

春蘭「ほほう……、これも悪くない。ああ、あれも華琳様に……。」

すると、

??「じゃあ、これは?」

1人の少女が春蘭に声を掛けたのであつた。

春蘭「おおつ。これは素晴らしい！」

沙和「やっぱりなの！それだったら、こっちも合うと思うのー。」

春蘭「・・・そうか？それはイマイチだろう。むしろ、これを内側に合わせたほうが・・・。」

沙和「おおーつ。お姉さん、なかなかやるのー。」

春蘭「お主もな・・・って、誰だ貴様っ！」

沙和「うーん。さつきから、服を見る目がすごく熱かったから・・・。こういう服が好きなら、これも気に入るんじゃないかなーって思ったの。」

栄華「あら。そちらは、今年の流行りですわね。」

沙和「そっちのお姉さんも詳しくそうなの！なかなかやるの・・・。」

栄華「ふふつ。まずは基本を抑えてこそ。その辺りは外しませんことよ。」

沙和「それにそっちのお姉さんは、自分のこだわりがちゃんとあるみたいなの・・・。そういうのも、とつてもステキなの！」

春蘭「ふつ。貴様、この私とやり合う気か？華琳様のための私は、自分で言うのもなんだが・・・、かなり凄いで？」

沙和「んー。このお店、可愛い服がたくさんあるし・・・、わかったの！その勝負、受けて立つの！」

栄華「面白くなってきましたわね……。なら、私も負けませんわよ！」
そして、勝負が始まったのであった。春蘭と栄華は肝心の視察を忘れて……。

そして、

春蘭「……。うむ、久しぶりに良い戦いであった。血がたぎったぞ！」

沙和「私も楽しかったの。その買った服も、きつとその子達に似合うと思うのー。」

栄華「ふふつ。あなたの見立ても、なかなかお見事でしたわ。」

沙和「お姉さんとも、またいい勝負が出来る気がするの……。」

春蘭「しかし、少々服を買いすぎたな。これでは持つて帰るまでに落としてしまいうだ……。うだ……。」

すると、

沙和「あー。それなら、この竹カゴを使うといいの。」

春蘭「おお、それは助かる！感謝するぞ！」

沙和「あ、でもそれ、売り物なの……。」

春蘭「なんだ、そうなのか。」

沙和「あと今思い出したけど、今日中にこのカゴ、全部売らないといけないの……。」
春蘭「ふっ。それならそうと早く言え。今日の勝負の札だ。そのようなカゴ、私が全て引き取ってやろうではないか！」

しかし、

栄華「ちよつとお待ちなさい、春蘭さん！それとこれとは別問題ですわよ、必要な分だけ買えば十分でしょう！」

栄華は、買いすぎであると反対したのであつた。

春蘭「好敵手には相応の敬意を払わねばなるまい。任せろ！」

沙和「おおっ！お姉さん、太っ腹なのー！」

春蘭「はっはっは。誰がお腹がたゆんたゆんで子供が乗ったらフカフカだとー？」

沙和「誰もそんなこと言っていないのー。」

春蘭「まあ良い。ほれ、これで……。」

そう言つて、春蘭は金を出したのだが、

沙和「……。」

春蘭「……。」

栄華「……。」

服を買いすぎて、もう殆ど残っていないなかったのであった。

沙和「……それはさすがに、1個しか売れないの。」

春蘭「え、栄華……！」

栄華に助けを求めたが、

栄華「お金なら貸しませんわよ。それは、使う必要のないお金ですもの。」

春・沙「そ、そんなあ……。」

はつきりと断られてしまったのであった。

一方、秋蘭と華命達は、

秋蘭「……。」

風「……。」

華命「……。」

秋蘭「……。」

風「……。」

華命「……ふああ。」

秋蘭「……良いものだな。このカゴは。」

凧「……どれも入魂の逸品です。」

秋蘭「……そうか。」

凧「……はい。」

秋蘭「……。」

凧「……。」

そして、秋蘭はまたカゴを見ながら、じっくり考えていたのであった。一方華命は、
華命「……あ。こっちはお肉売ってるっす。くださいな。」

秋蘭と凧のカゴを巡っての静かなる戦いに飽き、遊んでしまったのであった。

秋蘭「……。」

凧「……。」

華命「……むぐむぐ。お肉おいしいっす！もう一本欲しいっす！」

男「姉ちゃん、このカゴひとつおくれや。」

凧「……まいど。」

秋蘭「……。」

凧「……。」

華命「あ！こっちは何すか・・・？わ、ぴゅーって吹いたら変な音が出るっす。面白
いっすー！」

秋蘭「・・・。」

凧「・・・。」

華命「よし！これを季衣と香風のお土産にするっす。2人とも、ぜったい喜んでくれ
るっす・・・！」

すると、

秋蘭「・・・よし。」

凧「・・・っ！」

秋蘭「これを2つ、もらおうか。」

凧「・・・はっ。」

最終的に、秋蘭が2つカゴを買うという事になったのであった。

突き当たりの門

華琳「……で？」

春蘭「……。」

秋蘭「……。」

純「どうしてお前らは、揃いも揃って竹カゴを抱えてんだ。」

秋蘭「はあ。今朝、部屋のカゴの底が抜けているのに気付きました……。」

純「……なら、しゃーねーな。どうせお前のことだから、気になって仕方がなかったんだろ？」

秋蘭「は。直そうとは思っていたのですが、こればかりはどうにも……。」

純「しかし、なぜ2つ買ったんだ？1つはお前の分だが。」

秋蘭「もう1つは純様の分です。」

純「俺の？何で？」

秋蘭「先日、2人で一緒に純様の部屋でお茶してた時に会話の一部を聞いていたので、『カゴ壊れてしまったし、どうしようかな。』と。」

純「覚えてたんだ。わざわざありがとな。」

そう言つて、秋蘭からカゴを受け取ったのであつた。

華命「あたしは季衣と香風にお土産を買ってきたつすよ！」

華琳「そう、喜んでくれると良いわね。……で、春蘭と栄華は？何か山ほど入れて

いるようだけれど……。」

春蘭「こ、これも……、季衣の土産にございます!」

栄華「え、ええ……。それと、香風さんにも。」

華琳「何?服?」

春蘭「はっ!左様でございます!」

華琳「……そう。土産も良いけれど、ほどほどになさいね。」

栄華「ええ。そうしますわ。」

秋蘭「それで、純様もカゴを2つ持っていますね。何故ですか?」

純「これか。前豫州での賊討伐で、稟と風も手柄を挙げただけど、なかなか褒美をあげる物が思い出さなくて、カゴで良いかなと思つて、買ったんだよ。」

秋蘭「……そうですか。喜ぶと思いますよ。特に稟が。」

その時秋蘭は、少し拗ねた態度を取つたのであつた。それに気付いた純は、純「今度お前にも何か買ってやるから。なつ。」

そう言い、秋蘭の頭を撫でてやったのであつた。

秋蘭「……はい。」

そう言つて、少し頬を染めた秋蘭であつた。

華琳「それで、視察はちゃんと済ませたのでしようね。カゴなり土産なりを選ぶのに

時間をかけ過ぎたとは言わせないわよ。」

華命「もちろんっす！」

栄華「お、お任せくださいまし……。」

純「栄華、声が震えてるぞ。」

栄華「いえ、何でもありませんわ。」

華琳「ならいいわ。帰ったら今回の視察の件、報告書にまとめて提出するように。」

そう言つて、城に帰ろうとしたその時、

??「そこのお若いの……。」

純「ん？」

華琳「……誰？」

謎の声の主にかけられたのであつた。

??「そこのお主達……。」

栄華「何ですの？占い師？」

春蘭「華琳様と純様は占いなどお信じにならん。慎め！」

華琳「……2人とも、控えなさい。」

春蘭「は……はっ。」

そして、占い師は華琳と純を見つめて、その結果を述べた。

占い師「強い相が見えるの……。稀にすら見たことの無い、強い強い相じゃ。」
 純「ほお、一体何が見えるんだ？言ってみな。」

占い師「力のある相じゃ。兵を従え、知を尊び……。お主達が持つは、この国の器を満たし、繁らせ栄えさせる事の出来る強い相。この国にとつて、稀代の名臣となる相じゃ……。」

春蘭「ほほう。良く分かつているではないか。」

占い師「……。国にその器があれば……。じゃがの。」

栄華「……。どういことですか？」

占い師「まずその娘、お主の性、今のひび割れた国の器では収まりきらぬ。」

占い師「その野心、器の内に留まるを知らず……。溢れた野心は、国を侵し、野を侵し……。いずれ、遙か地の果てまで名を轟かせて、類い稀なる奸雄となるであろう。」
 すると、

栄華「あなた！それ以上お姉様を侮辱するならば、容赦は致しませんわよ！」

栄華が鋭い目つきで怒ったのだが、

華琳「栄華！」

栄華「し、しかしお姉様！」

華琳「そう。乱世においては、奸雄となると……。？」

占い師「左様。それとそこのお主。」

そして、今度は純に対して、

占い師「お主は、その娘以上に危うい。その器は、あらゆる理を全て破壊し、敵味方問わず多くの者の命を奪い、恐れられ、その名は遙か天の果てまで轟かせ、類い稀なる梟雄となるであろう。」

そう述べたのであつた。その時、

秋蘭「貴様！純様を愚弄する気か！」

栄華「お姉様に飽き足らず、お兄様も侮辱するならば、許しておけませんわよ！」

秋蘭と栄華が、特に秋蘭が烈火の如く怒つたのであつた。

純「秋蘭！栄華！」

秋蘭「・・・し、しかし純様！」

栄華「この方は、お姉様だけでなく、お兄様も侮辱したのですよ！」

純「いいから下がれ。」

そう言つて、2人を下がらせたのであつた。

純「そうか。乱世において、姉上は奸雄、俺は梟雄になるのか・・・？」

占い師「左様。それも、千年、万年・・・人の世が続く限り、名を残すやもしれぬほどのな。」

純「……ふつ。そうか……。」

華琳「……ふふつ。千年、万年と……ね。」

華琳「気に入ったわ。栄華、この占い師に謝礼を。」

栄華「は……？」

純「聞こえなかったのか？ 礼だよ。」

栄華「ですがお姉様、お兄様。このような胡乱な輩に出すお金など……。」

華琳「……純。この占い師に、幾ばくかの礼を。」

純「御意。」

そう言つて、純は幾らかの金を占い師の脇に置いてある茶碗に入れた。その際、栄華は華琳の事を、秋蘭は純の事を悪く言われたのが気に入らなかつたのか、静かに睨みつけたままであつた。

純「乱世の梟雄大いに結構だ。それが例え悪名だろうが何だろうが、人の世が続く限り人々の記憶に刻まれるのならばな。」

華琳「ええ。私も大いに結構。人の世が続く限り名を残すなら文句は無いわ。」

そう言つて、その場を後にしたのであつた。

その帰り道、

華琳「……それにしても春蘭。よく我慢したわね、偉かったわ。」

春蘭「……はあ。」

純「こいつ、あの占い師の言つた意味、分かつてねーな。」

そう思っていると、

華命「ねえねえ純兄。あの占い師の人、結局なんて言つてたんすか？らんせの……？
かんゆう？と、きよーゆう？」

純「乱世の奸雄というのは、奸知に長けた英雄という意味だ。」

華命「かんち……。」

純「こいつもかよ……。」

栄華「奸知というのは、ずる賢くて、狡猾という意味ですわ。」

華命「おー！じゃあ、きよーゆうは？」

秋蘭「残忍かつ強く荒々しい人という意味だ。」

華命「おー！そーなんすねー！」

純「つまり、姉上は世が乱れば、ずる賢い手段で上へのし上がるヒドい奴で、俺は、

強いだけでなく、残酷なやり方で上へのし上がる悪人という事だよ。」

その時、

春蘭「何だとおつ！あの占い師、華琳様と純様にそんなひどい事を！華琳様！純様！今すぐに引き返して、あのイカサマ占い師の首を刎ねてやりましょう！」

突然春蘭がキレたのであつた。

純（やつぱコイツ、分かつてなかつた・・・。）

秋蘭「・・・姉者。あの占い師の言葉、分かつていなかつたな。」

栄華「ああ・・・、そういうことですの。」

華琳「・・・だから、いいと言っているでしょう、春蘭。落ち着きなさい。」

春蘭「これが落ち着いていられますか！くそお、あの占い師め！」

純「春蘭、いいから落ち着け。二度は言わんぞ。」

春蘭「は・・・、はい。」

純の一言でやつと春蘭が落ち着いたのであつた。

純「・・・。」

秋蘭「純様？」

純「ん？どうした、秋蘭？」

秋蘭「いえ、何でもありません。」

純「そうか……。」

秋蘭「……。」

その時、秋蘭の目には、純の感情が僅かに乱れていると感じたのであった。

城に戻った後、純は稟と風に例のカゴを渡し、稟はそれを大事そうに持っていたのである。

一方季衣と香風は、例の盗賊3人組を追っていたが、途中その3人組が例の旅芸人に書物を渡したのだが、これが後に大陸中を騒がす事になるのは、この時誰も知る由は無かったのである。

14話

純の部屋

純「……。」

純は、部屋の窓から月を眺めていた。

純「……。」

その時、純は占い師の言葉を思い出していた。

回想

占い師（類い稀なる梟雄となるであろう。）

回想終了

純（梟雄か……。歴史に名を残せばそれでいいと言ったが……。）

その時、

秋蘭「純様。秋蘭です。」

純「秋蘭？ちよつと待って。」

純は扉を開けた。

純「どうした、秋蘭。何の用だ？」

秋蘭「純様にお伝えしたいことがあつて参りました。」

そう、秋蘭は言ったのであつた。

純「そうか。まあ入れ。」

そう言つて、純は秋蘭を部屋に入れた。

純「で、俺に伝えたい事つて……!？」

すると、背中に衝撃を感じたので振り返ると、秋蘭が純の背中に抱き付き、顔を埋めていたのであつた。

純「おい、秋蘭!? どうしたんだよ急に!？」

すると、

秋蘭「・・・まないで下さい。」

純「え？」

秋蘭「1人で抱え込まないで下さい。」

秋蘭はそう純に言ったのである。

純「何の事だ？」

すると、

秋蘭「先程の占い師の件です。梟雄でも構わないと仰っていましたが実は気にしておられたのでしょうか。」

純「・・・気付いてたか。」

純がそう言うのと、秋蘭は頷いた。

純「まあ、後の人が俺の事をどう評価しようが、名を残せばそれでいいというのは本当だ。けど、いざ言われるとな・・・。受け止めづらいというか。ましてや梟雄なんて言われるとは思わなかったから・・・。」

すると、秋蘭は抱き締めてる腕を更に強くし、こう言った。

秋蘭「私は初めて純様に仕えた時から知っております。純様は確かに強いです。けど、その強さは、私やその周りにいる人達を守るための強さであると。だから、1人で

抱え込まないで下さい。」

純「分かった。」

そう言つて、純は秋蘭の腕に手を添えたのであつた。

暫くが経ち、

純「しかし、お前に見抜かれるとはな……。」

秋蘭「私は純様と共に過ごした時間が非常に長かつたので。」

純「なるほどね……。」

秋蘭「後純様、他にもまだお伝えしたいことがあります。」

純「ん？何だ？」

すると、秋蘭は深呼吸してこう言つた。

秋蘭「実は、私は初めて会つた時から、純様の事が好きです。大好きです。」

純「……。」

秋蘭「もうこの気持ちを抑えられないんです。我慢出来ないんです。もう、あなた様
がないと駄目なんです。」

すると、

純「いや……。実は……。俺も……。お前の事が……。好きなんだ。」

そう、純は秋蘭に伝えたのであった。

秋蘭「!？」

純「いつからかは忘れちゃったけど、お前のことが目から離せなくなつて、気付いたら目で追つてた。お前のことが気になつて仕方が無かつた。お前とも一緒にいたいと思つてた。」

すると、秋蘭の目から涙が一筋落ちた。

秋蘭「……。その言葉、ずるいです。」

純「けど、俺は……。」

秋蘭「稟の事ですよ。私は構いません。純様は、自身を好きでいてくれる人皆を幸せにして下さい。」

純「……。秋蘭。」

秋蘭「けど今は、私だけを愛して下さい。」

純「……。分かつた。」

そう言つて、純は秋蘭の手を取り、寝台に向かい、そのまま一夜を過ごしたのであつた。

翌朝、

純「んんっ……。」

純は目を覚ますと、横に秋蘭の嬉しそうな、恥ずかしそうな、そんな微笑みが視界に入った。

秋蘭「おはようございます、純様。」

純「おはよう。……もしかしてお前、ずっと起きていたのか？」

秋蘭「いえ、純様よりちよつと早く目が覚めただけです。お陰で寝顔が見れて良かったです。」

自分の無防備な姿を見られた恥ずかしさからか、純は布団を頭から被りたい気持ちになつた。

それを察した秋蘭が、

秋蘭「そう恥ずかしがる必要はありませんよ。可愛らしかったです。」

そう言つたのであつた。

純「おい、男に可愛いはねーだろ。それを言うなら、俺より昨日の秋蘭の方が絶対可

愛かったぞ。」

すると、

秋蘭「そのような恥ずかしいこと、言わないで下さい。」

昨夜の出来事を思い出したのか、秋蘭は恥ずかしそうに視線を逸らし、布団の中の足をもそもそと動かしたのであった。

そんなギャップが可愛いと感じた純は、

純「秋蘭ー、秋蘭ー♪」

秋蘭「あの・・・、なんででしょうか純様？」

純「ううん、恥ずかしがる姿が可愛らしかったから名前を呼びたくなった。それだけ。」

秋蘭をからかったのであった。

秋蘭「な、何ですかそれは。だったら私も・・・、純様。」

純「何、秋蘭。」

秋蘭が子猫の鳴き声みたいに甘える声音に純が答えると、

秋蘭「ふふ、呼んでみただけです。」

そう言った秋蘭は、大陸中のどんな美人でも逃げ出すような笑顔を浮かべたのであった。

そして、細い喉から小さな笑い声を上げた。その度に腕に乗った頭が揺れ、絹より柔らかい髪の毛が擦ったく感じた純であった。

その様子が愛おしく思った純は秋蘭の頬に手を添え、

純「秋蘭。」

秋蘭「はい。」

純「大好き。」

秋蘭「あ……。」

そう言い顔を近づけ、目をつぶる秋蘭に優しく口付けをしたのであった。

15話

謁見の間

秋蘭「それでは、本日の会議はここまで。」

春蘭「解散っ！」

その時、

兵士A「失礼します！」

春蘭「何事だ！」

兵士A「はっ！ここより200里離れた村が襲われていると報告がありました。黄色い布です！」

兵士の報告を聞き、皆引き締まった顔をした。

華琳「それで、数は？」

兵士A「はっ。およそ五千。」

春蘭「ご、五千だと!?!」

桂花「華琳様、如何なさいますか？」

華琳「ふむ……」。
すると、

純「姉上、俺に行かせて下さい。」

純が自ら出陣を希望したのであった。

春蘭「純様!？」

秋蘭「……。」

栄華「お兄様!？」

華命「純兄!？」

柳琳「お兄様!？」

桂花「純様!？」

季衣「純様!？」

香風「純様!？」

華琳「それは何故かしら？」

純「春蘭と秋蘭、それに栄華らは、明日の準備があり手が空いておらず、今手が空いているのは俺だけです。なので、お願いします。」

華琳「……分かったわ。けど、明日の準備のため、連れて行ける兵は少ない。それはあなたの子飼いの兵もよ。」

純「分かっております。なので、俺の子飼いの五百で充分です。」

華・春・秋・栄・侖・柳・桂・季・香「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」

華琳「あなた正気なの!? 相手は五千よ。確かにあなたの軍は我が軍最強だけど、五千を五百で倒すの!」

純「はい。必ず成功させて見せます。」

そう言つて、華琳と純は睨み合つたまま数秒後、

華琳「・・・分かつたわ。貴方に任せるわ。」

純「はっ! 秋蘭!」

秋蘭「はっ!」

純「今すぐに、俺の子飼いのの中から五百を選びすぐつてくれ。」

秋蘭「御意!」

純「ではこれにて。稟! 風! 行くぞ!」

稟「はっ!!」

風「はいく!!」

そして、純と稟、風は謁見の間を出た。

華琳「栄華、桂花。今すぐ純に兵糧を渡す準備をしなさい。」

栄・桂「はっ。」

その頃、

稟「それにしても、無茶を申しますね、純様。」

風「いくら純様の隊が精強でも、五百で五千の賊を相手にするのは大変ですよ。」

純「悪い。明日のことを考えると、この兵数が限界だ。」

稟「確かに。明日の賊退治などの準備を考えると五百が限界ですけど。」

風「何とかしなくちゃいけないですね、稟ちゃん。」

稟「分かっています。」

そうして3人が喋りながら城門に行くとき、そこには秋蘭がいた。

秋蘭「純様。曹和隊から選りすぐった五百の兵です。」

そこには、秋蘭が選びに選んだ選りすぐりの五百の兵がいた。

純「ありがとう、秋蘭。」

秋蘭「構いません。その代わり、生きて戻って下さい。」

純「分かった。それじゃ、行ってくる。」

秋蘭「はい。どうかご無事で。」

そう言われて、純は馬に乗り、

純「出陣!!」

兵「「おおっ!!」」

村に向かって出陣したのであった。

道中、

風「それで、これからどうするんですか純様。」

稟「何か策でもあるのですか。」

純「あるよ。あの村の近くには伏兵にうつてつけの林がある。お前達はそれぞれ百ずつ兵を率いてそこに潜め。まず俺が三百の兵を連れて賊に一当てする。そして時機を見て林に後退し、それを追ってきた賊をお前達が両翼で奇襲する。」

風「悪くありませんね。」

稟「そうですね。実質これしか無いでしょう。」

純「よし、急ぐぞ！」

稟・風「御意！」

一方、被害にあつてゐる村は、

賊A「ギヤアアアア！」

??「くそ、一体どれだけ賊がいるんだ。いいかお前達、絶対に1人で立ち向かつてやるな！3人1組で挑むんだ！じゃないと敵を倒せん！」

村の中心部には、ボーイッシュユな黒髪に白いメッシュユが加えられている1人の少女が、大きな金棒を使いながら敵を倒し、指示を出していたのであった。

??（くそお、荊州を出ていったのは間違いだったのか。いやしかし、あのまま居ても、私の立場は……。）

その時、

ジャーン、ジャーン、ジャーン

??「ん？銅鑼の音？」

賊B「大変だく!!」

首領「どうした？」

賊B「陳留の兵がこちらに向かってきますぜ。」

首領「数は？」

賊B 「三百くらい・・・。」

首領 「三百？ たった三百で怯えるな。俺達は五千もあるんだ。返り討ちにするぞ！」

賊 「「おおーっ!!」」

「そう言つて、賊達は反転したのであつた。

?? 「助かつたのか・・・。」

一方純の率いる本隊は、

純 「来たか。行くぞお前ら!! 突撃!!」

兵 「「おおーっ!!」」

純の一言で戦が始まつた。最初は純の兵が押ししていたが、数の差からか、次第に押しきれつつあつた。

純 「この辺でいいだろう、今だ、退け!!」

純の命令で、本隊は後退する。

首領 「逃がすな、追えー!!」

すかさず賊は追ってきたのであった。その様子を見た稟と風は、
稟「流石純様。絶妙な判断で退きました。それでこそ我が主。皆さん、合図で突撃を
開始して下さい。」

風「おお、流石純様。これは風達もしくじれませんね。」

それぞれそう述べたのであった。そして、賊が稟達が潜んでいる林を通った瞬間、

稟「今です!!」

風「銅鑼を鳴らして下さい!!」

一斉に賊に襲いかかったのであった。

首領「な、何ー!!これは罠か!」

賊B「どうでしょう?」

首領「構わん。1人残らず討ち取れー!!」

するとそこへ、

純「今だ!反転し、賊を蹴散らせ!!」

兵「「おおーっ!!」」

純率いる本隊も襲いかかってきたのであった。

純「おい貴様、貴様が首領か!!」

首領「そうだ。」

純「この俺が討ち取ってやろう。」

首領「ガキが調子に乗りやがって、死ねー!!」

首領はそう言つて、剣を大きく振りかぶつて襲いかかつてきたのであるが、

純「ふっ。」

純の一本刀で首が飛んだのであつた。

賊B「首領がやられた!?逃げろー!!」

そう言つて、残りの賊も逃げ出してしまったのであつた。

純「逃げた賊は追うな。村の救助を最優先するぞ。」

そう言つて、村に向かつたのであつた。

村

純「怪我人を急いで手当てしろ。それと稟、急いで飯の用意をしてくれ。村人に配る。」

稟「はっ。」

純「風は村の復興作業を頼む。」

風「はい。」

すると、

村長「あの、此度は誠にありがとうございます。」

村の村長が、純にお礼を述べに来たのであった。

純「そなたが村の村長か。すまない。もう少し早く来ていれば、ここまでの被害にならずに済んだ。」

そう言つて、純は頭を下げたのであった。

村長「そんな!! 頭を上げて下さい。むしろ曹和様が来てくれたからこそ、賊は追い払えたのです。」

純「そうか……。」

村長「それに、この村が持ちこたえられたのは、この強き者のお陰です。」

そう言つて、1人の少女に目を向けた。

純「そうか。お前が、村を助けてくれたのだな。感謝する。俺は曹和という。お前の名は?。」

すると、

焰耶「わ、私は、魏延、字を文長と申します!!」

緊張しながら自己紹介をしたのであった。

純「はは。そう緊張するな。」

そう言つて、焰耶の肩に手を置いた。

焰耶「は、はい!!」

純「それで、怪我はないか？」

焰耶「はい!!?この通り大丈夫です!!?」

純「そうか。これから、俺達の陣に行かないか。炊き出ししてるから食いな。」

焰耶「はい!!?」

そうして純は、魏延と共に本陣に向かった。

本陣

稟「お帰りなさいませ、純様。」

風「お疲れ様です、純様。後ろにいる人は誰ですか？」

純「この村を守ってくれた者だ。稟、この者に飯をあげて。」

稟「はい。」

純「それと、この2人は俺の軍師の」

稟「郭嘉です。」

風「程昱です。」

純「それで、お前はどの村の出身か？」

焰耶「いえ。私は元々荊州の者で、劉表様に仕えておりました。しかし、孫堅との戦いで大きな失態を犯し、自身の立場が危うくなったため、やむなく荊州を出たのです。」

純「なるほど。つまり、行く宛もないって事か。」

焰耶「はい。」

純「では、俺に仕えないか。俺達が来るまで、この村を守ってくれたんだ。それ相應の才があるはずだ。」

焰耶「え!？」

その時焰耶はビックリした声を上げた。実は、彼女は密かに純に憧れており、いつも彼の活躍を耳にするたびに、その憧れが強くなったのである。今会えただけでも幸運なのに、その憧れの人に仕えるという提案に自分は夢を見てるのではないかと錯覚してしまったのである。

暫く経って、冷静になった焰耶は、決意をした顔になって、

焰耶「私は、姓は魏、名は延、字は文長、真名は焰耶です。この命、お館に捧げます。」
跪き、拱手したのである。

純「そうか、分かった。俺の真名は純だ。よろしく頼むぞ、焰耶。」
焰耶「はっ!!」

そして、

稟「私は稟です。よろしく頼みます。」

風「風は風ですよ。」

焰耶「ああ、よろしく頼む。」

そう言っ、それぞれ真名を交換し、その後村を後にしたのであった。

16話

謁見の間

兵士A「申し上げます。曹和様、城門前に着きました。」

華琳「分かったわ。城門を開けなさい。」

兵士A「はっ!!」

そう言い、兵士は下がり、城門を開けに行つた。

秋蘭「華琳様。迎えに行つて参ります。」

華琳「分かったわ。あなたも不安だったでしょう。」

秋蘭「はっ。ではすぐに。」

そう言つて、秋蘭は城門に向かつた。

春蘭「しかし、僅かな兵で敵を倒すとは。」

華琳「そうね。私でも出来るかどうか……。」

華命「さすが純兄つす!!どうやったのか聞きたいつす!!」

柳琳「姉さんつたら……。」

香風「シヤンも、聞いてみたい。」

春蘭と華命、そして香風は、興奮した様子であった。

桂花「あんた達、重要なのはそこじゃないわよ。」

栄華「そうですね。また黄色い布を巻いていたということですね。」

華琳「そうですね。そのことも純にも聞こうと思うわ。」

桂花「はい。それが良いですね。」

そう言つて、皆それぞれ顔を引き締めたのであった。

城門前

純「着いた着いた。」

焰耶「ここがお館が守つてる陳留か。」

純「そうだよ。姉上が統治して、俺がそれを守ってるんだ。」

焰耶「なるほど……。」

すると城門が開き、いつも通り秋蘭が出迎えたのであった。

秋蘭「純様。お帰りなさいませ。」

純「ただいま、秋蘭。そつちも、何も異常はなかったか？」

秋蘭「はい。何もありませんでした。よくぞご無事で。」

純「はは。そうだ。着いてからも紹介するが、武将一人雇ったから。焰耶、自己紹介しな。」

焰耶「はっ。」

そう言つて、焰耶は秋蘭の前に立ち、

焰耶「私は、魏延、字を文長と申します。」

秋蘭「そうか、分かった。私は夏侯淵、字を妙才、真名を秋蘭と言う。以後宜しく頼む。」

焰耶「真名までお許しただけなのか!？」

秋蘭「ああ。既に純様と真名を交換したのであろう。ならば私も交換せねば不公平だ。」

焰耶「はい！私の真名は焰耶です。」

そう言つて、真名を交換しあつたのであつた。

謁見の間

純「姉上、ただいま戻りました。」

華琳「秋蘭、出迎えご苦労だったわね。」

秋蘭「はっ。」

華琳「戦果は報告で聞いたわ。良くやったわ。」

純「ありがたき幸せ。しかし、此度はこの者が村を守ってくれたから、村が賊の手に落ちずに済んだのです。全てはこの者のおかげです。紹介しても宜しいでしょうか？」

華琳「ええ。構わないわ。」

純「ありがとうございます。焰耶、前に。」

そう言つて、華琳の前に立ち、

焰耶「私の名は魏延、字を文長と申します。」

華琳「そう。よく村を守ってくれたわ。純の臣下になったのでしよう。これからも、純を支えるように。私は曹操、字を孟徳、真名は華琳よ。」

焰耶「はっ。ありがたきお言葉。私の真名は焰耶です。」

そう言つて、華琳と焰耶は真名を交換したのであつた。

華琳「それで純、今回討伐した黄色い布を巻いた賊の件だけど、何か知ってることはあるかしら？」

純「その事でしたら、稟が既に情報を掴んでおります。」

華琳「そうなのね。」

純「はい。報告が遅くなり、大変申し訳ございません。稟、頼む。」

そう言われて、稟が前に立った。

稟「はっ！その黄色い布を巻いた賊ですが、張角、張宝、張梁の3姉妹が率いております。しかし、彼女らは、全く武術がありません。旅をしながら歌っているだけであり、今回の乱は彼女達の追っかけによるものです。」

華琳「そう。分かったわ。」

純「しかし、まだ3姉妹がどこに居るのかまではまだ掴めておりません。お許しください。」

華琳「構わないわ。誰が率いているのかを知れただけでも、まだ良い方よ。」

純「はっ。」

華琳「では、春蘭達もその賊の鎮圧、任せたわよ。」

春蘭「はっ！！お任せ下さい！！」

季衣「僕も頑張ります！！」

そうして、皆それぞれの持ち場に戻ったのであった。

純の部屋

純「そう言えば焰耶。」

焰耶「なんでしよう、お館。」

純「お前のその武器、なんて名前なの？」

焰耶「はっ。鈍砕骨と申しますが、それが何か？」

純「いや。そんなにかい武器を上手く扱えるなんて、流石だなと思つてな。」

焰耶「いえ。私なんてまだまだ未熟です。お館の活躍と比べたら。」

純「そんなことねーぞ。お前はあの村を守つたんだ。お前の實力でもあるんだ。誇りに思いな。」

焰耶「はっ!!ありがとうございます!!」

純「その武、頼りにしてるぞ。」

焰耶「はっ!!お館に命を捧げた身、例え火の中水の中どこへでも。」

純「そうか。ではまず、兵の動かし方と兵法、そして、武将としての心構えを再び学べ。兵の動かし方、心構えは秋蘭に、兵法は、稟と風に学ぶんだ。あいつらには話をつ

けるから。」

焰耶「はっ！承知致しました！」

純「では、ゆっくり休め。」

焰耶「はっ。では、失礼致します。」

そう言つて、焰耶は純の部屋を後にしたのであった。暫くすると、扉に人の気配がしたので、純は刀を取った。

稟「純様。稟です。入っても宜しいですか？」

純「ちよつと待て。・・・良いぞ、入れ。」

すると、扉が開いて、稟が部屋に入った。

稟「失礼します。」

純「どうした稟、何のようだ？」

純は稟にそう質問したが、

稟「それは・・・、その・・・。」

稟にしては珍しく言葉が続かなかつた。

稟「先日、秋蘭様・・・、抱きましたか？」

すると、稟は純にそういつた質問をした。

純「・・・ああ、抱いた。」

稟「!!・・・一応お聞きしますが、何故ですか？」

純「好きだから。」

稟「っ!!」

純「でも、お前の事も好きだよ。俺はな稟、俺の事を好きでいてくれる人皆を出来る限り幸せにしたいんだ。だから・・・。」

すると稟は、

稟「ヒドいお人だ。私の時はいつかで、秋蘭様は先日ですか。」

純「すまん。」

稟「いいんです。その代わり、今日は、今日だけは私だけを愛して下さい。」

純「分かった。来て、稟。」

すると、稟は純に近づき、背中に手を回したのであった。そして、

稟「純様。・・・んっ。」

純に口付けをしたのであった。

純「稟・・・。んっ・・・ちゅっ。」

そして、2人は寝台に行つたのであった。すると、

稟「・・・初めてなんですよ。」

稟が突然そう言った。

純「？」

稟「私が異性を好きになったのが。」

純「そうなの？」

稟「はい……。」

すると、稟は純にこう言った。

稟「……自分でも意味が分からないくらいドキドキしてしまい、いつもの冷静な私ではいられない。そんな風にしたのは、純様なんですよ。」

そんな姿を見た純は、

稟「あ……。」

稟を抱き締め、また、キスをしたのであった。

稟「これまでの私なら、こんな気持ちになつてはいけない、軍師としての自分に戻らなければいけないと、厳しく……己を叱っている筈なんですけど。」

純「今は……、そうならねーんだ。」

稟「……はい。ずっとこうして、貴方の懷に、身を預けていたって……、抱かれていたいなんて、そう考えてしまう悪い人なんです。」

そう言つて、稟は純の背中に回した手を更に強くしたのであった。

稟「ちよつとだけ、妄想が激しい私ですけど、」

純「それって、ちょっとだけ？」

稟「むう。意地悪ですね。」

すると稟は、右手を純の頬に添えて、

稟「ともかく、こんな私ですけど、宜しくお願いします。」

純「ああ、こちらこそ。公私共に、頼りにしてるぞ。」

そう言つて、2人は一緒に寝台に倒れ込んだのであった。

17話

謁見の間

春蘭「……というわけです。」

華琳「そう……やはり、黄色い布が。」

その日の軍議は、暴徒の鎮圧から帰ってきた春蘭の報告で始まった。

純「てことは、秋蘭の方もか？」

秋蘭「はい。こちらの暴徒達も同じ布を携えておりました。」

純「そつか……。稟、あの3姉妹の居場所はまだ分らんか？」

稟「はい。申し訳ございません。」

純「いや、気にするな。」

華琳「桂花。そちらはどうだった？」

桂花「は。面識のある諸侯に連絡を取ってみましたが……、どこも我が \square 州と同じく、黄色い布を身に付けた暴徒の対応に手を焼いているようです。」

華琳「具体的には？」

桂花「ここと……ここ、それからこちらも。」

そう言つて、桂花は広げた地図の上に丸石を置いていく。

純「桂花。そつちでも3姉妹の居場所は駄目だったかい？」

桂花「はい。捕らえた賊を尋問してみたのですが、誰一人として口を割りませんでした。」

純「そうか……。」

春蘭「……ふむ。剣を振り上げれば逃げ回るクセに、そこだけは口を割らんのか。さして忠義が厚いとも思えんが。」

純「そりや、お前の氣迫に当てられたら誰だつて逃げるわ。しかし、この前討伐した奴らは逃げなかつたな……。」

春蘭「そう言えばそうでしたな。」

すると純は、

純「……黄巾党。」

そう呟いたのであつた。

秋蘭「純様、それは一体……。」

純「ああ。敵を呼ぶにも名前が必要だと思つて、咄嗟に思いついた名前だよ。」

華琳「そう。まあ確かに、敵を呼ぶにも名前が必要だわ。黄巾党という名だけはも

らっておきましょう。それで皆、他に新しい情報はないの？」

秋蘭「はい。これ以上は何も……。」

春蘭「こちらありません。」

華琳「ならば、まずは情報収集ね。その張角ら3姉妹の居場所を掴まなければ……」
その時、1人の兵士が慌てて入ってきたのであった。

兵士A「会議中、失礼致します！」

純「どうした！」

兵士A「はっ！南西の村で、新たな暴徒が発生したと報告がありました！また黄色い布です！」

言い終わったとき、皆の顔が引き締まり、真剣な表情になった。

華琳「休む暇もないわね。……さて、情報源が早速現れたわけだけれど、今度は誰が行ってくれるのかしら？」

すると、

季衣「はい！僕が行きます！」

季衣が真つ先に手を上げた。

華琳「季衣ね……。」

純「ふむ……。」

しかし、華琳と純はすぐに決断しなかつたのであつた。

春蘭「・・・季衣。お前は最近、働き過ぎだぞ。ここしばらく、ろくに休んでおらんだらう。」

季衣「そんなの平気です！それに、また知らない村が襲われてるんですよ？せつかく僕、そんな困つてる人達を助けられるようになったのに・・・。」

香風「なら、シヤンが行く。」

華命「だつたらあたしも行くつすー！」

純「そうだな。今回の出撃、季衣は外そう。確かに最近の季衣の出撃回数は多すぎる。」

華琳「そうね。純の言う通りだわ。」

季衣「どうしてですか、春蘭様っ！僕、全然疲れてなんかないのに・・・！」

華琳「季衣。あなたのその心はとても貴いものだけれど・・・、自らの力を過信しては、いずれ足を掬われるわよ。」

季衣「そんなこと・・・ないです。」

純「いや、これは命令だ。」

季衣「・・・でも、みんな困つてるのに・・・。」

華琳「そうね。けれど、目の前の百の民を救うために貴女が命を投げ打つては、その

先救えるはずの何万という民を見殺しにする事にも繋がるの。．．．分かるかしら？」

季衣「だったらその百の民は見殺しにするんですか！」

すると、季衣の発言に、

華・純「「するわけないでしょう！／＼ねーだろーが！」

季衣「．．．っ！」

華琳と純が覇気のコもった力強い一声を出した。その一声に季衣だけでなく、その場にいる皆が身を縮ませる程であつた。

春蘭「季衣。お前が休んでいる時は、私達がその代わりにその百の民を救ってやる。

だから、今は休め。」

季衣「ううー．．．。」

華琳「今日の百人も助けるし、明日の万人も助けてみせるわ。その為に必要と判断すれば、無理でも何でも遠慮なく使ってあげる。．．．けれど今はまだ、その時ではないの。」

純「それに我が軍がいかに人手不足と言つても、お前一人に全てを背負わせる程ではねーよ。そうだろ？」

すると、

華命「おいっす！」

香風「……うん。任せて。」

華命と香風が返事をしたのであった。

季衣「……。」

純「桂花。編成を決めてくれ。」

桂花「御意。……では秋蘭、柳琳。今回の件、あなた達が行ってちようだい。」

香風「えー。」

華命「なんでつすかー！今、あたしと香風が行く気まんまんだったつすよー!？」

しかし、華命と香風は不満を漏らしたのであった。

桂花「今回の出勤は、戦闘よりも情報収集が大切になると華琳様と純様もおつ

しやつてたでしょ。……2人とも、気が付いたら突撃してるじゃない？」

すると、

香風「……そんなことない。命令なら、ちゃんとする。」

華命「そ、そうつすー！」

2人は揃ってそう言ったが、明らかに目が泳いでいたのであった。

純「決まりだな。秋蘭、柳琳。くれぐれも情報収集は入念にな。」

秋蘭「は。ではすぐに兵を集め、出立致します。」

季衣「秋蘭様！柳琳様！」

柳琳「大丈夫よ。私達が、季衣さんの分までしっかり村の人を守ってくるから。」

季衣「はい……。よろしくお願いしますっ！」

秋蘭「うむ。私達にしかと任せておけ。」

そして、秋蘭と柳琳は出立をしたのであった。

それから暫くが経ち、

純「姉上、都から軍令が届いたとお聞きしましたが。」

華琳「ええ。早急に黄巾の賊徒を平定せよ、とね。」

栄華「あの……。今頃ですか？」

華琳「今頃よ。」

純「しかし、朝廷のそれは今に始まったことではねーからなあ……。」

香風「うん。純様の言う通り……。でも、することは一緒。」

その時、

華命「華琳姉え、純兄、大変っすー！」

夜の警備に回っていたはずの華命が慌ててやって来たのであった。

華琳「どうしたの、華命。」

華命「ええつと、秋姉えと柳琳が行っている村から救援要請が届いたつす！」
それを聞いた華琳は、

華琳「純、あなたは今すぐに先遣隊として兵を率いて、秋蘭達の救援に向かいなさい。
春蘭と華命はすぐに本隊の準備を。栄華と桂花は、城下に降りて糧食の調達に向かいな
さい。」

全員「「はっ!!」」

そう指示され、皆それぞれ準備のためその場を後にしたのであった。

18話

先遣隊

焰耶「急げ急げ！なんとしても、秋蘭様達と合流するぞ！」

純「焰耶、焦るな。これじゃ、兵達が戦になる前に疲れてしまう。」

焰耶「しかしお館……」

風「焰耶ちゃん。純様の言っている事は正しいのです。今兵達を疲れさせてしまえば、ただの足手まといなのですよ。」

焰耶「……分かった。」

そう言つて、焰耶は馬のスピードを落としたのであつた。

純「稟、後どれくらいだ。」

稟「後、十里ぐらいだと思います。先に偵察部隊を送りましょう。」

純「うん、それが良いだろう。人選は任せた。」

稟「御意。」

そう言つて、稟は兵を選び、偵察部隊を送つた。

純「焰耶、風。兵達の疲れはどうだ？」

焰耶「大分回復したみたいです。」

風「これなら、残りは駆け足でも大丈夫かと。」

純「そうか。」

焰耶「お館、先程は申し訳ありません。」

純「良いんだ。お前の気持ちは痛いほど分かる。秋蘭達を信じよう。」

焰耶「御意！」

その時、偵察部隊が帰つてきた。

偵察兵A「報告致します。」

稟「村の様子はどうでしたか？」

偵察兵A「はつ。村の周りは賊に完全に囲まれています。村の中では、夏侯淵將軍と曹純將軍が戦っている模様です。」

稟「分かりました。あなた達は本隊が来るまで休んで下さい。」

そう言つて、稟は偵察部隊を下がらせた。

稟「純様。」

純「ああ。皆の者、よく聞け！我々の仲間が十里先で戦っている。仲間を助け、賊を

倒すぞ！」

兵士「「おおーっ!!」」

純「行くぞ！」

純の一声で、曹和隊は駆け出したのであった。

一方秋蘭達は、

柳琳「秋蘭様！西側の防壁、3つめの防柵まで破られました！」

秋蘭「・・・ふむ。残りの柵は後2つか・・・それでどのくらい保ちそうだ？李典。」

真桜「せやなあ・・・。応急で作ったもんやし、後一刻保つかどうかって所かなあ。」

秋蘭「・・・微妙な所だな。純様達本隊が間に合えば良いのだが。」

柳琳「きつと大丈夫です。お姉様とお兄様は必ず来ます。」

凧「しかし、夏侯淵様達がいなければ、ここまで耐えることは出来ませんでした。あ
りがとうございます。」

柳琳「それは私達も同じです。あなた達義勇軍の皆さんがいなければ、相手の数に押

されて保たなかったはずですから。」

その時、

沙和「大変なのー！東側の防壁が破られたのー！防壁は、後1つなのー！」

沙和が慌てた様子でやって来て、東側の防壁が壊されたことを報告に来たのであった。

真桜「・・・あかん。東側の最後の防壁で、材料が足りひんかったらかなり脆いで。すぐ破られてまう！」

秋蘭「仕方ない。西側は最低限の人数を残し、残る全員で東の侵入を押しとどめられない。」

凧「では、先陣は私が切ります。私の火力を集中させれば、相手の出鼻は挫けるはずです！」

柳琳「でしたら私の隊が続きます。それで、一度は敵を退けられるはず・・・しばらくは時間を稼げるでしょう。」

秋蘭「・・・そうだな。なら柳琳、そちらの指揮は任せる。」

柳琳「秋蘭様もお気を付けて。では、楽進さん。」

凧「はっ！」

秋蘭「皆、ここが正念場だ。力を尽くし、何としてでも生き残るぞ！」

沙和「分かったの！」

真桜「おう！死んでたまるかいな！」

その時、

凧「か・・・夏侯淵様！外に砂煙が見えます！」

外に砂煙が見えるとの報告を受けたのであった。

真桜「なんやて！」

沙和「えー……。また誰か来たの？」

秋蘭「敵か！それとも……。」

すると、

柳琳「お味方です！青の旗色に曹の旗印！お兄様です！」

そう柳琳は報告したのであった。それを聞いた兵士達は、

兵士A「おお！曹和様だ！」

兵士B「曹和様が来たからにはもう大丈夫だ！」

気力を取り戻し、士気が上がったのであった。

先遣隊

純「稟、風、焰耶。ちゃんと付いて来いよ。」

稟「はっ！」

風「はいっ！」

焰耶「もちろんです！」

純「突破するぞ！」

純達は村に向かっていき、包囲網を突破していったのであった。

村中央

純「秋蘭！柳琳！」

秋蘭「純様!!」

柳琳「お兄様！助かりました！」

純「お前達、ここまでよく耐えたな。」

秋蘭「彼女らのおかげです。」

純「この者か？お前達、よくこの村を守ってくれた。俺は曹和、字は子元と言う。お前達は？」

すると、

凧「自分は楽進、字は文謙と申します。……我らは陽平義勇軍。黄巾党の暴乱に抵抗するため、こうして兵を挙げたのですが……」

その時、ある一人の少女の顔を見た瞬間、

純「あつ。」

真桜「あー！」

純は真桜を見て、お互い指を差し合ったのであった。

秋蘭「純様、知り合いですか？」

純「ああ、前にみんなで城下に視察に行ったときにな。へえ、お前も義勇軍か。」

真桜「せやで。ウチは李典、字は曼成。そつか……てことは、あの時の姐さんが、州牧様で、兄ちゃんはその弟さんか……。」

沙和「私は于禁、字は文則なのー！お兄さん、とつてもカッコいいのー！」

その時、

凧「真桜！沙和！曹和様に対してその言い方は何だ！」

沙和「っ!! 凧ちゃん痛い!!」

真桜「本気で殴ったなー!!」

凧が、真桜と沙和に拳骨を下ろしたのであった。

純「はは。ああ秋蘭、柳琳。後半刻ほどで、姉上達の本隊もやって来る。それまでに、何としても持ち堪えるぞ。」

秋蘭「はっ!!」

柳琳「はい!!」

純「俺は焰耶と一緒に西側に行くから、そちらは任せたぞ。」

秋蘭「御意!!」

柳琳「分かりました!!」

純「稟と風はここで補佐をしてくれ。」

稟・風「御意。」

純「じゃ、行ってくる。来い、焰耶!!」

焰耶「はっ!!」

その時、

秋蘭「純様!! どうかご無事で・・・。」

そう言われたので、純は右手を掲げて行ったのであった。

西側

純「よし、矢を放て!!」

純の命令で、多くの矢が放たれた。それによつて、賊が多少怯んだのであつた。

その様子を見た純は、鞘から刀を抜き、

純「敵に一当てする。突撃!!」

兵士「「おおーっ!!」」

純「焰耶も、思いつきり暴れる。しかし、状況を見て一度退くからな。」

焰耶「はっ!!」

そう言つて、純達は突撃した。その時純の動きは、まるで流麗な舞の如く刀を振るい、敵を斬つていったのであつた。その舞のような動きに焰耶は思わず、

焰耶「・・・カッコイイ。」

そう呟きながら、敵を鈍碎骨で潰していったのであつた。

その後、華琳達の本隊が到着し、黄巾党は壊滅的被害を受けて、撤退したのであつた。

春蘭「純様!秋蘭!ご無事ですかつ!」

純「ああ!大丈夫だ!」

秋蘭「危ないところだったがな……まあ見ての通りだ。」

季衣「秋蘭様ーっ！」

華命「柳琳！柳琳はいるっすかー！」

柳琳「姉さん！」

妹の様子を見た華命は、

華命「るー!!」

柳琳に抱き付いたのであった。

柳琳「もう、姉さんったら。そんなに心配しなくても大丈夫だから。」

華命「お姉ちゃんなんだから、心配するに決まってるっすー！無事で良かったっすー

！うわーん！」

香風「……純様。」

純「うん。香風も助かった。」

香風「……うん。」

華琳「皆、無事で何よりだわ。けれど、損害は大きかったようね。」

秋蘭「いえ。防壁こそ破れましたが、純様の救援と彼女らのおかげで最小限の損害

で済みました。村の住人も皆無事です。」

純「彼女らは陽平義勇軍と申し、黄巾の暴乱に抵抗するために兵を挙げたそうです。」

その時、

春・栄・沙 「「あー！」」

春蘭と栄華、沙和が互いに指を指し、叫んだのであった。

華琳 「・・・何よ、一体。」

純 「実は姉上、俺も到着して気付いたのですが、以前に皆で視察に行つたときに会つた、絡繰を作つたカゴ売りの者です。」

華琳 「・・・思い出したわ。あの時の。」

真桜 「せやで。」

沙和 「私は前に服屋でむぐぐ」

しかし、沙和が喋ろうとしたときに春蘭と栄華が口を押さえ、

春蘭（そ、それは内緒にしておいてくれっ！）

栄華（そうですね。私とあなたは初対面。いいですわね。初対面ですわよ・・・？）

そう述べたのであった。

沙和（むぐむぐ。わかつたの・・・。）

季衣 「どうしたんですか？春蘭様。」

春蘭 「い、いや、何でもないっ。何でも！」

沙和 「むぐぐー。内緒にするから、離してなのー！」

栄華「そうですね。何でもありませんわ。おほほほほほほほ。」

沙和「でもこれだけお話したら、とつくにバレてる気がするの……。」

季衣「春蘭様……なんなんですかね？」

秋蘭「さあな。何かあったのだろうが、姉者に合わせておいてやってくれ。」

華琳「……で、その義勇軍がこの村を守っていたのね。」

凧「はい。ですが、黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず……こうして夏侯淵様と曹和様に助けをいただいている次第。身の程も弁えず、お恥ずかしい限りです。」

華琳「けれど、あなた達がいなければ私は大切な将を失う所だった。皆を助けくれた事、感謝するわ。」

そう言つて、華琳は凧達に頭を下げた。

凧「それはこちらと同じです。こちらが感謝こそすれ、感謝されるようなことは……。」
その時、

純「姉上。この者達を、我が軍に加えてみては如何でしょうか。」

華琳「義勇軍が私の指揮下に入るといふこと？」

純「はい。皆、鍛えればひとかどの将になる器です。」

凧「聞けば、曹操様と曹和様もこの国の未来を憂いておられるとのこと。一臂の力で

はありますが、その大業にぜひとも我々の力もお加え下さいますよう……。」

華琳「……そちらの2人の意見は？」

真桜「ウチもええよ。新しい州牧様とその弟さんの話はよう聞いとるし……そのお方が大陸を治めてくれるなら、今よりは平和になるつちゆうことやろ？」

沙和「凧ちゃんも真桜ちゃんが決めたなら、私もそれでいいのー。」

華琳「秋蘭から見てもどうかしら？」

秋蘭「村のカゴ売りで終わらせて良い人材ではありません。純様の仰る通り、鍛えればひとかどの将になる器かと。」

華琳「そう……。純と秋蘭が認めたなら問題は無いでしょう。名は？」

凧「榮進と申します。真名は凧……曹操様と曹和様にこの命、お預け致します。」

真桜「李典や。真名の真桜で呼んでくれてええで。以後よろしゅう。」

沙和「于禁なのー。真名は沙和っていうの。よろしくおねがいますなのー。」

華琳「凧、真桜、沙和。以後宜しく頼むわね。それでは3人の件はこれでいいわね。物資の配給の支度が終わったら、この後の方針を決めることにするわよ。各自、持ち場に戻りなさい。」

純「かしこまりました。」

そして、それぞれ持ち場に戻ったのであった。

19話

本陣

華琳「さて。これからどうするかだけど……。新しく参入した風達もいることだし、一度状況をまとめましょう。……純。」

純「はっ。俺達の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。構成員は若者が中心で散発的に暴力活動を行っているが……。特に主張らしい主張はなく、暴徒の群れの中心にいる張3姉妹の追っかけによるものだ。」

純「その首領の張3姉妹も、旅芸人であると言う点までは突き止めたが、それ以外は不明だ。どこにいるのかも分かっていない。」

真桜「……。ぶつちやけ何も分かってへんのやな。」

栄華「本当に張角ら3姉妹が指揮を執っているかも怪しいものですわ。3姉妹が実際に扇動をして、煽られた者達だけが好き勝手に暴れている可能性もありますわね。」

春蘭「誰も口を割らん以上、本人を捕まえて聞くしかなかなかろうな。」

真桜「それ、口を割らんのやのうて、ホンマに知らんだけとちやうん?」

「桂花「その可能性も否定出来ないのが面倒なところね．．．」。

稟「はい、そうですね。」

風「ぐうぐ。」

稟「寝るな！」

風「おお！面倒な事だと思いつい．．．」。

稟「全く．．．」。

風「目的とは違うかもしれませんが．．．我々の村では、地元の盗賊団と合流して暴れていました。陳留のあたりではいかがでしたか？」

華琳「似たようなものよ。ただ、この村の例もあるように、事態はより悪い段階に移りつつある。」

春蘭「悪い段階．．．？どういう意味ですか？」

桂花「ここの大部隊を見たでしょう？無為に暴れるだけの烏合の衆や、地の盗賊と組むだけじゃない。それなりの指揮官を載いて、組織としてまとまりつつあるのよ。」

春蘭「．．．ふむ？」

イマイチ良く分かってなかったので、

桂花「要するに．．．今までのように、春蘭が大声で咆えたら終わるような敵じゃなくなるってこと。」

と説明したのであった。

春蘭「なるほど。」

桂花「・・・ホントに分かつてるのかしら。」

香風「前より強くて、面倒になってる。」

春蘭「・・・うむ。それだ。」

純（コイツ、ゼッター香風に乗っただけだろ・・・。）

華琳「ともかく、一筋縄ではいかなかった事だけは間違いないわ。ここでこちらにも味方が増えたのは幸いだったけれど・・・これからの案、誰かある？」

桂花「相手も組織化しつつあるなら、それこそ張角ら3姉妹が首領として据えられている可能性も高いです。そこを一網打尽にするしかありませんが・・・」

秋蘭「本拠地を潰せば一番良いのだが・・・旅芸人という出自故、我々のように特定の拠点を持たず、各地を転々としている可能性も高い。そもそも潰す本拠地がないなら、痛いな。」

凧「本拠地が不明で何処から来るか分からない敵ですか・・・。」

桂花「だからこそ、都から直々に討伐命令が出たのでしょ。ただ、それを討伐出来れば、華琳様と純様の名がさらに大陸に轟くのは間違いないわ。」

凧「はい。私も桂花の意見に同感です。それが出来れば純様の名が広がります。」

純「……」

華琳「如何したの、純？ さつきから黙っているけど。」

華琳の一言で、皆の視線が純に集中した。

沙和「……すいませーん。軍議中、失礼しますなのー。」

その時、柳琳や華命と一緒に炊き出しを手伝っていた沙和が顔を出したのであった。

華琳「どうかした、沙和。また黄巾党が出たの？」

沙和「ううん、そうじゃなくってー。」

春蘭「何だ。早く言え。」

沙和「村の人に配ってた食糧が足りなくなっちゃったの。代わりに行軍用の糧食を

配ってもいいですかー？」

華琳「……栄華、糧食の余裕は？」

栄華「数日分はありますけれど……義勇軍が加わった分の影響もありますし、ここ

で使い切ってしまうては身動きが取れなくなってしまうますわ。」

桂花「……とはいえ、ここで出し渋れば騒ぎになりかねないわよ。」

栄華「分かっています。既に補充の手配はしてありますから、それがこちらに着くの

が……そうですわね。3日分なら、出しても構いませんわ。」

沙和「3日分ね。わかりましたなのー。」

凧「すみません。我々の持ってきた糧食があれば良かったのですが、先程の戦闘であらかた焼かれてしまっています。」

栄華「焼けてしまったものは仕方ありませんわ。悔やめば灰が食べられるようになるわけでもなし、あるもので何とかしましょう。」

その時、

純「……糧食……。ふっ、その手があつたか……。」

華琳「……純？」

純の言葉に皆の視線が再び純に集まる。

純「部隊の規模が大きくなればなるほど、糧食の数は増えていく……。」

香風「……あー。」

秋蘭「……なるほど。」

純「流石秋蘭。分かったようだな。香風も。」

稟「なるほど。流石です。」

凧「その手がありましたか。」

季衣「にや？」

栄華「ああ、その手がありましたわね。桂花さん。」

桂花「分かっているわよ。……今どうすれば良いか考えてるんだから、声を掛けない

で。」

春蘭「どういう意味だ？」

華琳「流石ね、純。」

真桜「流石大将やないの。」

春蘭「お、おい・・・！華命がいないと、分かっていないのは私だけのようではないか！」

季衣「春蘭様、大丈夫です。僕も分かりません！」

純「あいつら黄巾党は、今や大部隊まで発展している。現地調達だけでは武器、食糧を賄いきるのは不可能だ。どこかに、連中の物資の集積地があるはず。そこを叩けば、情報だつて集まるし、仮に何も無くても相手に確実に打撃を与えられる。もつと運が良ければ、張3姉妹がいるかもしれない。」

華琳「ええ。桂花。」

桂花「はい。周辺の地図から物資を集積出来そうな場所の候補を絞り、それぞれに偵察部隊を向かわせます。」

華琳「任せるわ。物資の集積場所だけでなく、搬入と搬出に使えそうな道や痕跡も見逃さないようにしなさい。いいわね？」

桂花「もちろんです！」

純「稟と風も頼めるか？」

稟「お任せ下さい。」

風「お任せなのですよ。」

純「他の者は、桂花達の偵察経路が定まり次第、出発しろ。それまでに準備を済ませておくこと！」

春蘭「はいっ！」

季衣「分かりました！」

華琳「相手の動きは極めて流動的だわ。仕留めるには、こちら情報収集の早さが勝負よ。皆、可能な限り迅速に行動なさい！」

そして、それぞれ即座に行動を移したのであった。

それから数日後、

華琳「既に廃棄された砦ね・・・良い場所を見つけたものだわ。」

風「敵の本隊は近くに現れた官軍を迎撃しに行っているようです。残る兵力は1万が

せいぜいかと。」

純「ふん。だから砦を捨てて逃げようとしてんだらうな。」

春蘭「はい。そうでしょうね。」

栄華「正直、ここまで使い捨てられると良い気分ではありませんわ。砦をひとつ建てるのに、一体いくらかかると思っていますの。」

純「お前らしい考えだな。」

春蘭「その身軽さと神出鬼没が連中の強みなんだから、仕方ないな。」

純「ああ。もう少し遅かったら、この砦はもぬけの殻だったな。」

華琳「いずれにしても、厄介きわまりない相手に一当てする絶好の機会でしょう。∴
それで風、こちらの兵は？」

凧「我ら義勇軍と併せて、八千と少々です。向こうはこちらに気付いていませんし、絶好の機会かと。」

純「そうだな。なら、一気に攻め落とすか。」

華琳「ええ、そうね。」

すると、

桂花「華琳様、純様。それに際して、ひとつご提案が。」

華琳「何？」

桂花「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立ててから帰らせて下さい。」
と桂花が提案したのであった。

稟「私も桂花の意見に賛成です。軍旗を立てた方が今後のために良いと思います。」

華命「え、置いて帰るんすか？なんで？」

桂花「この砦を落としたのが、我々だと示す為よ。」

純「なるほど。黄巾の本隊と戦っているという官軍も、狙いはおそらくここだ。ならば、敵を一掃したこの城に曹旗が翻っていれば……。」

稟「はい、そういうことです。」

華琳「ふふつ、面白いわ。いいでしょう、軍旗を持って帰った隊は厳罰よ。」

栄華「まったくもう……砦もですけれど、軍旗もタダではありませんのよ？」

純「ふつ、栄華は反対か？」

栄華「……いいえ。今後のために必要な策だと理解していますから、結構ですわ。そういう意見がある事だけ、お心に留め置いてくださいまし。」

そう言つて、栄華はため息をつきながら言った。すると、

真桜「せやつたら、誰が一番高いところに旗を立てられるのか、競争やな！」

凧「こら、真桜。不謹慎だぞ。」

華命「面白そうつすー！あたしもやるつす！」

春蘭「ふん。新入りどもに負けるものか。季衣、お前も負けるんじゃないぞ！」

季衣「はいっ！もちろんですっ！」

香風「いちばん高い所……。シャンも頑張る。」

凧「……。むう。」

純「そうだな。一番高いところに旗を立てられた者には、何か褒美を考えておこう。

それでどうでしょう、姉上。」

華琳「ふふっ。ええ、良いわよ。」

すると、

凧「それでしたら、私も頑張ります！」

凧が先程の態度と打って変わって、やる気になった。

純（急にどうしたんだ？）

純がそう思っていると、

華琳「ただし、作戦の趣旨は違えないこと。狙うは敵の守備隊の殲滅と、糧食を残らず焼き尽くすことよ。いいわね。」

華琳がそう命を下したのであった。

春蘭「はっ！」

純「それが良いですね。」

すると、

沙和「あの・・・華琳様？」

華琳「何？沙和。」

沙和が華琳に質問をしたのであった。

沙和「その食料って・・・、さっきの村に持って行っちゃ、ダメなの？」

華琳「ダメよ。糧食は全て焼き尽くしなさい。私達の糧食とする事も禁じるわ。」

沙和「どうしてなの・・・？」

桂花「我が軍は今まで、どこからも略奪を行わずに戦ってきたのよ。」

稟「もし盗賊ごときの糧食をかすめ取るような真似をしてしまえば、今まで築いてきた評価が台無しになってしまいます。」

純「村に施しを行って手持ちの糧食が心許ないのは事実だが、かといって目の前の賊に売って貰う訳にもいかない。・・・ならば、焼くしかねーんだ。」

沙和「けど・・・！」

華琳「・・・それに、奪った糧食を村に持って行けば、今度はその村が黄巾党の復讐の対象になるかもしれない。規模は前回とは比較にならないでしょうね。」

沙和「・・・あ。」

栄華「あの村は既に、警護の増援と糧食を手配していますわ。それで復興の準備は整

うはず。お姉様とお兄様はあの村を見捨てるような事はしませんから、安心なさい。」
純「そういうことだ。糧食は全て焼け。米一粒たりとも持ち帰ることは許さない。それが奴らの怒りを全てこちらで引き受け、村を守る手段だと理解するんだ。いいな？」

沙和「・・・分かったの。」

華琳「なら、これで軍議は解散とするわ。先鋒は純と春蘭が務めなさい。」

純「はっ。」

春蘭「お任せ下さい！」

華琳「ならば、この戦をもつて、大陸の全てに曹孟徳の名を響き渡らせるわよ。我が覇道はここより始まる！各員、奮励努力せよ！」

全員「はっ!!」

華琳「純、各部隊の配置、任せたわよ。」

純「御意。」

華琳「それと、義勇軍の皆は貴方の下に付けるわ。」

純「分かりました。」

そう言つて、それぞれ各部隊の配置を決めたのであつた。

20話

本陣

凧「純様。楽進隊、布陣完了致しました。」

純「ああ、ご苦労。」

真桜「大将。布陣完了したで。」

純「ああ、ご苦労。」

沙和「純さん。布陣終わったの。」

純「ご苦労。」

そして、純は腕を組んだのであった。

暫くして、

焔耶「お館。曹和隊、布陣完了しました。」

純「ああ、ご苦労。」

香風「華琳様ー。純様ー。夏侯淵隊、準備できたー。」

季衣「夏侯惇隊も準備完了ですっ！」

それぞれが完了したことを報告し、

華琳「そう。なら、行くわよ。」

それを聞いた華琳は、純と春蘭に目配せをしたのであった。

純・春「御意ー！」

純「銅鑼を鳴らせ！鬨の声を上げろ！追い剥ぐことしか知らぬ盗人と、威を借るだけの官軍に、我らの名を知らしめてやれ！」

純「総員、奮闘せよ！突撃いいいいっ！」

純の覇気のもつた声で、曹操軍は奮い立つ。

純「楽進隊は前に出よ！李典隊、于禁隊は後方にて、打ち零れた敵兵を殲滅せよ！」

凧「はっ！」

真桜「了解や！」

沙和「了解なのー！」

純「曹和隊も前に出よ！この戦で、我らの隊の強さを知らしめるのだ！」

曹和隊「二〇おおーっ!!二〇」

純「焰耶！遠慮するな！思いっきり暴れてこい！そして、お前の強さを知らしめるのだ！」

焰耶「御意!!」

そう言い、焰耶は鈍砕骨を豪快に振るい、黄巾の賊を潰していった。

それから暫くが経ち、砦内

春蘭「おりやああああああつ!」

季衣「てりやああああああああつ!」

春蘭「ちつ。やるな、季衣!」

季衣「春蘭様こそ!でも、今度こそ負けませんよ!」

春蘭「それはこちらの台詞だ!あの時の勝負は純様のお声で水入りになったが、今度こそカタを付けてくれる!」

春・季「やああああああああつ!」

一方純と焰耶は、

純「ふっ！」

焰耶「でえええええいっ！」

純「ほお！やはりやるな、焰耶！」

焰耶「お館こそ！負けませんよ！」

純「それはこつちの台詞だ！やはりお前は最高の武人だ！良き部下を持った！だが、新たに3人の将が加わった！負けんじやねーぞ！」

焰耶「はっ！私はまだまだ未熟。さらに精進し、お館のような素晴らしい武人になって見せます！」

純「良く言った！それでこそ俺の部下だ！」

そして、純と焰耶の2人の通った道には死体の道が出来ていたのであった。

一方凧と華命、柳琳は、

凧「華命様！はああああああっ！」

華命「……へっ!?」

その時風は、華命に後ろから襲いかかろうとしている黄巾兵に向かって、気弾を放つた。

華命「あ……っ。」

柳琳「ね、姉さんっ!!」

黄巾党A「うわああああああああ……っ!」

そしてそれは、華命の脇を抜け、黄巾兵を吹き飛ばしたのであった。

風「大丈夫ですか、華命様!」

華命「ほへー。びっくりしたっす……。」

すると風は、城壁の上を見上げて、

風「よし、絶対に私が一番になってみせる!」

そう呟いたのであった。その横で、

柳琳「もう……姉さん、危ないからやめてって言ったのに!」

華命「大丈夫っすよー。柳琳は心配性っすねえ。」

柳琳「心配もするよう!」

華命と柳琳はそう言ったやり取りをしていた。すると、

華命「それより風!今の何すか?」

華侖「ばーってなって、ずばーってなって、どかーんって・・・、とにかくすごかったっすー！あれ、どうやるんすか？あたしにも出来るっすか？」

凧「ええつと、その・・・それは・・・。」

妹の心配を余所に、華侖は凧が放った気弾に興味津々であった。

一方香風と真桜は、

香風「うーん。」

真桜「上手いかへんなー。」

どうやったたら空を飛べるのか、考えていたのであった。

そして、

純「よう、お前ら。」

沙和「あ、純さん。お疲れ様なのー。」

純「ああ。沙和と栄華は大丈夫だったか？」

沙和「ん、平気なのー。」

栄華「私も大丈夫ですわ、お兄様。」

沙和は少し疲れた顔に見えたが、すぐに笑顔を見せたのであった。

純「そっか。」

栄華「ところで、焰耶さんは？」

純「あいつなら、今頃屋根の上辺りに行ってるだろう。」

栄華「そうですね。」

すると、

秋蘭「火を放て！糧食を持ち帰ること、まかりならん！持ち帰った者は厳罰に処すぞ
！」

庭の中央で、秋蘭の指示によって糧食が集められ、火をかけていたのであった。

沙和「あーあ。やっぱり、もったいないの。」

栄華「まったくですわ……。これだけの糧食があれば、我が軍が何日食べ繋げる事
か。」

純「気持ちには分かる。俺だって焼きたくなかったさ。姉上も。けど、こうするしかねーよ。」

沙和「みゆうう……。 」

栄華「それを理解するのと、もつたいたいと思うのは別問題ですわ。お兄様も、思うところはあるのでして？」

純「まあな。今の俺達だって、ただでさえ糧食が足んねーんだからな。」

沙和「もしかして、食料が足りないのって村の人の所に色々置いてきちやったからなの？ 沙和がもつと出せませんか、って聞いたから……。 」

栄華「あれは、あの場では必要な行いでしたわ。それにそれを責めるなら、3日分は置いて良いと判断した私の責任でしてよ、沙和さん。」

そう、栄華は沙和に優しく声をかけたのであった。

栄華「さて、屋根の上の勝負もそろそろ終わりの頃合でしょうし、本陣に戻りましょう。」

純「栄華はともかく、沙和は参加しなかったんだ。」

沙和「うん。沙和達はもう、城壁の所に全部立てちゃったの。」

純「そっか。」

栄華「ずっと気になっておりましたが、そういうお兄様は何処に立てましたの？」

純「正殿天井のちよつと下辺りだ。投げたらそこに刺さった。」

沙和「・・・え？」

栄華「そ、そうですよ・・・。」

そして、最終的に1番高い所に旗を立てたのは、季衣であり、2番は意外なことに風であり、春蘭は3番、焰耶は4番であった。

そして、純達が本陣に戻ると、沛から急な知らせが来たのであった。

本陣

華琳「沛の城が襲われたですって？」

沛国兵士A「はい。黄色い布を巻いた集団が大軍を率い、我らが沛国の都を・・・」

沛国兵士A「包囲が完了するまでの僅かな時間で、自分は陳珪様の命を受け、この地に出陣しておられる曹孟徳殿と曹子元殿に助けを求めるようにと出されたのです。」

純「分かった。ひとまず、お前は控えている。向こうに食事と寝床を用意させてあげる。」

沛国兵士A「・・・感謝致します。」

そう一礼し、ふらつく足取りで、その場を後にしたのであった。

華琳「しかし・・・、大変な事になったわね。」

純「はい。しかも、陳登もちょうど沛に戻っているはず。状況としては最悪ですね。」
真桜「けどさっきの遣い、陳留やのうて出陣しとるこつちに行くよう言われたて、どないなつとんの？沛の都からここと陳留じゃ、方角が全然違うで？」

真桜の疑問に、

桂花「こちらの動きは把握済みだったんでしょ。あの女狐の事だから、それくらいの情報収集はしても不思議でもなんでもないわ。」

栄華「もつとも、それを知られるのは向こうにとつても本意ではないはず。・・・それだけ余裕がなかったとも取れますわ。」

稟「しかし、罨の可能性もあります。」

桂花「そうね。」

風「嘘とも言い切れませんが、かといって本当のことだとは言い難いです。」

秋蘭「どうなさいいますか、純様。沛に向かうのですか？」

純「ああ。陳珪には借りも多いし、陳登はこれからの陳留に欠かすことの出来ない人材だからな。」

華琳「ええ。純の言う通りだわ。」

桂花「反対です。我が軍は既に連戦に連戦を重ね、疲弊の極みにあります。何より行軍に必要なだけの糧食がありません。」

稟「私も桂花の意見に賛成です。一度陳留に戻り、準備をしてから出陣すべきかと。」
風「風も同じ意見です。」

栄華「私も、お三方の意見に賛成ですわ。」

桂花「陳珪は朝廷との癒着の証拠も多く見つけましたし、罨の可能性も否定出来ません。ここから無理に兵を動かす事も計算の上で、どこかで待ち伏せている可能性すらあります。」

春蘭「……まさか、黄巾党と戦っている官軍と結託しているなどとは言わんよな？」
稟「流石にそこまではないと思いますが……せめて、沛城襲撃の裏付けを取ってからの出陣を提案致します。」

華命「んー。でもそんな事してて、間に合うんすか？」

香風「……たぶん、無理。」

華命「え、それじゃ意味がないっす……。」

華琳「意味がないわけではないわ。少なくとも、救出に向かったという事実は出来るもの。……間に合うかどうか別としてね。」

純「そうですね。それに、まだあれには対価の支払いも済んでおりません。踏み倒すには、少し額が多すぎますからね。」

華琳「ええ、そうね。」

季衣「だったら……！」

華琳「ただ、私達も万能ではないの。届く手の長さは決まっているし、手で掬える大きさにも限りがある。」

そう言つて、華琳は少し離れている純に向けて手を伸ばしたが、純の所には届かなかった。

純「姉上……。」

純も手を伸ばしたが、指先さえ触れる事は出来なかった。

その時、

季衣「なら、華琳様、純様……。お願いがあります。」

季衣が華琳と純に声を掛けた。

華琳「何？」

純「どうした？」

すると、

季衣「僕を、沛国に行かせて下さい。」

そう言ったのであった。

春蘭「・・・季衣。お前、またか！」

季衣「あの砦の一番高い所に旗を立てたら、ご褒美があるんですよね？ だったら僕、あの人達を助けに行きたいです。」

華琳「・・・。」

純「・・・。」

季衣「華琳様と純様の手が届かないなら、僕が一緒に伸ばします。」

そう言つて、季衣は華琳の手を取り、自身も一杯まで手を伸ばし、純に、反対側の手を伸ばしてきたのであった。

季衣「華琳様と純様に掬えないものは、僕もお手伝いします。」

その時、純は季衣に手を伸ばした。すると、季衣はしっかりと純の手を握りしめたのであった。

季衣「ほら。これなら華琳様の手は、純様に届きます。だから・・・」

しかし、

桂花「ダメよ。季衣だつて、ここに来るまでどれだけ戦つたと思つてるの。それにいくら黄巾の連中が雑魚ばかりでも、季衣一人が行つたところで・・・」

栄華「何より、もう食料がありませんのよ。せめて、こちらに向かつている輸送部隊

と合流して、補給を済ませてからでない」と。

桂花と栄華が反対したのであった。しかし季衣は、

季衣「それじゃ間に合わないかもしれないでしょ！それに、その食べ物はこの村の人達のものなんだから。」

そう言ったのであったが、季衣の腹が鳴り、

栄華「・・・ほら。今の私達は、その空腹を満たすのが精一杯ですよ。」

と栄華が言ったのであった。

季衣「だ、大丈夫だよ。お腹が空いてるのも、絶対に我慢するから！うう・・・お腹なんか減ってない、減ってない・・・。」

華琳「・・・純、あなたならどうするかしら？」

純「俺ですか？」

華琳「ええ。戦の進退は、あなたが握ってるもの。あなたの判断に任せるわ。」

純「そうだな・・・。」

そう言つて、純は目を閉じた。すると、

季衣「純様、助けに行きましょう！」

桂花「ここは公正な判断を・・・純様！」

稟「何とぞ、純様！」

風「……」

栄華「お兄様！」

柳琳「お兄様！」

春蘭「純様！」

香風「純様。」

華命「純兄！」

皆が一斉に純に目を向けたのであった。

純「……」

そして、純は沈黙の後、目を開き、こう言った。

純「沛国の救援に向かう！皆、強行軍となるから、大至急出撃の準備をせよ！ついて来れなかった者は置いていくぞ！」

全員「はっ!!」

純「それと、移動する際、武器鎧は、傷めてるのを装備しろ！栄華、お前は本隊から先行して、沛国に向かう進路上にある郡や県に声を掛け、糧食を貸して貰ってこい！」

栄華「承知致しましたわ！」

稟「なるほど。その為に武器鎧を……。流石は純様です。」

純「よし!!各自、行動を開始せよ!!」

全員 「三はっ!!」

そうして、陳珪救出のための準備を始め、出撃したのであった。

21話

豫州・沛

燈「戦況はどうかしら？」

沛国將軍A「良くありませんな。」

沛国將軍A「既に北門も破られました。その奥に壁を作つて、何とか凌いではいますが、いい加減、布きれの連中も痺れを切らしているようです。」

燈「大攻勢が来るのも時間の問題か。ここまで半月、よく保つたほうでしょうね。」

沛国將軍A「はい。そこらの賊のように、一当てすればすぐ崩れる烏合の衆かと思いましたが……。いやはや、敵ながらあつぱれ。なかなか粘る。」

燈「仕方ないわ。報告はもう結構よ、持ち場に戻りなさい。」

沛国將軍A「……はっ。」

そう言い、將軍は部屋を後にした。

燈「……この状況であつぱれはないでしょうに。」

燈「とはいえ、あれの本質が見えない者は、ただの烏合の衆と見誤るか……。」

喜雨「違うの？ 暴徒と賊が寄り集まっただけでしょ？」

燈「……ええ。あれらには、あの黄色い布がある。」

喜雨「それが……？ ただの布だよな？」

燈「ええ。私達にとっては、ただの布きれよ。……けれど、あの暴徒達にとっては

それこそが自分達の正義の証となる。」

喜雨「何それ。意味が分からない。」

燈「他に頼れるものもすがれるものもなくなってしまうえば、そんなものでも希望に見えてしまうのでしょうか。進んだ道の先には、何も無いというのに。」

燈「せめてあの布をかざした者が、荒れた土地を開拓する方向や、街を襲う賊に抗う力へと導く者なら良かったでしょうけれど……。」

喜雨「それって、誰かがあの布を使ってあの集団を操ってるって事？ それが……、沛の城を囲んでる連中の正体？」

燈「恐らくね。力を合わせて沛を落とせば、お米が腹一杯食べられる。皆で協力して、私腹を肥やす悪の相を追い落とそう。……せいぜい、その程度の煽りでしょう。」

喜雨「母さんを殺しても、何も解決しないの？」

燈「希望を失った民などそんなものよ。それが張角の望んだことか知る由もないけれ

ど……、その言葉にすがって走り出した者達は、もう止まることはないでしょうね。」

喜雨「でも、沛やこの辺りの郡で生活が苦しい民なんて、もう殆どいないはずだよ。」

喜雨「最近は大きな干ばつも起こってないし、税を納めてもご飯はちゃんと食べられる。暴れてた賊だって、曹操様と曹和様が退治してくれたはずなのに……。」

燈「黄巾の隆起は、なにも豫州で起こっているだけではないのよ。」

燈「東の徐州か、南の揚州か……。徐州の陶謙殿の権威も今はだいたい弱まっているそうだし、揚州は税も重く、徐州以上に荒れていると聞くわ。」

燈「そんな場所が集った暴徒が、豊かな沛の都に押し寄せるのは……、まあ、当然の流れでしょうね。」

喜雨「大陸でも、貧しい所がまだそんなに……。」

燈「あなたが育てたこの豫州や、力を付けた曹操とその弟曹和が守る兗州が特別なよ。そんな恵まれた土地は、この大陸からすればほんの一握りに過ぎない。」

燈「喜雨も、こんな事に巻き込んで悪かったわね。せめて、連中が城を包囲する前に逃がせば良かったのだけれど……。」

喜雨「……土を触っていても、嵐が来る事はあるよ。」

燈「そうね……。けれど、連中が城まで入ってきたら覚悟を決めて頂戴。戦で虜囚となった若い娘は、不幸よ。」

喜雨「……よく知ってる。村のみんなから、何度も聞いたよ。」

燈「そう。なら、この短刀は……、あなたの分よ。」

そう言つて、燈は喜雨に短刀を渡した。

喜雨「……。」

喜雨「でも、出来れば……、まだ死にたくはないな。」

燈「そうね。私もよ。」

喜雨「曹操様達、助けに来てくれないかな。……手遅れになる前には何とかしてくれるって、言つてたのに。」

燈「こういう時のために貸しは作つておいたし、それを理解出来ない愚物ではないはずだけれどね。」

燈「……少し、間が悪過ぎた可能性はあるのよねえ。」

すると、外が騒がしいことに喜雨は気付いた。

喜雨「……何?」

燈「いよいよ、向こうの大攻勢が始まったのかしらね。」

その時、

沛国兵士B「報告です!」

兵士が知らせにやつて来た。

燈「何？」

沛国兵士B「城の北方に新しい軍団を確認！」

燈「旗は。」

沛国兵士B「はっ！旗は曹！陳留の、曹孟徳殿とその弟、曹子元殿です！」

喜雨「・・・曹操様と曹和様？」

燈「もうここまで来たというの・・・？まさか・・・。」

沛城城外

秋蘭「斥候の兵、戻りました。既に沛城は最寄りの北門を始め、主要な門のいくつかが崩壊。黄巾党に城下への侵入を許しているそうです。」

秋蘭「ですが、城や門にまだ陳の旗は健在。陳登殿は不明ですが、陳珪殿はまだ無事と思われれます。」

華琳「・・・間に合ったようね、純。」

純「こちらもありふり構わずに来たのですから、易々と陥ちてもらってはいけません。」

すよ。」

そう言つて、純は指示を出した。

純「まずは城と、陳珪・陳登親子の確保が最優先だ。その後に賊を捕え、暴徒どもの繋がりを曝く。これだけの規模の賊だ、張角に続く手掛かりは必ずあるぞ。」

凧「はっ！」

純「凧、桂花。」

凧「はい。まずは落とされた北門を集中して攻略します。その後、城の確保と各城門の支援に隊を分割します。」

桂花「それと門の攻撃は、内外から同時に行い、門を攻める敵を挟撃して殲滅します。」

春蘭「まずは、あの一番近い門を攻めている連中を叩き潰せば良いのだな。」

凧「はい。そうです。」

桂花「好きなだけ暴れなさい。」

春蘭「良い策だ！季衣も行けるな？」

季衣「もちろんです！ご飯もお腹いっぱい食べましたから、いくらでも戦えますよーっ！」

純「焔耶も、好きに暴れろ！」

焔耶「はっ!!」

純「よし。ならば、我が陳留の勇者達よ！沛国を襲う脅威を蹴散らし、この地に平穩を！そして、我が国の農の希望を救出せよ！」

秋蘭「総員、進撃を開始せよ！」

そして、陳珪・陳登親子の救出戦が始まったのであった。

城内

春蘭「はあああああああああああああああああああつ！」

季衣「でりやあああああああああああああああああああ！」

黄巾党A「うわあああつ！なんだあれは！逃げろ、逃げろおつ！」

黄巾党B「こら、お前らばかり先に逃げるな！逃げるのは俺が先だあつ！」

春蘭「雑魚は捨て置け！まずは城までの道を切り開くのだ！行くぞ、季衣！」

季衣「任せて下さい！どりやあああああああああああつ！」

黄巾党C「うわーっ！」

純「おーおー、相変わらずだなあ、春蘭は。」

真桜「なんか、弱い者いじめ感はんばないな……。でも、大将はもつと強いんだよな……。」

沙和「うん……。春蘭様達が味方で、ホントに良かったの。」
すると、

秋蘭「純様。」

秋蘭が香風らを引き連れてやって来た。

純「秋蘭か。その様子だと、作戦通りにやってるようだな。」

秋蘭「はつ。万事滞りなく。」

純「そっか。」

香風「純様、華琳様がお城の中に行くと。」

沙和「えーつと、北門を抜けたら、沙和達は何するんだっけ？」

真桜「残った門の開放やな。内側から街中を掃除して回る組と、門の外側に回り込んで敵軍を後ろから叩く側に別れるんやて。」

凧「私達は全員、門の外側から賊の背後を叩く側だ。それでは純様、行つて参ります。」

純「ああ。3人とも、気を付けてな。」

そう言つて、3人はその場を後にした。

香風「なら、シャン達もいこー。」

純「そうだな。あの流れを止めるのはさすがにな。」

秋蘭「はい。姉者と季衣の手綱は私がかします。純様、どうかご無事で。香風も、頼んだぞ。」

純「秋蘭もな。」

香風「はい。」

城内

燈「来ていただけたこと、改めて礼を言わせていただきますわ、曹孟徳殿、曹子元殿。・・・正直、間に合わないかと思っていたもの。」

華琳「同盟の誼なもの。礼には及ばないわ。」

純「既に城には兵を入れて、防備を固めている。城下と城門は今掃除している最中だが、敵の指揮系統は崩壊しているようだし、後は時間の問題だ。」

燈「そう・・・。重ね重ね、感謝するわ。」

純「陳登も無事だったんだな。」

喜雨「うん。何とか助かったよ。．．．ありがとう。」

燈「しかし、どうやってここまでこんなに早く来られたの。私の遣いは、賊討伐の遠征先に着いたはずでしょう？」

華琳「純の判断で、そこから直接来たのよ。」

純「ああ。陳留に戻る時間も惜しかったからな。」

燈「そんなに糧食に余裕があつたの？」

純「いや。手持ちの糧食など、ここに来る道程の半分ももたなかつたぞ。」

華琳「ええ。そうだったわ。」

栄華「ですが、どこの太守や県令も、少し声を掛けただけで今までの恩返しとばかりに快く糧食を貸して下さいましたわ。」

純（ま、割増にした代金を後で支払う事を条件にだがな．．．。）

栄華「沛国の相殿をよしなに、だそうですわ。」

燈「．．．そう。」

純「別に緊急時だからって脅したとか、弱みを握ってどうこうってわけじゃねーから、安心しな。」

栄華「ええ。涙ながらに訴えただけですわ。こちらも賊退治の連戦で満身創痍ではあるけれど、大切な盟友である沛国の相殿をなんと少しでも助けねばなりません．．．と

ね。」

燈「・・・随分と、大衆受けしような手段を取ったものね。」

桂花「その方が民の語り草になるでしょう。」

稟「はい。こういう時は、危機感や悲壯感を出すくらいの方がちょうどいいので。」
純（まあ、だから傷めた装備で移動させたんだけど・・・。）

燈「・・・。」

華琳「そんな事より、あの連中はどこから現れたの？ 貴女はともかく、陳登の人望があれば沛の農民が城に攻め入る事などないでしょうに。」

喜雨「・・・僕にだってそんな人望はないよ。」

栄華「ふふつ。それでもありませんわよ。」

栄華「沛に入った後で道なりの村に声を掛けたら、陳登さんをお助け出来るならお代は結構です・・・という農民の方が後を絶ちませんでしたもの。」

喜雨「え、じゃあそれって・・・。」

栄華「もちろんこちらも、適正な代金をお支払いさせていただきますわ。今は手持ちがありませんから、買い掛かりにさせていただきますいただきましたけれど。」

喜雨「・・・そっか。なら良かった。」

燈「恐らく、喜雨の力が及ばない、徐州や揚州でしょうね。徐州は押さえの陶謙殿の

力も衰えていると聞くし、揚州は徐州以上に無法がまかり通っているそうだから。」

純「なるほど……。」

燈「それでね……ちよūd良い機会だし、2人をお願いがあるの。」

華琳「これ以上何を求めるつもり？」

燈「ええ。……あなた達との同盟を解消させてくださらない？」

純「……ほお。」

この宣言に、流石の華琳達は驚き、陳登も驚いていた。

華琳「この時期に、随分と一方的な話ね。……それで、破棄した後はどうするつもりなの？」

燈「ええ。この豫州を、あなた達の下にお預けするわ。」

華琳「……。」

純「……。」

燈「もはやあなた達には、この沛国……いや、私と同盟を結ぶ旨味はないでしょう？」

桂花「だからといって、本当に売国の徒となるつもり!？」

燈「ふふつ。今さらでしょうに。」

燈「……曹洪殿、正直に答えていただきたいわ。先程の件、ここまでの通り道で立

ち寄った沛の県令達は、みな本当に喜んで糧食を差し出してくれたのではなくて？」

栄華「……。」

彼女の問いに、栄華は凶星だったのか、何も答えなかったのであった。

燈「曹子廉殿。遠慮は無用よ。」

栄華「……県を預かる令ともあろう者達が、私のような遣いの小娘に媚びへつらう……とてもおぞましい光景でしたわ。正直、二度と思ひ出したくありませんわね。」

純「つまり……。」

桂花「黄巾の暴徒如きにいいようにされる陳珪に見切りを付けて、華琳様と純様に乗り換えたって事です。」

稟「はい。桂花の仰る通りです。」

燈「軍師殿は本当に遠慮が無いわね……。」

燈「でも、残念ながらその通りよ。恐らく、豫州の他の郡でも状況は変わらないでしょう。」

華琳「陳珪……。」

純「……。」

燈「豫州はもはや、あなた達のものという事よ。私が何をしようかね。」

華琳「……そう仕向けたのは、あなたでしように。」

燈「……で、どう？外の戦いももうすぐ終わるでしょう。今の内に決めておいた方が、戦後処理に手間取らなくて済むと思うのだけれど？」

純「なら……1つだけ答えろ。」

燈「何なりと。」

純「お前の目的は、何だったんだ？姉上を州牧にまで引き上げ、自分の属する州を売り渡すような真似までして……お前は、一体何を見ていたんだ？」

燈「そうね……。」

すると、陳珪は穏やかな微笑みを浮かべ、

燈「有能な後進に道を与えたかった、ではダメかしら？」

そう答えたのであった。

純「本当のことを言いな。」

華琳「ええ。おためごかしは嫌いよ。」

燈「……なら、この地を守るための大樹が欲しかった、とでも言えば満足する？」

華琳「育てた大樹に屋敷を潰されては世話はないわね。」

燈「そうね。それでも、大樹の陰や洞を新しい家とすることは出来るわ。」

そう言い、何か憑きものが落ちたように感じた純であった。

燈「何よりこれからは、国ごとその大樹の恩恵に預かっていられるのだもの。国1つ

を差し出した対価としては、まずまずだわ。」

華琳「貴女には為政者としての誇りはないの？」

燈「この土地と民もろとも果てるのが為政者の誇りというなら、そんなものはとうに捨ててしまったわね。」

華琳「……。」

純「……。」

燈「ふふつ。あなた達のその顔が見られただけでも、十分な対価な気がしてきたわ。」

華琳「……その言葉、私達の寝首を掻いた時にも口にするつもり？」

燈「さあ？そんな時が来ない事を願うだけだわ。もつとも、弟の場合は返り討ちに合
うやもしれないわね。」

燈「……さて、曹孟徳殿。曹子元殿。我が真名を預けるに足るお方よ。我が恭順を
受け入れるや。あるいは我が首を刎ねた血と屍の上に立ち、此の地の主となるや。」

華琳「……。」

純「……。」

香風「華琳様ー。純様ー。外の制圧、終わったって。」

燈「……曹孟徳殿。曹子元殿。いざ。」

そして、華琳と純は小さくため息を吐いて、

華琳「……いいでしょう。ならばその真名とこの地、私達に預けなさい。」
燈「……御意。」

陳留に向かうその道中、

純「姉上、燈をあのままして良かったでしょうか？」

華琳「沛の事後処理もあるし、ひとまずの処置よ。まあ、しばらくはこのままでしよ
うね。」

純「そうですね。これは燈自身が片付ける問題ですし、何より喜雨もいますからね。」

華琳「ええ、そうよ。」

すると純は、後ろを振り返り、

純「お前達、ずーっと黙ってたけど、不満だったろう？」

そう言った。すると、

桂花「はい、不満です。」

桂花がそう言ったのであった。

桂花「でも、燈が怪しいのは前々からずっと言っていたことですし、今さら言っても仕方ないです。」

稟「はい。私も桂花の意見に同感です。」

栄華「それに、お姉様の事ですもの、どうせいつもの・・・」

華琳「ええ。罨があるなら食い破る、それだけよ。」

純「なるほど・・・。」

春蘭「華琳様と純様の領地が増えるのだ。何にせよ、めでたいことではないか。お前達もうだうだ言っていないで、素直に喜べ。」

桂花「戦働きするだけだと色々考えなくて、楽で良いわね。」

と、春蘭に対して皮肉を言うと、

春蘭「ふふん、羨ましいか。」

そう返されたのであった。

桂花「・・・その厚かましき、羨ましいを通り越して腹立たしいんだけど。」

栄華「いずれにしても、燈さんを信用出来ないのは今までと何一つ変わりませんわ。信用の置ける者を補佐に入れて、監視の目を強くするくらいしかありませんわね。」

華琳「・・・。」

純「姉上、如何なさいましたか？」

華琳「いえ、何か忘れていている気がするのよ……。」

純「賊の城に旗を立てて、1番高い所に立てることが出来たら褒美をやるというお話では？」

華琳「ああ、そうだったわね。」

純「確か、2番目が凧だったんだよな？」

凧「はい。後一步及ばずでした。」

そう言つて、凧は悔しそうにしていた。

純「焰耶は4番目と？」

焰耶「はい。春蘭様に及ばず。」

焰耶も悔しそうな表情であつたが、

春蘭「いや、お前もなかなかだつたぞ。流石純様の家臣だな。」

春蘭がそう褒めたのであつた。

純「では焰耶、此度の褒美として、お前には俺の隊の指揮の一部を委ねる。」

焰耶「え?! 宜しいのですか!？」

純「ああ。まだまだ未熟な所もあるが、お前の武とその指揮には、光るものがあつたからな。頼んだぞ。」

それを聞いた焰耶は、稟の時と同様、全身が熱くなるように感じた。慕っている主か

らの期待と信頼に歓喜したのだ。

焰耶「はっ!! 期待に応えられるよう、全力でお館をお支えます!!」

純「ああ。」

そして、

純「2番の凧には俺が褒美を出してやろう。」

純がそう言ったのであった。すると、

凧「本当ですか!？」

凧が食いついてきた。

純「ああ、何が望みだ？」

すると、

凧「では私を純様の傍に置いて下さい!!」

そう言ったのである。

純「ほお、それは何故だ？」

凧「私は純様の傍で、色々学びたいのです。あなたについて行けば、私はもっと強くなれる気がするんです! お願いします!!」

そう言われて、純は華琳の方を見た。すると、

華琳「構わないわ。純、彼女の望みを叶えてやりなさい。」

そう答えたのであった。

純「分かった。では、俺の傍で仕えろ。真桜と沙和はどうする?」

真桜「ウチも凧について行くでー。」

沙和「沙和もなのー!」

他の2人もそう言ったので、

純「分かった。宜しくな。」

そう言ったのであった。

華琳「あなた達、純は我が軍随一の武人でもあり、私が最も信頼の置ける者よ。ついで行くのは大変だろうけど、頑張りなさい。必ず、大きく成長出来るはずよ。そして、純に仕えてる焔耶、郭嘉、凧とも、互いに成長し合うのよ。」

そう華琳が伝えると、

凧「はっ!!」

真桜「はいよー!!」

沙和「はいなのー!!」

凧ら三羽鳥はそう答えたのであった。

沛

燈「……ふふつ。」

その頃、燈は1本の短刀を見つめていた。

喜雨「母さん……？」

燈「……ああ、喜雨。まだ起きていたのね。」

喜雨「少し眠れなくて。……どうかした？」

燈「ええ、ちようど良かったわ。これを……預かっておいて欲しいの。」

そう言つて、喜雨に短刀を渡したのであつた。

喜雨「これつて……母さんの分の短刀？まさか、母さん……。」

燈「大丈夫よ。ここで自ら命を絶つほど、私は繊細な世界に生きていないわ。」

喜雨「……そう。」

燈「明日から陳留でしょう。早く眠つてしまいなさい。」

喜雨「うん……そうするよ。……母さんも、早く寝てね。」

燈「ええ……。」

そう言つて、喜雨は部屋を後にしたのであつた。

燈「……あれが、英雄というのでしょね。」

燈「……されど英雄は、ただの1人で成るものではない。」

燈「諸子百家然り、秦王政然り、項羽と劉邦然り……。」

燈「曹孟徳。曹子元。この先も英雄たらんとするならば、この先あなた達姉弟を育て、導き、競い合うのは、果たして……一体、誰なのかしらね。」

燈「……その行く末、見届けさせて貰うわ。我が大樹。」

そう、1人部屋の中で呟いたのであった。

2 2 話

青州中央部

沛の一件から数日後、純は五千の兵を率いて青州に来ていた。その理由は、皇甫嵩からの援軍の要請に応え、姉の華琳に代わって出陣していたのである。

出陣する際、秋蘭、焰耶、稟、風を引き連れていたのである。三羽鳥は、陳留の街の警備を一任しているため、連れてきてはいないのである。

現在、本陣に到着し、陣幕は焰耶と風に任せ、皇甫嵩のいる天幕へと向かっていた。

兵士A「名を申せ。」

純「□州州牧曹孟徳の名代として参つた、曹子元です。」

兵士A「了解した、では武器をこちらに。」

純「分かりました。行くぞ、秋蘭、稟。」

秋・稟「御意。」

そう言つて、純は刀を兵士に預け、天幕に入つていったのであった。すると、既に先客がおり、桃色の髪をした少女と、白い衣を着た少年、そして、綺麗な長い黒髪の少女

とペレー帽を被っている少女がいたのであった。

純「□州州牧曹孟徳が弟、曹子元と申します。こちらは副官の夏侯妙才と軍師の郭奉孝。何卒宜しくお願い致します。」

皇甫嵩「こちらこそ宜しくお願いするわ。子元殿。そしてこの者達は、平原から参つた劉玄德の一味よ。」

純「宜しく頼む。」

そう言い、拱手したのであった。

劉備「宜しくお願い致します。劉玄德です。」

北郷「俺は北郷一刀。」

諸葛亮「諸葛亮でしゅ！はわわ!!」

関羽「関雲長も申します。」

それに対し、劉備達はそれぞれ簡単に挨拶をし、諸葛亮に関しては、嘖んでしまったのであった。

純「それで、皇甫嵩殿、戦況は？」

すると、

皇甫嵩「ええ。極めて良くないわ。あなた方が来てくれて、どれだけ頼もしいか。作戦に関しては、あなた達に任せるわ。」

と皇甫嵩は、言ったのであった。

純「分かりました。秋蘭、稟の守りを頼む。俺は先に天幕に戻るから。」

秋蘭「御意。」

そう言い、兵士に刀を返して貰い、天幕に戻った。

曹和軍天幕

風「では焰耶ちゃん。この模型を使って8種類の陣形を作り上げて下さい。」

焰耶「うむ。これが魚鱗だ。」

風「はい、正解です。では次です。」

焰耶「えーっと、これが鋒矢だ。」

風「はい、正解です。流石焰耶ちゃん、しっかり学んでますね。」

焰耶「うむ。お館を支えると決めた身、こういった兵法もしっかり覚えねば。」

風「おお。流石焰耶ちゃん、風は感動しました。」

その時、

純「戻ったぞ。」

純が戻ったのであった。

焰耶「お館、お帰りなさいませ。」

風「純様、お帰りなさいです。」

純「焰耶、しっかりと勉強しているようだな。」

風「はい。もう風も驚いております。ここまで飲み込みが早いと、風は教え甲斐があります。稟ちゃんも同じ事を言ってますよ。」

純「そうか。今後とも励めよ。」

焰耶「はっ！」

そして、暫くすると、秋蘭と稟が戻ってきたのであった。

純「お帰り。んでどんな感じ？」

稟「はい。二手に分かれて攻めるといふ形になりました。東は劉備軍、西は我らと官軍という形です。」

純「そうか。ご苦労だった。皆、明日の準備をしてくれ。解散！」

そう言って、それぞれ明日の準備をに行ったのであった。

それから数時間後、秋蘭は純に呼ばれ、幕に向かつていた。そして、守兵に挨拶をし、秋蘭「純様、秋蘭です。入っても宜しいでしょうか？」

そう言った。すると中から、

純「入れ。」

そう言われて、秋蘭は幕に入ったのであった。その時、純は机に向かい書状を読んでしたが、秋蘭が来るなり、

純「来たか。此処に座つて。」

と胡座の上に座るよう促した。

秋蘭「書状はいいのですか？」

純「ああ。急ぎではないからな。」

そして、秋蘭は指示のまま純の胡座の上に座り、背を預けたのであった。

秋蘭「……少しは落ち着きましたか？」

純「……ああ。」

そう言つて、純は秋蘭を抱き締めた。

純「お前と久しぶりに組むから、昂ぶっちゃつてな。」

秋蘭「そうですね。私も久しぶりで少し舞い上がっております。」

純「……そうか。」

そう言つて、純は秋蘭を更に強く抱き締め、髪の匂いを嗅いだり、首に顔を埋めたりした。秋蘭は撥つたそうにするが嫌がることなくされるがままとなつていたのである。

そして、純は秋蘭の顎を指で軽く掴み此方に向けさせた。すると、秋蘭は潤んだ瞳で純を見上げ、唇から吐息が漏れる。純はそのまま唇を奪う。最初は触れ合うだけだったが、次第にもつと深くという思いが支配し、秋蘭から純の口の中に舌を入れたのである。純もそれに応えるよう秋蘭の舌に自分の舌を絡めたりしながら、秋蘭の口の中を蹂躪する。いつの間にか純と秋蘭は抱き合う様な格好になつていたのであった。

そして、純は唇を離し、

純「続きは帰つてからな。」

と言つたのであった。すると秋蘭は、少し不満そうな顔をしながら

秋蘭「・・・生殺しですか。辛いです。」

そう言つたのだが、

純「今は戦の時。帰つたら、お前の望み通りにしてやる。その時は、眠れなくなるくらい可愛がつてやる。」

そう純は、秋蘭の耳元で囁いたのであった。それに秋蘭は背筋にゾクリとした震えを感じ、

秋蘭「・・・はい！」

喜色満面の笑みで返事をしたのであった。

純「でも、今日は一緒に寝よ。」

そして、お互い抱き合うように倒れる。

純「・・・へへ。お休み、秋蘭。」

秋蘭「はい、お休みなさいませ、純様。」

そう言い、互いに抱き締め合いながら眠ったのであった。

翌日

稟「それでは、今回使用する策を説明させていただきます。」

純「その前に、皇甫嵩殿。一応我らと官軍は一緒に行動しますが、我らの作戦に従って良いのですか？」

皇甫嵩「ええ、構わないわ。現状あなた達が頼りですし、あなた達に任せます。」

純「分かりました。すまんな稟、続きを。」

稟「はつ。まず、中郎将殿と秋蘭様で騎兵を率い、賊軍に奇襲を仕掛けて下さい。あ

る程度成功したら……」

そう言つて、稟は地図に書いてある目の前の森を指さし、

稟「この森を一直線に駆け抜けて下さい。風は、賊軍が森に入り、中郎将殿達が抜けた頃合いを見計らつて、森に火を放ち、即座に撤退して下さい。そして、焰耶は、四方より取り囲み、敵を殺戮、及び殲滅して下さい。」

純「よし、その策で行こう。」

皇甫嵩「ええ。良い策だわ。」

そして、各自準備を始めたのであつた。

数時間後、戦闘が始まつた。

皇甫嵩「奇襲は成功したわね。後はこの撤退の時機を間違えないことだわ……。」「すると、

伝令兵「伝令！『そろそろ策を始動する』とのこと！」

皇甫嵩「ええ、分かつたわ。全軍、撤退!!」

秋蘭「全軍、一時撤退する、退け!!」

そう言い、皇甫嵩と秋蘭の騎兵は撤退を始めたのであつた。

森

兵士A 「程昱様！中郎将様と夏侯淵様の撤退が完了しました！」

兵士B 「賊軍が完全に森の中に侵入しました！」

それを聞いた風は、

風 「では皆さん、石火矢を構えて下さい。全軍、放て!!」

そう言つて、全軍石火矢を放つた。すると、森はあつと間に燃え広がつた。

風 「では皆さん、撤退を開始して下さい。後は焰耶ちゃんが何とかしてくれますよ。」

そう言つて、風の部隊は撤退を始めたのであつた。

一方焰耶は、

焰耶「おおー。策が成功した。よし、奴らを殲滅するぞ!!」

兵士「「おおーっ!!」」

そして、黄巾党を殺戮していった。すると、

首領「ひいーっ!これはどういふことだー!」

黄巾の将らしき者が目の前で叫んでいたのであった。

焰耶「賊将、この私が討ち取ってやる。覚悟ーっ!!」

首領「なんだとう!貴様を討てば何とかなる、死ねーっ!!」

そう言つて、焰耶に突撃するが、

焰耶「はあっ!!」

彼女の敵ではなく、一撃で討ち取られたのであった。

焰耶「敵将、この魏文長が討ち取った!!」

兵士「「おおーっ!!」」

こうして黄巾の戦いは終了したのであった。

官軍天幕

そして純は、秋蘭と稟を引き連れて、皇甫嵩のいる天幕に向かった。

純「皇甫嵩殿、お疲れ様です。」

皇甫嵩「ええ。夏侯淵殿の巧みな指揮と郭嘉殿の策、そして魏延殿の武勇のおかげだわ。」

秋蘭「ありがとうございます。」

稟「恐縮です。」

純「それで、劉備軍の方は？」

皇甫嵩「完了したとのお知らせが来たわ。」

純「そうですか。」

その後、劉備達が皇甫嵩の陣に来た。

純「劉備もお疲れ様。」

劉備「あ、はい。ありがとうございます。でも、私はあなたに今回の戦で一言言いたい事があるので！」

関羽「桃香様！お辞め下さい！相手は曹和殿です。ご主人様も何とか言って下さい！」

北郷「・・・。」

純（なんだ？何か邪険にされるような事やったか？）

すると劉備は、

劉備「この度のあなた達の行いは間違っております！いくら賊とは言え、それを殺戮、殲滅するなんて酷すぎます！中郎将様もどうしてこのような策に従ったのですか!？」

そう言つて、今度は皇甫嵩にも怒鳴るように言ったのであった。

関羽「桃香様！相手は中郎将様です！」

北郷「止めるな愛紗！俺も桃香の意見に同感だ！」

関羽「ご主人様!!」

すると、

純「言いたい事はそれだけか？」

純は劉備達とは対照的に比較的冷静な態度で対応したのであった。

劉備「それだけとは何ですか!!」

北郷「そうだ!!どういう事だ!!」

そう劉備は言い返し、北郷は純に殴りかかったが、秋蘭に拳を掴まれ、地面に押さえ込まれた。

秋蘭「貴様、誰を殴ろうとした……」

北郷「く、くそ……」

純「秋蘭、離してやれ。」

秋蘭「し、しかし……」

純「良いから。」

秋蘭「……御意。」

そう言つて、北郷を解放した。

純「所詮それだけだろう。奴らは人を殺め、物を略奪し、そのまま暴徒と化した。中にはやむなく参加した者もいるかもしれない。しかし、それでも他の奴らと何ら変わりはない。かような者に、慈悲など必要ない。そもそも、この戦は皇甫嵩殿からの黄巾党の討伐の援軍要請。その目的を違えた事を俺達は行つたか？」

その問いに、劉備と北郷は完全に沈黙してしまつた。

皇甫嵩「劉備！貴女は風鈴の教え子として目を掛けていたけど、今回は許せないわ！それに今回の私達の賊の対応は全く間違つていないと思うわ！もしあそこで許し、また被害が出たらどうするつもりなの!？」

桃香「そ、それは……」

皇甫嵩「何も言えないなら、軽率な発言をするのは辞めなさい!!」

そう言つて、劉備を完全に黙らせたのであつた。

劉備「……っ!!失礼します!!」

そう言つて、劉備は天幕を後にした。

北郷「桃香!! おい、お前、桃香に散々酷い事言いやがって!! 間違ってるのはお前らだろうが!!」

すると、北郷は純にそう言ったのであった。

関羽「ご主人様!! これ以上立場を危うくするのはお辞め下さい!!」

そう言つて、関羽は必死に諫めた。すると、

北郷「・・・ちっ!!」

舌打ちしてその場を後にしたのであった。

関羽「ご主人様!!」

すると、関羽は振り返つて、

関羽「申し訳ありません!! 中郎将様!! 曹和殿!!」

北郷の行為に必死に謝罪した。

純「いや、気にするな。」

皇甫嵩「私もよ、関羽殿。気にしないで良いわ。」

関羽「し、しかし・・・。」

純「関羽、気に病む必要はない。その代わり、その武勇、今後とも民のために振るつてくれ。」

そう言われて、関羽は申し訳なさそうな顔で拱手し、その場を後にした。

皇甫嵩「申し訳なかつたわ。まさかあの子があんなことを言うなんて。」

純「いえ、お気になさらず。しかし、先程彼女の師の真名らしきものを呼びましたが。」

皇甫嵩「ああ、風鈴、蘆植の真名よ。」

純「ほお。蘆植殿の……。」

皇甫嵩「ええ。蘆植殿もよく言っていたわ。正義感が強く、争い事が嫌いなのだけど、理想と現実の区別がつかなくなつて、何度も論じたのだけど、全く耳を貸してくれなかつた。」

純「そうですね。しかし、あの調子だと、北郷と申す者も……。」

皇甫嵩「ええ。恐らく劉備の思想に共感したのかもしれないわね。関羽も大変ね。」

純「それを言うなら、この場にはいなかったですが、諸葛亮も苦労してるかと……。」

皇甫嵩「ええ。そうなのかもしれないわね……。」

そう言い、天幕には暫く沈黙が支配したのであった。

道中

純「いやー、終わった終わった。」

秋蘭「しかし、あの劉備らはなんと申しますか……。噂と違ってましたね。」

純「そうだったな。しかし、今後俺や姉上にとつて、大きな敵になるやもな。理想とは、一種の美酒と同じだ、人を酔わせる。もしかしたら北郷も、その美酒に酔ってるのやもしれねーな。劉備然り。張飛然り。」

秋蘭「はい……。」

純「あの調子じゃ、関羽も苦労してそうだな。恐らく諸葛亮も。」

秋蘭「そのようですね……。」

稟「純様。劉備達にはもう一人軍師がいます。」

純「ほお、誰だ？」

稟「純様は臥龍鳳雛はご存じですか？」

純「ああ、知ってる。水鏡の秘蔵っ子で、臥龍は諸葛亮の事だが……。まさか……。」

稟「はい。あの場にはいませんでしたが、鳳雛、龐統も仕えております。」

純「そつか……。なら尚更、警戒しねーとな。」

稟「はい。」

純「それはそうと、焰耶と風、お前ら良くやったな。焰耶なんか、敵将の首を取るとはな。」

焰耶「はっ!! ありがとうがたきお言葉!!」

風「はいく!!」

純「秋蘭、お前もどうかうかしてらんねーな。」

秋蘭「いえいえ。まだ焰耶には負けるつもりはありませんよ。」

焰耶「私もです、秋蘭様。」

そう言ったのであった。

その後、陳留に帰還後、華琳に報告した純は、その夜秋蘭を自身の部屋に呼び、先日の約束通り、眠れなくなるくらい可愛がったのであった。

23話

謁見の間

春蘭「……とまあ、そういうわけです。」

春蘭の報告に、華琳と純はため息をついた。

華琳「……呆れた。それで、孫策に借りを作つたまま帰つてきたというの？」

華琳「……どうなの？」

春蘭「え、ええつと……連中の領に逃げ込んだ盗賊の退治は手伝つたのですから、差し引きで帳尻は……」

純「合つてねーよ。他国の領に入る前に黄巾党を片付けておけば、差し引く必要すらねーだろうが。」

燈「そうねえ。……ふふつ。全く、その通りだわ。」

華琳「……しかも燈の前でこんな話をする羽目になるなんて、笑い話にもならないわよ。」

純「確かに……。」

それに春蘭は、

春蘭「で、ですが華琳様、純様。連中め、私達が仕掛けた瞬間、もの凄い勢いで逃げ出しまして……。今思えば、あれも連中の策略だったのではないかと。」

そう言ったのであった。

桂花「……策略？ 風、それは本当なの？」

春蘭「私が話しているのだぞ。」

風「す、すみません、自分は官軍の撤退の支援をしていたもので……。」

桂花「なら香風。」

春蘭「私に聞けよ！」

香風「シヤンも風と一緒にだった。」

桂花「季衣はどう？」

春蘭「聞けつてば！」

季衣「ええつと……。それまでは都の軍を一方的に攻めてただけど……。僕と春蘭様が攻撃を仕掛けたら、ばーって撤退していつて……。」

燈「華琳様、純様……。」

華琳「……ええ。前に潰した黄巾党か、それとも新しく入ったか……。いずれにし

ても、黄巾党にはそれだけの策を弄せる指揮官がまだいるという事ね。」

純「しかし、こちらの予想としては折り込み済みの事項だから、驚くことではないですけど……。」

純「香風。今回の官軍の指揮官は誰だった？」

香風「張遼將軍でした。かなり強い指揮官でした。」

香風「多分、上から数えた方が早いくらい。」

純「そっか……。」

そして、純は香風にこんな事を聞いた。

純「香風は知り合いだったか？」

香風「ううん。張遼殿は董卓將軍の部下だったから、名前くらいは知ってました。」

純「そう言えば姉上、この前の山中の食料庫を陥とした時の戦、共同作戦だった事にして欲しいと手紙を送ってきた中郎將がそんな名前でしたね。」

華琳「そう言えばそうね。」

それに燈は、

燈「あれは皇甫嵩將軍の任務でしたから、それででしょう。皇甫嵩將軍と董卓殿は、同じ閥に属していたはずでしたから。」

そう答えたのであった。

華琳「董卓というのは、どういう人物なの？あの時は恩を恩と解する人物のようだったから引き受けたけれど・・・その口ぶりだと、知っているのでしょうか。燈。」

燈「もちろん。董卓將軍は地方豪族の出ですが・・・」

燈「公明正大な人物で、怪異蠢く朝廷の数少ない良心の1つと言えるでしょう。」

燈「そちらに手紙を送ってきた際も、贈り物はほんの手土産程度だったのではない？」

華琳「ええ。大量の賄を持ち込んだなら突き放すつもりだったけれど、手紙の文面も礼を尽くした物だったし、土産の趣味も悪くなかったわ。」

燈「恐らく、その文面で感じた通りの人物よ。ただ、そんな性格だし、朝廷では苦勞しているようだけれど。」

純「だろうな。あそこは、正しい者には生きにくい世界だからな。」

香風「・・・賄賂を沢山送った人が、強い。」

華琳「官軍の動きも妙だったし、今後はあちらを援護する場面も増えるでしょうね。純同様。」

純「そうかもしれませんがね。」

華琳「ええ。ああ、そうだね、純。あなた、春蘭が会った孫策という人物は知ってるわよね？」

純「はい。『江東の虎』孫堅の娘であることは知ってますよね。」

華琳「ええ、その程度しか知らないわ。」

純「その虎の娘に相応しい武勇と王の器を持つております。袁術の下に収まる者ではありません。」

華琳「そう。春蘭も純と同じ意見かしら？」

しかし、

春蘭「？」

よく分からなかったのであった。

純「難しく考えるな、武人の夏侯惇としてだどう見たんだ。素直に答えろ。」
すると、

春蘭「……檻に閉じ込められた野生の虎の目をしておりました。虎の娘というなら、それは間違いないでしょう。」

春蘭「袁術とやらがどんな輩かは知りませんが、純様の言う通り、ただの食客で収まる器ではないかと。」

華琳「そう……。春蘭、その情報に免じて、今回の件についての処分は不問とするわ。孫策への借りは、いずれ返す機会もあるでしょう。その機を見誤らないように。」

春蘭「はっ。ありがとうございます。」

華琳「それでは、他に何か報告すべき意見はある？」

桂花「いえ。朝廷の動きは、私の知人を通じて探らせておきます。」

燈「あちらの監視は、私に預けてもらって構わなくてよ。香風さんも色々知っているだろうし。」

香風「んー。あんまり頼りにされても、困る。」

桂花「結構よ。こちらはこちらでするわよ。」

と桂花は燈に対抗心むき出しであった。

華琳「・・・競いすぎてお互い尻尾を掴まれないようになさい。上に睨まれてもつまらないわ。」

桂花「お任せ下さい！」

燈「ええ、心得ていますわ。」

華琳「黄巾党はこちらの予測以上の成長を続けているわ。官軍は当てにならないけれど・・・私達の民を連中の好きにさせることは許さない。いいわね！」

季衣「分かっています！全部、守るんですよ！」

純「そうだ。それにもうすぐ、俺達が今まで積み重ねてきた事が実を結ぶはずだ。それが、奴らの終焉となる。」

春蘭「・・・どういう事でしょうか？」

純「いづれ分かる。・・・それまでは今まで以上の情報収集と連中への対策が必要に

なる。」

華琳「民達の血も米も、一粒たりとて渡さないこと。以上よ。」

そして、その日の軍議は解散となったのであった。

春蘭「純様！」

その時、春蘭が純を呼んだ。

純「どうした、春蘭？」

春蘭「いえ、先日の純様の遠征の件ですが……。」

純「ああ、青州に行った……。」

春蘭「それです！ 焰耶が敵将の首を取ったと。」

純「ああ、取った。中々の活躍だった。兵の指揮といい、将としての器も確かだ。」

春蘭「そうなのですね。それで、實力はどのくらいですか？」

純「それって、個人の武のことか？ それなら今だったらお前の勝ちだ。けど、あいつの才能は確かだ。瞬く間に追い付くぞ。もしかしたら、お前も追い抜かれるやもな。俺を追い越す前に。」

その瞬間、春蘭の目付きが変わった。

春蘭「いえ、負けるつもりはありません。」

そう言って、その場を後にした。

華琳「流石ね、純。」

純「姉上、聞いていたのですか。」

華琳「ええ。全部ね。」

純「そうですか。」

華琳「何故あのようなことを言ったのかしら？大体は理解できるけど。」

純「実際に焰耶の才能は確かです。先日の戦でも、その前の戦でも、その才の片鱗は見せています。その上でそう言ったのです。ああいう才ある者が結果を残し続けられれば、春蘭を初めとした他の皆にとつて、良い刺激になります。そして、お互い競い合い、高め合い、それが、我が軍の底上げになり、霸道完遂に大きく近づくかと。」

華琳「なるほど。あなたらしいわね。」

純「恐縮です。ではこれにて。」

そう言い、純はその場を後にした。

関所

香風「華琳様と純様は、シャン達が見えてる景色が違うんだらうね。」

秋蘭「我々には及びもつかん事を考えていらつしやるからな。私は特に純様と一緒にいた時間は他の誰よりも長いが、まだ分からん事もある。仕方ないさ。」

香風「秋蘭様も、分からない事あるんだね。」

秋蘭「分からない事だらけだよ。出来るのは、分かろうとする事と、信じる事だけだ。」

香風「・・・間違っていない事は、大体分かる・・・。」

秋蘭「ふつ。そうだな。」

その時、

純「何の話してんだ、お前ら。」

純が現れた。

秋蘭「純様、いえ、何でもありませんよ。」

純「そつか・・・。しかし、俺も国境警備の視察か・・・。まあ、それが正しく行われてんのか確かめるだけだな。」

秋蘭「はい。しかし、苑州は他より厳しくないはずなんですけどね。」

純「まあ、それには理由があるんだけどな。」

旅人A「こんにちは、お役人様。」

香風「こんにちはー。」

純（まあ、こうやってのんびり馬を進めると、旅人達が声かけてくれただけだな。）
旅人B「どうも、ごきげんよう。お役人様。」

秋蘭「うむ。」

純「ああ。」

そうやって暫く視察をしていた時だった。

兵士A「捕まえてくれ！関所破りだ！」

純「秋蘭！」

秋蘭「はっ!!」

それを聞いた秋蘭は、馬にくくり付けていた弓をひよいと取り上げ、つがえた矢を素早く引き絞った。

秋蘭「……無理に関など破らねば、この場にいる純様は貴様を受け入れて下さったものを。」

そう言つて、秋蘭は関所破りに向けて矢を放った。

関所破り「がっ!？」

その矢は、関所破りの肩にまるでそこに最初から決まっていたかのように吸い込まれていったのであった。

純「おおーっ。お前また腕上げたな。」

純は額に手をかざして見ながらそう言った。

秋蘭「いえ、まだまだです。純様もこの程度の距離、造作もない筈。それに聞いたことがあるでしょう、長沙の辺りにはこの倍の距離でも外さない弓使いがいることを。」

純「確かに聞いたことがある。けど、俺の中ではお前が1番だよ。」

秋蘭「ありがたきお言葉。・・・さて、肩ならば致命傷になつていないはずですが。」

そう言つて、純達は関所破りに近づいた。

関所破り「うう・・・痛え・・・。」

香風「純様、この人・・・。」

純「うむ。しかし、関所に払う金かねーのか、後ろめたいと思う気持ちがあつたのだろくな。まあその分、救いようがあるんだがな。」

そう言つて、純は関所破りを見ていると、

純「ん？」

懐に何かを発見したのであつた。

秋蘭「どうかなさいましたか？」

純「こいつの懐に何か入つてる。・・・何だこれは、手紙か？」

そう言つて、懐から取り出し、広げて見てみた。

純「これは・・・！」

秋蘭「純様？」

純「これを見てみる。」

そう言い、純は秋蘭達に見せた。

秋蘭「これは！いきなり情報が転がり込んで来ましたね。」

純「ああ。おい、連れて行け。」

兵士A「はっ。ご協力、感謝致します。」

そう言つて、兵士は関所破りならぬ、黄巾党の連絡兵を連れて行つたのであつた。

純「大手柄だな、秋蘭。」

そう言つて、純は秋蘭の頭を撫でた。その時の秋蘭の顔は、幸せそうな表情であつた

と、後に香風は語つていた。

謁見の間

華琳「大手柄ね、秋蘭。」

秋蘭「・・・はっ。」

桂花「連中の物資の輸送経路と照らし合わせて検証もしてみました。敵の本隊で間違いないようです。その後、凧と沙和を偵察に向かわせましたが……。」

凧「はい。張る姉妹と思われる3人組も、見受けられました。」

華琳「間違いないのね？」

沙和「うん。3人があの歌を歌って、黄巾の兵士達がみんなですそれを聞いてたの。すつごく楽しそうだったの。」

華琳「……楽しそうだった？」

沙和「なの！」

華琳「分からないわね……何かの儀式？」

凧「詳細は不明です。連中の士気はやたらと上がっていたようでしたので、戦意高揚の儀式かもしれません。」

純「凧、彼女らは見つけ次第、殺せば良いか？」

凧「いえ、彼女達は見つけ次第、捕まえるべきかと。彼女達の歌でこれだけ集まったのです。それには利用する価値があり、彼女達に徴兵をさせて貰うのです。」

純「つまり、彼女達の力で徴兵し、兵力を上げるってことか？」

凧「はい。」

純「なるほど……。姉上、如何致しましょう？」

華琳「郭嘉の意見を採るわ。この件は、一気にカタが付くわ。動きの激しい連中だから、これは千載一遇の好機と思いなさい。皆、決戦よ！」

そう言われ、それぞれ準備を始めたのであった。

24話

別働隊

華命「焰耶ー。秋姉えー。本隊、到着したそうっすよー。」

焰耶「そうですか。」

秋蘭「各隊の報告はまとまったか？」

真桜「ちょうど終わったところやで。連中、かなりグダグダみたいやな。」

秋蘭「ふむ。純様の予想通りだな。」

焰耶「そうですね。真桜、報告を頼む。」

真桜「はいはい。連中の総数やけど、約二十万。」

沙和「うはー。もの凄い大軍勢なの……。」

香風「本隊って言っても、多い。」

季衣「それって……僕達だけで勝てるんですかね？」

と、それぞれ本隊の数に驚いていた。

真桜「まあ聞きや。総数は二十万やけど、そのうち戦えそうなんは……、三万くらいやな。」

焰耶「なるほど、そういうことか……。」

秋蘭「ふっ。焰耶は分かったようだな。」

沙和「残りの十七万はどこに行ったのー?」

真桜「武器も食料も全然足りてへんみたいなんよ。その割に、さつきもどつかの敗残兵みたいなのが合流しとったから……。」

風「二十万というのは、その敗残兵も合わせた数ということか。」

真桜「せや。陣のあっちこちで小競り合いも見えたから、一枚岩っちゅうわけでもないな。見た限りじゃ仲裁もなかったし、指揮系統もバラバラなんちゃうか?」

華命「でも、なんでそういう連中が今頃合流してるんすか?そういうのって、関所で止められるんじゃないんすか?」

その疑問に、

焰耶「大軍ならともかく別れて数名ずつで抜ければ、関所は止めません。お館がそういう命を出しておられますから。」

秋蘭「そうだな。」

沙和「えげつないのー。」

真桜「それ、褒め言葉に聞こえへんで。沙和。」

秋蘭「黄巾を旗印に団結を旨とする集団なら、来たものは陣内に取り込むしかないだろうし、拒絶すれば内々に火種を生む遠因となる。」

秋蘭「その結果は・・・見ての通りだ。」

凧「神出鬼没の人食い熊も、太り過ぎればただの的、という事ですね。」

しかし凧の例えは、

真桜「太りすぎたら・・・。」

沙和「・・・イヤな例えなの。」

2人には不評であった。

香風「・・・？」

季衣「熊なら僕、いくらでもやっつけるよ！」

華侖「それで、どうするっすか？作戦は、最初のでいいんすか？」

秋蘭「問題なからう。華琳様と純様の本隊に伝令を出せ。皆は予定通りの配置で、各個攪乱を開始しろ。」

秋蘭「攻撃の機は各々の判断に任せるが・・・張3姉妹を殺すような真似だけはするなよ。以上だ。」

一方黄巾党本隊は、

黄巾党兵士A「張角様！張宝様！張梁様！」

人和「何？そんなに慌てて。」

黄巾党兵士A「申し訳ありません！しかし、急用だったもので．．．！」

天和「急用．．．？」

黄巾党兵士A「敵の奇襲です！各所から、火の手が！」

人和「何ですって！すぐに消火活動を！」

黄巾党兵士A「各々でやっているようですが、火の手が多いのと誰に指示を受ければ
良いかが分ならず．．．！」

すると、

黄巾党兵士B「張角様！大変です！火事ですっ！」

黄巾党兵士C「張宝様！大変です！」

黄巾党兵士D「張梁様！火事が．．．！」

色んな報告が3姉妹に届いたので、

地和「ああもうつ、ちゃんと聞いてあげるから、一列に並びなさいっ！」
収集がつかなくなってしまうたのであった・

人和「く・・・っ。人ばかり無駄に増えているから・・・！」

黄巾党兵士たち「「どうしましょう！」」

人和「ともかく、敵の攻撃があるならまずはその対処を！火事も手の空いている者が協力して消して！」

黄巾党兵士たち「「はいっ！」」

人和「・・・まったくもう。」

天和「れんほーちやあん・・・。」

地和「人和・・・。」

人和「・・・もう潮時ね。誰かが付いてくるかもなんて言っている場合じゃないわ。・・・よっと。」

天和「何？その荷物。」

人和「逃げる支度よ。3人分あるから・・・、3人でもう一度、初めからやり直しましょう。それでいいなら、荷物を取って。」

地和「仕方がないわね。でも、2人がいるなら。」

人和「また貧乏との戦いだけど、いい？」

地和「楽しく歌えるなら、そっちの方がずっとマシよ。」

天和「そだねー。ちーちゃんどれんほーちゃんがいれば、何度だってやり直せるよね」
♪

人和「そうだ、これも・・・。」

その時、人和がある1冊の本を取った。

地和「太平なんとか、だっけ・・・？」

人和「そうよ。これがあれば、いくらでも再起が図れるもの。」

天和「もうそんなのいいよ。2人がいれば何もいらなから、早く逃げようよー！」
そう言つて、3人は逃げる準備を始めたのであった。

曹操軍本隊

栄華「お姉様。お兄様。敵陣の各所から火の手が上がりましたわ。秋蘭さん達が行動を開始したようです。」

柳琳「秋蘭様から伝令が届きました！敵の状況は完全に予想通り、当初の作戦にて奇

襲をかけると、こちらも作戦通りに動いて欲しいとの事です。」

華琳「了解・・・ならば桂花。指揮は預けるわ。」

桂花「御意！」

純「稟と風も、指揮は任せた。」

稟「御意！」

風「はい〜！」

春蘭「しかし、先日はあれ程苦戦したというのに・・・何ですか、今日の容易さは。」

それに桂花は、

桂花「苦戦したのは春蘭が馬鹿だからじゃないの？」

そう答えた。

春蘭「なんだとう！」

純「少数の兵で春蘭程度をあしらえる器はいても・・・、あれほどの規模の兵をまとめ、扱える器はいなかった。それだけの事だ。」

春蘭「なるほど。私程度を・・・って純様！それは酷うございます！」

純「はは、冗談だ。」

華琳「それより喜雨。燈はともかく、貴女まで来る事はなかったのよ？」

喜雨「ううん。この大陸を散々荒らして、豫州の作物もたくさん略奪して回った連中

だもの。その最後まで、僕にも見届けさせて。」

喜雨「戦場で役に立たない自覚はちゃんとあるから、始まったら邪魔にならない所に退がるよ。後方で良い？」

華琳「後方は奇襲が来るかもしれないから、安全ではないわ。見届けたいと言うなら、燈と共に私の側にいなさい。いいわね？」

喜雨「分かった。言う通りにするよ。」

桂花「華琳様。純様。そろそろ、こちらにも動こうと思うのですが・・・、号令を頂けますか？」

華琳「あら、もう？もう少し時間があるかと思っただけけど・・・秋蘭達、張り切りすぎではない？」

純「どっちかと言うと、焰耶だったりとか。」

華琳「あら、それはあり得るかもしれないわね。」

桂花「向こうの混乱が輪をかけてひどいのでしょうか。こちらの準備は出来ていますので、お早くお願いいたします。」

桂花「急がなければ、張3姉妹がこちらではなく身内に殺されかねません。」

華琳「それはそれで問題ね・・・分かったわ。」

そして、華琳と純は前に立ち、

華琳「皆の者、聞け！」

華琳「汲めない霧は葉の上に集い、すでにただの雫と成り果てた！」

純「奴らを追つて霧の中を彷徨う時期はもう終わりだ。今度はこちらが呑み干してやる番だ！」

華琳「ならず者どもの寄り合い所帯と、我らとの決定的な力の差……この私と我が弟に、しっかりと見せなさい。」

純「総員、攻撃を開始せよっ！」

全軍に号令を下したのであった。

別働隊

凧「焰耶。華琳様と純様の本隊が来たぞ！」

曹の旗を掲げた本隊が、大地を揺らしながら突っ込んで来た。

焰耶「流石お館。予定通り……。」

凧「そろそろ合流しよう。華命様達は？」

すると、

華侖「焰耶ー！風ー！」

沙和「焰耶ちゃん、お待たせなのー！」

焰耶「みんな大丈夫でしたか？」

沙和「大丈夫なの。っていうか、沙和達何もしてないのに向こうが勝手に崩れていったの・・・。」

季衣「だから、華琳様と純様も来たし、そろそろかなって。」

華侖「秋姉えや香風は、もう右翼の応援に行つたつすよ！」

その知らせに焰耶は、

焰耶「よし。なら、我らも急いで本隊に合流しましょう。」

風「焰耶、指示を。」

沙和「焰耶ちゃんがこの隊の指揮官なんだから、焰耶ちゃんがやるべきなの！」

焰耶「いや、そこはご一門の華侖様がやるべきでは・・・。」

しかし、

華侖「焰耶の号令、聞いてみたいっす！」

そう言い、

沙和「ほらほら焰耶ちゃん、華侖様もそう言ってるの。」

沙和にも言われてしまったので、

焰耶「やれやれ・・・了解です。なら・・・。」

仕方なく号令を掛けた。

焰耶「これより我らは本隊に合流し、本隊左翼として攻撃を続行する！ただし張3姉妹は生け捕りにせよ！総員、今まで連中に味わわされた屈辱と怒り、存分に返してやれ！」

兵士「応っ！」

焰耶「全軍突撃ーっ！」

そして、黄巾本隊との戦いが始まった。

焰耶の号令で左翼部隊の士気は格段に上がった。

季衣は、愛用の反魔を振り、黄巾党を吹き飛ばし、凧もそれに負けじと気弾で一氣に数人を吹き飛ばした。

真桜も螺旋槍で敵を一掃し、焰耶は鈍砕骨で黄巾党を潰し、部隊の巧みな指揮で敵を追い詰めていったのであった。

とある場所、

地和「この辺りまで来れば・・・平気かな。」

天和「もう声もだいぶ小さくなってるしねー。・・・でも、みんなには悪いことしちゃったかなあ？」

人和「難しいところだけれど・・・こればかりはどうしようもないわね。正直、私だつてこんな事になるなんて思つてなかつたし・・・。」

地和「けど、これで私達も自由の身よっ！ご飯もお風呂も入り放題よねっ！」

人和「・・・お金ないけどね。」

地和「う・・・。」

天和「そんなの、また稼げばいいんだよ。ねー？」

地和「そう・・・そうよ！また3人で旅をして、楽しく歌つて過ごしましょうよ！」

人和「で、大陸で1番の・・・。」

地和「うん！今度こそ歌で大陸の1番になるんだからっ！」

天和「がんばろーっ！」

天・地・人・命「「おーっ！」」

その時、

天和「あれ、何か多い気が……。」

1人多いことに気付いた時、

地和「……え、ちよつと！あんた誰よ！」

華命に誰かを尋ねたのであった。

華命「え？あたしは華命っす！」

地和「そうじゃない！何者だつて聞いているのよ！」

しかし、

華命「華命は華命なんすけど……あれ？じゃあ、華命じゃない何者だつていうなら、あたしは何者なんすか……？」

全く話が伝わっていないのである。

地和「……なんだか姉さんがもう1人増えた気がする。」

天和「えー。ちーちゃんひどーい。それに華命ちゃんだつて、華命ちゃんつて名乗つてるじゃない。」

人和「姉さん、多分それ真名……。」

天和「あー。ごめーん。訂正するねー。」

華命「あはは。大丈夫っす！気にしないっす！」
すると、

沙和「華命様ー。どこに行っちゃったのー。」

華命「あ、沙和ー！こっち、こっちつすー！」

沙和「もう。探したのー！」

沙和が頬を膨らませながらやって来た。

地和「なんか増えた・・・。」

沙和「あつ！」

天和「えつ。」

人和「・・・まさか！」

すると、

沙和「もしかして、3人って張3姉妹なの？」

そう言うと、

天和「えー。お姉ちゃん、有名人？」

そう言ったが、

人和「ちよつと姉さん、ここで張3姉妹なんて名乗っちゃダメよ。敵方の追っ手かもしれないんだから。」

そう注意した。

沙和「沙和、3人の歌大好きなの！いつも歌ってるの！」

華侖「あたしも大好きっす！」

地和「ホント!? ありがとー！」

天和「ほら人和ちゃん。私達の歌を応援してくれてる人が、追っ手なわけないよ。こつちの部隊の偵察の誰かじゃないの？」

人和「そ、そうなのかしら・・・？」

地和「ええっと、揮毫はここでいい？」

華侖「わーい！ おつきく書いて欲しいっすー！」

人和「ちよつとちい姉さんもなんでそんなに適応してるのよ。」

地和「え、だつてちゃんと応援してくれる子なら大事にしないと。」

人和「時と場合によるでしょ！」

すると、

焰耶「・・・私もそうだと思うぞ。」

凧「私も同感だ・・・。」

焰耶と凧がやって来た。

華侖「あ、焰耶ー。凧ー。」

天和「あら、2人の友達？」

地和「あなた達も私達を応援してくれてる人？」

風「それはまあ、応援していないと言えは嘘になりますか……。あなた方の歌にはとても感銘を受けましたし、あの歌がなければ私はここに立っていないでしょうし……。」

焰耶「それは私もだな……。」

天和「ほらね。人和ちゃんは心配しすぎなんだってばー。」

焰耶「いや、そうでもないさ。」

沙和「なの……。ごめんね。応援はしてるけど、沙和達その追っ手なの。」

天和「えええええ……。」

華命「大人しく捕まって欲しいっすー。」

地和「ちよつと、あんたまで曹操軍の一員つてこと!?!」

天和「どうしよう……。もう護衛の人達もいないよー?」

地和「くうう……。まだあんな事やこんな事もしてないのにー!」

人和「だから言つたじゃない。時と場所を考えろつて……!」

焰耶「とはいえ、乱暴にするつもりはない。大人しく付いて来るなら、悪いようにはしないと約束しよう。」

人和「……。付いて行かなかつたら?」

沙和「えー。困つちやうの……。」

地和「もしかして、その大きい金棒でちい達を殺すの!？」

焰耶「いや、殺しはしない。」

凧「うむ。幸い私は無手の心得があるからな。お主らを傷付けずに捕まえることは出来る。」

天和「でも、痛いんでしょ？お姉ちゃん、痛いのは嫌だなあ。」

その時、

黄巾党兵士E「張角様っ！」

黄巾党の残党がやって来た。

凧「！」

黄巾党兵士F「テメエ！俺達の・・・」

しかし、

焰耶「はあああっ!!」

グシャツ・・・

全員「!!?!」

話が終わる前に彼らは焰耶によって殺された。

焰耶「雑魚は黙っとけ。それで、お前達は私達に付いて来るのか。もし断れば、両手をへし折ってでも連れて行くぞ。」

焰耶はそう言つて殺気を出すと、3姉妹は顔を真っ青にしながら首を縦に振つたのであつた。

その時の焰耶の様子は、まるで修羅のようだったと、後にその場にいたみんなは語つていたのであつた。

25話

曹操軍本陣

秋蘭「純様。敵部隊の追撃隊、出発させました。」

純「後でこの辺りの賊として残られても困る。まとめて捕らえて、郷里に送り返せ。」

秋蘭「はっ。」

純「・・・で、お前達が・・・張3姉妹か？」

振り向いた純と華琳の目の前に並んでいるのは、焰耶達が連行してきた3人の少女だ。

地和「そうよ！なんか文句ある！」

純「稟、間違いないか？」

稟「はい。私が得た情報と同じ人達です。」

純「そうか。」

喜雨「・・・この3人が、張3姉妹。」

その時、自身の立場をよく理解していない3人を見つめていた喜雨は純の隣で見つめていた。

華琳「喜雨。思う所は色々あると思うけれど。」

喜雨「・・・分かつてるよ。」

純（沛国は、どこもかしこも黄巾党に荒らされてる。この3人が直接手を掛けた訳ではないにしても、喜雨の立場からすれば何とも言えねーな・・・。）

喜雨「無理を言つて同席させてもらったんだから、大人しくしてるよ。華琳様と純様にこれ以上迷惑は掛けないから。」

純「しかし、どうしてこんな事をした？聞いた通り、ただの旅芸人じゃねーか。」

人和「・・・色々あつたのよ。」

華琳「色々では分からないわよ。子細に話しなさい。」

地和「・・・やつぱり、話したら斬る気じゃないの？」

純「それは話を聞いてからだ。お前達が黄巾党を率いて各地の略奪を行ったというなら、俺達も相応の対応をせざるを得ないな。」

地和「ちい達がそんなことするはずないでしょ！」

天和「そうだよ。お姉ちゃん達だって巻き込まれたんだから！」

その時、

喜雨「自分達でこの騒ぎを巻き起こしておいて……！」

天和と地の被害者ぶる態度に喜雨は怒りの声を上げたのであった。

華琳「喜雨。」

純「お前の気持ちは分かる。けど、今は堪えろ。」

喜雨「……分かつてる。悪かったよ。」

それに華琳と純は止めたのであった。

地和「その子は？」

華琳「沛国の農業を指導していた子よ。今は苑州と豫州の村々を巡って、働いてくれて
いるわ。」

純「沛国は、黄巾党の大規模な襲撃を受けて、城まで落とされ掛けた。もちろん村々
の被害も相当なものだったな。」

人和「……。」

淡々と語る華琳と純の言葉に、思う所もあつたのか、人和はしばらく黙っていたが、
人和「……分かつたわ。全て話す。」

天和「人和ちゃん？」

人和「ただし、私達3人の命を助けてくれる事が条件よ。そうでなければ、私は何一
つ口にしないわ。」

華琳「いいでしょう。」

そして、人和は、自分達がこれまで辿ってきたこれまでの道程を話し始めたのであった。

秋蘭「各地を歌って回って、気が付いたらおかしな信奉者が増えていたと。」

天和「うん。夜、厠に起きたら壁の向こうからこつちを見てる人とかもいたし……怖かったあ。」

栄華「……これだから男なんて油断出来ないのですわ。気持ち悪くて、臭くて下品で汚くて。少しはお兄様を見習って欲しいですわ。」

桂花「ええ。使った後の厠に入って匂いを嗅ぐとか、お風呂に忍び込んで脱ぎたての下着を集めるとか、まだ温もりの残る寝台に乗ってゴロゴロするとか、人としての品性を疑うわ。」

純「おい桂花、張梁はそこまで言ってるぞ。」

人和「ただその頃には、護衛を申し出てくれるきちんとした子達もいたから……そのうち、その子達と行動するようになって。」

凧「……その規模が、気が付いたら大きくなりすぎていた。そういうことか。」

人和「ええ。最後のあたりは噂を聞いた子達がどんどん来るようになって、完全に収集が付かなくなってたけど。あれ、あなた達の策略でしょ。」

華琳「さあ、どうかしらね。」

華琳「それにしても・・・やはり太平要術の書は、貴女達が持っていたのね。」

天和「うん。応援してくれてる、っていう人にもらったんだけどー。逃げてくるとき、置いてきたの。」

華琳「そう・・・。」

人和「私達の天幕は陣の中枢部にあるから、あの火勢では恐らくもう灰になっているはず。」

人和「色々凄い事が書いてあって、ただの書物ではないとは思っていたけど、やはり曰くのある書物だったのね。」

華琳「ええ。けれど、そう・・・あの書は灰になったのね。」

純「姉上。もう一度、あの陣に火を放ちましょう。」

華琳「ええ、そうね。誰かに悪用されては、また今日のような事態になりかねないわね。」

純「はい。秋蘭、あの陣にもう一度火を放っておいてくれ。」

秋蘭「承知致しました。」

天和「それで、これから私達をどうするつもり？これで私達の知っている事は全て話したけど・・・。」

華琳「そうね……。貴女達から見た、黄巾党の事は分かったわ。」

純「喜雨。」

喜雨「何？」

純「お前はどうしたいんだ？少なくとも、ここで一番彼女達に憤りを感じているのはお前だろう。」

喜雨「僕……？」

喜雨「……そうだね。」

喜雨「でも、それは……みんな同じだよ。村を焼かれたり、襲われたりした人達の気持ちなら、確かに僕が一番聞いていると思うけど……。」

喜雨「黄巾党の情報を集めたり、街を守って戦ったり、城を落とされたり……悔しい気持ちは、多分村以外のみんなも同じだと思うから。」

思う所があるのか、喜雨は自らを納得させるように拳を強く握り、きつく目を閉じていた。

喜雨「最初に言った通り……戦場では華琳様と純様の判断に従うよ。」

華琳「そう……。」

人和「やはり、都に連れて行って処刑するの？それとも、塩漬けにした首を晒し者にする？」

地和「ちよつと、やっぱり殺すんじゃない！」

天和「やだー！お姉ちゃん死にたくなーい！」

天和「どうせ死ぬなら、せめて好きな人を作つて、美味しい物たくさん食べて、思いつきり歌つて可愛いお婆ちゃんになつて、可愛い孫の笑顔に囲まれて死にたかつたー！」

純（完全に天寿を全うしてんじやねーか・・・。）

華琳「・・・ふむ。」

華琳「死なずに済む方法も、ないわけではないわよ。」

地和「・・・どういう事？」

天和「えっほんと？お姉ちゃん死にたくない！するする！なんでもする！」

人和「命乞いが早すぎるわよ姉さん。せめて条件を聞いてからにして！」

華琳「太平要術の書のおかげかどうかは知らないけれど、あなた達の人を集める才覚は相当なものよ。」

華琳「それを私達のために使うというのなら・・・その命、生かしてあげても良いわ。」

地和「何？どういうこと？まさかちい達を兵士の慰問の道具にするとかじゃ・・・！」

華琳「・・・半分は間違っていないわね。」

天和「えーっ！やだーっ！お姉ちゃん、初めては好きな人がいい！」

その時、

ヒユツ、ザクツ

天・地・人「「!?!」」

地和の横に槍が飛んできて、地面に刺さったのであった。

華琳「純。」

純「すいません。ちよつと野良犬が横でキャンキャンうるさかったので、黙らせるために槍を投げたのですが、少々手元が狂ってしまいました。」

華琳「・・・そう。」

その時、天和と地和の顔は、青を通り越して真っ白になり、涙目になっていたのだった。

人和「・・・詳しく聞きましょう。姉さん達も良いわね?」

その時、天和と地和は壊れたロボットののように首を素早く縦に振ったのであった。

華琳「賢明ね。私達が大陸に覇を唱えるためには、今の勢力では到底足りない。だからあなた達の力を使い、兵を集めさせてもらおうわ。」

華琳「あれだけの賊を熱狂させ、ここに居る将達にも少なからずの影響を与えた、その歌の力でね。」

人和「兵を集める?その為に働けと・・・?」

華琳「ええ。活動地域は・・・そうね。私の領内なら、好きに動いて構わないわ。通

行証も出してあげる。」

すると、

地和「ちよつと。領内ならつて、それじゃ私達が行きたい所に行けないつて事じゃないっ！」

立ち直つた地和が文句を言つたが、

人和「・・・待つて。ちい姉さん。」

地和「何よ。」

人和が止めた。

人和「・・・曹操。曹和。あなた、大陸に覇を唱えるということは・・・、これから自分の領土を広げていく気なのよね。」

華琳「ええ。」

純「そうだ。」

人和「そこは私達が旅出来る、安全な所になるの？」

純「お前達のためではないけどな。」

人和「・・・分かつたわ。その条件、飲みましょう。その代わり、私達3人の全員を助けてくれる事だけは譲れないわよ。」

華琳「交渉の必要もなさそうね。私達が欲しいのは貴女達3人だもの。1人でも欠け

ては、利用価値が落ちてしまうわ。」

地和「利用価値って・・・人和、こんなヤツら相手に何勝手に決めてるのよ！姉さんも何か言つてやつて！」

しかし、

天和「えー。だつてお姉ちゃん、難しい話つてよく分かんないし・・・。」
そう返されてしまったので、

地和「あーもう役に立たないわねっ！」

地和は頭を抱えたのであった。その姿を見ていた秋蘭は、

秋蘭「・・・。」

春蘭「・・・どうした秋蘭。なぜ私を見る。」

秋蘭「いや・・・、何でもない。」

自分と照らし合わせてしまったのであった。

純（気持ち察するわ、秋蘭・・・。俺は多分、大丈夫だと思う・・・。）

人和「でも、1つだけいい？」

華琳「何かしら？」

人和「私達が歌つて、あなた達の兵を集める。その方針は理解したわ。」

人和「けど、私達はお尋ね者よ。その件はどうするつもり？もみ消すの？」

燈「……これだけの規模の騒乱になつては、もみ消すのはもう無理でしょうね。」

華琳「別に。」

人和「別につて……！」

華琳「あなた達、ひとつ誤解しているようだけれど……あなた達の正体を知っているのは、恐らく私達だけよ。」

地和「……へ？ どういうこと？」

華琳「そうよね、純。」

純「はい。お前ら、ここ最近姉上の領を出てなかつたらう。」

人和「それは、あれだけ周りの搜索や国境の警備が厳しくなつたら……、出て行きたくても行けないでしょう。」

純「現状、首魁の張角が旅芸人だつてくらいは知られてるけど……朝廷や他の諸侯達の間でも、張角の正体は不明のままなんだ。」

地和「え、何が言いたいのか？ 意味分かんないんだけど。」

華琳「誰を尋問しても、張角姉妹の正体を口にしなかつたらしいわよ。……大した忠誠じゃない。」

栄華「それに、真に断罪されるべき薄汚い連中……、この騒ぎに便乗した盗賊や山賊は、そもそも貴女達の正体を知らなかつたようですよ。」

純「そいつらのでたらめな証言が混乱に拍車をかけてな。確か、今の張角の想像図は・・・稟。」

稟「はい。こちらです。」

そう言われて稟が見せたのは、ヒゲモジヤの大男の姿絵であった。それも、腕が8本、足が5本、おまけに角やシツポまで生えていたのであった。

天和「えー。これがお姉ちゃん？お姉ちゃん、こんな怪物じゃないよー!？」

地和「いや、いくら名前に角があるからって、角はないでしょ・・・角は。」

純「・・・まあ、この程度という事だ。結構苦労したぞ。」

華琳「後は・・・そうね。今の名前は捨てて、真名で呼ばれるというのもアリかもしれないわね。」

地和「ちよっ!そんなこと・・・!」

天和「あ、その手があるねえ。」

地和「姉さん!ちい達の真名を誰にでも呼ばせるなんて・・・、ありえないわよ!!」

人和「・・・いえ、案外悪くないかもしれないわ。」

地和「人和まで!？」

人和「信頼を置いた者にしか許されない真名を呼んでも構わないとなれば、応援してくれる子達にとって・・・私達は、名前を呼ぶだけでも特別な存在になれる。」

地和「うう……ちいの真名は、ちいだけのものなの。」

人和「ちい姉さん。もともと選択肢なんか無いのよ。ここで断れば、私達はこの場で殺されても文句は言えないわ。さっきの槍のように。」

地和「……。」

それを聞いて、地和の顔はまた青ざめた。

人和「それに、この騒ぎはまだ暫くは尾を引くはず。どこの州も、旅芸人の出入りは厳しく言われるでしょう。」

人和「そこを、生かしてくれる上に、活動するための資金を出してくれて、自由に歌っていいなんて……正直、破格の条件だと、私は思う。」

人和「……活動資金も出してくれるのよね？」

純「構わねーだろ、栄華。」

栄華「それは……貴女達の働き次第ですわね。」

栄華「案としては悪くありませんけれど、それが私達が兵を集める経費に勝る効果を出せないようでは……お金を使う価値はありませんもの。」

人和「もちろん、やるからには成果は上げてみせるわよ。私達としても当分は情報収集が必要だけれど……その結果次第で援助を打ち切ってもらっても構わないわ。」

栄華「あら。少しはお金の使い方が分かっている方がいらっしやるようですわね。」

人和「当然。誰にモノを言ってるの？」

栄華「……。」

人和「……。」

そして、この2人の間に火花が散り、そして、

栄華「……結構。なら、良い報告を期待させていただきますわ。」

地和「けど、援助の打ち切りはともかく……用が済んだからって、殺したりしないわよね？」

純「栄華の言うように、用済みになったら支援を打ち切るだけだ。」

純「けどさ、大陸一の歌い手になるんだろう？もし本当にそうなれたなら、そもそも俺達の支援が必要かさえ怪しい所だな。」

そう言い、3姉妹に発破を掛けたのであった。

地和「……面白いじゃない。なら、あんた達がちい達を切るより早く、ちい達の方からあんた達の支援なんかもういらなくなって言ってるんだから。」

華琳「期待しているわよ。……喜雨もこれで良くて？」

喜雨「うん。……1つ付け加えるなら、これからも辺境の村は回り続けて欲しいかな。あなた達が来てくれて嬉しかったって言ってる人、結構多いんだ。」

天和「あ、それならお姉ちゃんも分かる！小さな村の人達って、お姉ちゃん達の事、

すつごく喜んでくれるんだよね。もちろん行くよー!」

地和「よし!なら決まり!」

天和「・・・はいいんだけど。えーっと。結局、私達は助かるって事でいいのかな?」

人和「そうよ!しかも、これからも歌い続けられるのよ!」

華琳「ああ、そうだ。」

地和「ちよつと・・・まだあるの!?これ以上の条件は飲めないわよ!」

華琳「舞台に立つ者なら、幕引きはすべきでしょう?次の舞台に立つ前に、まずそれをなさい。・・・この幕引きの報酬をもって、最初の援助とさせてもらうわ。」

人和「・・・断れば、その時点で支援打ち切りって事ね。」

地和「幕引きって・・・いったい、何をさせるつもりなのよ。」

そして、幕引きの後、3姉妹が、仲間に加わったのであった。

苑州・陳留

陳留に帰還したが、帰って早々に招集をかけられた。

香風「おなかすいた……」

季衣「うん……」

そんな不満な顔をしているのは香風や季衣だけではなく、真桜や沙和も同じ表情であつた。

真桜「宴会……あかんの？」

そう言うと、

華琳「私はそのために報奨を与えたつもりだつただけけれど?……私だつて春蘭と
閨で過ごすつもりだつたわよ。」

と朝廷の使者の前ではつきりと言つたのであつた。すると、

純「そういうのは、あまり人前では言わない方がいいですよ、姉上。ましてや朝廷の
使者の前だつたら。」

純が謁見の間に入って言つたのであつた。

華琳「遅かつたわね、純。」

純「申し訳ありません、色々。」

その時、

??「アンタが曹和か。」

胸をサラシで巻いた袴姿の少女が純に話しかけた。

純「そうだが、アンタは？」

霞「ウチは張遼や。すまん。みんな疲れとるのに集めたりして。すぐ済ますよつて、堪忍してな。」

純「そつか。」

すると、

香風「あー。」

香風が張遼を見て反応した。

霞「久しぶりやな、香風。こないだの撤退手伝うてもろうて以来か。」

華琳「張遼殿。あなたが大將軍・何進殿の名代かしら？」

霞「や、ウチやない。ウチは名代の副官・・・ああ、うん。ねねは補佐やから、ウチが副官やな。」

春蘭「なんだ。將軍が直々にというのではないのか。」

霞「あいつが外に出るわけないやろ。椅子にふんぞり返つて賄の銭数えるんで忙しいんやから。」

そうはつきり言つたのであつた。その時、

??「呂奉先殿のおなりですぞー！」

呂布「・・・。」

呂布とその補佐らしき人が入ってきた。

?? 「曹孟徳殿、こちらへ。」

華琳 「はっ。」

呂布 「……。」

しかし、呂布は何も言わず広間の上座でブーツと突つ立つたままだが、純をじつと見つめていたのであった。

?? 「えーつと、呂布殿は、此度の黄巾党の討伐、大義であった！と仰せですぞ！」

華琳 「……は。」

呂布 「……。」

?? 「して、張角の首級は？と仰せなのです！」

華琳 「張角は首級を奪われることを恐れ、炎の中へと消えました。残った跡をくまなく探させましたが、もはや骨の欠片すらも燃え尽きており……。」

呂布 「……。」

?? 「ぐむう……首級がないとは片手落ちだな、曹操殿。と仰せなのです！」

華琳 「……申し訳ございません。」

純 (やべえな、姉上怒ってやがる……。)

呂布 「……。」

?? 「今日は貴公の此度の功績を称え、西園八校尉が一人に任命する……という、天子様のお達しを携えて来た。と仰せなのです！」

華琳 「は。謹んでお受けいたします。」

呂布 「……。」

?? 「任命式は近日、禁中にて行われる。日取りは改めて伝えるゆえ、待つように。と仰せなのです！」

呂布 「……。」

?? 「これからも天子様を支える諸侯の一人として、日々の職務を全うするように。……では、用件だけではあるが、これで失礼させてもらう。と仰せなのです！」

呂布 「……おわり？」

?? 「そうですぞ。ささ、恋殿！こちらへ！」
しかし、

呂布 「……。」

呂布は純を凝視していたのであった。

?? 「恋殿、どうなされたのです？」

霞 「恋、どないした？」

すると、

呂布「お前、強い……。多分恋と同じかそれ以上に……。」

呂布は無表情のまま純に言った。

純「はっ？」

??「恋殿、何を言っているのです!?お前、恋殿に何をしたのですか!？」

純「……。何もしてねーよ。」

??「嘘をつくなです!!うう、ちんきゅーキーツク!!」

そう言つて、純に飛び蹴りを繰り返したが、

ガシッ!

純は少女の足首を掴み、そのまま逆さにぶら下げたのであった。

??「はーなーせー! 離すのです!」

純「いきなり蹴つてくんじゃねーよ。まあ、離してもいいが、このまま離したら、お

前の頭がち割れて死ぬぞ。それでいいなら離してやろうか?」

そう言うとその少女は、涙目になってしまったのであった。

??「イヤーなのですー!!」

華琳「純、離してあげなさい。」

純「はっ。」

そう言つて、純は優しく下ろしたのであった。

?? 「うう・・・ぐすつ、ヒック・・・。」

呂布 「ちんきゅー。今のはちんきゅー悪い。」

陳宮 「ううー、恋殿ー。」

霞 「・・・ま、まあ、そゆわけや。堅苦しい話で時間取らせてすまんかったな。あとは宴会でも何でも、ゆつくり楽しんだらええ。」

霞 「ほななー。」

そう言つて、張遼達はその場を後にしたのであつた。すると、

全員 「二・・・プツ、あははははっ！」「二」

純 「な、何だ!？」

皆が笑い始めた。

真桜 「大将、めっちゃおもろかつたで！」

沙和 「笑い堪えるの必死だったのー！」

凧 「・・・プツ！」

香風 「プツ！」

華命 「あはははははっ！」

柳琳 「ね、姉さん、笑いすぎよ。ふふっ！」

栄華 「そうですね。華命さん!! ふふっ!!」

曹姉弟の過去

華琳と純は同じ年の姉弟であるが、腹違いであり、純が一日遅く生まれたため、純が弟である。

純の母親は、純を生んですぐに亡くなってしまったため、父親曹嵩は純を引き取り、娘の華琳同様、可愛がった。

そして2人は、幼くしてすぐに非凡な才を發揮し、華琳は霸王としての才を、純も霸王の才があつたが、中でも特に彼が抜きん出ていたのは、武人として、または指揮官としての才であつた。曹嵩は、その2人を父親として、または曹家当主として愛しており、将来は姉が弟を、弟が姉を助け合うような仲になつて欲しいと願つていた。

しかし、そんな思いとは裏腹に2人の仲は、というよりは華琳が一方的に純を嫌つていたのである。ある時は、

華琳「子元！私はあなたの助けなんかいらさないわ！」

と言つたり、またある時は、

華琳「子元！家中の皆があなたについて行つても、私はあなたに負けないし、あなたを認めないわ！」

と言う次第であつた。それには訳があつた。それは、人望の差であつた。別に華琳にも人望が無かつたわけではない。しかし、純は一兵卒でも、文武官でも、民でも分け隔て無く対応していたため、必然と人氣に差が出来たのである。それを見ていた華琳は非常に面白くなく、氣に入らないと思ひ、一方的に純と張り合つていた。それは、春蘭が華琳に、秋蘭が純に仕える事になつても変わらなかつた。

その度に純は寂しい顔を時々していたが、秋蘭にはその姿を一切見せなかつた。しかし、純を慕つていた秋蘭にとつて、純の氣持ちは痛いほど察しており、華琳に対して悪感情を抱くようになっていた。春蘭も複雑で、同じ武人として純の事が好きであつたが、直属の主でもあつた華琳の事も敬愛しているため、より複雑な心境であつた。

曹嵩もこの状況には頭を悩ませており、どうにかならないかと思つていた。自身が死んだ後もこの状態が続けば、曹家は滅んでしまうと。

しかし、そんな仲が改善するあるきつかけが起きたのであつた。それは、曹嵩が病に倒れたことである。この時純は、秋蘭と一緒に賊討伐に遠征に行つていたため、不在であつた。

華琳「お父様、お加減はいかがですか？」

曹嵩「華琳か。どうやらわしもここまでのようじゃな。」

華琳「何を言っているのですか!!お父様はきつと良くなります!!弱氣にならないで下

さい!!」

曹嵩「いや、自分のことは一番理解しておる。その前に、1つお主に言いたいことがある。」

そう言つて、曹嵩は寝台から起き上がった。

華琳「何でしょう、お父様。」

すると、

パシン

曹嵩は華琳の頬を叩いたのだ。

華琳「な、何をするのでですか!?!」

曹嵩「華琳、これまで何も言わずに黙つておつたが、お前はいつまで純の事を嫌うのだ?」

華琳「そ、それは……。」

曹嵩「お主のその下らない妬みで、彼奴はどれだけ胸を痛めたか、お前は分かつてるまい。彼奴はな、今の曹家の現状を最も理解しておつたぞ。」

華琳「現状……ですか?」

曹嵩「やはりお前は気付いておらなんだか。今曹家はな、2つに割れかけておつたのじゃ。お前の派閥と、純の派閥にな。」

華琳「えっ・・・!?」

曹嵩「もしそのままにすれば、完全に2つに割れてしまい、最悪潰される可能性もあった。だから彼奴は、自身の派閥を抑え込んでこう言った。『例え俺が姉上の命で死ぬことがあつても、恨んではいけない。私心を捨て、姉上によく仕えろ。』と言つておつた。」

華琳「・・・!?」

曹嵩「それほどまでに、お主の事を気にしていたし、曹家の事も気にしていた。にも関わらず、お主の下らない嫉妬で彼奴を苦しめた。お主、分かっているのか!？」

それを聞いた華琳は、俯いてしまった。何て愚かなことをしていたのか、自分の下らない妬みで家が危うくなつていた事を。

曹嵩「ようやくお主も自分のしでかしたことの大きさに気付いたようじゃな。しかし、早まつてはならん。まずは、純にしっかり謝るのじゃ。しかし、秋蘭を初めとした純を慕っている連中は、お前のことを許さぬかもしれん。そこからはお主次第じゃぞ。」

華琳「・・・御意。」

そう言つて、華琳は拱手した。そして数日後、曹嵩はこの世を去つた。

そして、

華琳「私が曹家の後を継ぐわ。これからもよろしく頼むわ。」

全員「「御意!!」」

すると、

春蘭「華琳様。曹嵩様の葬儀は、純様と秋蘭を呼び戻してからの方が宜しいかと。」

春蘭がそう言うのと、

栄華「春蘭さん、何を当たり前な事を言っておりますの！お兄様抜きで始めるなんて、曹嵩様がお嘆きになりますわ!!」

春蘭「そんなこと分かかっておる!!一応聞いてみたのだ!!」

華命「春姉えと栄華も、喧嘩はやめるっすー!!」

柳琳「姉さんの言う通りです。お姉様の前で喧嘩は・・・。」

華琳「やめなさい、2人とも。栄華、春蘭がそのようなことを聞くのは当然よ。私の純に対しての態度は、あまりにもひどいものだったから。」

栄華「お姉様・・・。」

華琳「栄華も辛かったですでしょう。あなたも、純の事を本当の兄のように慕っていたのだから・・・。」

栄華「はい。私も、お姉様とお兄様のお姿を見て、胸を痛めておりました。」

華琳「華命も柳琳も、ごめんなさいね・・・。」

華命「あたしも辛かったです・・・。」

柳琳「はい、私も栄華ちゃんと同じ意見です・・・。」

華琳「そう……。春蘭、純達に遣いを出しなさい。」
春蘭「御意。」

そして、純達に遣いを送ったのであった。

純達一行は、

純「今回の賊退治、見事な活躍だった、秋蘭。」

秋蘭「ありがたきお言葉。」

純「父上の病も、これで少しは良くなれば良いのだが……。」

秋蘭「はい、そうですね。」

その時、

兵士A「曹和様！」

春蘭が送った遣いの兵士がやって来たのだ。

純「どうした？」

兵士A「すぐにお戻り下さい！」

純「何があつた？」

兵士A「曹嵩様が・・・、お亡くなりになつた。」

純「・・・何だと!？」

秋蘭「・・・!？」

兵士の言葉に、純と秋蘭は驚いた。

兵士A「曹嵩様は亡くなる前に、曹操様に曹家を任せ、曹和様は姉曹操様を補佐するようにと。」

その言葉に純は目に涙を浮かべながら、

純「・・・分かつた。すぐ戻ると伝えてくれ。」

そう言つたのであつた。

兵士A「はっ!」

そう言つて、兵士はその場を後にした。

純「・・・。」

すると、

秋蘭「純様・・・。」

純の姿を見た秋蘭は、純の傍に寄つて、優しく抱き締めたのであつた。

その時純は、泣き顔を見られないように、秋蘭の肩に擦りつけるようにして、秋蘭は

まるで赤子をあやすかのように、ポンポンと背中を叩いたのであった。

暫くが経ち、

純「……行くぞ。」

秋蘭「御意。」

そう言つて、兵を纏め、帰還していった。その道中、

秋蘭（このお方は何があつても守り、支えてみせる！例え大陸中全ての人を敵にしても……！）

と秋蘭が純の背中を見て、改めて決意したのであつた。

曹家屋敷・曹嵩霊前

その部屋には、華琳が一人座っていた。すると、

兵士B「申し上げます、曹操様。曹和様が戻られました。」

兵士がそう伝えてきた。

華琳「兵馬の数は？」

兵士B「屋敷に入る際、単騎でした。」

華琳「分かったわ。」

そう言つて、兵士を下がらせた。すると、純が来て、

純「……！」

曹嵩の霊前を見て、絶句したのであつた。そして歩み、両膝をついた状態で、

純「父上、申し訳ございません。俺は親不孝者です。戻るのが遅すぎ、看取る事も出来ず……、父上……。」

泣きながら曹嵩の霊前で謝罪したのであつた。すると、華琳は立ち上がつて純にある事を言つた。

華琳「子元。いや、純。私に代わつて、曹家の後を継いでくれないかしら？」

それに驚いた純は、

純「姉上、何を言われるのですか!?!父上は姉上に後を任せましたのです。俺は、姉上を差し置いて後を継げません！」

立ち上がつてそう言つたのであつた。

華琳「聞いて、そうじゃないわ。曹家を思つての事なの。私は臣下からの信頼も無い。けどあなたは、才も徳もあり皆に慕われているわ。あなたが後を継げば、一門、臣下の信頼が得られ、曹家を発展させる事が出来るわ。」

それを聞いた純は、

純「ならば、お聞かせ下さい。姉上は何を？」

そう尋ねた。すると華琳は、

華琳「私はあなたの配下となつて、あなたを支えるわ。」

そう言つたのであつた。

純「それが父上のご遺言であるか？」

華琳「・・・お父様の遺言は、曹家を私が継ぎ、あなたがそれを支えるようにと。し

かし、今の曹家を引つ張れるのは純、あなただけなの！」

そう言われた純は、曹嵩の霊前を見て、

純「お気持ちは分かりました。」

そう言つた。そして、

純「されどお断りします。」

そう言い、拱手してその場を後にしたのだつた。

華琳母の部屋

その部屋には、華琳の生みの母がいた。すると、

純「義母上、純が戻りました。」

純が戻ったことを報告したのだった。

華琳母「純、私は幼くして母を、その後は友であったあなたの母親を、そして今度は夫を亡くした。人生とは、誠に辛いものです。」

純「お察し致します。なれど父上を助け、姉上を育て、そして、血は繋がっていません、俺を実の息子の如く扱ってくれて、ただただ敬服致します。」

華琳母「私も辛いです、私よりもずっと苦しんでる者があります。」

純「・・・姉上ですか？」

華琳母「いかにも。あの子はあなたと同一歳。あの歳で、曹家を任されたのです。その道は険しいものです。華琳は、大きな不安に苛まれ、今も震えが止まりません。」

華琳母「先程華琳が、あなたに曹家を任せると言われましたね。」

純「はい。お断りしました。」
そして、

純「義母上。父上のご遺言、お聞かせ下さい。」

そう尋ねた。

華琳母「純よ。そなたが言ったように、そなたとは血は繋がっていないが、実の息子

同様に思っておる。ゆえに、全てを打ち明けましょう。」

そして、純に曹嵩の本当の遺言を述べた。

華琳母「お父上が残した遺言は、華琳に曹家を任せるといふもの。」

真実の遺言を聞いた純は、

純「ならば、なぜ俺に曹家当主の座を？」

そう言った。すると、

華琳母「まだ分かりませんか？華琳は、お父上から、自身のあなたに対しての態度が原因で曹家が2つに割れかけていた事を知ったのです！華琳は、自身の犯した過ちを考え、今そなたに譲った方が良いと考えた。」

華琳母「分かりますか？そうすることで、自分の命を守り、曹家の将来を守ろうとしたのです。さらに、将兵や文武官の殆ども恐らく、同じ考えでしょう。純、あなたも知っているように、華琳は聡明です。しかし、あなたが思っている以上に聡明すぎるのです。よつて、将来のために自らの地位を放棄すると決めた。」

そう述べたのであつた。そして、純は頭を下げた後、こう言った。

純「義母上、全て心得ました。」

そう言つて、部屋を後にしたのであつた。

曹嵩靈前

純は、春蘭、秋蘭、華命、柳琳、榮華を引き連れて、華琳がいる曹嵩の靈前の部屋に
来た。そして跪き、拱手してこう述べた。

純「父上！この純は、春蘭、秋蘭、華命、柳琳、榮華らと共に、父上の靈前で誓いを
立てに参りました。心を一つにして姉上を助け、命を懸けて、姉上をお支えします！」

春・秋・命・柳・榮「二三命を懸けて、華琳様／華琳様／華琳姉え／お姉様／お姉様
／をお支えします／するっす／しますわ!!!」

そう言つて、頭を下げたのであつた。それを聞いた華琳は、

華琳「みんな、どうか立ってくれないかしら。」

そう言い、純達は立ち上がった。

華琳「この私も、靈前で誓おう。これよりあなた達と、榮辱生死を常に共にし、曹家
を更に大きくする!!」

そう言つて、華琳は拱手し、純達もそれに続いて拱手した。これにより、純と華琳の
仲は改善され、曹一門の結束は強まったのである。

26話

謁見の間

純「姉上、お呼びですか？」

謁見の間に、純と焰耶がやって来た。

華琳「ちょうど良いわね、純。」

すると、

地和「だから聞いているの？」

その横には、張る姉妹がいた。

華琳「ええ、聞いているわ。つまり、あなた達は世話役が欲しいのよね。」

地和「そうよ。いくらちい達でも限度があるもの。」

人和「それに、華琳様と純様との連絡にも城の誰かを来て貰わないといけないので。」

天和「お姉ちゃんはねー、純さんがいいなー。」

その発言に、

華・春・秋 「「なっ!!」」

その場にいた華琳と春蘭、秋蘭が驚いた。

華琳 「どうして純なのかしら？」

天和 「だって純さんは曹操軍の中では1番強いから私達を護衛して貰いたいし、この中で1番連絡係に最適なもの。」

地和 「それもそうね、ちいも賛成。」

華琳 「・・・純の意見は？」

純 「正直言って、難しいですね。今の仕事でも充分多いですから、これ以上やるのは・・・。」

華琳 「そうね・・・。」

純 「しかし、1人適任がおります。」

華琳 「あら、それは誰かしら？」

すると、純は焰耶に目を向け、

純 「焰耶、頼めるか？」

焰耶 「お、お館!?!私ですか!?!」

そう言ったのであった。

純 「そうだが？」

華琳「なぜ、焰耶が良いと？」

純「前の戦では、部隊をよく指揮してましたし、何よりこの3姉妹を捕らえました。その褒美として、彼女の世話役を引き受けて貰おうと。」

華琳「なるほどね……。」
すると、

天和「えー!?お姉ちゃん、こんな怖い人嫌だー!!」

地和「ちいも嫌だー!!」

人和「ちよつと……!!」

天和と地和が我儘を言ったのである。その時、

焰耶「何だと……。」

焰耶は禍々しいオーラを出し、

天・地「「ひっ……!?!」」

天和と地和を怯えさせたが、

純「焰耶、辞めろ。」

焰耶「……御意。」

純の一言で静めたのであった。

純「他に適任はいねーんだ。諦めろ。」

人和「天和姉さん、ちい姉さん。これ以上は辞めて。」

地和「・・・分かったわよ。」

地和は不満そうな顔をしながらそう言ったのであった。

純「良いか、焰耶？」

焰耶「分かりました。お館の期待に応えるべく、世話役、引き受けました。しかし、も

しこいつらがお館の害になるようでしたら、殺しても宜しいでしょうか？」

純「殺すのは辞めろ。お灸を据える位にしろ。」

焰耶「分かりました。」

純「まあ、俺もたまには顔を出すから、安心しろ。」

天和「ホント!!」

地和「絶対だからね!!」

純「姉上も、宜しいでしょうか？話を勝手に進めてしまいました。」

華琳「構わないわ。それで行きましょう。」

純「はっ！」

そして、張3姉妹の世話役には、焰耶に決まったのであった。

その夜、純の部屋

純「なあ、稟。」

稟「はい、純様。」

純「ちよつと気になったんだけど、西園八校尉だけど、他に誰がいたんだっけ？」

稟「曹操殿の他に、蹇碩、袁紹、鮑鴻などがおります。」

純「そっか……。それとさ、稟。」

稟「何ですか、純様。」

純「お前、いつになったら姉上と仲良くなるんだ……？」

稟「それは、私に曹操殿に真名を預けると仰っているのですか？」

純「別にそこまでは言っただけ……。」

風「純様、もう少し稟ちゃんのお気持ちを理解して下さい。」

純「いや、しかし……。」

風「ぐうぐ。」

純「起きろ、風。」

風「おお！ つい。まあ、純様と稟ちゃんは2人つきりで話し合っていただかないと駄

目ですわね。それじゃ、風はこれにて。」

そう言つて、風は部屋を後にした。

稟「……。」

純「おい、稟。」

稟「何ですか、純様。」

純「お前、怒つてるよな？」

稟「別に怒つてはいません。」

純「いや、お前……。」

すると、

稟「……純様が悪いんですよ。確かに純様は曹操殿の弟であり、臣下でもあります。しかし、私や風、そして焰耶にとつては主なのです。おそらく秋蘭様も。本当は曹操殿を押しかけて、曹一門を率い、この大陸を覇道で統一していただきたかつた。」

稟は本当の思いを純に言った。

純「……。」

稟「それでも……、それでも私は、あなたについて行くことを決めました。そして、誰よりもあなたのことが好きになつた。」

純「稟……。」

すると、純は稟に近づいて肩に手を乗せた。すると、

稟「純様……。」

稟は純に抱きついたのであった。

純「悪い、稟……。俺さ、父上の霊前で誓ったんだ。姉上を支えるつて。」

稟「ずるいです……。そんな言い方されたら、許すしかないじゃないですか。」

純「……。悪い。」

稟「良いんです。その代わり、今日は精一杯、私を愛して下さい。」

純「分かった……。」

そう言つて、純と稟は一緒に寝台に向かったのであった。

翌朝、

稟「んんっ……。」

稟は目を覚ますと、横に純の寝顔が目に入った。その顔を見た稟は、

稟「ふふっ……。」

純の頬を撫でたり、純の手を自分の頬に当てたりしたのであった。

稟（純様……。大好きです。）

その時、扉が開いて、

秋蘭「純様……。」

秋蘭が入ってきたのである。

秋蘭「……。」

稟「……。」

すると、

稟「あ、あの……、し、秋蘭さ……。」

稟の顔が一気に赤くなってしまい、大声を出しかけたが、

秋蘭「しーっ。」

秋蘭がすぐに稟の傍により、口を塞ぎ、自身の人差し指を口に当てたのである。

稟「秋蘭様……?」

秋蘭「別に気にはしておらんよ……。お主の気持ちには気付いていた。しかし、私は純様に言ったのだ。自身を好きでいてくれる人全てを幸せにして下さいと……。」

稟「秋蘭様……。」

秋蘭「けど、私はお主に負けるつもりはない。正妻は譲らぬぞ。」

すると、秋蘭は稟に宣戦布告したのであった。

稟「わ、私も、秋蘭様には負けません!!」

そう稟も言ったのであった。

秋蘭「しかし、今は純様の寝顔を堪能しようではないか……。」

稟「はい……。」

そう言つて、2人は純の寝顔を柔らかい顔で見ていたのであった。

純（やべー、起きる時期を間違えた……。まあいつか、暫く寝てるふりすつか。）

……。純は起きるタイミングを逃し、暫く寝てるふりをしていたのだが。

27話

廊下

真桜「うう……。心臓、バクバクいうてるう……。」

沙和「だよねえ……。緊張するの……。」

焰耶「別にただの状況報告会なんだから、いつもの調子でやればいいんだ。緊張すること無いぞ。」

真桜「そりゃ、焰耶は華琳様と大将達にちよくちよく会うとるからええやろうけど……。ウチら、そない滅多に会えへんねんで！緊張もするわ……。」

沙和「それに、華琳様と純様達の前で報告するなんて初めてだし……。会議だつて、普段は座ってお話聞いているだけなの。」

沙和「あうう、背中結び目、曲がったりしてないかな？ないよね？ないよね？」

焰耶（全く、ちよつと会議で報告するだけなのに、この2人の雰囲気を見てみると、私まで緊張してしまうではないか……。）

凧「……。」

焰耶「風に至っては、固まってるし……。しっかりとしてくれよ、お前達。」
少し心配になってきた焰耶であった。

真桜「ええつと……。どうやったかな、手の平にこう大って書くんやったっけ……。？」
焰耶「それは人だ。」

沙和「確か、落ち着く呼吸法っていうのもあったよねえ……。ひっひっふー、ひっひっふー。」

焰耶「それはお産の時のだ。」
すると、

真桜「あれ？なんで焰耶がそんなん知ってるん？」

と言われ、

沙和「実は、子供が……。」

と言われたので、

焰耶「な、な、何を言っている!!いるわけがないだろ!!」

と焰耶が怒鳴ったのであった。

真桜「いや、まさか……。」

焰耶「おい真桜ーっ!」

沙和「きゃー。焰耶ちゃん、おめでどうなのー!」

凧「……。」

その時、

桂花「……何をやっているの、あなた達。」

焔耶「あ、桂花か。もう時間か？」

桂花がやって来た。

桂花「遅れて行って華琳様と純様のご不興を買っても知らないわよ。」

焔耶「おう、それはすまん。」

桂花「早くしなさい。」

そう言つて、桂花はその場を後にした。

真桜「ううう……もうすぐ始まると思つたら、改めて緊張してきたあ……。」

凧「……。」

沙和「焔耶ちゃん。報告の所だけで良いから、替わつてほしいのー。」

焔耶「おい、行くぞお前ら。」

そう言つて、焔耶達は謁見の間に入ったのであった。

謁見の間

栄華「次、経理部門の報告をお願いいたします。」

文官A「はっ！」

と会議が進み、三羽鳥も死ぬほど緊張していたが、

真桜「……ぐう……。」

沙和「……むにやむにや……。」

焰耶「お前ら、起きろー！」

後ろの席にいるはずの2人からは、寝息が聞こえていた。華琳と純が玉座にいるため、後ろを振り向くことが出来ない焰耶は、小声を投げたのだが、全く反応も無かった。

焰耶「風、お前はいい加減にしろ！」

風「……。」

隣の風は未だに硬直状態から抜け出せなかった。目は開いたままであったが。

純「軍備の増強はどうなっているんだ？」

桂花「はい。街に新しい職街を作り、戦で流れてきた職人の受け入れと、生産力の強化を行わせています。」

桂花「人材の発掘も随時行わせていますので、当面の人材には不足しておりません。」

純「そつか。ではそちらは、引き続き人材の確保に全力を注ぐようにな。」
桂花「はいっ。」

華琳「それで、兵力の増員は？」

人和「はい。地方巡業は予定通りの日程で終了しています。」

人和「舞台後の揮毫会にはこちらの期待以上の参加がありましたから、私達の活動に
応えた地方からの徴兵応募はこれから動きがあると思われます。」

華琳「期待させて貰うわ。それから、次の巡業先と今回の動員数の最終報告も早急に
提出するように。」

人和「お任せ下さい。」

華琳「次は・・・、徴兵応募者への対応だけれど・・・。」

三羽烏らの出番なのだが、

焰耶「おい、真桜！」

真桜「・・・むにゃ・・・あとちよつとー・・・。」

焰耶「沙和！」

沙和「・・・ふみゆう・・・もう朝あ・・・？」

焰耶「凧！動いてくれ、凧ー！」

凧「・・・。」

完全に沈黙していたのであった。すると、

純（しゃーねーな・・・。）

その様子を最初から見ていた純は、

純「焰耶、頭下げろ。」

焰耶「は、はっ！」

そう言つて、焰耶の頭を下げさせ、3人の額に向けて、碁石を投げた。

凧「・・・!?」

真桜「あだっ!?」

沙和「いたっ!?」

すると、3人の額に見事命中したのであった。

春蘭「楽進！李典！于禁！」

凧「・・・っ！」

真桜「・・・ひやいつ！」

沙和「・・・ふわっ！」

秋蘭「貴様ら、主君の御前だぞ！何を腑抜けているか！」

春蘭と秋蘭の怒号に、

凧「・・・！」

真桜「……。」

沙和「……ふみゆうう。」

3人は身を縮こませてしまったのであった。

焰耶「申し訳ございません、春蘭様。」

春蘭「焰耶！なんだ貴様まで！」

焰耶「3人とも、緊張しすぎて、報告できそうにないので、私が代わりに報告しても宜しいでしょうか？」

純「なら焰耶、報告を頼む。」

焰耶「はつ。現状、新兵の訓練は順調に進んでおります。3人とも独自のやり方で訓練は進めています、目立った遅れは出ておりません。」

焰耶「このまま進めれば、予定通り本隊に引き渡せるはずです。」

焰耶（沙和の隊は若干遅れ気味だが、そこは調整の範囲内。引き渡しまでは何とか出来る。）

純「3人とも別のやり方……なるほど、そういうことか。」

焰耶「お館のお察しの通り、新兵にも個性があります。それに合わせて、訓練の導入方法を3種類作っております。」

焰耶「三隊とも最終的には本隊に加えられる戦力として運用出来るようにします。」

焰耶「しかしその過程は、個性を上手く利用した方法を使った方が、互いに負担が少ない……というお館の方法を使ってみたのです。」

純「ほお……、よく見てるな、焰耶。」

焰耶「はっ、ありがとうございます。」

純「春蘭、お前はどう思っている？」

しかし、

春蘭「……。」

春蘭は無反応だった。

純「おい、春蘭。」

秋蘭「姉者……さっきの話、分かっているか？」

春蘭「バ……バカにするな！ 要は、華琳様と純様の兵として相応しい兵がこちらに届くかどうかだろう！」

と上手い言い方で逃げた春蘭であった。

華琳「そうね。その所はどうなの？」

焰耶「もちろんそれが大前提で話は進めています。3人とも随時話し合いの機会を持って、より良い方法を模索させております。」

春蘭「純様と似ている方法でやっているのだから、相応しい兵士は来るのだな？」

焰耶「はい。」

春蘭「ならば問題ありません。華琳様。純様。」

純「じゃあ新兵の育成も、より迅速かつ練度の高い訓練を課せられるようになる。」

焰耶「徹底させます。」

華琳「ならば、次の議題だけれど……。」

そう言つて、会議が進んだ。

焰耶「……ふう。」

何とかなつたので、ほっとした焰耶。すると、

沙和「ありがとー！焰耶ちゃん！」

真桜「焰耶、かっこよかつたで！」

凧「……。」

焰耶「お前らなあ……。」

そして、それ以後も話は進み、

秋蘭「それでは、本日の会議はここまでとする！」

春蘭「一同、解散！」

会議は終わったのであつた。

真桜「おわつたー！」

沙和「ねえねえ焰耶ちゃん、お昼ご飯、食べに行こうなの。」

焰耶「そうだな。隊舎に戻る前に何か食べて帰るか……。」

真桜「それ、もちろん焰耶のおごりよね？」

焰耶「……いや、むしろ今日はお前達が出せ。」

沙和「えーっ!?!せっかく、可愛い部下がお願いしてるのにー。」

凧「……。」

真桜「てか、凧。ええ加減、そのネタも飽きてきたで。」

凧「……ネタじゃない。」

真桜「ちゃんと喋れるやん！」

その時、

純「お前ら、ちよつといいか？」

純が4人の所に来た。

焰耶「お館。」

凧・真・沙「「純様!?!／大将!?!／純様!?!」」

純「こういうことはあまり言いたくはなかったけど、お前達3人は最悪だな。」

凧「……!!」

真桜「……。」

沙和「……うう……」

純「緊張だけならまだしも、会議中に寝るのは、武人として、いや人としてどうかと思うぞ。」

純の厳しい言葉に、3人は顔を俯いてしまった。

焰耶「お館、今回は上官たる私の責任です！こいつらを責めないであげて下さい！」

そう言つて、焰耶は3人を庇つた。

純「焰耶！お前はこの3人に何を教えたんだ！会議中は寝ろと教えたのか？」

焰耶「いえ、違います！」

純「でも寝たよな。」

焰耶「……」

純「まあ、今回は俺も悪い。この会議に出席させろと言つたのは俺だから、俺にも責任はある。こいつらにはまだ早かつたつて事だ。今回は大目に見る。けど、次も同じ事があつたら、お前らにはそれ相応の処分を下す。そして、もうお前らには何も期待しねーからな。」

純の言葉に、

焰耶「……はっ。」

風「……はっ……」

真桜「……はい……。」

沙和「……はいなの……。」

焰耶と三羽鳥は、顔を俯きつつ、拱手したのであった。

秋蘭「純様……。」

純「今行く。それじゃ。」

そして、純は秋蘭に呼ばれたので、その場を後にしたのであった。

凧「……。」

真桜「……。」

沙和「……。」

焰耶「……お前達、今回の件をしつかり胸に留めて、仕事に向かうぞ。」

そう言つて、焰耶は3人を引き連れて、その場を後にしたのであった。

秋蘭「純様。」

純「何、秋蘭。」

秋蘭「先程の焰耶達の事です。純様も久しぶりに厳しいお言葉を言いましたね。」

純「……まあ、流石に寝るのはどうかと思つてな。ここで釘を刺しとかねーと、同

じ過ちを繰り返しかねんからな。」

秋蘭「そうですね……。」

純「言い過ぎたかな……。」

秋蘭「いえ、彼奴らにとっては、良い薬になったと思います。きっと彼奴らは、良き将になると思います。」

純「そっか……。そうだな。」

そう純と秋蘭は、話していたのであった。

28話

司隸・洛陽

季衣「でっかい。」

春蘭「どうだ季衣、驚いたか。」

華琳「……別に春蘭さんが誇るところではありませんでしょう?」

季衣「でも、陳留も大きいって思ってたけど、もっと大きい街があるんですね。す
ごいなあ……。」

純「はは。しかし、都は久し振りですね、姉上。」

華琳「ええ、そうね。」

純「懐かしいですね。覚えてます? 姉上が北部都尉に任命された時の事。」

華琳「ええ、覚えてるわ。赴任当初は酷かったわね。」

燈「私もその噂は聞きましたわ。」

季衣「華琳様! 純様! 聞かせて下さい!」

そう言つて、華琳は昔のこと語つた。

回想・数年前

華琳が北部都尉に任命され、純と春蘭、秋蘭と一緒に向かつたのだが、あまり良い地域とはいえなかつた。施しを求めただけでなく、犯罪が横行しており、肝心の役所もすっかり対応していなかつた。その都尉府の門番も居眠りをしているほどである。

春蘭「彼奴らー!!」

秋蘭「……。」

それを見た春蘭と秋蘭は、怒つて門番を起こし、殴ろうとしたが、

純「待て、お前ら。」

純が2人を止めたのである。

秋蘭「し、しかし……。」

春蘭「そうです、純様。止める必要はありません!!」

純「安心しろ。然るべき処置はとる。」

華琳「そうね。さあ、入るわよ。」

そう言つて、役所の中へ入つていった。

華琳「春蘭。」

春蘭「はっ。」

華琳「二刻ほど後に大鍋2つ分の粥を用意してくれないかしら？くれぐれも熱くもなく、冷たくもなくね。良いわね。」

春蘭「なんとお優しい！鍋をもんぜ・・・」

華琳「いいえ。入口の目立たない場所に置いておくのよ、行きなさい。」

春蘭「は、はあ・・・？」

よく分からないといった顔をしていた春蘭であつたが、すぐに華琳の命令に従い、その場を後にしたのであつた。

純「秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

純「人手を借りたい。後ほど幾人か曹家から兵をよこしてくれ。門外に囲いを立て、『静粛に』と札を掛ける。」

秋蘭「・・・目的は分かりませんが、承知しました。すぐに手配します。」

純「それから・・・」

秋蘭「はつ。門番を起こさないように、ですよね。」

純「そつ、頼んだぞ。後、棍棒も持つてくるように。それも2本。」

秋蘭「御意。」

そう言つて、秋蘭もその場を後にしたのであつた。そして、華琳と純は役所の中に入つたのであつた。

そこは、明らかにしばらく使つていないようであり、煤や埃が溜まっていた。それを見た華琳と純は、呆れた表情を浮かべたのであつた。

純「これは想像以上にひどいですね。」

華琳「奴らは当てにならないわ。私達自ら、掃除するしかないわね。」

純「そうですね。しかし、とても役所とは思えませんね。」

華琳「そうね。だからこの地域は治安が悪いのよ。」

純「俺達が何とかしなければなりませんね。」

華琳「ええ。」

そう言つて、掃除を始めたのであつた。

回想終了

栄華「そんなことがありましたわね。あの日の後、お姉様とお兄様の煤と埃だらけのお姿を見て驚きましたもの。」

純「はは。それは悪かった。」

季衣「それで、それからどうしたんですか！」

華琳「そうね、それから私達はこうしたのよ。」

そうやって、華琳は話の続きをした。

回想

二刻後、北部都尉府の前には老若男女問わず大勢の人が集まった。そして、華琳の命で持ってきた粥に驚きと戸惑いを浮かべていたのであった。

華琳「よく集まってくれたわ。私はここの北部都尉に任命された、曹操よ。そして、我が弟の曹和。臣下の夏侯惇、夏侯淵よ。」

そして、大鍋に入っている粥を指差して言った。

華琳「見ての通り、2つの大鍋には粥が入っているわ。今日より、ここ北部都尉府門前に、毎日粥を置く。鍋でも食べても良いわ！」

そう言うのと、集まった人々は喜びの声を上げた。しかし、

純「ただし、1人1杯だけだ！」

純がそう言うのと、人々は一転してブーイングの声を上げた。

華琳「1杯にするのは、あなた達を飢え死にさせないためよ。役所の裏には広い空き地がある。後ほどそこに道具を揃えておくわ。」

純「女は、天幕を織れ！男は北部都尉府の兵に志願すれば、俺と夏侯惇、夏侯淵が毎日訓練に付き合つてあげよう、軍事訓練だ。飯も食べるし、夜も眠れる。しかし、物乞いをする事は許さぬ！」

その発言に、

市民A「どうやって生きていくんだ・・・？」

市民B「どうすりや良いんだよ・・・？」

市民は戸惑っていた。

純「それを教えてやろう。毎日1杯の粥を施されるより、生きる術を身に付け働き、肉を食え！」

そう言うと、

市民「「うおー!!」」

市民は大盛り上がりであった。その反応に満足した華琳はこう述べた。

華琳「すなわち、怠け者は養われないわ。暇人も。見えるかしら、まさに怠け者、暇人よ。」

そう言つて、後ろに指を指すと、先程居眠りをしていた門番がいた。

門番A「曹操様！曹和様！お許しを!!」

門番B「お助けを!!」

春蘭「跪け、貴様ら!!」

そう言われ、市民達の前に引きずり出された。

純「秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

純「棍棒を持った兵は用意したか？」

秋蘭「はい、ご命令通りに。」

純「こいつらの前に出せ。」

秋蘭「はっ、出ろ。」

そう言つて、秋蘭は兵士を門番の前に出した。

純「50打て！済んだらとっとと帰れ！」

そして、門番は50回棍棒に打たれたのであつた。それを見た華琳は、

華琳「純。」

純「はっ。」

華琳「明日棍棒を5本用意なさい。出来れば倍の太さを。別々の色を塗り、棚を置いて、そこに並べておきなさい。」

純「五色棒ですか。分かりました、すぐに手配します。」

華琳「春蘭、皆に粥を配りなさい！」

春蘭「はっ！さあさあ並べ、押すなよ！」

そして、1日を終えたのであつた。

回想終了

季衣「へえ、スゴイですね!!」

春蘭「そうだろう。」

栄華「別に春蘭さんが命令したわけでもありませんのに……。」

純「はは。後、姉上。蹇碩の叔父の件は覚えてますよね？」

華琳「ええ、覚えてるわ。」

季衣「それって、どんな事が起きたのですか？」

純「あれはな、姉上が北部都尉に任命されてしばらくが経った時だ・・・。」

回想

北部都尉兵士A「時すでに2更！出歩くことは控えよ！夜遊びは禁ず！」

華琳が北部都尉に任命され、華命と柳琳、榮華も北部都尉府に入った。そして、まず華琳が決めたことは、夜間の出歩きの禁止である。それによって、酔っ払いが騒ぐこともなくなり、治安が一気に回復したのであった。その日の夜、事件が起きた。

蹇碩叔父「飲み足りぬぞ!!」

酒場店主「ああ、駄目です!!店仕舞いますので、どうかお帰り下さい!!」

蹇碩叔父「うるさい!!」

酒場店主「ああっ!!」

その時、

春蘭「何事だ!!何の騒ぎだ!!」

春蘭と秋蘭が兵を引き連れてやって来た。

酒場店主「お聞き下さいませ!!2更を過ぎたのにこの方が帰って下さらないのです!!

酒を出せと言われても出来ませぬ!!禁止令に背く事に!!」

蹇碩叔父「うるさい、黙っておれ!!貴様の都合など、どうでも良い。俺様は飲みたい

時に飲むのだ!!たかが洛陽北部都尉とその弟如きが、夜間通行禁止令だ?!?下らぬ事を

!!」

春蘭「貴様ー!!」

秋蘭「純様を愚弄するとは!!」

そう言つて、春蘭と秋蘭は逮捕しようとしたが、

蹇碩叔父「捕まえるものなら捕まえてみる!!俺様は蹇碩の叔父だぞ!!」

そう言うと、

春・秋「!?!」

春蘭と秋蘭は妥協してしまった。それもそのはず、蹇碩は現皇帝のお気に入りの宦官

であったからだ。

蹇碩叔父「はっはっはっ!! やつと分かったか!! 今宵は見逃しておけ。穩便に済ませろ。お互いの将来にとって、その方が良い。少し酒を飲んで、時を忘れただけなのだ。次は遅くならぬ。二度とお前らの手を煩わせる事はない。」

その時、

純「次などあり得んな。」

春・秋「純様っ!?!」

純が馬に乗ってやって来た。

蹇碩叔父「俺様を知らぬか!? 俺様は蹇碩の叔父だぞ!!」

純「ほお・・・。」

蹇碩叔父「お前とお前の姉の祖父さんは、蹇碩と親しかったな。」

純「そうだったな。そもそも、使命を果たすために私情を挟んではならない。法を犯せば罰を受けるものだ。」

蹇碩叔父「夜間通行禁止令が法だと言うか? お前達姉弟が来るまで、この街は明るく賑わっておった。捕り物などなかったのだ。」

純「これまでの北部都尉が怠慢であつたからであろう。夜間通行禁止令は、我が姉である現北部都尉が定めたものだ。それに背いた者は、誰であろうと許さぬ。縛り上げろ!!」

そう言つて、蹇碩の叔父を捕らえたのであつた。

翌日

北部都尉府の門前には、大勢の人が集まり、そして、蹇碩達もやつて来た。その真ん中には、蹇碩の叔父が腕を縛られていた。

華・純 「蹇碩殿。」

蹇碩 「これは曹操殿、曹和殿。」

それぞれ拱手して挨拶した。そして、華琳と純は門前の人々の前に立つた。

華琳 「夜間通行禁止令は、酒酔いの騒ぎで、治安が悪くなるのを防ぐために定めた法であるわ。しかし、それを平然と破り、あろう事かそれを咎めた役人に盾突いたこの不逞の輩、見逃すわけにはいかない。」

市民 「二」そうだー!!」

華琳 「そして私は今回の沙汰で、皆に知らしめるわ。大小を問わず、罪を犯した者には罰を与えると!!思い知るが良い!!この国の世のために、人のために!!」

そう言つて、華琳と純は蹇碩に振り向いた。

華琳「蹇碩殿、お尋ね致します。私、曹孟徳のこの考え、そして、我が弟曹子元の対応、正しいでしょうか？」

蹇碩「正しいとも、もつと早くやるべきであつた。」

純「更にお伺い致します。法を破り、深夜に酔つて役人に盾突いたこの罪に、如何なる罰が相応しいか？」

蹇碩「そうだな・・・。」

そう言つて周りを見るが、目を逸らされてしまつた。

華琳「蹇碩殿、どうぞご遠慮なく。」

蹇碩「宜しい。此度犯した罪は、大罪とまでは言えまい。死罪には値せぬ。棒打ちだ。棒打ちの刑だな。」

そう言つたのであつた。

蹇碩「加えて・・・。」

そう言い、華琳と純に近付き、耳元でこう言つた。

蹇碩「曹操殿、曹和殿。私と曹家は付き合ひが深い。つまり、顔を立ててくれても良からう。されどもちろん・・・。」

すると華琳は、蹇碩の言葉を遮り、

華琳「なるほど……。」

蹇碩「ほお……。」

華琳「よく分かりました。」

そう言った。

華琳「幼き頃より私達は世話に、赴任して日が浅いにもかかわらず、禁止令を出したこと、お許し頂きたい。」

蹇碩「そうか……。」

華琳「棒打ちは幾たび……?」

蹇碩「そうだな……。顔を立ててくれ。20?」

しかし、華琳と純は表情を変えず、30、40にしても表情を変えなかった。そして、蹇碩「50にしろ!!」

華琳「よし!!蹇碩殿の仰せに従います!!純!!」

純「はっ!!春蘭!!」

春蘭「はっ!!」

そして、純は春蘭を呼び、耳元でこう言った。

純「50で殴り殺せ。」

春蘭「御意。」

そう言い、春蘭は棒を持って、蹇碩の叔父を殴った。

市民「「もつとやれー!!」」

その間、華琳と純は冷めた目で棒叩きの様子を見ていたのであった。そして、50回を叩き終え、様子がおかしい事に気付いた一人の兵士が近付いてみると、

兵士A「曹操様、曹和様。死んでしまいました。」

それを聞いた華琳と純は、蹇碩に近づき、拱手してこう述べた。

華琳「蹇碩殿。刑を執り行いました。」

純「残るは、後始末だけです。お待ちになりますか？」

華琳「それともお帰りに？」

兵士A「曹操様！曹和様！死んでおるのです!!幾たびも棒で打たれ、死んだのです!!」
その時、兵士があまりに慌てていたので、

純「お前は黙っている!!」

純が覇気のこもった一声で黙らせたのであった。

そして、

華琳「蹇碩殿。叔父上は、持ち堪えられず、息絶えました。」

華琳は蹇碩にそう述べた。

蹇碩「曹孟徳よ……、曹子元よ……。良くやった……。殺りおつたな……。」

華琳「ここは洛陽北部都尉の管轄。あなたが如何なる官職にあらうとも、私が上です。」

純「無礼な振る舞いならば、棒打ちに処す。如何なさいますか？」

そう言われ、蹇碩は苦虫を噛んだような顔をしながら、その場を後にしたのであった。

純「おい。」

兵士A「は、はっ!!」

純「さつきは怒鳴って悪かったな。」

兵士A「い、いえ。」

純「コレも作戦でな。申し訳なかった。」

兵士A「いえ、お見苦しいところをお見せしてしまいました。」

純「いいんだ。その代わり、街の治安では、頼りにしてるぞ。」

そう言つて、純は兵士の肩を叩いた。

兵士A「はっ!!」

この一件以来、法を犯す者はいなくなり、治安が一気に回復したのであった。

回想終了

純「・・・といった事があつた。」

季衣「スゴーい!! 悪い人を懲らしめたんですね!!」

春蘭「そうだぞ、季衣!!」

栄華「何故春蘭さんが誇るのですか? 命令したのは、お姉様とお兄様ですよ。」

純「はは。しかし、あの一件で、姉上の名が一気に広まったんだ。」

華琳「ええ。ついでに純の名前もね。」

純「しかし姉上、あの時の蹇碩の顔、傑作でしたね。」

華琳「ええ、見てて気分が良かったわ。」

純「はは。」

華琳「ふふ。」

秋蘭「しかし、流石に少し肝が冷えました。」

純「それは悪かったな、秋蘭。」

そう言つたら、秋蘭は純に寄り添うような形で近付いたのであつた。

燈「それより、急ぎませう。西園軍の任命式、遅れるとそれだけで印象が悪くなり
ますし。」

華琳「そうね。皆、急ぐわよ。」

そう言つて、朝廷に向かったのであつた。

29話

朝廷

季衣「ほへー……。」

純「……季衣。」

季衣「あっ！」

純（まあ、気持ちは分かるな……。俺も小さい頃父上に連れてかれた時はこんな感じだったもんな……。）

季衣の反応にそう思っていると、

秋蘭「純様。」

純「ああ。季衣、行くぞ。」

季衣「はい。」

秋蘭に言われ、純達は華琳から離れ、後列に向かった。そして、純は密かに辺りを見渡すと、

何進「……。」

呂布「……。」

田豊「……。」

純（何進、皇甫嵩殿、呂布、田豊もいる……。後董卓と賈コウもいるな……。）
と思つたのであつた。すると、

栄華「……ああ、この前仕立てさせたお衣装を着せたら、どれだけ似合う事でしょう……はあはあ。」

純「……栄華、止めろ。」

燈「純様の言う通りですわ。」

栄華がかなり危ない状態で董卓を見ていたのであつた。しかし、この広間には全体的にピリピリした空気が漂つており、

何進「……。」

特に苛立ちを隠していないのが、中央の椅子の脇に立っている何進であつた。その時、

??「遅くなりましたわ、失礼!」

と、高飛車な声が聞こえたのであつた。

何進「誰だ!名を名乗れ!」

袁紹「あら。この私に、名乗りが必要ですの……?」

と人を食った返事をしたが、

何進「……いいから早く席に着け、袁本初。」

と言ったのであった。

純（相変わらずだな、麗羽……。）

その様子を見た純は、そう思っていると、

何進「これで全員揃ったな。では、式典を開始する。」

何進「天子様の御前である。控えよ！」

といった声が聞こえたので、純達は平伏したのであった。その上から、

皇帝「……皆、此度は大義であった。今後も朕の西園軍を支える八校尉の一員とし

て、一層奮励努力するように。」

皇帝の気怠げな声が聞こえたのであった。

何太后「続いて、尚書令・劉協様。」

劉協「皆の者、お、面を上げよ。」

そうして顔を上げた。すると、

栄華「……まあ♪」

玉座の間に立っていたのは、栄華好みの少女であった。

数時間後

栄華「……まったく。なんですの、あの方々は。」

と、式典が終わった後、栄華は一番不機嫌さを露わにしたのであった。

純「まあ栄華、そう不機嫌になるな。」

栄華「しかし、お兄様は感じませんでしたの？あの大將軍というかたに……。」

純「まあ、確かにこの式典の大半を占めたのは、何進大將軍の演説だったしな。」

栄華「それに西園軍は天子様の軍なのです。それなのに、事あるごとに我が軍、我が軍と……。」

純（まあ、栄華が腹立つのも分からなくもないか……。）

栄華「お姉様はあのような方に仕えるために八校尉を拝領したわけではありませんのに！お兄様も同じ気持ちではありませんの！」

すると、

華琳「控えなさい、栄華。どこで誰が耳をそばだてているか分からないわよ。」

と華琳がたしなめたのであった。

純「そうだ。今は落ち着け、栄華。」

栄華「あ……失礼致しましたわ。私ったら、何をこんなに熱くなつて。」
すると、

董卓「いずれにしても、八校尉は名誉官職ですから。実際に軍があるわけではありませんし、恐らくはこの先も同じでしょう。」

と董卓は言った。

純「まあ、あれは本来、黄巾党に対抗すべく設立された軍だからな。」

董卓「はい、その通りです。」

春蘭「……。」

純（春蘭と季衣は、何が無礼なのか分かってねーと思うな……。ま、分かつたらメンドーなんだけどな……。）

すると、

春蘭「純様、何か失礼なことを考えませんでしたか？」

と春蘭に言われたのであつた。

純「いや、別に。」

栄華「でも、今日は春蘭さんは大人しくしていらつしやいましたわね。私よりも春蘭さんが怒るかと思ひましたけれど。」

春蘭「ふむ……、大將軍の物言いが腹立たしいのは間違いないが、それ以上に腑に落ちん事があつてな。……なあ、秋蘭。」

秋蘭「なんだ姉者。」

すると、

春蘭「どうしてあんな雑魚が大將軍を名乗っているのだ？」

春蘭がこの場で絶対に口にはいけない事を言つたのであつた。

純「春蘭……。」

すると、

季衣「あー。それ、僕も思いました。」

燈「季衣ちゃんまで……。」

季衣も春蘭の意見に同調したのであつた。

春蘭「だが禁軍数十万の頂に立つ大將軍だぞ？実力を隠している様子でもなし、あれなら十人束にしても季衣の方が強かろう。」

燈「隣に天子様の奥方がいらしたでしょう？あの方が、何太后。その姉君が、あの何進殿よ。」

純「お前ら、城を出るまで黙つてろ。」

華琳「純の言う通りよ。その話は帰り道でゆっくり聞くわ。」

春蘭「……はあ。」

季衣「……はーい。」

純「栄華、お前もだ。」

栄華「うう……、どうして私まで、このお二方と同列に……。
すると、

董卓「でしたら、孟徳殿。子元殿。この後はどうなさいますか？」

華琳「もう陳留に戻るわ。ここには、泰山府君にいくら寿命を伸ばしてもらつても足りそうにないもの。」

純「俺も同感だ。」

董卓「そうですね……。それでは、門の所までお送り致します。」

華琳「ええ、よろしくお願いするわ。」

董卓「今日はお会いできて光栄でした。今後も、朝廷のために力を尽くして下さいませ。」

華琳「こちらこそ。貴女と話が出来て、足を伸ばした甲斐もあったというものよ。」

董卓「後、子元殿。義真殿が、子元殿によろしくと。」

純「そうか……。」

その時、

純（賈☒がいねーな……。どこに行つた？）
と思つた純であつた。

しかし、それからしばらくが経ち、何進が暗殺され、その後董卓が実権を握つたといふ情報が入つた。そして、不正を働いた役人の大粛正を董卓が行つてると聞いた栄華は、精神的ダメージを受けたのであつた。

30話

何進が暗殺され、董卓が実権を握っても、仕事がある事には変わらない。

純「んじゃあ、コイツから片付けるか。」

稟「純様。私も手伝います。」

純「助かる。」

そう言つて、書類を開くと、

焰耶「お館、失礼します！」

と焰耶が純の部屋に入ってきたのであつた。

純「どうした、焰耶。」

焰耶「あの3姉妹の事で相談があるのですが。」

純「分かった。後でこの部屋に連れて来い。」

焰耶「了解しました！」

そう言つて、焰耶は部屋を後にしたのであつた。

純「さてと、仕事と・・・」

その時、

風「失礼します。」

今度は風が入ってきた。

純「風か。何の用だ？」

すると、

風「はい。先程風が街で見つけた優秀な子を武官として推薦したいのですが。」

純「ほお・・・。」

風「稟ちゃんも知ってる子ですよ。なんとって、一緒に旅をしてたのですから。」

稟「風、それってまさか・・・。」

風「はい。稟ちゃんのお察しの通りですよ。」

純「分かった。じゃあ、仕事が終わる次第、連れて来てくれ。」

風「了解です。」

そう言つて、風は部屋を後にした。

純「稟。風が推薦したい者は、それほど優秀なのか？」

稟「はい。私と風は、その者と共に旅をしていたのですが、普段は飄々としてて掴み所はないのですが、武芸は確かで、頭の回転も鋭かったです。私も是非純様に薦めたいです。」

純「そっか。お前と風がそう言うなら。」

稟「はい。」

そして、純は稟と一緒に書類を裁いたのであった。それからしばらくして、焰耶が3姉妹を連れて部屋に入ってきた。その内容は、舞台の説明と、彼女の事務所についての話しだったため、それに必要な費用について話し合い、3人に納得させて、3人はその場を後にした。そして、

純「焰耶。」

焰耶「はっ。」

純「近いうちに、大きな戦が起こるかもしれない。その日に備えて、訓練を徹底させて。」

焰耶「はっ。承知致しました！」

そう言つて、焰耶は部屋を後にしたのであった。そして、その入れ違いに風が入ってきた。その横には、蝶の羽の模様を浮かべた袖に白い服を着た少女がいた。

風「純様。こちらが風が推薦したい子なのですよう。」

純「うむ。初めまして、俺がこの苑州州牧の曹孟徳の弟である、曹子元だ。」

星「私は、姓は趙、名は雲、字を子龍と申す。此度は我が友である程昱殿の推挙と私自身の目を持つて貴方を我が主として仕えたい。」

純「趙雲とやら、お前の気持ちは分かった。しかし、何故俺なのだ。他にも有力な勢

力は多々ある。それに、もし我が軍に加わるなら、姉上に仕えるという選択もあるんだが。」

その問いに趙雲は、

星「……私は各地を旅し、我が槍を振るうに相応しい主を探していた。袁紹、袁術、孫策、公孫賛など……。だが、どの諸侯も私が槍を存分に振るえぬと思った。その時、ここにいる稟と風が仕官している曹操殿の弟である曹子元の噂を聞いて、旧友を深めようと思い、この陳留に訪ねてきた。そして、こうやって貴方の顔を見て思ったのです。我が槍を振るうに相応しいと。」

と答えたのであった。

純「……稟。」

稟「はっ。」

純「お前の言う通りだったな。」

稟「恐縮です。」

純「分かった。お前の任官を許そう。俺の真名は純だ。以後よろしく頼む。」

星「ありがとうございます。私の真名は星です。よろしく頼む、主。」

純「それで早速だが、姉上達にも紹介をしてもらおうのだが、良いか？」

星「はっ。構いませぬ。」

純「うむ。ではついて来い。稟、風、少し外す。」

稟「はっ。」

風「はい。」

そして、華琳達に星を紹介したのであった。その実力は確かであり、他の武官達はより一層鍛錬に気合を入れたのであった。

31話

陳留・大通り

焰耶「……平和だ。しかし、コレが本来あるべき姿なんだ。」

と焰耶は警備をしながらそう独り言を言った。たまに黄巾党の残党が現れても、訓練を積んだ兵達であつさり討伐できる。

焰耶（先日の軍議でも、都の董卓の話が話題になった。華琳殿とお館の話によれば、送った使者は会う事も出来なかつたらしい。警備の合間に都から来た隊商に話を聞くと、血生臭い宮廷の噂は切りがない。尚且つ、重税も課しているとか……）

しかし、

焰耶（実際に董卓には会っていないが、果たして、コレは本当に真実の情報なのか……？ 噂が全て真実とは言えない……。果たして本当は……。）

と焰耶はそう思いながら警備の仕事をしていた。その時、

?? 「あのお……、すいません。」

焰耶「む?どうした?」

声を掛けられた方に振り返った。

??「ちよつと教えて欲しいことがあるんですけど・・・構いませんか?」

焰耶「うむ。どこかに行きたいのか?」

??「えつと、お城・・・」

??「の前に、美味しい料理を食べさせてくれるところ、教えてくれよ!」

??「ちよつ!文ちやあん!」

文醜「いいじゃんか斗詩。あんなバカでかいもん、別に逃げはしないって。」

顔良「うー。まったくもう、しょうがないなあ・・・。」

文醜「それに、腹が減つては戦は出来ぬって言うだろ!まずは腹ごしらえだよ。な、姉ちゃんもそう思うだろ!」

焰耶「ふむ。それで、どちらを案内すれば良い?」

文醜「料理屋がたくさん並んでるところ!」

焰耶「・・・分かった。案内する。」

文醜「おお!姉ちゃん、気が利いてるじゃんか!」

と言われながら、焰耶は料理街に案内したのであった。

料理街

文醜「おおおーっ！斗詩、見ろよ！すげー！屋台がたくさんある！」

顔良「そりゃ、屋台通りっていうくらいだし……」

焰耶「では私はこの辺で……」
すると、

文醜「なんだよ姉ちゃん、あんたも一緒に食べていきなよ。どうせ昼飯、まだなん
だろ？」

と誘われたのであった。それには、

顔良「ちよつと、文ちゃん。悪いよ。」

文醜「気にするなつて。旅費ならたつぷりもらつてるんだし！」

顔良「だからつて、旅費ならなおのこと大事に使わないと……。帰つてから真直ちや
んに怒られるよ。」

顔良がたしなめたのであった。しかし、

焰耶「いや、別に構わない。ちよつど良い時間でもあるしな。」

と焰耶が言った。

文醜「なら決まり！姉ちゃん、どっかオススメのお店、教えてくれよ！」

焰耶「ふむ……。」

その時、

華侖「季衣！焰耶がいるっす！おーい！おーい！」

華侖が声を掛けてきたのであつた。

焰耶「華侖様に季衣。ちょうど良かった！」

華侖「あ、もしかしてお仕事で良かったっすか？」

季衣「……でも、ちょうど良かったってなに？」

焰耶「いや、この者達にオススメの店を紹介する事になりました、季衣はどこか心当たりあるか？」

季衣「この辺り？まかせてよー！」

文醜「ん？このちびっ子、詳しいのか？」

顔良「ちよつと文ちゃん、失礼だよ……。」

季衣「……焰耶。誰、このぼさぼさ。」

文醜「……ぼさぼさ……。」

焰耶「季衣、失礼だぞ。」

季衣「うー。」

顔良「文ちゃんも落ち着いてつてば。」

文醜「むうう……。」

焰耶「すまない。仲間が失礼なことを言つてしまつて。彼女はこの辺りの料理屋は非常に詳しいのだ。だから、良い店を教えてくれるはずだ。」

顔良「へええ……。良かったね、文ちゃん。」

文醜「……ふうん。こんなちびつ子が詳しいのかねえ。」

季衣「この街に来たばかりのぼさぼさよりは、詳しいと思うけどねー。」

文醜「なんだとう……！」

季衣「なんだよう……！」

すると、

焰耶「お前達、もし暴れるなら、こちらもそれ相応の対応をするぞ。」

と焰耶が2人に向けて少し殺気を出したのであつた。これには、

文醜「むっ……。」

季衣「うう……。」

2人とも大人しくなつたのであつた。

華侖「それはいいから、お腹すいたっすー。季衣ー。」

その発言に、

焰耶「・・・では、お主はどうする？」

と、焰耶は顔良に聞いた。

顔良「はい、ご一緒します。なんていうか・・・、すみません。」

焰耶「いや、こちらにも非がある。申し訳なかつた。」

季衣「いいよ！そつちのぼさぼさに、絶対美味しいって言わせてやるんだから！見てろよ！」

文醜「へっ。あたいの舌は厳しいぜ？ちびつ子程度の選んだ店で、そうそう美味しいなんて言わないっての。」

季衣「むーっ！」

文醜「しゃー！」

そして、季衣がオススメのお店に入っていったのであった。

料理店

文醜「うまーい！」

焰耶「うむ、確かに美味いな。」

文醜「斗詩も食つてみるよ！びっくりするほど美味しいから！」

顔良「もう食べてるよう・・・。」

季衣「へええ・・・お姉ちゃん、いい食べっぷりだねえ。」

文醜「そういうお前もなかなかじゃん。見直したぜ！」

そう言つて、文醜は顔良の肉を取つたのであつた。

顔良「ちよつと文ちゃん、私の分の肉取っちゃダメだよ！」

そして、

華命「あ・・・、あれ。あたしのお肉もなくなつてゐるつす！」

華命も取られてしまった。

文醜「それにしてもこれ、美味しいなあ。南皮でもこんな美味しい店、なかなかないぜ！」

お姉さん、おかわりー！」

季衣「僕もおかわりー！」

華命「あたしもおかわりつすー！」

??「はいはい！すぐ持つてきまーす！」

その食べっぷりに、

焰耶「なんか、季衣が2人いるみたいだ。」

顔良「はあ。私も、文ちゃんが2人いるみたいに見えます。」

焰耶「それで、お前達はこの街に何しに来た？見たところ、武人のようだな。それに、南皮という事は、袁紹の使者か？」

その問いに、

顔良「・・・流石ですね。しかし貴女もかなりの實力。恐らく私と文ちゃんが東になつてかかつて、あつさり返り討ちにあいますね。」

と答えたのであつた。それに焰耶は、

焰耶「私はまだまだ武人として未熟だ。さらなる鍛錬を積みまねば。」

顔良「そうですね。それで、この街に来た目的はですね・・・」

その時、

秋蘭「失礼する。」

焰耶「お館と華琳殿。それに秋蘭様も。」

純と華琳、そして秋蘭と喜雨がやって来たのであつた。

純「ほお。焰耶達も来ていたのか。」

華琳「そのようね。」

焰耶「喜雨も一緒か。珍しいな。」

喜雨「この店には、僕の回る村で獲れた野菜を卸してるんだよ。大口で定期的に買ってくれるお客さんがいると、村の収入が安定するからね。」

焰耶「・・・なるほど。」

華琳「焰耶。そちらの2人は？」

焰耶「美味しい料理屋を案内してくれって頼まれたので案内したら、こうなりました。」

純「相変わらずよく働くな。」

焰耶「いえ。これも全て民の為です。」

純「そっか・・・。しかし、時には休みを取りなよ。倒れたら元も子もないからな。」

焰耶「御意。」

そして、華琳は喜雨と、純は秋蘭と隣同士に座った。

??「あ、いらつしやいませ！曹操様、曹和様、夏侯淵様、今日もいつもののでよろしいですか？」

顔良「っ！」

文醜「・・・？」

秋蘭「うむ。純様もよろしいですか？」

純「ああ。それで頼む。姉上も良いですか？」

華琳「ええ。それでお願いするわ。」

喜雨「僕も同じもので。」

??「はいっ。すぐお持ちしますねー！」

そう言つて、給仕は厨房に向かった。

焰耶「お2人は、よく来るのですか？」

純「まあな。」

華琳「まだ若いのに、大した腕前よ。本当は城に欲しいのだけれど・・・」

焰耶「・・・断られたのですか？」

華琳「ええ。親友に呼ばれてこの街に来たのだけれど、結局合流出来なかつたらしいのよ。それで、手掛かりが見つかるまでここで働いているんですつて。」

焰耶「親友ですか・・・。この街も人はどんどん増えておりますし、名前だけじゃなかなか見つかりません。」

純「でも、なにか特徴があれば見つけられるやもしれぬぞ。」

焰耶「そうですね。では、聞いてみます。」

その時、

??「お待たせしましたー！」

その給仕が料理を持って来たのであつた。

焰耶「すまない。少し良いだろうか？」

??「はいっ。ご注文ですか？」

純「彼女がお前の友人を探してくれるそうだ。良かったら、特徴を言ってみたらどうだ。」

??「え、本当ですか？」

焰耶「そういうのが仕事だからな。その者は料理人か？」

??「いえ、食べる方は大好きなんですけど……、料理はさっぱりなんです。ただ、私を呼んでくれたって事は、料理のお店で働いてるんじゃないか……と。」

焰耶「その手紙には仕事の事は書いてなかったのか？」

??「住み込みの仕事が見つかったから、来いだけしか。ただ、私が呼ばれるくらいですから、彼女も給仕か、力仕事の裏方をしているのかと。力自慢の子なので。」

純（内容も内容だが、来る方も来る方だろ……。）

そんなことを純は思っていた。

焰耶「なるほど。食べるのが大好きな、力持ちか……。流石にそれだけじゃ、手掛かりが少なすぎる。」

焰耶「その者の名前は何という？真名じゃなくて良いぞ。」

??「ええっと、真名じゃない名前なら、許緒……。」

その回答に、

焰耶「……。」

純「……。」

秋蘭「……。」

華琳「……。」

喜雨「……。」

呆れつつ、季衣を見たのであった。

季衣「……にや？」

その時、

??「あーっ！」

その給仕が、季衣を見た瞬間、大声を上げたのであった。

季衣「あー。流琉ー♪どうしてたの？遅いよう。」

流琉「遅いよじゃないわよーっ！あんな手紙よこして私を呼んだと思つたら、なんで

こんな所にいるのよーっ！」

季衣「僕こそずーっと待ってたんだよ。城に来て書いてあったでしょー！」

流琉「お城って、ホントにお城だったの!?季衣の事だから、ずつとどこかの大きな建物をお城と思つてるのとはかり……。」

華琳「……純。」

純「……はっ。」

そして純は、

純「……ふうーはあー……。」

ゆつくりと殺気を出したのであった。これには、

季衣「……。」

流琉「……。」

季衣と流琉は、武器を下ろしてしまい、

純「季衣、給仕、そこまで。」

季衣「は、はい。」

流琉「す、すいませんでした。」

腰が抜けてしまったのであった。これには、

文醜「……。」

顔良「……。」

華命「……。」

文醜、顔良、そして華命も固まってしまったのであった。

純「姉上、止まりました。」

華琳「ええ。ご苦勞だったわね。」

純「御意。」

秋・焰「……ふう。」

華琳や秋蘭、焰耶は除いて。

純「それで、この陳留に何用で参つた。顔良、文醜。」

顔良「は、はい！主、袁本初より言伝を預かり、南皮の地より参りました。こんな場面で恐縮ではありますが、曹孟徳殿、曹子元殿、至急お目通りを願いませんでしょうか？」

華琳「……あまり聞きたくない名前を聞いたわね。」

純「はは。」

華琳「まあいいわ。席を用意させましょう。」

そう言つて、料理屋を後にしたのであつた。

謁見の間

華琳「袁紹に袁術、陶謙、公孫贊、西涼の馬騰まで……。」

純「こりや有名どころばっかだな。」

顔良「董卓の暴政に、都の民は嘆き、恨みの声は天高くまで届いていると聞いております。今も続く官の大粛正に、禁裏も血の臭いで満ちているとか……。」

文醜「それをなげいた我が主は、よをただすため、董卓をたおすちからをもつたしよこののかたがたに……。」

純「手本になるくらい見事な棒読み……。」

華琳「持つて回った言い方は止しなさい。あの麗羽の事だから……どうせ、董卓が権力の中樞を握ったことへの腹いせなのでしょう？」

これには、

顔良「う……っ。」

凶星の反応をしたのであった。

純「そういや、以前黄巾の討伐で董卓がそちらに出向いた時、麗羽は賄を要求したとか。どうせ断られた怨みも引きずってんじやねーのか？」

文醜「……げっ。」

華琳「大粛正とて、都で不正を働いていた官に行っただけと聞くわよ。どちらが悪か

は、判断の余地があると思うけれど？」

顔良「で、ですが・・・、官軍の中でも賢人の誉れ高い蘆植殿を幽州に流し、清廉潔白で通していた皇甫嵩殿もはるか西方の涼州に左遷したという話も・・・。」

純「・・・皇甫嵩殿の件は初耳だが、蘆植殿の流刑は何進が大將軍だった頃の話だろうか。」

文醜「・・・よく知ってますねー。」

純「良く聞こえる耳があると、知りたくねー事も入ってくるんだよ。それに、ウチには優秀な部下がいるしな。」

純（稟の奴、一体何人隠密がいるんだ・・・？）

燈「顔良殿、先程あげた諸侯の中で、既に参加が決まっている方々は？」

顔良「先程あげた挙げた皆様は既に。今も、流れを見ていた小勢力や、袁家に縁のある諸侯達を中心に、続々と参戦の表明を受けております。」

その時、

春蘭「おい。その中に、孫策という奴はいるか？」

と春蘭が尋ねた。

顔良「孫策・・・、ですか？文ちゃん、知ってる？」

文醜「んー。袁術様の所の怖い姉ちゃんかな・・・？」

春蘭「おお、それだ！」

顔良「その方なら、おそらく袁術様と一緒に参戦されるのではないかと。」

春蘭「華琳様！純様！」

桂花「春蘭、私情は控えなさい。個人的な借りを返すために参加するなど、愚の骨頂よ。」

春蘭「うぐ……。」

華琳「桂花。私はどうすればいい？」

桂花「はい。ここは参加されるのが最上かと……。」

春蘭「何だとう！貴様、私の意見は散々こき下ろしておいて、結局は賛成なのではないか！」

桂花「……当たり前でしょう。」

桂花「華琳様、純様。これだけの英傑が一挙に揃う機会など、この先あるとは思えません。ここで大きな手柄を立てれば、華琳様と純様の存在は諸侯の間で一層盤石な物となります。」

純「……姉上、この流れに乗るのも一興かと思えますよ。」

燈「はい。それに私達が動かなくても、既に周りは動いておりますし。」

華琳「そうね。顔良、文醜。麗羽に伝えなさい。曹操とその弟曹和は、その同盟に参

加する、とね。」

顔良「はっ！」

文醜「ありがとうございます！これであたい達も、麗羽様にお仕置きされなくて済みます。」

華琳と純達は参加を決めたのであった。そして、季衣と流琉の喧嘩も収まり、それぞれ真名を交換したのであった。

その夜、純の部屋

純は秋蘭と一緒に寢所の上で座っていた。

秋蘭「純様。董卓に関しての情報は、既に握っていたのでは？」

純「まあな。一応、稟に頼んでいたからな。以前八校尉の件で都に行く前から握っていたよ。」

そう言い、横になったのであった。

秋蘭「・・・そうでしたか。」

純「何だ秋蘭、そんな不満そうな顔して。」

秋蘭「いえ、何でもありません。」

すると、秋蘭は純の胸に両手を添えて、その両手の隙間に左頬を乗せ、覆い被さった。そして、

秋蘭「あつ……。」

純「そう妬くな、秋蘭。」

そう言つて、純は秋蘭の髪を指先で優しく梳いた。すると秋蘭は、少し上に行き、両手で純の頬に手を添え口付けをし、純の口の中に舌を入れたのである。純もそれに応えるかのように秋蘭の舌に自分の舌を絡め、秋蘭の背中に腕を回し、強く抱き締めたのである。すると、秋蘭も頬に添えた手を純の首に回し、2人は抱き合うような形になった。そして、そのまま2人は満足するまで、快樂に身を委ねたのであった。

32話

連合の参加を表明してから数日後、華琳と純達は兵を率いて出陣していた。そして、桂花「華琳様！純様！袁紹の陣地が見えました！他の旗も多く見えます！」
目的地まで目の前に着いた。

香風「華琳様。純様。向こうに馬の影ー。」

顔良「曹操様！曹和様！ようこそいらつしやいました！」

華琳「顔良か。久しいわね。文醜は元気？」

顔良「はい。元気すぎるくらいですよ。」

純「それは結構な事だ。・・・それで、俺達はどこに陣を張れば良いんだ？案内してくれ。」

顔良「了解です。それから曹操様、曹和様。麗羽様がすぐに軍議を開くとの事ですの
で、本陣までおいでいただけますか？」

華琳「分かったわ。栄華、顔良の指示に従って陣の構築をしておきなさい。それから
桂花は、どこの諸侯が来ているのかを早急に調べておいて。」

栄華「かしこまりましたわ。」

桂花「御意。」

純「焰耶、お前も顔良の指示に従って陣の構築をしておけ。風達も、焰耶を手伝ってくれ。星は久し振りの実戦だが、気負わずにな。」

焰耶「御意。」

風「はっ！」

真桜「任しとき！」

沙和「了解なのー！」

星「かしこまりました、主。」

華琳「純、春蘭、燈は、私に付いてきなさい。」

春蘭「はっ！」

純「分かりました。秋蘭も付いてこい。」

秋蘭「了解です。」

そして、本陣に向かったのであった。

連合軍本陣

華琳と純達が天幕に入ると、

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

耳に響く高笑いが聞こえた。

純「……この高笑い、久し振りですね。」

華琳「ええ。相変わらずね。その耳障りな笑い声……麗羽。」

袁紹「華琳さん。純さん。よく来てくださいましたわ。」

純「お前も息災のようだな、麗羽。」

袁紹「ええ、純さんもお元気そうで。しかし、純さんは華琳さんと違って、相変わら

ずお優しいお方ですわね。」

純「……どうも。」

そう言つて、純は麗羽に対し、比較的穏やかに対応していたが、

華琳「……。」

華琳は心底嫌そうな顔をしていたのであった。

袁紹「さーて。これで主要な諸侯は揃つたようですよわね。華琳さんがびりつけつです

わよ、びりつけつ。純さんが可哀相ですよわ。」

と、華琳は麗羽に言われたが、

華琳「……はいはい。」

華琳はスルーしたのであった。これには、

純「……。」

秋蘭「……。」

純と秋蘭は、完全に諦めモードであった。

袁紹「それでは最初の軍議を始めさせていただきますわ！」

袁紹「知らないお顔も多いでしょうから、まずそちらから名乗っていただけますこと？ ああ、華琳さんはびりっけつですから、一番最後で結構ですわよ。本当に純さんが可哀相ですわ。おーっほっほっほっほ！」

純「……つたく。」

燈「お察し致します。」

純「……どうも。はあ……。」

そして、それぞれ自己紹介を始めた。

公孫贊「幽州の公孫賛だ、よろしく頼む。今回は徐州の陶謙殿の軍と連合で参加させていただく。徐州からは……」

?? 「雷々だよー！」

?? 「電々ですよー！」

公孫贊「……おい、お前達！ここで名乗るときは真名じゃなくて名前を名乗れとあれほど……」

糜竺「あ、そうだった……」

糜芳「電々、間違えちやつた……」

公孫贊「……良いからやり直せ。」

糜竺「ええつと、陶謙様の名代で来た、雷々……、じゃなくつて、糜竺だよ！徐州の軍を率いるよ！よろしくー！」

糜芳「その補佐の、糜芳です……えへへ、ちゃんと出来た！」

袁紹「……いつからここは年少の私塾になりましたの。」

華琳「……陶謙殿の発言力も衰えたと聞いていたけれど、人材も不足しているよね。」

袁紹「まあ結構ですわ。次の方！お願い致しますわ。」

劉備「あ……、はい。平原から来た劉備です。そして北郷一刀と、軍師の諸葛亮。」その瞬間、場がざわめき、いくつもの視線が劉備達に向けられた。

劉備「……ひあつ。」

北郷「……うおつ。」

それは……、彼女達を値踏みする視線であり、中にはため息をつく者もいた。

諸葛亮「桃香様……」

劉備「あつ、う、うん。ええつと、私達も、幽州と徐州の連合に入れさせていただけます。よろしくお願いします！」

すると、

袁紹「まあまあ、貴方が噂に聞く天の遣いという方でしたのね。北郷なんとかと聞き慣れないお名前でしたから、西からいらしたのかと思いましたが……なるほどねえ。」

袁紹「……けれど、随分と貧相な格好ですのね。天のお方と名乗るなら、もつとそれらしい装いや身なりというのものもあるでしょうに。」

と麗羽に言われてしまったのであった。

馬超「涼州の馬超だ。今回は母の馬騰の名代としてここに参加することになった。」

馬鉄「補佐を務める馬鉄です。よろしくお願ひします。」

袁紹「あら、馬騰さんはいらっしゃいませんの？」

馬超「最近、西方の五胡の動きが活発でな。袁紹殿にはくれぐれもよろしくと言付かつてるよ。」

袁紹「あらあら。あちらの野蛮な連中を相手にしては落ち着く暇がありませんわねえ……。」

馬超「……ああ。すまないが、よろしく頼む。機動力のある相手なら任せてくれ。」
袁術「袁術じゃ。江南を治めておる。まあ、皆知っておろうかの！ほっほっほ！」
張勳「私は美羽様の補佐をさせていただいています、張勳と申します。こちらは客將の孫策さん。」

孫策「……。」

孫策は立ち上がって、黙礼を一つしてそのまま座つたのであつた。

春蘭「……むっ。」

純（孫策、久し振りに見るな……。雰囲気は親譲りか……。）

そして、

袁紹「次。びりつけつの華琳さん、お願いいたしますわ。」

華琳達の順番になつた。

華琳「……典軍校尉の曹操よ。こちらは弟の曹和、そして夏侯惇、夏侯淵、陳珪よ。」

その瞬間、劉備の時以上に注目されたのであつた。

孫策（へえ）。あれが曹操の弟であり、軍神と言われている曹和か。噂以上の男ね。

母様以上の覇気と王の器を感じるし、少しでも気を抜けば跪いてしまいそうだわ。）

馬超（久し振りに見たけど、また強くなつてな……。あの日のこと、覚えてい
だろうか……。）

劉備（曹和さん……。あんなことをするような酷い人も参加しているなんて……。それじゃあ姉の曹操さんもそういう人なんだ……。）

北郷（曹和めえ……。）

それは興味、懐古、そしてとある者からは失望と憎悪といったそれぞれの視線で混ざっていた。

袁紹「さて、それでは……。最後はこの私、袁本初ですわね！」

袁紹も自己紹介をしようとしたのだが、

華琳「それは皆知っているから、いいのではなくて？」

純「確かに。」

公孫賛「だな。有名人だから、みんな知ってるだろ。」

袁紹「そ、それはそうですけれど……っ！」

糜竺「雷々も知ってる！」

糜芳「電々もー！」

馬超「軍議を円滑に進めるための名乗りだろう？なら、いらないんじゃないか？」
と言われたのであった。

袁紹「うう……。三日三晩考えた名乗りですのに……。」

純（それ、ゼッターなげーやつだ……。）

袁紹「ま……まあ、仕方ありませんわね。それだけこの私が名を知られているという証ですわ！おーっほっほっほ！」

袁紹「では、紹介も終わりましたし、軍議を始めさせていただきますわ！」

袁紹「僭越ながら、進行はこの私！わ、た、く、し！三公を輩出した袁家の長、袁本初が行わせていただきますわ！」

袁術「むう……、袁家の長は、この妾じゃぞ。」

純「さっさと始めろ。」

田豊「あ、袁紹様の補佐は、不肖この田豊が務めさせていただきます。」

袁紹「さてでは、最初の議題ですけれど……、このわ」

公孫賛「現状の目的と確認だろ？」

袁紹「え……ええ、そうですね。この私が集めた、反董卓連合の目的ですけれど……」

華琳「都で横暴を働いているという董卓の討伐、でいいのよね。」

華琳「西園軍の任命式の頃は中郎将だったはずだけれど、今はどれだけ官位を上げているの？」

袁紹「さあ？どうせ大した役職では……」

しかし、

公孫賛「聞いた話だと、相国だそうだ。」

劉備「はい、袁紹さん！私もそう思います！董卓さんを倒して、都に住んでる人達を助けましょう！」

純（まさか劉備の奴、都の情報を取ってないのか・・・！この様子じゃ、董卓が悪だと言うことも信じてそうだな。恐らく北郷も。諸葛亮は何をしていたんだ・・・？）

袁術「おのれ董仲穎。西涼の田舎者と思うておれば・・・。」

馬超「・・・あの。あたしの故郷も西涼なんだが。」

馬鉄「聞こえてないみたいだよ。」

華琳「なつてしまったものは仕方ないわ。理由は何であれ、朝廷をほしいままにする董卓は誅しなければならぬ。・・・次の議題は何かしら？」

その後、都までのルートや配置、先鋒を決め、そして、総大将が袁紹と決まり、解散となったのであった。

陣外

春蘭「孫策！」

孫策「あら・・・、久し振りね。どうしたの？」

春蘭「うむ。我が主が挨拶したいと……。」

孫策「……苑州の曹操が？」

華琳「私の名、知ってくれているのね。光栄だわ。」

孫策「弟の曹和も。」

純「へえ、俺の事もか。」

孫策「黄巾の首謀者を討った曹孟徳とその弟曹子元の名前くらいは、さすがに知っているわよ。尤も、曹和は黄巾の戦以前に有名だったけど。」

華琳「なら、話が早いわ。先日はうちの部下が随分と借りを作ってしまったようね。」

孫策「借りねえ。……盗賊退治も手伝って貰ったし、楽させて貰ったから別に良いんだけど。」

純「そうはいかねーよ。」

華琳「ええ。この借りは折を見て、必ず返させて貰う。よく覚えておいて。」

孫策「……この戦いで？」

純「さあな。この戦いか。」

華琳「この先の別の機会か……。」

孫策「そ。まあ、期待しないで待っておくわ。」

すると後ろから、

袁術「孫策！何をしておる、早う来やれ！そのような宦官の孫と話しておるでない！」と袁術の声が聞こえたのであった。

孫策「ちつ……、うるさいわねえ。……それじゃ、袁術が呼んでるから行くわ。」

華琳「ええ。」

純「ではな。」

そして、孫策は袁術の所に向かったのであった。

春蘭「華琳様……。純様……。」

華琳「さすが江東の虎の娘。純と春蘭の言ったとおりの人物のようね。」

すると、孫策の向こうで袁術が純達に向かつて、あかんべーをしたりしたのであった。

純「……姉上。俺達、袁術に嫌われるような事しましたっけ？」

華琳「知らないわ。春蘭が勝手に立ち入った件でそこまで腹を立てるとは思えないけ

れど……。」

燈「あれは……。私でしょうね。」

と燈が言った。

華琳「燈が？」

純「何したの？」

燈「以前、袁術が沛を揚州に取り込もうとした事がありました。……それを断った

私が自ら華琳様と純様の元に下ったものですから、悔しいのでしよう。」

春蘭「……沛の兵が孫策を退けたというのか？あの弱卒が？」

燈「まさか。力に出られたら、勝てる見込みもなかったわ。」

純「まあ、戦は戦場だけじゃねーからな。ですよね、姉上。」

華琳「そうね。それはそうと貴方、劉備達に随分と嫌われてるように感じたけど……。」

純「あれは、以前姉上の名代として俺が青州に出陣して、皇甫嵩殿と共に賊を殲滅した時なのですが……。」

そう言つて、純は青州の件を話した。

華琳「何よそれ。貴方は全く間違つてないじゃない。」

純「はい。俺も何故責められたのかよく分かんなくて……。軍議の場にはいませんでしたが、関羽が必死に止めてましたよ。」

華琳「……そう。劉備つて子、相当な甘ちゃんね。あの天の遣いとやらも……。」

純「はい。しかし、今後俺達にとって、大きな敵になるやもしれません。理想とは、一種の美酒と同じですから。」

華琳「そうね。さて、私達の陣に戻るわよ。」

そう言つて、陣に戻つたのであつた。

曹操軍陣営

桂花「汜水関は公孫賛と劉備ですか……」

華琳「ええ。連合の初戦、我々で引き受けた方が良かったかしら？」

桂花「いえ。汜水関の将は華雄一人です。それほど強い相手ではありませんし、無駄な力を使うこともないでしょう。」

純「使うなら、虎牢関だな。呂布に張遼がいる。」

桂花「はい。」

華琳「天下の飛將軍呂布と、神速の用兵を使う張遼か。」

桂花「黄巾の時は何進や袁家に振り回されて苦労していたようです。」

純「しかし、本来なら一筋縄ではないかな強敵だ。」

春蘭「それは確定情報なのか？桂花。」

桂花「さつき戻ってきた斥候の情報だから、今のところの最新情報ね。純様も、稟から同じ情報が届いたのでは？」

純「ああ。俺も同じ情報が入ってる。」

華琳「ならその情報、あとで公孫賛と劉備の所にも送ってやりなさい。」

桂花「・・・よろしいので？」

華琳「公孫賛は小物だけれど、麗羽と違って借りを借りと理解できる輩よ。」

華琳「劉備というのは純の話で些か疑問だけれど、まあ送っておきなさい。」

桂花「承知致しました。」

その時、

凧「お話中、失礼します。純様、華琳様、報告が・・・。」

純「何だ？また麗羽が無理難題でも言ったのか？」

凧「いえ、そうではなくて・・・、袁術殿が先行して勝手に軍を動かしたそうです。」

と凧が報告したのであった。

純「・・・。」

春蘭「先鋒は誰だ？」

凧「先鋒は孫の旗。恐らく孫策殿かと・・・。」

華琳「・・・孫策の考えではないのでしょうかね。」

純「はい。袁術の独走では・・・。」

桂花「それか功を焦ったか、袁紹に張り合ったかどちらかでしょう。」

春蘭「華琳様！純様！今こそ過日の借りを・・・！」

華琳「今はまだ返すべき時ではないわ。」

純「そうだ。それを孫策は望んではいねーはずだ。・・・自制しろ。」

春蘭「しかし！」

華琳「孫策を助けるには軍を動かすことになるわ。」

純「そうなれば俺達は麗羽から不興を買うし、助けられた孫策も袁術の不興を買ってしまう。それでは借りを返すどころか、貸しの上積みになる。」

春蘭「・・・むう。」

華琳「純の言う通りよ。今は自制なさい。彼女の力が本物なら、いずれ十倍・・・いえ、百倍にして返せる時が来るでしょう。」

春蘭「・・・承知致しました。」

華琳「桂花。この戦の結果も、一緒に公孫贄に送ってやりなさい。共有して損のない情報は遠慮なくね。」

そう言って、公孫贄と劉備に最新情報を送ったのであった。

幽州・徐州連合軍陣幕

北郷「曹操と曹和んとこから情報が流れてきた？」

公孫贊「ああ。使者の兵が雷々や桃香の所にも行くって言ってたから、どうなのかなと思ってたから、どうなのかなと思ってる。ちよつと来てみたんだけど。」

糜竺「そうそう。雷々の所にも来たよー！」

糜芳「で、貰った資料がこれなの。」

劉備「うん。私達もその話をする所だったんだけど・・・、どう思う？みんな。」

関羽「私は、この情報を信じてても良いと思います。現に、孫策が攻略に失敗したという情報も確認してますし。」

諸葛亮「はい。私も愛紗さんの言う通りだと思います。曹操さんと曹和さんは野心の塊ですし、敵には容赦しないでしょうが・・・、袁家のお二人のように味方の足を引っ張って、自らの評判を落とすような方々でもないはずですよ。」

張飛「華雄って、そんなに強いのだ？」

諸葛亮「どうも袁術さんの側も一枚岩ではないようで・・・。孫策さんの隊に、袁術さんからの糧食の補充がなかったそうです。」

公孫贊「・・・はあ？なんだそりゃ。」

張飛「お腹が空いたら戦えないのだ！」

諸葛亮「ともかく、そのあたりの細かい情報も、こちらと一致しています。」

関羽「そうか。では本命は・・・」

諸葛亮「はい。こちらに貸しを作っておきたいのと・・・、恐らく愛紗さんの考える通りだと思います。我々の実力を測りたいのだと。」

北郷「くそっ!!ふざけやがって!!」

関羽「ご主人様!」

劉備「と、ともかく、この情報は正しいと思って良いんだよね?」

諸葛亮「はい。当面の作戦は、曹操さんと曹和さんの情報が正しいことを前提に立て、違っていた場合も対応出来るようにしておきます。」

劉備「うん。それで行こう。そして、この董卓っていう悪い人を倒して、圧政に苦しんでる人達を助けよう!」

北郷「ああ! そうだな、桃香!」

劉備「うん!」

すると、

関羽「しかし、この連合は権力争いの線もありえます。ましてや書状と噂で全てを鵜呑みにしては・・・」

と関羽は言ったが、

北郷「愛紗!! それじゃあ俺の天の情報に信じないって言うのか!!」

関羽「い、いえ、私はそういう意味で言ったわけでは・・・」

桃香「そうだよ愛紗ちゃん! なんとたつて、風鈴先生を追い出して、中郎将様を西方の涼州に左遷して、沢山の人を殺してゐるんだよ!! 絶対に悪い人に決まってるよ!!」

と劉備と北郷に言われてしまった。

関羽「し、しかし・・・!!」

その時、

諸葛亮「愛紗さん・・・!!」

公孫賛「愛紗・・・!!」

諸葛亮と公孫賛が関羽を止めた。

関羽「朱里・・・!! 白蓮殿・・・!! くっ・・・!!」

関羽（ご主人様・・・!! 桃香様・・・!! 何故私の意見を聞こうとしないのです・・・!!）と唇を噛みしめながら俯いてしまったのであった。

33話

汜水関

焰耶「・・・噂には聞いていたが、高いな。」

星「そうだな。」

その巨大な砦の足元に展開しているのは、幽州と徐州、そして劉備の連合軍。連携の撮れていない反董卓連合には珍しく、それぞれの隊はお互いを助け合うような動きを取っている。

凧「・・・始まったな。だが、本当に見ているだけでいいのか？」

焰耶「いいんだ。指示あるまで戦闘態勢のまま待機が、お館と華琳殿、特にお館の命だ。」

真桜「ま、今んところはこっちが有利みたいやし、大丈夫やろ。」

その時、

沙和「あれ？門が開いて、砦から兵士が出て来たの・・・。」

城門が開いて、兵士が出て来たのだ。

焰耶「・・・定石で言えばこの場は籠城だ。勝てないまでも、負けはないはずだぞ。」
星「確かに、基本はそうだからな。」

凧「先ほど劉備陣営の将が何か言っていたようだし、挑発にでも乗ったんだろう。」

真桜「守備隊の将ってどんだけアホやねん・・・。」

凧「む。あの先頭にいるのは・・・。」

真桜「知つとるんか、凧。」

凧「・・・ああ。確か、華雄將軍だ。前に黄巾党に包囲されている所を助けた事があ
る。」

焰耶「・・・そうか。む、劉備陣営からも出て来た。・・・あれは、関羽か。」

沙和「きれいな黒髪なのー。」

星「中々の鬪気だな。」

凧「焰耶、知ってるのか？」

焰耶「ああ。以前青州に出陣した時に会った事がある。」
すると、

秋蘭「劉備陣営の中で、一番筋の通った武将だ。」

と秋蘭が柳琳と一緒にやって来た。

焰耶「秋蘭様、柳琳様。」

凧「お二人とも、どうしてこんな所に？」

秋蘭「あまりに暇なのでな。伝令役を買って出た。」

焰耶「お館は何と？」

柳琳「汜水関が破られたら、ただちに進撃を開始して下さい。劉備さん達が様子見で引いた隙を突いて、一気に関を抜けるそうです。」

秋蘭「うむ。その後、散り散りになった敵に追撃をかける。」

真桜「敵の罨やったら？・・・あ。」

すると、守備隊の将が馬の上から落とされたのであった。

秋蘭「・・・今討ち取られたのが汜水関の総大将だ。自分から飛び出したのもそうだが、そのうえこのまま討ち取られるようなら・・・、そう器用な作戦が立てられる輩とも思えんな。」

と秋蘭が呆れ顔で言ったのであった。

焰耶「今が好機です。」

秋蘭「うむ。こちらでも移動を開始するぞ。もうすぐ姉者が突っ込んでくる手はずになつているから、柳琳と一緒にうまく流れに乗るがいい。」

焰耶「分かりました。総員、移動を開始せよ！あの門が閉まるまでに無理矢理ねじ込

め！」

兵士「「おおーっ!!」」

そして、汜水関は難なく抜ける事が出来たのであった。

連合軍本陣

袁紹「華琳さん！何を考えていらっしやいますの！」

華琳「劉備達は戦闘直後で、いったん矛を引いた形だったわ。そこで反撃を受けると
 厳しいだろうと判断したから、追撃を引き受けようと思ったのだけれど？」

純「麗羽、現場判断だった故、連絡が行き届かなかった。申し訳なかった。」

純「だが、汜水関を一番に抜けたかったという風に見えてしまったのは否定しない。
 けれど、敵軍の追撃が主な目的だったのは確かだ。分かってくれ。」

と純は麗羽に謝罪した。

華琳「純もこう言っているのだし、それでいいのではないかしら？」

袁紹「ぐ、ぐぬぬぬぬぬぬ……っ！分かりましたわ！純さんのお顔に免じて、今回

は大目に見ますわ！」

純「助かる。その代わり、詫びと言っちゃ何だが、次の虎牢関一番乗りは、麗羽が取つても構わない。」

華琳「ただ……、追撃が必要になった場合、誰かに引き受けて貰えると助かるわね。」

袁紹「なら、私……」

華琳「錦馬超、あなた達はどうか？」

袁紹「……ッ！」

馬超「ああ、あたし達は遠慮しとくよ。野戦ならいくらでも引き受けるけど、砦攻めは得意じゃないし、わざわざ残党を追い回すだけつてのもなあ。」

華琳「そう。なら、他に誰かいないかしら……。袁術は来ていないし。」

袁紹「で、でしたら、追撃は私が引き受けてもよろしくてよ！虎牢関の一番乗りは、今度こそ私達袁家一門ですわ！」

華琳「……はいはい。なら、それでいいわね。」

純（相変わらずチョロいな……。）

そして、華琳と純は一緒に天幕を出た。

曹操軍陣營

桂花「お帰りなさいませ、華琳様！純様！いかがでしたか？」

華琳「虎牢関攻略の指揮権は引き受けてきたわよ。これで良いのね、桂花。」

桂花「はい。ここで呂布と張遼を破れば、華琳様と純様の名は一気に高まるでしょう。それは華雄ごときの比ではありません。」

純「後姉上、もし張遼を我が陣營に引き入れたいのなら、春蘭が最適ですよ。」

華琳「あら、どうして私が張遼を欲しいと思つてしていると気付いたのかしら？」

純「初めて会つた時から欲しそうな顔をしていたではないですか。」

華琳「相変わらず鋭いわね。なら、どうやったら捕まえられるかも考えているのでしよう。」

純「はい。彼女の強みは個人の武よりも用兵です。兵を奪い取つた上で捕らえるのであれば、兵は桂花が。張遼は春蘭が何とかしてくるでしょう。」

桂花「お任せ下さい！」

しかし、

春蘭「わ……、私ですか!？」

まさか自分が言われるとは思わなかったのか、春蘭は驚いていたのであった。

華琳「あら、してくれないの？春蘭。桂花はしてくれるようだけれど？」

桂花「・・・ふふん。」

春蘭「くうう・・・っ！張遼ごとき、ものの数ではありません！十人でも二十人でも、お望みの数だけ捕らえて参りましょう！」

純「よし。張遼は桂花と春蘭に任せる。見事捕らえてこい！」

春・桂「はっ！」

そして、軍議は終わり解散となった。純はすぐさま自分の天幕に戻った。戻ってすぐに、

純「稟。」

稟「はっ！」

稟を呼んだ。

純「お前の隠密にこの手紙を持たせて、洛陽の董卓に渡して返事を貰ってきてくれ。」
と言つて、稟に手描きの手紙を渡した。

稟「これは一体・・・。」

純「説明は後です。すぐに頼む。」

稟「分かりました。」

そして、稟は隠密にその手紙を渡したのであつた。

洛陽・朝廷

董卓「天子様。お茶が入りましたよ。」

献帝「うむ。・・・苦勞であるな。」

董卓「ここは私しかいませんから、構いませんよ。白湯様。」

献帝「・・・ん。」

その時、

隠密A「ご無礼つかまつり、申し訳ございません。董卓殿と天子様ですか？」

董・献「!!」

稟の隠密が、董卓と献帝の前に現れた。

董卓「貴方は誰ですか？」

隱密A 「自分は曹和様の軍師郭嘉様の隱密でございます。曹和様の命により、手紙を届けに参りました。」

そう言つて、董卓は手紙を受け取り、読んでいった。ある程度読み終えると、

董卓 「本当ですか？」

献帝 「月？」

董卓 「私や詠ちゃん達、そして白湯様らを助けるのは？」

隱密A 「自分は手紙を渡してこいと言われましたので。」

月 「では、この話を受けたのですが、詠ちゃんと話してみます。」

隱密A 「かしこまりました。」

董卓 「その代わり、条件があります。」

隱密 「何でしょう。」

董卓 「私に付いてきてくれた人達の中に故郷に帰りたい人もいます。ですの
で、その人達を涼州まで帰してください。」

隱密A 「・・・分かりました。主にお伝えしましょう。」

そう言つて、隱密はその場から消えた。そして、董卓は賈コウ達と話し合い、純の話を飲んだのであつたが、呂布と陳宮、そして張遼はその時戦場において手が離せなかつたため、この話が出来なかつたのであつた。

曹和隊陣営

稟「純様。隠密が戻りました。その際、条件付きで申し出を受け入れるとか。」

純「その条件は？」

稟「董卓軍の中で、故郷に帰りたい者を帰して欲しいとの事。」

純「分かった。その件は馬超に頼もう。他には？」

稟「いえ、特には。」

純「分かった。」

稟「純様、どうしてこのようなことを？」

純「ああ。この作戦はな・・・」

そう言つて、純はとある作戦を伝えた。それを聞いた稟は驚いていたが、すぐにいつもの冷静な顔になり、納得したのであつた。

翌日・曹操軍陣営

華琳「では、昨日話した作戦通りに行くわよ！」

全員「「はっ!!」」

純「流琉は、この戦が初陣だったな。汜水関では遠巻きに見ていただけだったが、実際に相手を目の前にして、どうだった？」

流琉「正直・・・、ちよつと怖いです。熊や虎を退治した事がありますけど・・・。」

純「・・・そうか。」

華琳「・・・まるで貴方ね。」

季衣「大丈夫だよ！僕も一緒に戦うから、頑張ろう。ね！」

流琉「うん！」

純「大丈夫のようだな。では、かい・・・」

しかし、

華琳「の前に、純、あなた私に報告しなければならぬ事があるんじゃないかしら？」
と言った。

純「……何故そう思ったのですか？」

華琳「あなたが私のことを理解しているように、私もあなたのことを理解しているのよ。」

純「……分かりました。俺は、天子様だけでなく董卓も助けようと思う。」

その言葉に、華琳以外の皆は驚いた。

華琳「どうしてかしら？」

純「今回の戦は、麗羽の腹いせが原因です。董卓に非はありません。それどころか、彼女は洛陽を平和にしようとしております。そのような者を殺すなど俺には少し気が引けます。」

華琳「けど、もし董卓を助けたことがバレたら、連合は私達の所に矛を向けて来るわよ。」

純「だから彼女には表向きは死んで貰います。洛陽に火を放ち自害した事にします。そうすれば、怪しまれないと思います。それに、上手くいったら彼女の領土の西涼が手に入るかもしれません。」

その言葉に、流石の華琳も驚いた。

華琳「あなたって、時には思い切った事をするわね。でも、それには董卓が了解した場合でしょう。そう簡単に了解するとは思えないけど。」

純「それでしたらご心配なく。既に了解を得ております。条件付きで。」

桂花「えっ!!」

燈「・・・!!」

華琳「その条件とは？」

純「董卓軍の中で故郷に帰りたい者は帰して欲しいと。」

華琳「それをどうやって帰すのかしら？」

純「馬超に頼み、一緒に連れて帰って貰います。」

そして、

華琳「・・・そう。そこまで考えているのなら、もう何も言わないわ。あなたに任せ
るわ。」

純「ありがとうございます。では、俺は馬超に話をつけてきます。」

そう言つて、純は焰耶と一緒に馬超の陣に向かった。その際、華琳達は純は曹操軍に
とつて、なくてはならない存在である事を改めて再認識したのであった。

涼州軍陣営

純「失礼。馬超殿に会いたい。」

兵士A「名前を聞いてもよろしいでしょうか？」

純「典軍校尉曹孟徳が弟、曹子元と申す。こっちは部下の魏延。」

兵士A「分かりました。少々お待ち下さい。」

そう言つて、天幕の中に入った。そして天幕から出て来て、

兵士A「お待たせしました。馬超様がお会いになるそうです。」

そう伝えた。そして、純達は天幕に入った。

純「突然の訪問にもかかわらず会つていただき、ありがとうございます。典軍校尉曹孟徳が弟、曹子元と申す。こちらは部下の魏延と申す。本日はお願いがあつて参りました。」

馬超「別に構わんよ。それで願ひとは？」

純「実は……」

そう言つて、純は董卓に関わることを全て言つた。馬超はその条件を受け入れたが、これには馬超の母である馬騰も一枚噛んでいたことに驚いていた馬超と、その妹の馬鉄であつた。そして、天幕を出る際、

純「そう言えば馬超。」

馬超「ん？」

純「あの日から槍の腕は上げたか？」

と純は馬超にそう言った。それに対し馬超は、

馬超「!!ああ、あの日から一度も鍛錬は怠っていない!!」

純「そうか。・・・ではな。」

そう言って、純は天幕を後にした。その時の馬超の顔は、非常に嬉しそうであったと、後に馬鉄は振り返って言っていたのであった。

34話

曹操軍陣營

凧「報告っ！城の城門が開きました！」

華琳「見えているわ。」

純「ああ。なら、聞け！皆の者！今までよく頑張った！ここが最後の正念場！この戦いに勝てば、長い遠征を終え、故郷の地を再び踏む事が出来るだろう！」

華琳「けれど、もし奴らをあの城の中に押し戻してしまつたら、この遠征は永劫に続くこととなる！」

純「我らが平和を、我らが天子様を、禁城をほしいままにする逆賊どもから取り戻すのだ！総員、戦闘用意！」

桂花「門より敵部隊出撃！突撃してきます！」

華琳「・・・さあ、誰が私達の相手をしてくれるのかしらね。純！」

純「はっ！総員、突撃いっ！」

そして、この戦の最終戦が始まり、一進一退の攻防となったが、次第に董卓軍が押され始めたのであった。

霞「く……つ。やっぱ、この戦力じゃ厳しいか！恋ともはぐれてもうたし……。」
すると、

公孫賛「待てえっ！張遼！」

と公孫賛が追ってきたが、

霞「待てるかボケ！」

公孫賛「何……、この私が馬術で追いつけんだと……!？」
軽くかわされてしまったのであった。

馬超「どけどけどけええっ！張文遠、その首、この西涼の錦馬超が貰い受ける！蒼、号令！」

馬鉄「とうとう念願の野戦だよーっ！みんな、張り切っていこーっ！突撃いいーっ♪」
公孫賛「……ああもうっ！城攻めの疲れが残ってなけりや、西涼の奴らなんかにまで後れを取ったりしないのに！」

糜竺「あ、白蓮さんだ！大丈夫ー？」

公孫贊「大丈夫じゃないよ！」

糜芳「あのねー。電々達、さつきまで城攻めしてたでしょ？桃香ちゃんが、疲れてるならウチの隊と交代していいって。」

公孫贊「いや・・・、大丈夫だ。」

糜竺「さつき大丈夫じゃないって言ったのに・・・。」

公孫贊「私はまだやれる！戦えるぞーっ！ものども、進め、進めーっ！」

糜竺「あ、待ってよー！」

糜芳「待ってってばー！」

しかし、それらも撒いた張遼。

霞「・・・やれやれ。西涼の連中も、やっと撒けたか。」

霞「けど、どう見てもこっちの負けやなあ・・・。月と詠、上手く逃げられたやろか。」
すると、

春蘭「待て！貴様が張遼かつ！」

春蘭が張遼の前に現れた。

霞「あちやあ・・・、このクソ忙しいときに。一騎打ちの申し込みなら、もう締め切つとるで！」

春蘭「そんなことは知らん！否というなら、私との勝負に応じるまで追いかけるまで

だ！」

霞「その目……、アカンつちゆうても仕掛けてくる目やな。」

春蘭「……ふむ。貴様の目も、剣に映る私の目と同じように見えるが？」

霞「……なんや、そうか。あー。あかんなあ。自分の事は、出来るだけ殺しとるつもりやつたんやけど……。」

そう言つて、霞は飛龍偃月刀を構え、

霞「……せやな。ま、最後くらい自分のしたいことしてもバチあたらんやろ。詠にもそう言うとするしな。……名あ名乗りい！」

そう言つた。

春蘭「我が名は夏侯元讓！主の覇道を切り開き、立ち塞がる何者をも打ち倒す、曹孟徳と曹子元の剣である！」

霞「元讓いうたら、夏侯姉妹の手が付けられんほうか！」

霞「ウチの名乗りは今さらいらんやろ！……来いや！」

春蘭「良い心がけだ。ならば行くぞ、張文遠！」

そして、

霞「おおおおおっ！」

春蘭「でやあああああっ！」

両者の刃は激突した。

一方、

呂布「……邪魔。」

秋蘭「……くっ！呂布め、何という強さだ……！」

文醜「けど、ここを抜かれたら麗羽様のいる本陣だろ！」

呂布「だから……、無駄。」

季衣「流琉、星、いっちー、ちびっこ、黒髪綺麗なお姉さん！もう一度仕掛けるよ
！」

流琉「うん！」

星「承知！」

文醜「おっしや！」

張飛「だから、チビにチビって言われたくないのだ！」

関羽「そんなこと言っている場合か！行くぞ、鈴々！」

呂布「……大人しく、通して。」

季衣「でえええええいつ！」

流琉「はあっ！」

呂布「……何度やっても、無駄。」

文醜「そうかあ？背中ががら空き……」

呂布「……何が？」

文醜「だああっ！」

張飛「甘いのだっ！」

呂布「……うう。」

張飛「ひやっ！」

こういつた状況に、

秋蘭「……くっ。やはり、純様か姉者でもなければ足止めで精一杯か。」

秋蘭もそう弱音を言ったのであった。その時、

秋蘭「……っ！」

呂布「……通る。」

呂布が秋蘭の目の前に現れ、

流琉「秋蘭様っ！」

と耳元で伝えた。

星「かしこまりました。主、どうかご無事で。」

純「ああ。」

そう言つて、星はその場を後にした。

純「関羽達も下がれ。」

張飛「何でなのだ!! 鈴々はまだ行けるのだ!!」

関羽「承知致しました。」

張飛「愛紗!!」

関羽「鈴々。我らでも敵わなかったのだ。ここは曹和殿に任せるぞ。」

張飛「けど・・・!!」

関羽「鈴々!!」

張飛「・・・分かったのだ。」

純「2人は劉備達の陣に戻りな。」

関羽「承知致しました。行くぞ、鈴々。」

そう言い、関羽達は劉備達の陣に向かった。

純「待たせたな、呂布。ここからは俺が相手だ。連戦になるが、大丈夫か?」

呂布「大丈夫。」

そして、純は太刀を構えた。呂布も方天画戟を構えた。そして、両者は激突した。戦闘が始まると、両者はまず、正面から激しくぶつかり、呂布の方天画戟と純の太刀が、火花と金属音を周囲にまき散らした。

ガギン！ガギン！ガギン！

数合に渡る斬り合いが繰り広げられていたが、

純「!?」

呂布の一撃が、純の胸を僅かに掠ったのであった。

秋蘭「純様っ!？」

それに思わず秋蘭は声を上げたが、純は手をかざし、無事を表した。

純「へえ。流石呂布だな。一騎当千だな。」

呂布「お前こそ。やはり、初めて会ったときから違った。」

純「そうかい。・・・ククツ。」

呂布「?」

その時、純が突然笑ったので、呂布は不審に思った。すると、

純「わりいわりい。傷を受けたのは、久し振りだな。ちよつと嬉しかったんだよ。」

と言った。その時、純は太刀を肩に担いだ瞬間、

純「久し振りに本気を出してやる。お前も本気で来な。」

溢れんばかりの覇気を出し、呂布に対峙したのであった。これには、

呂布「!!」

呂布も顔つきが先程と変わったのであった。

純「行くぞ!!」

呂布「・・・行く。」

そして、再び両者が激突した。その様子を見ていた

季衣「スゴイ・・・。」

流琉「うん・・・。純様と関わってまだ日が浅いし、噂程度しか聞いてなかったけど、

あんなに強かったんだ。」

季衣と流琉は呆然としながら見ていた。

秋蘭「あんな純様を見たのは初めてだ。」

季衣「秋蘭様もですか!?!」

秋蘭「ああ。私は幼い頃から純様に仕え、殆ど一緒に過ごした。もちろん手合わせも何度かした。無論姉者も。一度も勝てなかったが、あそこまでの強さではなかった。」

季・流「!?!」

秋蘭「まだ底は見せていないと思っていたが、ここまでとは・・・。」

と秋蘭は言ったのであった。一方、

関羽「これが曹和殿の本気・・・。」

関羽は純と呂布との一騎打ちを見て、唯々呆然と見ていた。まるでレベルが違うと。それは、

孫策（スゴいわね・・・。これは母様以上だわ。私なんか一撃で倒されるわ。）
孫策も同様であった。そんな中でも、両者の戦いは続いている。

ガギン！ガギン！

純（コイツ、俺の本気について来やがる!!）

呂布（速い！動きについていくので精一杯・・・!!）

ガギン！ドン！ギン！

純（このままじゃ、先にバテるぞ!!）

呂布（恋が先に疲れきっちゃう。）

尚も斬り合いが続き、両者ともそう思っていたが、

純・呂（でも、スゲー楽しい!!／スゴく楽しい!!）

そんな気持ち芽生えていた。

ガギン！

2人の間に距離が出来た。

純「ははっ！中々やるじゃねーか!!」

呂布「そつちこそ!!」
そう笑顔で言つたのだ。

呂布「まだまだ行く!!」

純「ああ!!来・・・」

その時、

ドシュ!!

呂布「え・・・」

季衣「へ・・・?」

流琉「な・・・?」

一瞬時が止まり、そして、

秋蘭「じ・・・」

秋蘭「純様あつ!!!」

秋蘭の悲鳴に近い声が戦場に響き渡つたのだ。何と、純の左目に矢が刺さつたのであつた。

純「・・・ぐ・・・っ!」

秋蘭「純様っ!純様あつ!」

純「・・・ぐ・・・くうう・・・っ!」

呂布「……曹和!？」

これには呂布も驚きの声を上げた。一方後ろの呂布隊では、
陳宮「だ、誰なのです!?! ねねの許可なく勝手に矢を放つたのは……!？」
と陳宮が叫んでいた。

純「ぐ……あああああつ！」

純も、あまりの激痛に跪き、矢が刺さった目を押さえていた。これを見た秋蘭は、
秋蘭「くつ、おのれええつ！」

怒りの声を上げながら弓を構え、

呂布隊兵士A「ぐはっ！」

矢を放った兵士を射殺したのであった。それを見た季衣は、

季衣「流琉! 純様と秋蘭様をお守りするよ！」

流琉「う……、うんっ！」

そう言つて、純と秋蘭を守る体勢を取つたのだ。

秋蘭「純様! 大丈夫ですか、純様っ! 気を確かにお持ち下さい！」

その間も、秋蘭は純に必死に声を掛けていた。

純「ああ……はあ、はあ、はあ……ッ。」

しかし、純は激痛に耐えているのか、力のない返事を返したただけであつた。それを見

た秋蘭は、

秋蘭（く．．．つ。ここで呂布達が動けば、こちらの戦線は崩れ去ってしまう．．．。それだけは避けねば．．．！）

秋蘭（いや、こんな時に何を考えているのだ、私はっ！．．．今は純様を．．．ッ！）
完全に取り乱しており、冷静な判断を下せなかった。その時、

純「ぐ．．．。」

流琉「純様っ！」

純「うぐ．．．う．．．う．．．う．．．」

純「がああああああああ．．．っ！」

純は叫び声を上げながら、左目に刺さった矢を抜いたのだ。

秋蘭「純様っ！」

呂布「曹和っ！」

純「あああああああああッ
!!!!!!」

純「はあ、はあ、はあ．．．。」

純「がああああッ！」

そして、

純「き．．．、聞けエッ。」

純「聞けえええいつつ！」

季衣「純様……。」

純「天よ！地よ！そして戦場でまみえる全ての兵達よ！我が言霊の証人となるがいい！！」

純「我が精は父から、我が血は母からいたただいたもの！そしてこの五体と魂、今は全て我が姉曹孟徳のもの！断りなく捨てるわけにも、失うわけにもいかぬ！」

純「故に、故に……ッ！」

純「我が左の眼……、永久に我と共にあり！」

呂布「曹和……！」

そう宣言し、左目を食べたのであった。

秋蘭「純様っ！」

純「ぐ、げほっ……はあ、はあ、はああ……ッ。」

秋蘭「大丈夫ですか、純様！」

純「ぐ……、大事な。そう取り乱すな……、秋蘭。俺がこうして立つ限り……戦線は崩れさせねーよ……いや、崩れさせてなるものか！」

秋蘭「はい……はいっ。そうですね、その通りです……。」

秋蘭「純様……。せめて、これをその目に……。」

そう言つて、秋蘭は純に眼帯を渡した。

純「ああ。」

そして、

呂布「曹和……。」

純「……水を差されたが……、待たせたな、呂布。さあ、続きと行こうか。」

そう言つて、純は太刀を構えたのであつた。

呂布「……うん!!」

そして、

ガキン!

両者の一騎打ちが再開された。

一方、禁城

純の命によつて、例の作戦を実行に移していた焰耶達は、禁城の中にいた。

真桜「もう殆ど制圧も終わつとるなあ。急ぐで、焰耶。」

焰耶「ああ……。」

しかし、焰耶は少し考え事をしていた。

沙和「……どうしたの？ 焰耶ちゃん。」

凧「焰耶？」

焰耶「いや……、何でもない。」

そして、

焰耶「董卓だけでなく、他にも誰か残ってないか探そう。天子様は星が見つけてるや

もしれぬが、一応な。」

凧「分かった。」

真桜「了解。」

沙和「分かったのー！」

そして、搜索を再開した。そして、董卓と賈コウを発見し、星も、天子様を発見したのであった。

戦場

純「・・・俺の勝ちだ、呂布。」

純は、呂布との一騎打ちを制した。

呂布「ぐっ。」

呂布は、戟を杖代わりにして立ち上がった。そして、

呂布「負け・・・ちゃった。でも・・・楽しかった。」

呂布は純にそう言った。

純「そうか・・・俺もだ。」

と純もそう返し、それと同時に、呂布は倒れた。すると、

陳宮「恋殿ー!!」

陳宮達呂布隊がやって来た。

陳宮「恋殿! しっかりするのです!」

純「安心しろ。まだ生きてる。」

純は、陳宮にそう伝えた。そして、

陳宮「恋殿を担ぐのです!」

と呂布隊に命令した。

陳宮「見逃すのですか?」

純「あいにく、そんな余裕はねーよ。」

陳宮「……今日は恋殿の負けなのです！でも次は必ず恋殿が勝つのです！」
そう言つて、陳宮と呂布隊は戦場を離脱したのであった。そして、

純「……ぐっ。」

純もその場に倒れてしまったのであった。

秋蘭「純様！」

それを見た秋蘭は、純に駆け寄り、抱き抱えた。

秋蘭「季衣、流琉！手伝つてくれ！早く傷の手当てを！」

季衣「はいっ！」

流琉「純様！」

そして、曹操軍本陣後方に行つたのであった。そして、この一騎打ちを見ていた者は、
関羽（あの呂布を倒すとは！！何て強さなのだ！！）

孫策（加えてあの覇氣……！！我ら孫家にとって、最大の敵になるわね。姉の曹操と
並んで……。）

といった思いで見えていたのであった。

35話

洛陽

あの激しい戦いから一夜明けて、華琳は兵を城内に入れて、道路や倒壊した建物を片付けさせ始めていた。本当は勝手にこういったことを行つてはいけないのだが、純同様、古い知り合いがおり、既に許可が下りていた。本当は使いたくはなかったが、非常時であつたため、やむを得なかつたのである。その時、

袁術「あーっ！いたのじゃ麗羽姉様！」

袁紹「見つけましたわっ！華琳さん！」

華琳「・・・またうるさいのが。」

袁紹と袁術がやつて来た。

季衣「あ、いっちー！元氣ー？」

文醜「おー。きよっちーも流琉も元氣そうで何よりだ。」

顔良「こんにちは。」

袁紹「この工事は何ですの！また私達に無断で……！」

華琳「大長秋から許可はいただいてあるわよ。問題があるようなら、確認して貰っても構わないけれど？」

その発言に、

袁紹「な……っ！大長秋……！」

袁紹は驚いたが、

袁紹「ま、真直さん。確認なさい。その書類、偽物ではなくて？」

脇に控えている田豊に命令し、書類を持っていく燈から受け取り、確認をさせると、田豊「……いえ。間違いなく本物です。この通り、大長秋の璽印もしっかりと。」

本物であった。

袁術「なんでおぬしのような奴が大長秋と繋がりを持つておるのじゃ！」

華琳「私と純の祖父が何代か前の大長秋だったのよ。」

袁術「ずるいのじゃ！それを言うたら、妾達とて三公を輩出した名門袁家の出身じゃぞ！」

華琳「あらそう。なら、今の三公に許可を取っておけば良かったのではなくて？」

袁紹「く……っ！点数稼ぎも良いところですよ！」

華琳「私は必要なことをしているまでよ。文句を言われる筋合いはないわ。純も同じ

事を言うわよ。」

その横で、

文醜「大中小つて何だ？斗詩。」

顔良「・・・ええつと、確か・・・」

燈「大長秋。皇后府を取り仕切る宦官の最高位よ。華琳様と純様のお爺様は、以前その地位にあつたの。」

文・季「・・・ふうん。」

顔良「分かつてないふうんだね、二人とも・・・。」

燈「今は天子様も相国以下の官職も軒並み不在だから・・・、都の事を取り仕切つているのは、健在なあの辺りの方々になるようね。」

季衣「・・・とりあえず、凄く偉いつて事だけは分かつたよ。」

文醜「だな。それだけ分かりや充分だ。」

顔良「いいんだ・・・。」

といった話をしていた。

袁紹「ええい、猪々子さん、斗詩さん、真直さん！こんな所にいる場合ではありませんわっ！行きますわよっ！」

袁術「木を見て瓶なのじゃ！」

文醜「ひや、ちよつと、麗羽様ー！」

顔良「きやーっ！引つ張らないでー！」

田豊「そもそもどこに行くんですか！まずそれを決めないと！」

袁紹「走りながらお決めなさい！」

田豊「いくらなんでも無茶言わないで下さいよーっ！麗羽様ーっ！」

そして、袁紹達はそのままその場を後にしたのであつた。

そして、ある程度街を回っていると、

春蘭「ここにいらつしやいましたか。華琳様。」

春蘭がやって来た。

季衣「あ、春蘭様！」

華琳「言われた通り、ちゃんと季衣と流琉を連れている文句はないでしょう？」

春蘭「それは構いません。それと、華琳様に会わせたい輩がおります。」

そう言つて春蘭は、

霞「・・・どもー。」

霞を華琳の前に出した。

華琳「……そう。見事役目を果たしたわね。そう言えば、純はどうしたの？ 呂布を相手にしたと聞いたけど。」

すると、

春蘭「それが……。」

春蘭の顔が曇つたのであつた。それを見た華琳は、

華琳「まさか……。」

華琳「……冗談、でしょうか？」

最悪のことを考えた。

春蘭「私も後で聞いたのですが、秋蘭によると、呂布との一騎打ちは制したのですが、その最中に怪我をしてしまい、今は意識不明の重体で……あつ！」

華琳「っ！」

すると、意識不明と聞くや、華琳はその場を走つたのだ。

春蘭「華琳様！ 純様は本陣の救護所におります！ 今は秋蘭と稟が傍に！」

華琳「わかつたわ！」

そして、華琳の背中中はあつという間に見えなくなつてしまつたのであつた。

春蘭「お前達も、よく我慢したな。」

春蘭は、季衣と流琉にそう言つた。その声を聞いた季衣と流琉は、涙ぐみながら頷い

た。

季衣「流琉、後で皆で純様のお見舞いに行こう。」

流琉「・・・うん。」

霞「そんなにあかんのか・・・？」

春蘭「ああ。秋蘭に聞いたが、一騎打ちの最中に流れ矢が飛んできて、それが純様の左目に刺さったのだ。医者によると、血を失いすぎたため意識がないらしく、仮に助かっても、左目は純様自ら抜き取ったからもう・・・。」

霞「・・・そうか。すまん、辛いのに・・・。」

春蘭「いいんだ。今一番辛いのは秋蘭だ。何せ秋蘭は、幼い頃から純様しか見ていなかったからな・・・。」

そう言い、その場には沈黙が支配したのであった。

曹操軍本陣・救護所

救護所では、重い空気が支配していた。すると、

沙和「あ、華琳様……。」

柳琳「お姉様……。」

華琳「あなた達、純はどこ！」

華琳が息を切らしながらやって来た。

柳琳「はい。お兄様はあちらの天幕に……お姉様！」

すると、華琳は柳琳の声を最後まで聞く前に、

華琳「純っ！」

純のいる天幕に入った。そこには、

秋蘭「華琳様……。」

稟「曹操殿……。」

秋蘭と目を赤く腫らした稟がおり、その寝台には、純が眠っていた。そしてその両手には、秋蘭と稟の手が互いに握っていたのであった。

華琳「秋蘭、純の目……。」

華琳のその問いに、

秋蘭「呂布との一騎打ちの最中に、流れ矢に当たりました……。」

秋蘭は努めて冷静に話した。

華琳「そう。流れ矢に当たって……。」

秋蘭「医者の話によると、矢が刺さった後も無理に戦ったため、その分血を多く失いすぎたと。それと、矢を眼と共に抜いてしまったため、もう左目は無理だと……。」

それを聞いた華琳は、

華琳「……そう。」

と返した。

秋蘭「純様の部隊は今は焰耶を筆頭に、風と凧、そして真桜と星が何とか纏めております。」

華琳「……そう。分かったわ。純の事、あなた達に任せるわ。」

そう言い、華琳はその場を後にしようとした。

稟「……何ですかそれは？曹操殿！あなたは純様のことを、弟のことが心配ではないのですか！あなたはそんなに冷たい人なのですか！」

すると、華琳が淡々と話している姿に、稟は涙を流しながら怒鳴ったのであった。それを聞いた華琳は、

華琳「心配に決まってるでしょう！」

稟「っ!!」

稟に対し、そう怒鳴ったのであった。

華琳「心配に決まってるでしょう！純は、私が一番信頼する弟でもあるし、一番大切な弟でもあるのよ！もしもの事があつたら、私は半身を失つたのと同じよ！心配しないわけないでしょう！」

と言つたのであつた。

稟「・・・申し訳ございませんでした。」

華琳「良いのよ。怒鳴つてごめんなさい。あなたも純の事、愛してるのね。」

稟「・・・はい。」

華琳「なら、純の事、自身の主のことを信じなさい。」

そう言つて、華琳は救護所を後にした。それから、孫策も純の見舞いに来たりもした。そして、

馬超「すまんが、曹和殿の見舞いに参つた。」

馬超も見舞いに来た。

秋蘭「馬超・・・。」

馬超「声を掛けなくてすまなかつたが久し振りだな、夏侯淵。あの時以来か・・・。」

秋蘭「ああ・・・。」

そして、馬超は純の寝てる顔を見て、昔を思い出していた。

回想

馬超「これが都か……。デケーな……。!!」

今から数年前、馬超は武者修行の旅に出ており、その際に洛陽に来ていた。その時、あまりの都の大きさに、馬超は驚いていたのであった。そして、洛陽の北部辺りで、

馬超「さてと、これからどうしようかなあ……。宿でも取るか……。」
と言っていると、

市民A「た、大変だー!」

と言った声が聞こえた。

馬超「何だ?」

その声に向かって行くと、人だかりが出来ており、その様子を見ると、

賊A「おらおら、どきやがれえ!!」

中央で、賊が剣を振り回して暴れていたのであった。その様子を見ていた馬超は、

馬超「市民に剣を向けるな!!」

そう言つて、槍を賊に向けたのであつた。

賊A「ああ？誰だてめえ・・・？」

馬超「貴様などに名乗る名などない!!」

そう言つて、馬超は槍を繰り出したが、まだ槍を握つての実戦経験が殆どなかつたため、賊にあつさりやられてしまったのであつた。

馬超「く、くそ・・・!!」

賊A「死ねー!!」

そう言つて、馬超に剣を振り下ろそうとした。

馬超「!!」

その時、

ズバツ!!

後ろから純が現れ、賊の剣を切り裂いたのであつた。そして、

純「貴様、ここがどこか分かつてこのような狼藉を働いているのか？」

そう言いながら、太刀を賊に向けたのであつた。すると、

賊「あ・・・、あ・・・。」

賊は恐怖のあまり、座り込んでしまい、漏らしてしまつたのであつた。

純「捕らえろ!!」

北部都尉兵士A「はっ!!」

そして、その賊は、連行されたのであった。その際、

馬超「すまない。あたしは馬騰の……うわっ!!」

馬超は、純にお礼を言おうとしたが、腰が抜けてしまい、尻餅をついてしまった。すると、

純「大丈夫か？」

純に助けられたのであった。

馬超「ああ。すまない。」

その時純は、

純「実戦は初めてか？」

馬超に尋ねた。

馬超「あ、ああ。恥ずかしながらな……。」

と馬超は悔しそうな表情を浮かべながら述べた。

純「そつか……。でも、良い槍だし、まだ未熟だが、将来お前強くなると思うぞ。」

馬超「そ、そつか……。」

純「ああ。だから、頑張れよ。」

その時、

秋蘭「純様。」

秋蘭が純を呼んだ。

純「ああ。じゃあな。ええつと……。」

馬超「あたしは馬超だ。」

純「そつか……。俺は曹和。じゃあな。」

秋蘭「私は夏侯淵だ。ではな、馬超。」

そう言つて、純と秋蘭はその場を後にした。すると、

市民B「流石曹和様だなー!!」

市民C「ああ。姉の曹操様同様、いつも俺達の事を考えてくれてる!!」

市民D「それに、曹和様は俺達には気さくに接してくれるしな!!」

市民E「加えてあの端正な顔立ち……。素敵だわ……。!!」

市民F「それを言うならいつも曹和様のお隣にいる夏侯淵様も素敵よね!!あの凜々し

いお姿はいつ見ても良いわ……。!!」

市民G「ええ!!曹和様と夏侯淵様、あのお二人が並ぶと本当に絵になるわ……。!!」

市民H「いつも一緒に仲が良いし、お似合いよね〜!!」

市民達はそれぞれ純と秋蘭の事を褒めていたのであった。それを聞いていた馬超は、

馬超（あれが噂の曹子元……。決めた!!あたしはあの人を目標に強い武人になって

みせる・・・!!)

心の中でそう決意したのであった。

回想終了

馬超（あれから数年……。曹和殿に追い付いたか分からんが、あたしも強くなった……。あたしにとつて、あんたは目標でもあるんだ。だから曹和殿、早く良くなってくれ……。）
そう思いながら、馬超は純の事を見ていたのであった。

36話

曹操軍本陣・救護所

純「ん……。」

目が覚めると、そこは天幕の中であつた。

純（そつか……。俺、あの後倒れたんだっけ……。）

上半身を起こして視線を下げると、その左右には見知つた顔がいた。それは秋蘭と稟であつた。結局2人は、純が倒れた2日前からずっと側を離れなかつたのである。上半身を寝台へと倒して、そのまま寝ていた。それを見た純は、2人の頭にそつと手を添え、頬に触れたりした。

純（秋蘭。稟……。）
すると、

秋蘭「ん……。純様……？」

秋蘭が目を覚ました。

純「おはよう、秋蘭。」

その声を聞いた秋蘭は、

秋蘭「純様あっ!!」

と言い、純に抱き付いたのだ。

純「し、秋蘭？」

秋蘭「良かった……良かったです……」

と涙を流しながら言ったのだ。それを見た純は、

純「悪い。心配かけたな……」

と頭を撫でながら言ったのであった。その後、

稟「ん……。純様……?」

稟も目が覚め、純を見るや涙を浮かべ、

稟「……純様あっ!!」

と言い、飛びついたのであった。そして、

稟「純様!ご無事で本当に良かったです!」

と秋蘭同様、涙を流しながら言った。

純「悪い。」

そう言い、頭を撫でたのであった。そして、

焰耶「お館!」

凧「純様！」

真桜「大将！」

沙和「純様！」

星「主！」

凧「純様！」

曹和隊の面々が続々と天幕にやって来た。

純「お前達、心配かけたな。」

焰耶「お館!!お館がいなくなったら、私はもう……!!」

凧「純様……!!」

真桜「ホンマに良かったわー!!」

沙和「真桜ちゃんく!!」

星「主……。本当に良かったです。いつか私も、主と肩を並べるまで精進致します。」

凧「純様……。純様がいなくなったら風だけでなく、ここの皆や兵士も、悲しみま
すよ。」

純「悪かった……。それで、俺はどのくらい眠ってた？」

凧「2日程です。」

純「そうか……。」

秋蘭「純様……。その……左目ですが……もう……。」
すると、

純「お前が気にすることではない。」

そう言った。

秋蘭「しかし……!!もつと私が周りに気を配っていたら……!!」

純「だからもう良い。全ては俺の油断が原因だ。お前がそう思い詰める必要はない。」

秋蘭「しかし……!!」

すると、

純「もう良い。」

そうやって、純は秋蘭の頭を優しく撫でた。

純「ところでお前達、首尾はどうだ？」

焰耶「はい!!全て計画通りに!!洛陽の城にも火を放ちました!!」

星「私も、天子様を見つけました。」

純「そうか……。良くやった。」

その言葉に、焰耶達は我が事のように喜び、

焰・風・真・沙・星「「はっ!!」「」」

それぞれ拱手したのであった。

純「風も焰耶達と一緒に、よく兵を纏めてくれた。」

風「はいく!! ありがたきお言葉ですく!!」

風も拱手したのであった。

純「稟も良くやってくれた。」

稟「はっ!!」

純「それじゃ、兵の様子でも見に行こうかな・・・。」

全員「二それはダメですっ!!!」

純「うおっ!!」

すると、秋蘭達は声を揃えて、純を止めたのであった。

一方外では、

華琳「純・・・、良かったわ・・・。」

柳琳「はい。秋蘭様も嬉しそうです。」

華琳「そうね。あんな嬉しそうな秋蘭は久しぶりね。私達の見舞いは、後の方が良

いわね。」

すると、

霞「……姉もそうだが、弟もええ主やな。」

春蘭「当然だ。私達の自慢の主だ。」

月「はい。曹和さんはとても慕われているのが分かります。」

詠「……そうね。彼も王の器があるわ。」

霞達も純の様子を見ていたのであった。

それから、純には華琳達は勿論だが、孫策や馬超からも見舞いが参り、孫策と馬超とは仲良く話したのであった。

一方劉備達は、

劉備（洛陽の都は平和だった……。暴政をしていないなら、なんで隠すの!? 最初から本当のことを話していれば、誰も死なずに、傷つかずに済んだのに……!! どうして……

!!)

北郷（なんで．．．、なんで洛陽はこんなに平和なんだ．．．!?董卓って、暴君じゃなかったのか．．．!?それじゃあ、なんで話し合うことをしなかったんだ．．．!?そうすれば、何事もなく平和になったのに．．．!!）

諸葛亮（桃香様．．．。ご主人様．．．。）

龐統（朱里ちゃん．．．。）

関羽（ご主人様．．．。桃香様．．．。）

劉備と北郷は、檄文の内容とその現実に困惑しており、その2人の様子を見ていた関羽達は、複雑な表情を浮かべていたのであった。

こうして、大陸の諸侯達を巻き込んだ反董卓連合の戦いは終わりを告げたのであった。

37話

日が天高く昇った穏やかな天気の後。

純は城内にある中庭で1人、刀に手を添えた格好で静かに佇んでいた。

純「・・・ふう。」

息と一緒に余計な力を抜き、集中力を研ぎ澄ます。そして、目を瞑ってイメージする。純（数は・・・、20人で軽く準備運動すつか。）

そして、刀を抜き、

純「っ！」

本当に今自分の周りに20人の敵がいることを想定して、刀を振った。その動きは、周りから見れば、流麗の舞を舞っているかのような動きを見せた。

そして、最後の1人を斬り捨てたのだが、

純（次からは数増やすか・・・。）

といったことを思った。そして、

純「いつまでこそそそ見てんだ。出てこい。」

と声をかけた。すると、

真桜「あちゃー。気付いてもうたか。」

と真桜が現れ、その他にも焰耶と凧に沙和、星に霞もいた。

真桜「見るつもりなかつたんよ。許してなー。」

純「別に良いけど・・・。」

凧「純様は、剣術意外にも弓と槍、そして戟も扱えるとか。」

純「まあな。でも、刀以外はそんなに得意じゃねーけどな。」

星「ご謙遜を。以前私と手合わせしたときなんか、私と同じ槍でしたが、中々見事な槍捌きでしたぞ。」

純「そりや嬉しいな。お前に褒められるなんて。」

星「いえ。」

焰耶「お館の武は、この大陸では一番です。」

純「ありがとう。しかし、何故霞がここにいるんだ。今日は訓練だったのでは？」

純がそういう疑問を言ったら、

霞「えー？別にええやん、警備隊の皆さんと仲良うしたつて。なー？真桜ちー。」

真桜「なー？姐さん。」

沙和「あー。お姉様、わたしとは仲良くしてもらえないのー？」

霞「ん？そんなことないで。ウチの愛は、色々平等やからなー。だからほら、凧っ

ちと焰耶ももそつとちこう……。」

凧「いえ、遠慮しておきます……。」

焰耶「私も遠慮する……。」

霞「ああもう、堅いなあ……。」

星「なら霞。私とならどうだ？」

霞「お。ええな、星。」

といったやり取りをしたのであった。

純「まあ、何だつて良いが……。」

凧「あの……。」

純「ん？」

凧「もしよろしければ、一手お相手願えませんか？」

純「……そうだな。相手がいた方が想像よりも修行になる。焰耶はどうする？」

焰耶「私は先日お相手しましたので、お譲りします。」

純「そうか。分かった。」

凧「なら、お願いします。」

そして、2人は戦闘態勢を整えた。流石に焰耶や霞、星達も武人。今までのような軽口を止め、戦いを見守った。

真桜「どっちもがんばれー。」

沙和「純様ー。凧ちやーん。がんばってー。」

霞「なら、判定はウチがしたる。双方、構え．．．、始め！」

凧「行きます！はああああ！」

そして、純と凧の模擬戦が始まった。その最中、

華琳「何をしているの？」

沙和「あ、華琳様。」

華琳達一行がやって来た。その間も、純と凧の模擬戦は続く。

凧「てええええええいっ！」

純「踏み込みが浅い．．．。脇腹が開いてるぞ！はっ！」

凧「くっ．．．。」

それを見ていた華琳達も声を漏らした。

春蘭「むう．．．。」

華琳「へえ．．．。純、また強くなったわね。」

秋蘭「まだ、本気を出してはおりませんが。」

桂花「左目を失って心配しましたが、どうやら杞憂でしたね。」

華琳「ええ。むしろ、より凄味を増した気がするわ。」

焰耶「うむ。私も、先日お館と手合わせしたのだが、益々差を痛感させられる。」

星「だが、目指し甲斐がある。そうだろ、焰耶?」

焰耶「ああ。武人として私は幸せなのかもしれないな。」

そして、

霞「双方、やめっ!」

霞のかけ声で、模擬戦が終わった。

秋蘭「終わったようですね。」

純の刀が、風の首筋で止まっていた。それだけでなく、風は息を切らし、汗を掻いていたのだが、純は息は切らしておらず、汗も掻いていなかった。

風「ありがとうございます。流石の強さです。」

純「なに。お前も悪くなかったよ。」

すると、

焰耶「お館、お疲れ様です。私も精進します。風、お疲れ。私も負けておれんな。」

純「ああ。」

風「ああ。それは私も同じだ。」

霞「純く、相変わらず凄いわ。益々惚れたで!」

純「はいはい。」

星「主。私も惚れましたぞ。」

純「ははつ。・・・それより姉上も見てたんですね。」

華琳「ええ。あなた、また強くなったのではないかしら？」

純「どうでしょう？俺もよく分かりません。」

華琳「そう。」

すると、

純「そうだ。おい焔耶、春蘭と一本手合わせしてみたらどうだ？」

と言ったのだ。

焔耶「え!？」

春蘭「純様!？」

これには、春蘭も焔耶も驚いたのであった。

焔耶「お。お館！私はまだ春蘭様には・・・！」

純「お前、たまには誰かと手合わせしてみたらどうだ。」

焔耶「し、しかし・・・、私は春蘭様に勝てるかどうか・・・。」

純「大丈夫。お前の努力は、俺が一番よく知っている。俺の部下になってから、一度も鍛錬は怠っていないし、兵法だってしっかり勉強し、戦でも勇猛果敢で指揮もそつがない。お前なら、きっと春蘭に勝てる。」

焰耶「お館……。分かりました！お館の期待に応えるため、頑張ります！」

純「よし！春蘭も良いよな！」

春蘭「はっ！私は構いません。前から焰耶と手合わせしたいと思っておりませんでした、楽しみです！」

純「そうか。よし2人とも、準備してこい！」

春・焰「はっ!!」

そして、春蘭と焰耶の手合わせが始まった。

数刻

春蘭「ほほう。焰耶、良い面構えではないか。」

片手に七星餓狼、鎧を着け、春蘭は完全に戦闘モードに突入していた。焰耶も同じく、鈍砕骨を持ち、武装し、戦闘モードに入った。

春蘭「焰耶、お前の活躍は聞いておる。指揮官としても、武人としても、中々の活躍ではないか！」

焰耶「いえ。私はまだまだ未熟です。まだお館のような武人には遠く及びません。」

春蘭「それは私も同じだ。全力で来い！」

焰耶「無論です！」

審判は、霞が引き続き行うことになったが、

春蘭「でやあああああああつ！」

合図を待たずして、春蘭は先制攻撃を仕掛けた。しかし、

ガキイン!!

焰耶はあっさりそれを受け止めたのであった。

春蘭「ほほう。私の一撃を良く受け止めたな！」

焰耶「春蘭様こそ、いきなりの先制攻撃ですね！」

春蘭「ふん！そんなの待ってはおれんわ！」

焰耶「春蘭様らしいですね！」

そう言い、春蘭は焰耶に目にも止まらぬ速さで剣を振るつたのであった。一方、

華琳「焰耶、中々やるわね。」

桂花「しかし、防戦一方に見えますが……。」

純「いや、それでもねーぞ。」

桂花「えっ？」

秋蘭「純様の言う通りだ。確かに端から見たら焰耶が不利に見える。しかし、焰耶は姉者の攻撃を全て涼しい顔で捌いている。」

凧「春蘭様も本気でやっております。しかし、焰耶も更に成長してるといふ事ですか……。」

純「そういうこと。あいつ、1日も欠かさず鍛錬も勉強も怠らなかつたからな。」

そう話してる間も、手合わせは進んでいった。

ガキイン!!

春蘭「……ふつ。まさか、私の攻撃を全て防がれるとはな。純様以来だ。」

焰耶「どうします、終わりますか?」

春蘭「ぬかせ。勝負はこれからだ!はああああ!」

そう言つて、春蘭は先程よりも速く剣を振るつたのであつた。焰耶も、

焰耶「はああああ!」

それに負けじと、鈍砕骨を振るい、春蘭の攻撃を捌きつつ、攻撃していた。

星「主よ。」

純「ん?」

星「焰耶の強さは最初からこうでしたか?」

純「いや。確かに出会つた頃から実力はあつたが、最初は春蘭には及ばなかつた。け

ど、伸び代は確かだった。とは言え、ここまで成長するとは思わなかったな……。」
星「そうですか。」

星（焰耶の強さの源は、自身の鍛錬の賜物だけではない。恐らく主の道を切り拓くため、そして、彼奴は恐らく主を一人の男として見ておる。その思いも、焰耶の強さの源なのやもな……。）

そして、手合わせも終わりが近付いた。

春蘭「はあ、はあ、はあ。」

焰耶「はあ、はあ、はあ。」

両者互いに息を切らしており、そろそろ限界だと分かるほどであった。

焰耶「春蘭様、次でけりを付けましょう。」

春蘭「そうだな。最高の一撃でお前を倒す！だからお前も、最高の一撃で私に向かっ

てこいー！」

焰耶「はっ!!」

そして、互いに武器を構え、そして、同時に動いた。その結果、

春蘭「……。」

焰耶「……。」

互いに、それぞれの武器が突きつけられている状態となった。

霞「双方、やめっ！この勝負、引き分け！」

春蘭「やるな、焰耶。」

焰耶「春蘭様も、流石の強さです。」

春蘭「実に良い勝負だった。だが、次は私が勝つぞ。」

焰耶「それはこちらの台詞です。」

そう言つて、互いに健闘を称え合つたのだった。

華琳「終わったようね。」

純「そうですね。焰耶！」

焰耶「はっ!!」

純「良くやった!!成長したな!!」

焰耶「しかし、春蘭様には勝てませんでした。まだまだ未熟です。これからも精進して参ります!!」

純「そうか。これからも、期待しているぞ!!」

焰耶「はっ!!」

華琳「春蘭も、良くやったわ。これからもその武、頼りにしてるわ。」

春蘭「はっ、華琳様!!」

純「焰耶、ちよつと……。」

焰耶「はっ？」

すると、

焰耶「!？」

純「お疲れ。本当に良くやったな。」

そう言つて、純は焰耶の頭を撫でたのであつた。

焰耶「お、お館!？」

突然頭を撫でられたので、焰耶の顔は一気に真っ赤になつた。その時の焰耶の顔は、嬉し恥ずかしい顔をしていたと、周りの皆は言つていたのであつた。

38話

霞「はあ……。」

とある日、霞は上物の酒が手に入ったので月見酒と洒落込もうとしたのだが、何か物足りなさを感じていた。

霞「おつかしいなあ。こんなに良い酒と綺麗な月があるっちゅうのに何か足りひん気がするんよな。」

そう言い、酒を一口飲むが、やはり何か足りなかった。

霞「うーん。こういうときは妙ちゃんに聞くに限るな。」

そう言つて、霞はその場を後にして秋蘭の部屋に向かったのであった。

秋蘭の部屋

秋蘭「ふむ。何か足りない気がする。」

霞「そうなんよ。何が足りひんのかな？」

そう言つて、霞は秋蘭に尋ねた。

秋蘭「そうだな……。最近あつた一番楽しかつたことは何だ？」

霞「へ？一番楽しかつたことか……。せやな……。たまたまなんやけど、純と一緒に街に行つたことかな？」

と霞は言つた。すると、それを聞いた秋蘭はクスクスと笑いながら、

秋蘭「なんだ、もう答えは出たではないか。」

と言つたのであつた。

霞「？どういふこつちや？」

秋蘭「とりあえず、純様を誘うといいぞ。」

霞「そうなん？まあとりあえず誘つてみるわ。」

そう言い、霞は秋蘭の部屋を後にした。

秋蘭「随分と軽い足取りではないか。それにしても、稟に続いて霞もか……。恐らく焰耶と風もだ……。恋敵が多くて困つたものだ……。」

そう言つた秋蘭だが、その顔には微笑を浮かべていたのであつた。

その後霞は、純の部屋を訪ねたのだが留守で、あちこち探し、そして先程飲んでいた場所に行くつと、

霞「なんや純、ここにおったんか。」

純「ん？ああ霞か。俺を探してたのか？」

純を見つけたのであった。

霞「せやで、一緒に酒でもどうかかなと思つたんよ。」

純「そうか。それじゃあ馳走になろう。」

そう言つて、純は少しずれて霞の座るスペースを作る。霞はそこに腰を下ろし杯に酒を注ぐと純に手渡し、自分の杯にも注いだ。

霞「結構良い酒やで。」

純「霞がそう言うならそうなんだろうな。」

そう言い、純と霞は静かに酒を飲み始めた。2人の間には特に会話はなく、ただ静かに月を見上げていた。その時、

霞「なあ純、隣にそいつが居るだけですつごい満足感が味わえるような奴つてどんな存在なんかな？」

と純に質問した。それに純は、

純「うーん、そうだな……。同性なら親友、異性なら恋人、もしくは好きな人じゃねーかな。」

そう答えた。すると、

霞「!!そっか、好きな人か。」

霞はそう呟いたが、その頬は朱色に染まっていた。

純「俺はそう思っただけだ。しかし、今日の月は良いな・・・。」

と言い、酒を飲んだ。

霞「へへ、せやなく♪」

霞もそう言い、酒をクイツと飲み干した。その時の霞の表情は、非常に幸せな表情をしていた。そして、2人はその後も酒を飲み月を見上げていたのであった。

39話

純はこの日、自身の仕事を終わらせ、秋蘭の部屋に向かっていた。すると、

秋蘭「純様？」

ちようど秋蘭に出会ったのであった。

純「おお秋蘭。今日お前って、休みだったよな？」

秋蘭「はい、そうですか？」

純「ちようどお前を誘おうと思ったんだけど、これから一緒に街を回ろうよ。」

秋蘭「はい。私は構いません。」

すると、

秋蘭「その前に、少し着替えてもよろしいでしょうか？」

と秋蘭は何か思いついたのか、純にそう言ったのであった。

純「？まあ良いけど。」

純は意味が分からないと思ったが、了承した。そして、純を部屋の前で待たせ、秋蘭は部屋に入り、筆筒を開き、一着の服を手に取り、着替えたのであった。

秋蘭「お待たせしました。」

そう言われ、秋蘭を見ると、そこには、高貴な青い礼服に身を包んだ秋蘭がいた。

純「お前、それって……」

秋蘭「はい。前に私と一緒に買い物に行った時に私に買ってくれた服です。」
すると、

秋蘭「ど、どうでしょうか……」

秋蘭が、少し恥ずかしげながら、上目遣いで純に尋ねたのであった。

純「……うん。やっぱり似合ってる。やっぱり綺麗だな、秋蘭。」

と純は言った。それを聞いた秋蘭は、嬉しくなり純に抱き付いた。

純「それじゃあ、行こっか。」

秋蘭「はい！」

そして、2人で一緒に街に言ったのであった。街を回ってる間も、秋蘭は純の腕に抱き付いた状態であった。周りの者は、

市民A「おい、曹和様と夏侯淵様だぞ。」

市民B「本当だ。相変わらず仲が良いな。良いなあ、羨ましい……」

市民C「それに今日の夏侯淵様、とってもお綺麗ですわ〜!!」

市民D「ええ。隣には曹和様。絵になるわ〜!!」

純と秋蘭を見て、そう言ったのであった。

純「今日のお前、本当に綺麗。それ買って本当に良かった。」

すると、純は秋蘭にそう言った。それを聞いた秋蘭は益々嬉しくなったのか、抱き付いて腕を強くしたのであった。そして、2人は軽く飯を食い、小物屋で商品を見たりなど、色々回ったのであった。その道中、

絵師A「お2人さん、ちよつと良いですか？」

絵師に声をかけられ、純と秋蘭は振り返った。

絵師A「実は私、絵師でありまして、良ければお2人の絵を描かせていただきたいのですが……。」

純「別に構わねーよ。なあ秋蘭？」

秋蘭「はい。構いません。」

絵師A「そうですか。ありがとうございます。」

そう言つて、絵師は2人の絵を描き始めたのであった。それから暫くが経ち、

絵師A「出来ましたよ。」

そう言い、絵師は2人に絵を差し出した。

純「スゲー!!めっちゃ上手い!!」

秋蘭「はい。私も思います……!!」

その出来に、2人は興奮したのだった。

絵師A「喜んでいただいて何よりです。よろしかったらその絵は差し上げますよ。」

秋蘭「良いのか？」

絵師A「ええ。構いませんよ。」

秋蘭「感謝する。」

そう言い、秋蘭は絵を大事そうに抱き締めた。

純「本当ありがとな。こんな素晴らしい絵、初めて見た。」

絵師A「構いませんよ。私も久し振りに良い絵が描けましたから。こんな綺麗な恋仲の絵を描くのは。」

純「そうか。ではな、これはその礼だ。」

そう言つて、純は幾らか金を出して、絵師に渡した。そして、秋蘭と一緒にその場を後にしたのであった。

秋蘭「純様、この絵は私が貰つても良いでしょうか？」

純「良いよ、お前にあげる。」

そう言い、純は秋蘭の頭を撫でた。すると秋蘭は非常に嬉しかったのか、純の頬に口付けをしたのであった。そして、2人は城に戻り、その日の夜は、2人で一緒に寝たのであった。

40話

稟は、資料を持って歩いてきた。その時ふと中庭に目をやると、

純「……すう。」

純が、中庭の木の下で横になって眠っていた。稟が純を目で追ってしまったのは、ただ偶然そこにいたからではない。

稟（純様……）

彼女は、彼の霸王の器を愛していたが、彼と接する時間が多くなるほど、彼の人柄を知りそして、愛したのであった。

純の部屋

純「さて、今日はどうすつかな……。」

この日の純は休暇を取っており、一日部屋で過ごすか、どこかに出かけるか、迷って

いた。すると、

稟「純様。稟です。入っても宜しいですか？」

純「ちよつと待つて。・・・良いぞ、入れ。」

扉が開き、稟が部屋に入った。

稟「失礼します。」

純「どうした稟？」

すると、

稟「えつと、純様。もし宜しければ今日、一緒に出かけませんか？」

稟は顔を赤らめながらそう言った。

純「え？俺と？」

稟「そうです。」

純の一言に、稟はそう言つて眼鏡のフレームを軽く上げ掛け直した。

純（稟つて、あまり買い物とかしないからちよつとびっくりだな・・・。）

と思つてゐると、

稟「あの・・・、純、様？私とでは困るでしょうか？」

稟が俯きがちにしながら寂しそうな表情をした。

純「ううん、そんなわけないよ。行こう行こう。」

それを見た純は愛おしく思い稟の髪を撫で、頬に手を添えながらこっちに顔を向かせた。

稟「・・・はい。」

それに対し、稟は頬の手の上に掌を重ねて相好を崩して柔らかい笑みを浮かべたのであった。

純「それじゃあ、行こうか。」

稟「はい。」

そう言つて、2人は互いに手を取り、腕を組みながら街に行つたのであった。そして、2人で買い物したり、商品を見たりなどして、充実した時間を過ごした。そして、2人は純の部屋にいた。

純「今日は楽しかったな。」

稟「はい。そうですね。」

純「明日もどっか行こうよ。」

すると、

稟「純様・・・、明日は仕事ですよ。」

稟は眼鏡のフレームを上げ、ジトツとした目で純を見た。

純「はは、冗談だよ。」

稟「全く……。」

そして、稟は純の前に座り、身を預けた。すると、『稟は自分のだ』と言うかのように腰に腕を回して強く抱き締め、稟の肩に顔を置いた。稟もそんな純を受け入れて、頭を撫で、耳に触れたりした。

純「そうだ。稟、お前に渡したい物があるんだ。」

そう言つて、純は懐から髪飾りを一つ取り出した。その髪飾りには、椿の花に鈴がついていた。

稟「これは……。」

純「お前には、何度か助けて貰つてるからな。そのお礼。」

純は、少し恥ずかしそうに言つた。

稟「はい。ありがとうございます。」

そう言つて、稟は髪飾りを大事そうに胸に抱き締めたのだ。そして、髪飾りを付けて、稟「どう……でしょうか？」

と純に尋ねた。

純「うん。とても似合つてる。買って良かった。」

と言つた。それを聞いた稟は、純に抱き付き、胸に顔を埋めたのであつた。

純「稟……。」

純は、稟の顔を上げ、口付けをした。稟は口付けを受け入れ、蕩けるような目をした。稟「純様……んっ。」

すると、今度は稟が積極的に舌を入れたのだった。それを純は応じ、長い口付けをした。

しかし、長く口付けをかわしていたからか、流石の稟も苦しくなってきたのが分かった。純は一旦離れようとするが、稟は離れないように更に密着し、背中に回してる腕を強く抱き締めたであつた。まるで、離してしまつたら終わると思つているかのように。そして、もつともつとと催促するかのように、稟は更に大胆な動きをした。

そして、2人は口付けを終えてからもしばらくの間、お互いを見つめ合つた。

純「……稟。」

稟「はい……。」

そして、2人は1つになり、そのまま夜を過ごしたのであつた。

41話

焰耶「・・・はあ。」

城の上で、焰耶は一人溜息をついていた。

焰耶「たまの余暇に、何をしているのだろうか？私は。」

彼女は、ある悩みを抱えていた。それは、自身の主でもある、純の事である。最初は、憧れの人の下に仕える時、歓喜の声を心の中で上げた。その時は、自身の武をこの人に全てを捧げようとし、日々の鍛錬に勤しんだ。苦手な兵法も必死に勉強し、今や曹和隊の指揮の一部を任せられるほどになり、あの春蘭とも一騎打ちで互角に渡り合えるほどに成長した。

そして、彼を間近で見て、その思いは敬意だけでなく、次第に愛も加わっていき、彼を目で追うようになっていった。しかし、

焰耶（お館には、既に秋蘭様がいる。それに稟も。まだ他にもいるかもしれないが、そのどれもが私とは違って、綺麗で凛々しい方ばかりだ。私が入り込む隙などありはしない・・・。）

と思ひ、諦めようと思っていた。けど、

焰耶（でも、駄目なのだ。どうしても、お館を目で追ってしまふ。諦めなきやならぬいのに。胸が苦しい。私はどうすれば……。）

と思ひ、

焰耶「はあ……。」

また溜息をついた。するとそこへ、

星「おや、焰耶。こんな所で何をやっているのだ、お前は。」

焰耶「つ、星……。」

星が酒を片手に現れた。

星「このような場所で、酒を飲むでもなく風に吹かれて何をしている。」

焰耶「昼から酒などを食らっているのは、お前か霞だけだ。」

星「私なりの楽しみ方だ。恐らく霞も。たまの休みに、時間を持て余す哀れな者より

よほどマシだろう。」

焰耶「全く……。」

星「ふふ……それで焰耶、何を悩んでいる。」

と、星は焰耶に言った。

焰耶「……別に悩んではない。」

と言われたのだが、

星「主が気にしておったぞ。」
と切り出すと、

焰耶「な・・・!?!」

分かりやすく、顔を真っ赤にして驚いたのであった。

星「おや、やはり主の事か。」

焰耶「何故、お館が・・・貴様!?!私の何を知っているっ。」

星「朝から晩まで溜息ばかりでは、主でなくても気にするといふものよ。」

焰耶「・・・お館は何と?」

しかし、星は酒を飲んでおり、話さなかった。それを見た焰耶は、

星「なんと余裕のない。酔っ払いをそのような武器で脅すとは、魏文長の名が泣くぞ。」

鈍砕骨を星に向けた。

焰耶「お前が、からかうようなことばかり言うからだっ!!」

星「主と秋蘭が情を交わしているため、苦しいのか。」

すると、

焰耶「な・・・!?!」

また焰耶の顔が真っ赤になった。

焰耶「何故星がそれを知っている。」

星「そんなの、あのように仲睦まじい姿を見れば、誰だって分かるさ。稟も、主の事を好いており、情を交わしておるしな。」

焰耶「……。」

星「おや、泣くのか？」

焰耶「誰が泣くか!!」

星「泣くくらい可愛げがあれば良いものを……。そうやって強がる。」

焰耶「……っ!?お、お前っ。」

星「主は本当に気にしておった。あの方は、本当に部下思いのお方だ。」

焰耶「……お館はそういうお方だ。私達臣下だけでなく、一兵卒のことも大事にしておられる。」

星「そういう一面を見て、お主の女をこじ開けたか。」

すると、焰耶はまた鈍砕骨を星に向けた。

星「照れ隠しにも可愛げがない……。私でなければ、仰け反つてるところだ。」

焰耶「……。」

星「……まあ良い。そんなに深く考えなくても良いと思うぞ。主なら、お主の思いを受け取ってくれる。」

焰耶「……そうだろうか。」

星「そうとも。少なくとも、私の目に映る主は、秋蘭や稟だけでなく、お主の事も好いておるぞ。」

焰耶「……そうか。ここで私が躊躇ったら、意味がない。お館の思いを裏切るのと同じ。今からお館の元へ向かう。済まん、星。」

星「何、共に戦う仲間のそんな姿を見てはおれんと思つたからな。」

焰耶「ふつ、感謝する。」

そう言つて、焰耶はその場を後にした。そして、焰耶は純の部屋の前に立ち、

焰耶「お館、焰耶です。入つても宜しいでしょうか？」

すると、

純「焰耶か。入れ。」

という声が聞こえたので、

焰耶「失礼します！」

と言ひ、部屋に入った。

純「それで、俺に何のようだ？」

焰耶「えつと、そのですね……。」

その姿は、いつもの焰耶にしては珍しくしおらしかった。

焰耶「お館は、秋蘭様と稟をどう思っていますか？」

純「好きだよ。俺にとって、かけがえのない存在だ。」

焰耶「……。」

純「けど、最近もう1人決してなくしちやいけない人を見つけたんだ。」

焰耶「……それは一体……。」

純「お前だ、焰耶。」

焰耶「っ!!。」

純「俺、お前のことも好きなんだ。一臣下としてだけでなく、1人の女として。」

すると、焰耶の目から大粒の涙が零れ落ちた。

焰耶「お館、それは本当ですか……。本当に……。」

純「ああ。嘘でもない。お前のことも好きだ。」

焰耶「お館っ!!」

焰耶は、純の胸に飛び込み、胸に顔を埋めた。

焰耶「ずっと、我慢してたんです。」

純「？」

焰耶「お館には、秋蘭様と稟がいる。私はあの2人とは違って、綺麗で凜々しくもなく無骨者だ。だから、諦めようと思っていました。けど、そう思えば思うほど、お館へ

の気持ちがどんどん強くなってしまい、どうすれば良いのか分からなくなってしまいました。」

すると、

純「お前は無骨者なんかじゃねーよ。」

と言った。

焰耶「えっ？」

純「焰耶は無骨者なんかじゃねー。焰耶は、俺には勿体ないくらいの魅力を持った女子だ。だから、そう自分を卑下すんなよ。俺が辛い。」

そう言い、純は焰耶の背中に腕を回して、強く抱き締めた。

焰耶「本当に、私みたいな女でも……？」

純「二度も言わせるな。俺は見た目で判断しねーし、焰耶が俺を好きだって言ってくれた事が本当に嬉しかった。」

焰耶「はい……。」

純の言葉が恥ずかしかったのか、焰耶は顔を真っ赤にしたのだが、それが嬉しそうにはにかむように笑った。そして、

純「焰耶……ん……っ。」

焰耶「お館……ん……っ。」

2人は静かに唇を合わせ、寝台に倒れ込んだのだった。

42話

警備・屯所

風「はあ……」

風は、ここ最近溜息をついていた。その様子を見ていた

真桜「なーぎー、どうしたんー？」

沙和「風ちゃん、どうしたのー？」

真桜と沙和は、心配そうな顔で声をかけた。

真桜「なあ、最近の風はなんかおかしくないか？」

沙和「沙和もそう思うのー」。

普段の風ではないので、2人は心配になった。風がこうなった理由それは、

風（純様……）

風が純に惚れていたからである。戦場での圧倒的な武勇、将兵の巧みな扱い、そして
気遣いもあって、多くの人望を得ていた。

そんな彼に風は憧れを抱いていたが、それは時間と共に愛に変わっていった。だから

こそ分かるものがある。彼の周りには好いてる女性がおり、その誰もが美人である。凧には焦る条件しかなく、そんな中に純に近づくにはどうすれば良いかと、そんなことばかり考えていた。

真桜「な、なんや、めっちゃめっちゃ険しい顔してるで。」

沙和「何か深刻な悩みを持つてるのー。」

2人がこそそとそんな話をしてしていると、

純「お前ら、ちよつと良いか？」

純が屯所にやって来た。

真桜「おお大将、入って・・・」

その時、

凧「じ、純様!ど、どうぞ!」

凧が急に元気になり、さらには頬を若干赤らめているのだった。その様子を見て、真桜と沙和の2人は理解した。

真・沙（これは惚れてるな／のー。）

と。

純「この後の警邏なんだけど、焰耶がちよつと別件で外せない用事が出来たから、俺が焰耶の代わりを務める事になった。よろしくな。」

その言葉に、

凧「ほ、本当ですか!？」

凧がもの凄い勢いで食いついてきたのだった。

純「ああ。もしかして、迷惑だったか？」

真桜「そんなことあらへんで。ほなそろそろ時間やし行こうで。」

沙和「行くのー!」

そう言い、4人は警邏隊の集合場所に向かい、一緒に警邏を始めた。そして、1日の警邏を終えたその日の夜、真桜と沙和は、凧に純について聞いてみた。

真桜「いいか凧、今から大事なこと聞くから、しっかりと答えるんやで。」

凧「?」いったいなんだ？」

沙和「凧ちゃんは、純様の事が好きなの？」

その質問に、

凧「ななな、何を言ってるんだ、お前達は!?!確かに純様は武人として、人として尊敬すべきお方でカッコいいし優しいけど……。」

凧は顔を真っ赤にしながらそう言った。

真桜「ようは好きっちゆうことやな。」

凧「……。」

すると、凧は顔を真っ赤にした状態で、コクリと頷いた。

沙和「凧ちゃんつてば、真っ赤になっちゃって、かわいーのー!!」

真桜「・・・うーん。」

沙和「ねえねえ、真桜ちゃん。」

真桜「分かつとる。凧のためや、一肌脱いだろ。」

沙和「でも、純様の周りには秋蘭様を筆頭に強敵が多いの。」

真桜「確かに。特に秋蘭様は大将とは幼い頃からの付き合い。一番の強敵や。」

沙和「そうなのー! 秋蘭様は綺麗でカッコいいのー!」

真桜「せやな。けど、凧にも凧の魅力がある。そこを大将に見せなきやな。」

沙和「そうなのー! そうすれば、きつと純様も、ドツキーンとしてキューンつてなっ

てくのー!」

凧「純様にはそのような姿は想像出来んが・・・。」

真桜「ともかく凧、諦めたらアカンで。」

凧「・・・わ、わかった。頑張る・・・。」

こうして、純が凧の事も好きになれるように、作戦が始まったのであった。

43話

反董卓連合が解散してしばらくの時が過ぎたが、諸侯の小競り合いが続き、乱世は収まることはなかった。そんな中で新たな情報が入った。

玉座の間

華琳「・・・呂布が見つかった？」

燈「はい。あの戦いの後、南方の小さな城に落ち延び、そこに拠点を構えることにしたようです。」

卓上の地図に置かれた碁石が示すのは、ここから遙か南西にある小さな城であり、周りに大きな勢力もない、殆ど空白地帯みたいな場所であった。

華琳「なるほど・・・。純、呂布が逃亡し同行していたわね。」

純「はい。副官の陳宮が、呂布と共に行動をしているという情報が届いています。」

桂花「……どうしますか？少数とはいえ、呂布が本気になればこちらはかなりの損害を被る可能性もあります。が……。」

その瞬間、誰かが息を飲んだ。確かに反董卓連合の戦の時は、純が激しい一騎打ちの末、倒したとはいえ、油断が出来ない相手であった。

華琳「……今は放っておきましょう。」

純「……。」

春蘭「何ですと！」

桂花「華琳様。それはいくらなんでも危険すぎます。」

華琳「……霞。呂布は、王の器に足る人物かしら？」

霞「……正直、よう分からん。」

霞が華琳に対しての質問にそう答えると、

春蘭「どういう意味だ？まさか、かつての味方だからといって……。」

春蘭がそう言った。

霞「んなわけあるかい。……恋が何を考えとるか、分からんっちゃゆうこつちや。純、

秋蘭、流琉、正面からやりおうたアンタなら分かるやろ？特に純は。」

純「……そうだな。」

秋蘭「……確かに。」

流琉「えっと、武將っていうより、野生の熊や虎を相手にしてるのと同じ感じでした。」

霞「・・・相手にしたことあるんかい。」

流琉「え？皆さんはないんですか？」

純「俺はあるぞ。」

霞「あるんかい!?!」

華琳「確かに、あなたはどんなに険阻な場所でも熊や虎と格闘して、その肉を皆に分けてたわね・・・。」

純「あはは・・・。」

霞「・・・よ、よう分からんけど、多分そういうこつちや。」

春蘭「だから、どういう意味なのだ？」

純「・・・お前は少し勉強しておけ。周りが変な知恵を付けない限り、こちらが手をささなければ、襲わねーという事だろ？」

霞「そんな感じかなあ。軍師の陳宮はそこそこ切れ者やけど、まだまだおこちやまやしな。」

華琳「あの辺りは治安も悪いし、南蛮の動きにも気を配る必要があるわ。何かするにしても、しばらくは動けないでしょう。」

華琳「それとも、あの辺りの州牧とでも結びつく可能性がある？」

燈「益州州牧の劉璋は、さして軍事には明るくないわ。こちらとの州境にはたびたび偵察を入れているようだけれど……。」

華琳「ならば西はそのようになさい。……ただ、監視だけは十分しておくように。」

桂花「華琳様がそう仰るなら……。」

華琳「それに今はもつと警戒すべき相手がいるわ。純、情報は集まっている?」

純「はつ。先日麗羽と公孫贊の争いですが……、予想通り、麗羽が勝ちました。公孫贊は徐州の劉備の所に落ち延びたようです。」

華琳「……そう。劉備か……。陶謙から徐州を受け継いだり、可愛い顔をしている癖に純の言う通り、一筋縄ではいかなそうね。」

純「恐れ入ります。」

華琳「話が逸れてしまったわね。純、話の続きを。」

純「はつ。麗羽は青州や并州にも勢力を伸ばし、河北四州をほぼ手中に納まりました。後は南に下るだけです。」

華琳「純、麗羽が次に狙う相手は誰だと思うかしら?」

純「姉上もアレの性格を分かっただけでしよう。麗羽が次に狙うのは、ここでしよう。あいつは派手好きです、大きな宝箱と小さな宝箱を出されてどちらか選ぶように言われたら、迷わず大きな宝箱を選ぶ奴ですよ。」

華琳「ふふ、そうね。あなたの言う通りだわ。」

流琉「領地の大きな我々が狙われるという事ですか？」

燈「そのうえ、喜雨のおかげで土地の開拓も盛んに行われているもの。徐州よりは、よほど豊かなはずよ。」

華琳「そういうこと。州境の各城には、万全の警戒で当たるよう通達しておきなさい。．．．それから、河南の袁術の動きはどうなつていて？」

桂花「特に大きな動きはありません。州境を偵察する兵は散見されますが．．．、その程度です。」

華琳「あれも袁紹に負けず劣らずな俗物だけれど、動きがないということのも気味が悪いわね。警戒を怠らないようにしなさい。」

桂花「はつ。そちらにも既に指示は出しています。」

純「後で稟と風にも手伝わせるよ。」

桂花「はつ。ありがとうございます。」

華琳「他の皆は、いつ異変が起きても良いように準備を怠らないこと。いいわね。」
そう言つて、解散となった。その際、

純「姉上。」

華琳「何？どうしたのかしら？」

純「先程の話ですが、姉上でしたらどちらの宝箱を選びますか？」

といったのを聞いた。すると、

華琳「あら、あなたも私の性格を分かかって言ってるわね。決まってるじゃない、両方開けさせて、中の良いところを全てよ。」

華琳はそう答えた。

純「やはりそうですか。姉上らしいですね。」

華琳「ふふ。」

純「はは。」

そして、互いに笑ったのであった。

44話

冀州・易

袁紹「おーっほっほっほ！これで河北の四州はこの私のものですわね！白連さんの泣きつ面が目には浮かぶようですわ、おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

文醜「おめでどうございますっ！麗羽様ーっ！」

田豊「おめでどうございます、麗羽様！」

顔良「これで覇業の第一歩を踏み出せましたね！」

袁紹「当然ですわ！あの董卓がいなくなった今、この大陸を統一するのはこの私！大將！軍！袁本初ですわっ！」

しかし、

文醜「・・・大將軍？」

文醜は理解できなかつたので、

顔良「ほら。この間の董卓討伐の戦功で、朝廷から新しい官位をもらったでしょ。」

顔良が説明した。

文醜「ああ、前に何進がやってた……」

袁紹「何かおっしゃいました。」

文醜「……いえ、何でも。」

袁紹「ま、元々袁家は三公を輩出した高貴な家柄ですから、たかが大！将！軍！に格上げされたところで、大した事はありませんけれど。おーっほっほっほ！」

文醜「そうですねー。まだ上には相国とかいう……」

袁紹「猪々子さーん。なーにーかー、おっしゃいました!!」

文醜「べ、別に。」

田豊「もう……。せつかく麗羽様のご機嫌が良いのに、なに余計なこと言ってるのよ。」

顔良「それで、次に攻めるのは劉備さんのいる徐州ですか？公孫賛さんもそちらに逃げたみたいですけど。」

田豊「当然ね。まず確実に歩を進めて、最終的に曹操と曹和を……」

しかし、

文醜「……は？」

袁紹「……え？」

顔良「え？」

袁紹「何を言っていますの、この娘達は。」
と言われたのだった。

田豊「で、ですが、ここは戦略的にも・・・」

文醜「おいおいおい・・・先約とか前略とかなにノリ悪いこと言ってるんだよ、お前らあ。」

袁紹「次に泣かせてさしあげるのは、華琳さんに決まっているでしょう！」

顔良「えええええつ!? そんな、無茶ですよー！」

田豊「・・・はあ。」

袁紹軍は相変わらず平常運転であった・・・。

陳留・玉座の間

純「麗羽・・・。」

華琳「馬鹿は決断が早すぎるのが厄介ね。敵の情報は。」

柳琳「旗印は袁、文、顔。敵の主力は全て揃っているようです。その数、州境におよ

そ三万……」

秋蘭「また、敵の動きは極めて遅く、奇襲などは考えていない様子。むしろ、こちらを挑発しているような印象さえ受けたと、焰耶は言っております。」

純「……威力偵察か。」

華琳「ええ。そうかも知れないわね。」

春蘭「で、報告にあつた城は焰耶が入っているが、兵はどのくらいいるのだ？ 三千か？ 五千か？」

すると、

柳琳「それが……、およそ七百。」

そう柳琳が答えると、

春蘭「ななひやくう!?」

秋蘭「城といつても、州境の監視所と変わらんからな。周囲にはもつと兵のいる街もあるが、一番手薄な所を突かれた。」

春蘭「そんなもの、手も足も出んではないか！ 攻略が始まれば、籠城したところで半日も保たんぞ！ そうなれば、焰耶が……！」

純「桂花、今すぐ動かせる兵士はどのくらいいる？」

桂花「はい。半日あれば、城の兵から五千。明日には遠征に出ている季衣と流琉が戻

りますから、もう一万。北部の駐留軍をかき集めてさらに一万……。計二万五千ほどかと。」

華琳「少ないわね。親衛隊を加えればどうなる？」

桂花「華琳様！」

華琳「非常時に兵だけ遊ばせておいても仕方ないでしょう。どうなの？」

桂花「なら、もう三千は……。」

純「しかし、それでこちらの全戦力を集結させてしまえますと、相手の威力偵察にむざむざ乗る形になります。今後の作戦展開に、大きな支障をもたらしてしまうかと。」

稟「はい。純様の仰る通りです。」

桂花「はい。私も純様の意見に同意します。」

華琳「ふむ……。ならば、策は？」

桂花「はい。ここは件の城の放棄を提案致します。」

桂花「袁紹のことですから、小城とはいえ城を落とせば調子に乗ってもつと大きな城を狙いに来るでしょう。もちろん焰耶には城を脱出してもらい、焰耶を含めて戦力を整え、万全な状態で挑むべきかと。」

桂花「数日あれば、さらに三万ほどは集められるはずです。」

真桜「調子に乗ってって……。そんなもんなん？向こうかて、軍師くらいおるんちゃ

うん？」

桂花「確かに向こうには田豊もいるけどね。．．．袁紹がどんな奴か、あなた達も反董卓連合で見たでしょう？調子に乗ったあれが聞くとと思う？」

真桜「．．．せやな。」

桂花「袁紹さえ退ければ、最初の城を取り戻す事は容易です。私の提案する戦の場所は．．．」

沙和「え？この城って．．．！」

稟「なるほど．．．」

風「．．．」

桂花が目の前の地図で指した場所に、一部は思わず息を呑んだ。

柳琳「前に、季衣さんや風さん達と守った街ですな。」

燈「ええ。今この街は、北部の軍の駐留拠点となっているの。ここに兵が五千、周囲の城にもある程度の兵が置いてあるから、守備の兵を残して集めても一万の戦力になるわ。」

風「黄巾の騒ぎから、やっと復興したばかりの街でしょう。それをまた戦火にさらすというのですか．．．？」

桂花「その為の兵士と防壁よ。今使わなくてどうするの。」

稟「はい。私も桂花と同じ意見です。」

凧「華琳様、純様。私情を挟むように申し訳ないのですが、この策には反対です。」

沙和「沙和もなの！」

真桜「ウチも、さすがになあ……。」

桂花「あんた達、そんな感情論で戦つてちや、勝てる戦も勝てなくなるでしょ！戦火にさらされるのが嫌なのは、どこの村や街だつて当たり前なんだから。」

真桜「そうは言うけれど、復興したばかりやで!?まだそれも十分やあらへんのに。」
すると、

柳琳「……あの。」

柳琳が話しかけてきた。

純「どうした、柳琳？」

柳琳「いえ、お話中のところ、本当に申し訳ないのですが……、焰耶さんからの報告には、まだ続きがありました。」

純「何だ。」

柳琳「兵の増援は不要だと。」

桂花「そのまま撤退するの？」

柳琳「いえ。守り切るそうぞ。」

桂花「はああ!？」

真桜「それこそ、なんぼなんでも無茶過ぎひんか？ウチらが秋蘭様と防衛戦したときかて、そないな戦力差はなかったで。」

稟「それに城もそこまで丈夫ではなかったはず……。焰耶は何を……。！」

純「……。分かった。ならば増援は送らない。」

桂花「純様!？」

稟「純様!？」

風「……。」

純「あいつのことだ、何か考えがあつての事だ。秋蘭。」

秋蘭「はっ。」

純「麗羽達を退けた後、こちらに来るよう焰耶に伝えておけ。皆の前で理由をちゃんと説明してもらおう。」

華琳「……。生きていたらの話だけだね。」

秋蘭「……。御意。」

桂花「……。」

稟「……。」

純「2人共、聞いているか？」

桂花「え．．．あ、はい。かしこまりました。」

稟「．．．かしこまりました。」

純「お前達も勝手に兵は動かすな。コレは命令だ。．．．守れなかつた者は嚴罰に処す、良いな。」

華琳「皆、分かつたわね。解散！」

苑州・濟陰

焰耶「三万の大軍団。いなしなければ間違はなく、我らの最後．．．か。」

副官A「魏延様。曹和様から返事が来ました。増援は送らない代わりに、後で城に来て皆の前で理由を説明しろ、だそうです。」

焰耶「そうか、分かつた。相手の性格ならば、この作戦は成功すると思うが．．．。」

副官A「し、しかし、もし袁紹が攻めてきたら．．．！」

焰耶「その時はその時だ。お前達を逃がし、私はこの城と共に討ち死にする．．．と前なら言っていたかもな。」

副官A「では？」

焰耶「うむ。私もお前達と共に脱出し、お館の元に戻る。お館の夢を叶えるため、まだ死ねないからな。」

そう言つて、焰耶は眼下の袁紹軍を泰然としながら見ていたのだった。

袁紹軍本陣

袁紹「・・・あの、斗詩さん？私、報告を聞き間違えたのではありませんわよね？」
顔良「はい。目の前の城は、見張りの兵士くらいしかいないみたいです。多くても、千いかない程度かと。」

袁紹「真直さん。確かに私、相手の手薄な所を選べとは言いましたけれど・・・いくらなんでも、少なすぎませんか？」

田豊「えええ、私達の行動範囲内で一番確実に落とせそうな城を選べって言ったの、麗羽様じゃないですかー！」

文醜「確實っていつても、千はないぜ、千は。こつちは三万の大軍団なんだぜ？」

文醜「もつとこう、十万くらいの兵がこう、どーんという所とか選べば良かったのに……！」

田豊「なんでわざわざ戦力差三倍の相手にぶつかりに行くのよ！」

文醜「あたいが四万、斗詩が三万倒せば、後は五分五分だろ。」

田豊「計算になつてないわよ、それ。」

文醜「あ、真直が一万倒すか？」

田豊「軍師の私に無茶言わないで！」

文醜「でも、楽勝な勝負なんて面白くもないだろ。あたいと斗詩の気合と努力と友情で、ものすごい強敵をずがーんと打ち破るのがいいんじゃないか！あ、後愛ね、愛！」

顔良「いや……もつと平和なのでいいんだけど。」

文醜「愛！」

顔良「あー、はいはい。はあ……。」

袁紹「この辺りの街ではいけませんでしたの？兵力が五千とありますけれど。」

田豊「そこは敵が多いからやめようって言ったの麗羽様じゃ……。」

袁紹「……？」

田豊「ああ……、覚えてないんですね。」

袁紹「まあいいですわ。そんなしよぼくれた相手なんかちよいちよいつと蹴散らし

て、華琳さんに私の力を示しておあげなさい。猪々子さん！斗詩さん！

文醜「へーい！」

顔良「分かりました。」

と言った話があったのだった。

陳留

春蘭「糧食は後続に持たせろ。我々が持つのは最小限でいい！とにかく、機動力を高めろ！」

沙和「騎馬隊を優先なの！歩兵は後からで良いのー！」

星「騒がしいと思えば、何をやっているのだ、お前達。」

春蘭「星！見て分らんか！出撃の準備だ！」

星「分かっているから言っておるのだ。主に禁止されたぞ。」

春蘭「ふんっ。袁紹ごときに華琳様と純様の領土を穢されて、黙っていられるものか

！華琳様と純様がお許しになっても、この夏侯元讓が許さん！それに、なんと少しでも焰耶を助けねば！」

凧「……すまない、星。私も春蘭様と同意見なのだ。それに、あの街を戦火にさらす策にも賛成いたしかねる。」

真桜「春蘭様！出撃準備、完了したので！」

春蘭「よし。先発隊は私が率いる。後続は凧、真桜、沙和。貴様らに任せるぞ。」

凧「はっ！」

真桜「まかしとき！」

沙和「分かったの！」

星「待て春蘭！」

すると、

霞「おいこら！自分ら、何やっとなねん！」

霞もやって来た。

春蘭「ちつ……、星でも厳しいのに、更に厄介になった。」

星「霞か。春蘭が焰耶の籠っている城に行くのだ、助太刀を頼む。」

霞「……つたく。ここもイノシシか！どあほう！」

星「全くだ……。」

春蘭「貴様らも似たようなものではないか！」

霞「ウチと星は自制効くぶんまだマシや！星、純を呼んで来い！ここはウチが食い止めるさかい！」

星「心配致すな。既に呼んでいる。」

霞「そうか……。本隊、止まれ！止まれえいつ！」

春蘭「貴様ら……。！どうしても止める気か！」

霞「当たり前や！もしどうしても行くつちゆうんなら……」

星「我らを倒してからにしろ!!」

春蘭「上等だ！ならば……。行くぞ！」

霞「来い！」

星「やれやれ。イノシシを躰けるか……」

そう言つて、互いに得物を構え、ぶつかつた。

袁紹軍

袁紹軍兵士A「文醜様。兵の配置、完了しました。」

文醜「んー。」

顔良「面白く無さそうだね、文ちゃん。」

文醜「あつたり前だろー。ガキとケンカして勝てとか言われて、やる気の出る奴なんかいるもんか。」

顔良「もう……。でも、千かあ……。」

文醜「こつちは連れてきた兵のうち、麗羽様の近衛以外を全員突っ込んでるんだぜ？半分で行つても半日もかかないだろ。」

顔良「なんか、本当に弱い者イジメだね……。」

文醜「頭の良い奴の考える事は、えげつないよなー。あ、斗詩は別な。」

顔良「……作戦は有効っていうのは分かるんだけどね。」

袁紹軍兵士B「伝令です！後方の袁紹様から、攻撃はまだかだそうです。」

文醜「うー……。」

顔良「どうする？文ちゃん。」

文醜「うーん……。なんか、熱出そう……。」

顔良「え？この程度で？」

文醜「だって、百万くらいいると思つたんだもん。とにかくぶち当たればいいやー、く

らいに考えてたら、たったの千だぜ、千。」

顔良「いや、百万はいくらなんでも無茶・・・」

文醜「んー。千かー。千だよなー。んー。」

顔良「しないなら、私が号令かけようか？」

文醜「いや・・・よーし、決めた！斗詩、全軍に通達！これより行動を開始するぞっ
！」

そして、顔良と文醜は行動を開始した。

陳留

その頃、春蘭と霞、そして星が激しい戦いを繰り広げていた。その時、
純「お前ら、何をしている！」

華琳「春蘭、やめなさい！」

華琳と純がやって来た。

春蘭「かつ！華琳様っ！純様っ！」

純「何でこうなったかは大体察するが、説明しろ。」

霞「今ええ所なんやから、邪魔せんといつてえええええいつ！」

春蘭「・・・くうっ！」

そして、霞が春蘭の剣を吹き飛ばした。

香風「おー。勝負あり。」

霞「さて、今度はウチの勝ちやなあ。春蘭。」

星「ふっ。霞に先を越されたか・・・。」

霞「堪忍な、星。」

春蘭「お、おい、今のは油断して・・・っ！」

純「見苦しいぞ、春蘭。」

華琳「そうよ、春蘭。」

春蘭「うう・・・、華琳様と純様まで・・・。」

純「で、何をしているんだ。答えろ。」

春蘭「い・・・、いかに華琳様と純様の、此度は純様ですが、そのご判断とは言え、今

回の件、納得いたしかねます！」

春蘭「件の城の指揮官がいくら焰耶であっても、七百で城を守るのは不可能です。袁紹ごときに華琳様と純様の領地を穢されるなど・・・、あつてはなりません！」

純「それで兵を勝手に動かしたんだな？」

春蘭「これも華琳様と純様を思えばこそ！華琳様と純様の御為ならば、この首など惜しくありません！」

それを聞いた純は、

純「・・・はあ。姉上、こいつにはもう少し説明しておくべきでした。」

華琳「そうね。」

と華琳に言った。

純「・・・分かった。出撃しろ。」

春蘭「純様っ！」

星「主!？」

霞「おいおいおい！それでええんか？」

純「ただし、これだけの兵を連れて行くことは許さねー。お前の最精鋭・・・そうだな、三百だけ動かすことを許そう。」

霞「さ・・・、三百やて!？」

香風「純様ー。」

純「ああ、香風も同行したいそうだから、こいつは三百に含まなくて構わねーぞ。少数精鋭で動くなら、数日あれば向こうに着くだろうな。構いませんね、姉上？」

華琳「軍に関する全権はあなたが握ってる。あなたに任せるわ。」

純「焰耶率いる城の守備隊と合わせれば千になる。これで勝てないようだったら、お前の決死の覚悟で足りないところを埋めてみる。・・・春蘭、お前なら出来る。」

春蘭「はっ！純様の信任に応えるため、存分に暴れて見せます！総員、騎乗っ！」

霞「おい、春蘭っ！」

星「春蘭っ！」

春蘭「腕に覚えのある者だけ私に続け！ただし、城を出る時に三百を越えた者は置いてゆくぞ！出撃！」

香風「それじゃ華琳様、純様、行ってきます。」

純「ああ。後の事は任せたぞ。」

華琳「ええ。任せたわ。」

そして、春蘭達は出撃した。

星「主、宜しいのですか!？」

霞「いくら何でもそりゃひどすぎひん？七百が千になったかて、相手が三万じゃ足しにもならないで。」

純「構わねーよ。どうせ春蘭が到着する頃には終わってるから、三百もいれば十分だ。」

純「後は・・・、賊退治の話が来てるから、霞と星は、凧達3人を連れてお前が出てくれ。・・・ただし、糧食や矢はちゃんと持って行けよ？」

霞「そりやかまへんけど・・・。」

星「主・・・。」

純「姉上、話を進めましたが、宜しいですね？」

華琳「ええ、構わないわ。軍の事や戦の事は、あなたが握ってるもの。そして、騒ぎはひとまず収まったのだった。」

その数日後、

純「やはりここにいたか、お前達。」

そう言つて、純は城壁の上の見張り台にいる2人に声をかけた。

季衣「あ、純様・・・。」

流琉「はい。季衣が寝られないらしくて・・・。」

純「・・・そつか。」

純（まつ、ここは遠くまでよく見える。春蘭達が戻ってきたら一番に分かる場所だもんな・・・。）

季衣「春蘭様、いつ帰ってくるんだろう・・・。」

純「もう少しだ。」

季衣「あんな無茶な事するなら、僕も連れて行って欲しかったのに・・・春蘭様の馬鹿。」

純「お前らは盗賊討伐に出たから、入れ違いになっちゃったからしよーがねーよ。」

実際、この2人が戻ってきたときには、既に春蘭は出撃しており、季衣は再出撃を華琳とそこにいる純に求めたが、許さなかったのだった。

季衣「それだつて分かってますよう・・・でも、純様・・・ダメですよね？」

純「駄目だ。出撃は許さん。大丈夫だ、ちゃんと帰ってくるから。春蘭を信じろ。」

季衣「はい・・・。」

そう言つて、季衣は少し涙ぐんでいた。ここに来る間も、桂花の執務室の灯りが点いており、様々な件の十手、二十手先の対応を考えている。もちろん純も、稟と風に任せしており、今も稟と風は、その先の対応策を考えている。その時、

秋蘭「季衣、流琉。明日は早いのだ、早く寝ておけ。純様も早くお休みになられては。」

秋蘭が、華命と柳琳、そして栄華を連れてやって来た。

純「秋蘭か……。それとお前らも。寝れねーのか？」

流琉「あ、秋蘭様。」

華侖「だって、春姉え達、心配つすよ。」

栄華「……。ですわ。いくら香風さんが一緒と言つても、三万対千でしょう？」

純「大丈夫だ、心配すんな。」

柳琳「お兄様。それはお姉様も同じ事をおつしやつていましたけど……。」

栄華「そうですね、お兄様。いくらなんでも……。」

秋蘭「……。姉者は無事に帰つてくるさ。私はそれを言いに来ただけだ。それに、私は純様を信じます。」

純「……。そうか。」

すると、

季衣「……。あれっ!？」

流琉「ん? どうかしたの?」

季衣が何かを見つけた。

季衣「ねえ、みんな! あれ……。あそこ!」

そう言つて、季衣が指差す方向には、もうもうと上がる砂煙が見えた。

栄華「伝令……。ではありませんわね。」

柳琳「だいぶ多いですね。．．．五十、いや、百は超えている？旗印は．．．」

華命「えつと．．．、夏侯つす！あれ、春姉えつすよ！」

純「．．．やはり、戦わずに戻ってきたか。」

秋蘭「そうですね。」

純「門を開けに行くぞ。春蘭を迎える．．．流琉は姉上をお呼びして来てくれ。」

流琉「はいっ！」

そして、純達は城門に着いた途端、

季衣「春蘭様っ！」

華命「春姉えー！」

季衣と華命が、春蘭に飛びついた。

春蘭「おお、お前達か．．．。」

栄華「香風さん！」

香風「純様ー。」

純「ああ、お帰り。」

春蘭「純様、わざわざのお出迎え、ありがとうございます。」

純「ああ、ご苦労だった。」

すると、

華琳「出迎えご苦労だったわね、春蘭、香風。」

華琳が出迎えに現れ、

春蘭「はあ・・・。」

純「焰耶も、ご苦労だった。」

焰耶「はっ！」

焰耶も、その場に元気な姿で現れたのだった。

45話

苑州・東都

袁紹「おーっほっほっほ！やはり、こちらの方が私らしいですわ！おーっほっほっほ！」

文醜「ですよー！七百の城を三万で落とすとか、あたいや麗羽様っぽくないですもん！」

袁紹「ええ！この大軍団でたった千を蹴散らすなど、この大！将！軍！袁本初にしては、あまりに大人げない行為でしたわ。」

田豊「全くもう……どうして私の言うことを聞かずに、こういう思いつきみたいな作戦行動ばかり……。」

顔良「まあまあ、真直ちゃんも落ち着いて……。」

田豊「それに、五千の兵がいる駐屯地を攻めるとか、これももう威力偵察じゃなくって、普通に侵攻じゃないですかー！」

袁紹「別にどちらでも構いませんわ。どうせ華琳さんと事を構えるなら、陥とすのでしよう?」

田豊「それは陥としますとも。陥としますけど、それまでには補給の段取りとか諸侯との調整とか色々ですね。政治的なあれやこれやがですね。」

文醜「まあいいじゃんか。七百の城を潰しても大人げないって言われるだけだし。だつたら、五千の城とがつつり戦つた方がそれっぽいじゃん。」

袁紹「そうですね。私の覇道の第一歩となる戦は、せめてこの程度の規模はありませんと! 斗詩さんもそう思いますわよね?」

顔良「あ、あはは。それはまあ。」

田豊「・・・うう、もう敵の領地内の調査が出来たと思うしかないわね。斗詩、周辺の地域調査はどう?」

顔良「うん。そっちはちゃんと終わつてるよ。ここに来るまでの地形も、兵を出して調べさせてる。」

田豊「ホント、アンタだけが頼りだわ。：城攻めが無事に終われば良いんだけど。」
顔良「とりあえず、敵の兵も五千か六千くらいだから、応援が来るまでに何とかなるんじゃないかなあ。」

袁紹「そうですね! 次の作戦は、素早さが命ですわよ! 日が昇つたらばーつと仕掛け

一方、霞と星達は、

霞「袁紹に遠慮はいらへんで！」

星「総員、突撃いいいっ！」

凧「我らの街を狙う薄汚い盗賊共を、華琳様と純様の領地から追い払うのだ！攻撃、攻撃いっ！」

真桜「どうせこっちは少数や！思いつきり引つかき回して、後は混乱に任せるだけでええ！終わったらとつととずらかるで！」

沙和「……お姉様あ、星ちゃん。なんか、沙和達の方が盗賊みたいなの。」

霞「考えたら負けやで、沙和！」

星「霞の言う通りだ、沙和！皆の者！朝日が昇るまでには撤退するぞ！行けーっ！！」
こうして、袁紹の三万の兵を撃退したのであった。

陳留・玉座の間

真夜中の緊急会議でありながら、城にいた主要メンバーの全員が、予定時間に集まった。形はどうあれ、焰耶はもちろん、春蘭達の事も心配してたのだ。

純「……さて、説明して貰おうか、焰耶。何故あの状況で、増援がいらないと云ったのか。」

焰耶「はっ。相手は三万の袁紹軍でしたが、前線指揮官の文醜は、情報によると派手な戦が好きですから、たった七百の城など相手にしないだろうと思つたのです。」

春蘭「……ふむ。」

焰耶「……ただし、ここで華琳殿がお館がもし増援を送つたら、向こうもケンカを売られたと思つてしまいます。」

焰耶「袁紹達の性格だと、特に華琳殿から売られたケンカは絶対買つてしまいます。……そしたら我らは全滅し、城も半日は保ちません。」

桂花「なるほど……。袁紹と文醜の性格をよく調べていたようね。」

稟「けれど、向こうにも軍師の田豊がいたはずですよ。」

風「それに、抑え役の顔良もですね。」

焰耶「あの2人が、軍師や抑え役の言葉をちゃんと聞くとも思えません、特に今回は絶対に負けない戦でしたし、油断を油断とも思わなかつたのではないでしょうか？」

華琳「……分かった？春蘭。」

春蘭「はあ。だが、焰耶……。もし袁紹が七百の手勢を与しやすしと見て、総攻撃を仕掛けてきたらどうしていたのだ？」

焰耶「もしそういう事態になれば、七百の兵を逃がし、私は城と共に討ち死にするつもりでした。」

春蘭「なっ……。!?」

その発言に、春蘭はもちろん、華琳と純以外の他の皆は絶句したのだった。

焰耶「……と、以前の私ならそう思っていました。」

秋蘭「……今は違うのか？」

焰耶「はっ。城に火を放ち、皆でこの城を脱出しようと考えてました。七百の兵ならそれも十分可能ですから。それに、私の命は、既にお館に捧げております。お館の夢を叶えるため、私はまだ死ねませんので。」

その発言に、

純（焰耶……。随分成長したな……）

と純はそう思った。

春蘭「下手に数が増えると、逆に動きが取れないと？」

焰耶「三千の兵では上手いかなかったです。」

純「……どちらにせよ、春蘭の増援は必要なかったということだ。」

華琳「ええ、そうね。」

春蘭「ならば、どうして行かせたのですか。それに香風まで。」

純「念のためにな。それに、元々は香風に任せるつもりだったけど、二人いても問題ねーだろ。」

春蘭「……むう。それでは完全に子供の使いではありませんか。」

純「行きたいと言ったのはお前だぞ、春蘭。」

その時、

柳琳「お姉様、お兄様。いま霞さんと星さんから早馬の連絡が入りました。焰耶さんの城から駐屯地に移動中の袁紹軍を捕捉、本日の早暁にも奇襲を掛けるとのことです。」
霞からの知らせが来たのであった。

純「分かった。」

華琳「ふふ。盗賊って、やはりそういうことだったのね。」

純「威力偵察ですから、ちゃんと一当てはさせました。感謝はされても、恨まれる筋合いはありませんよ。」

華琳「ええ。あなたの言う通りね。」

純「霞や星、風達のことだから、そちらの奇襲の心配はないだろう。お前も見事な指

揮だったな、焰耶。」

焰耶「いえ。追撃の兵を出して下さって、ありがとうございます。」
純「今後ともよろしく頼むぞ。」

焰耶「はっ！」

そう言つて、焰耶は拱手した。それを見ていた桂花は、

桂花「・・・どこかの脳筋も見習つて欲しいわ。」

春蘭「おい桂花、それは私の事を言っているのか？」

桂花「別にあんたなんて一言も言つてないのだけど。」

春蘭「貴様ーっ!!」

そんなことを言つて春蘭を怒らせたのだった。

46話

陳留・玉座の間

焰耶の活躍から暫くが経ち、新たな情報が入った。それは、袁紹が劉備達のいる徐州の州境を越えたという情報だった。

華琳「そう。麗羽が。」

純「まさか本当にやるとは思いませんでしたね。」

華琳「ええ、そうね。」

稟「袁術相手で手一杯の劉備を見て、好機と思ったのでしょうか？」

純「いや、違うと思う。」

華琳「ええ、袁術に徐州を一人占めされるのが、急に惜しくなったのでしょうかね。」

純「・・・まるで子供ですね。」

華琳「そうね。・・・風、お茶をもう一杯貰えるかしら？」

風「はい。純様もいりますかー。」

純「ふつ、貰おうか。」

華琳「さて、私達はこれからどうするべきか。皆はどう考えるかしら？」

純「稟はどう考える？」

稟「はい。徐州の遠征軍には袁紹、文醜、顔良という敵の主力が揃っています。この機に南皮へ攻め入り、徹底的に袁紹を叩くべきではないでしょうか。」

燈「・・・賛成です。もしくは遠征軍の後背を断ち、浮き草となった袁紹軍本隊を叩くべきかと。血の巡りの絶えた頭脳も、頭脳を失った手足も、いずれも敵とはなりえません。」

といった意見も出た。すると、

桂花「反対です。袁紹も袁術も先見の明のない小物ゆえ、今は大軍でも、放っておけば勝手に根腐れを起こします。」

桂花「しかし劉備は、以前純様が仰つてたように、いずれ華琳様と純様の前に立ち塞がるであろう相手。これを機に、まずは徐州を攻め劉備を討つべきかと。」

榮華「私も桂花さんの意見に賛成ですわ。面倒な種は先に省くに限りませすわ。」

といった意見も出た。

純（見事に分かれたな・・・。）

華琳「純は？」

純「……俺としては、どちらにも手を出さずに国力を高めるべく傍観という考えです。風は？」

しかし、

風「……ぐー。」

……寝ていた。

桂花「純様が聞いているのよ、寝るなっ！」

風「……おおっ。」

純「……膝枕しようか？」

風「お願いしまーす。」

稟「純様……。」

純「冗談だ。」

風「でー。劉備さんをよつてたかつて袋叩きにするんですか？それとも、袁紹さんの所に火事場泥棒に入るんですか？」

風「あとは、えーと……劉備さんをだまし討ちでしたっけ？」

稟「……。」

桂花「……。」

栄華「……身も蓋もない言い方をなさいますのね。」

華琳「でも、風の言っている事に間違いはないわ。純の案に決定ね。」
そして、袁紹の対策が決定したのだった。

徐州・琅邪

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

文醜「進め進めー！目指すは劉備の本拠地だー！」

顔良「麗羽様あ．．．。ホントに良かったんですか？」

袁紹「何がですか？」

顔良「だって、劉備さん達、袁術様と戦ってて大変なのに．．．。」

袁紹「そんな私の知ったことではありませんわ！そもそも、美羽さんなんかに必死になつている劉備さんが悪いんですよ。ねえ真直さん！」

田豊「ええ．．．まあ、流石に火事場泥棒感が半端ない気はしますけど、そうですね。」

文醜「そうそう。所詮この世は焼肉定食．．．、空しいぜ。」

田豊「それ、何か違うわない？」

文醜「・・・そうだっけ？」

顔良「文ちゃん・・・、そんな所カッコ良く言っても、全然カッコ良くないよう。」

袁紹「それに、こんな広い土地を美羽さんに一人占めさせるなんて・・・この間お夜食を食べていたら、だんだん腹が立ってきましたの！」

顔良「はあ・・・。」

文醜「結局は思いつきなんすね・・・。」

袁紹「閃きと言って欲しいですわね。」

田豊「そうは言っても、策を考えるのは私なんですから・・・少しは気を使って欲しいです。・・・しかもどうせ聞いてくれないのに。」

袁紹「ともかく、南にかかりつきりの劉備さんのお城はスツカスカのがらつがらに決まっていますわ！今のうちに私達の物にしてしまいますわよっ！」

文醜「おー！」

袁紹「声が小さいですわっ！」

三人「「おーっ！」」

田豊（・・・七百の城を落とすのは渋るくせに、ガラガラの城を落とすのは平気なんだもの。我が主ながら、ホント読むのが面倒くさいわね。）

一方、淮陰の袁術は、

袁術「はあ!? 麗羽が攻めてきたのかえ!？」

魯肅「はい。密偵から連絡があつて、もう徐州の州境あたりにいるみたいなんですよー。」

袁術「し・・・、信じられんのじゃ! 普通、そんな火事場泥棒のような真似はせんであろ!？」

孫策（・・・あなたがいつもしてる事じゃない。）

袁術「孫策! 何か言うたかや?」

孫策「べつつにー。」

袁術「とにかくこのままチンタラしては、徐州の良い所は全部麗羽に取られてしまふのじゃ!」

袁術「せめて七割・・・いや、八割は制圧せねば攻め損じゃぞ! 包、策を考えよ!」

魯肅「ひやわわ。策を考えろって言つても、美羽様包の話とか全然聞いてくれないじゃないですかあ!」

魯肅「それに向こうの軍師、將軍達の連携の隙とか包の指示の合間とか、遠慮ナシに突いてきて……、こつちが見透かされてるみたいでむちやくちや怖いんですけどー。」

張勳「包ちゃん。何か仰いました？」

魯肅「……うう、何でもないです。」

魯肅「……ひやわわ。仕官先、間違えたかなあ。」

孫策「……この軍師も大変そうねえ。」

袁術「ええい、役に立たんやつめ。……ならば孫策、おぬしらの部隊で総攻撃を掛けるのじゃ。それで劉備をやっつけて、徐州を一気に妾のものにしてみせるのじゃ！」

孫策「……言うだけなんだから、楽なものよねえ。」

袁術「返事は！」

孫策「はいはい。」

袁術「はいは一度でよいのじゃ！」

孫策「はい。」

魯肅「……と言っても、ここの将も大変そうなんですよねえ。」

一方、劉備達は、

関羽「……袁術も本気の様子か。」

張飛「さつきの戦いで、もうみんなへトへトなのだ。……ここでさつきよりも多い相手が来たら、きつと持ち堪えられないのだ。」

関羽「それに、いくら白蓮殿でも、今の城の兵だけでは……。」

北郷「でも、だからって何もしないわけにはいかないよな。」
すると、

諸葛亮「……うーん。」

龐統「やつぱり、あれかなあ……。」

諸葛亮「……でもあれは厳しいし、あれも無理があるし。」

龐統「だよねえ。あつちが立てば、こつちが立たなくなるし。」

と諸葛亮と龐統が、何か策があるのか、話し合っていた。それを見た北郷は、北郷「何か良い策があるのかい？朱里、雛里。」

と尋ねた。

諸葛亮「ないわけでは……、ないのですが。」

龐統「朱里ちゃん……。」

諸葛亮「ううん、やっぱりダメです。この策を実行すれば、きっと沢山の犠牲が出ちやいます。」

関羽「だがな、朱里よ。この窮地を乗り切る為には……犠牲はやむなしとするしかないぞ?」

鈴々「愛紗!!」

北郷「そうぞ愛紗、桃香の考えを……!!」

関羽「分かっております。心優しいご主人様と桃香様は、一人の犠牲も出したくない事を。」

北郷「愛紗!!」

しかし、

関羽「しかしご主人様。そのような超常の一手は、そうそう打てるものではありません。故に我々は、出来る限りの最良の手を打つしかないのです。」

関羽は終始冷静に北郷にそう返した。

北郷「ぐっ……。」

関羽「朱里。その策、私に授けてくれ。見事に果たしてみせる。」

鈴々「愛紗……。」

関羽「大丈夫だ鈴々。私一人ならどうともなる。ご主人様と桃香様をしかと守るの

だぞ。」

と関羽は張飛に優しく言った。

北郷「けど、そんなの……！」

その時、

劉備「そんなのダメ！絶対ダメ！みんな無事に生き残るの！」

劉備の声が、大広間に響き渡った。

関羽「しかし桃香様。他に方策がない以上、打てる手を打たねばなりません。それに、

世の中には出来ることと出来ないことが……。」

劉備「そ、それは分かっている。けど……!!」

そう言つて、劉備は顔を俯いた。すると、

北郷「……あるよ、一つだけ。」

と北郷が言った。

関羽「まさかご主人様、降伏ですか。」

北郷「いや、降伏はしない。袁紹のやり方は間違っている。」

劉備「うん。私もそう思う。力を使って制圧なんて。」

関羽「だつたら何を？」

北郷「朱里、前に言ったのだけど……。」

この決断に、劉備以外の皆は猛反対したのだが、北郷「皆が生き残るにはそれしかない。」と北郷が言い切り、強引に事を進めたのだった。

47話

陳留・玉座の間

香風「ねむい……。」

焰耶「香風、起きろ。眠いのは分かるが、もう少しだ。」

真夜中に、華琳と純から突然の集合命令が下され、眠そうな目をこすっていた。

真桜「つちゆうか焰耶、香風と一緒にやったんや。」

焰耶「その廊下で力尽きているのを拾ったのだ。」

真桜「でも何やの、こんな時間に集合で。焰耶は聞いたる？」

焰耶「私も知らない。今から徐州に強襲を掛けるとかでもないだろうしな。」

真桜「ありえそうなんが嫌やなあ。けどそれなら、せめて寝る前に言うて欲しかったわ。」

焰耶「うむ……。」

焰耶（前にいる軍師組も、そんなに緊張している様子はない……。それにもし夜に

動くなら、準備は昼に済ませるはず……。

凧「……。」

焰耶「凧、流石に早いな……。」

しかし、

凧「……。」

焰耶「……凧？」

反応がなかったため、様子を見ると、

凧「……。」

真桜「……寝とる。」

焰耶「目を開けたままだと……。」

目を開けた状態で寝ていた。

沙和「……すー。」

凧「……むにやむにや。」

華命「ぐー。」

その横では、全力で寝ている者もあり、華命に至っては大の字で堂々と寝ていたのだった。

焰耶「沙和、凧、起きろ。華命様も起きて下さい。」

風・沙「……おおっー!」

焰耶「反応まで一緒とは……。」

柳琳「姉さん。姉さんも起きて、ほら。」

華侖「むにやむにや……、もう脱いでいいすかー?」

柳琳「姉さん!」

焰耶「風もとにかく起きろ。」

風「っ!!」

霞「焰耶ー、これ何の集合か知つとるかー?」

焰耶「いや、私も分らない。」

霞「そつか……。星もかー?」

星「私も知らない。急に集合が掛かったからな……。」

桂花「そこー!うるさいわよ!」

稟「風、早くこちらに来なさい。あなたの場所はこちらでしょう。」

風「おおっ。すっかり忘れてました。」

皆それぞれに定位置に着いたところで、華琳と純、春蘭と秋蘭が入って来た。

華琳「全員揃ったようね。急に集まってもらったのは、他でもないわ。純。」

純「先程早馬で、徐州から州境を越える許可を受けた輩がいる。」

燈「……州境を？」

華琳「ええ。入りなさい。」

??「……は。」

そう言われて、入ってきたのは

凧「な……。」

真桜「何やて……！」

桂花「関羽……!？」

関羽であつた。

華琳「見覚えのある者も多いでしょうけれど、一応、名乗ってもらいましょうか。」

関羽「我が名は関雲長。徐州を治める劉玄德の家臣にして、それを支える者である。」

霞「なんで関羽がこない所に……。」

焰耶「お館と華琳殿に助けを求めたという事か……？」

純「残念だが、少し違うな。説明してくれるか？」

関羽「……私は、孟徳殿と子元殿の領地の通行許可を求めに参りました。」

焰耶「……そういうことか。」

純「焰耶、気付いたか。」

焰耶「はい。これはあくまで推測なのですが……。」

純「構わない。言ってみろ。」

焰耶「はつ。恐らくあの劉備と天の御遣いの事ですから、仲間のために戦うのが嫌だから荊州か益州に逃げるためにお館と華琳殿の領地を通らせて欲しいといった事ではないかと。」

純「流石だな、焰耶。」

関羽「……魏延殿の言う通りです。我々は、益州へ向かいたいです。」

稟「なんと無謀な……。」

季衣「ねえ、益州って遠いの？」

柳琳「はい。一番近い道を通つても、豫州から荊州の北側まで全部を横断する事になりますよ。」

季衣「え……それってものすごく遠くない!？」

桂花「ものすごく遠いわよ。だから、無謀って言ってるの。」

真桜「けど、袁紹や袁術と正面からぶつかるよりは、マシやと思うで。命あつての物種や。」

凧「それはそうだが、我々として別に徐州と同盟を組んでいるわけではないだろう？」

栄華「同盟どころか、目的地の益州も含めてこちらの仮想敵の一つですわ。」

秋蘭「……だが、そのどちらかに逃げると言ってもアテはあるのか？ 漠然と逃げる

だけでは、もはや軍とは呼べんぞ。」

その問いに、

関羽「それは……。」

関羽は顔を俯いた。

純「既に向こうから打診もあつたのではないのか？劉姓のよしみもあるだろうし、東西から俺達を牽制する同盟を結ぶというのは、理に叶っているからな。」

華琳「ええ、そうね。」

燈「益州州牧の劉璋は軍事にはさして明るくない人物と聞きますし、劉備さんの率いる将が客将としてでも陣営に加わるのは、悪い話ではないでしょうね。」

華命「えーつと、結局それって、どういう事つすか？」

桂花「……劉備達有力な将を率いた一大集団を、わざわざ私達の敵国に送る手伝いをしろつて事よ。」

焰耶「更に無茶苦茶な感じがした気がするが……。」

関羽「……。」

純「とはいえ関羽も、それは重々承知の上のようだな。この策が通るとは思っていないよな。」

関羽「……それを承知で、お願いに参りました。」

霞「主も無茶なら、それを頼みに来る将も無茶やなあ。正気やないで。」

関羽「それでもだ。」

霞「気合入つとんなあ。なんでまた、そないに頑張るん？」

関羽「確かに張遼の言う通り、私も無茶だと思つている。しかし、我々が生き残る可能性としては、これが最も高い選択でもあつた。」

霞「そつか……。しかし、その忠義、誰かさんにそつくりやなあ。なあ春蘭。」

春蘭「わ……。私はこんなに愚直ではないぞ！」

しかし、

華琳「……。」

純「……。」

桂花「……。」

秋蘭「……。」

春蘭「誰か何とか言えよ！」

皆にスルーされたのだった。

華琳「だからこれから、その返答をしに劉備の元へ向かおうと思うのだけれど……。誰か、付いて来てくれる子はいるかしら？」

徐州・彭城

純「なんだかんで全員か……。人気者ですわね、姉上。」

真夜中の行軍であつたにもかかわらず将はおろか、兵は誰一人文句を言わず準備は速やかに行われた。

華琳「あなたほどではないわ。付いてきた将の殆どは、あなたを慕っているし。」

純（でも、まんざらでもなさそうだな……。）

関羽「……。感謝します、孟徳殿、子元殿。」

華琳「さあ。私達はまだ協力するとも敵対するとも言っていないわよ。」

純「そうだ。その言葉は、無事に事が済んでから聞くことにしよう。」

関羽「それでも、主に会っていただけると、言つて下さいましたから。」

純「……。そつか。」

秋蘭「純様、先鋒から連絡が来ました。……。前方に劉の牙門旗。劉備の本陣のようです。」

純（州境ギリギリだな……。）

華琳「なら関羽。あなたの主の所に案内して頂戴。」

純「何人か一緒に付いてきてくれ。」

桂花「華琳様！純様！この状況で劉備の本陣に向かうなど、危険すぎます！畏かもしれません！」

春蘭「桂花の言う通りです！せめて、劉備をこちらに呼び出すなどさせては……？」
華琳「でしようね。私も別に、劉備のことを信用しているわけではないわ。……けれどそんな臆病な振る舞いを、この私がして良いと思う？」

純「……はあ、全く。」

春蘭「……ぐっ。」

華琳「だから関雲長。もしもこれが劉備もしくは天の御遣いの罠だったなら……貴方達はこの場で残らず死んでもらう事にするわ。特に、我が弟の実力はあなたは知っていると思うけど。」

関羽「それはありませんゆえ、ご随意に。」

華琳「それで……誰が私と純を守ってくれるのかしら？」

春蘭「はっ！」

季衣「僕も行きます！」

流琉「私も！」

純「なら、春蘭、季衣、流琉、霞……それから、焰耶と星、稟と燈も来い。残りの皆はこの場に待機。秋蘭、桂花、指揮は任せた。」

純「関雲長の確約も取ったから、中で異変があったなら、あの陣で動く者は俺達以外残らず塵殺しろ。」

秋蘭「はっ。」

桂花「華琳様、純様、お気を付け下さいませ。焰耶、季衣、命に替えても華琳様と純様のことをお守りするのよ！」

季衣「うんっ！」

焰耶「無論、承知だ！」

春蘭「おい、私も行くぞ！」

桂花「焰耶と違って、脳筋のアンタは頼りにならないわ。」

春蘭「何だとう!!」

純「やめろ2人とも。行くぞ。」

華琳「では関羽。案内を。」

そして、劉備達のいる本陣に向かった。

劉備軍本陣

劉備「曹操さん！曹和さん！」

華琳「久しいわね、劉備。連合軍の時以来かしら？」

劉備「はい。曹和さんも、あの時愛紗ちゃん和鈴ちゃんを助けて下さって、ありがとうございます。」

純「別に大したことじゃねーよ。」

華琳「それで今度は私達の領地を抜きたいなどと……また、随分と無茶を言ってきたものね。」

北郷「……ごめん、それを通したのは俺なんだ。でも、みんなが生き延びる為には、これしか思いつかなくて……。」

すると、半歩分だけ前に立つ北郷が申し訳なさそうに眉を下げた。

華琳「ふうん？貴方が……ね。まあ、それを堂々と言う貴方達の胆力は大したものだわ。いいでしょう、私達の領地を通ることを許可してあげる。」

それを聞いていた純と稟は、

純（……やはり即答か。という事は。）

稟（純様、宜しいのでしょうか？）

純（・・・どうせ姉上の事だ、ゼッテー何か要求してくるよ。）

小声で話していたのだった。

劉備「本当ですか！」

春蘭「華琳様!？」

純「まあ、劉備とこの陣の状況を見れば、長々と話す余裕もねーだろう。手短に済ませる。」

劉備「曹操さん・・・、曹和さん・・・。」

北郷「良かった・・・。」

すると、劉備と北郷はホツとした顔をした。

華琳「移動に使う街道はこちらで指定させてもらうわ。物資と糧食の手配もしてあげる。・・・で、益州に向かう兵はどれほど？一万？二万？」

その質問に、

劉備「え、ええつと・・・。」

北郷「そ、それは・・・。」

2人は目を泳がせたのだった。すると、

諸葛亮「十五万です。」

後ろから諸葛亮が人数を言ったのだった。これには、

春蘭「じゅ……っ!?」

純「……。」

春蘭は驚きのあまり絶句し、純は眉間にしわを寄せたのであった。

華琳「……それだけの兵がいて、戦わないというの?」

劉備「あ、いえ……兵は二万もいません。後は……」

諸葛亮「話を聞いた徐州の都の民が、我々と行動を共にしたいと。」

華琳「呆れた。それを真に受けて、全部連れて行くというの? どうせ年寄りや子供もいるのでしょうか?」

北郷「それでも……平原から付いてきてくれた人もいるし、見捨てるわけにはいかなくて。」

純「……稟、燈、こちらでも糧食を都合するとして、何とかなりそうか?」

燈「移動の大半は豫州ですから、物資の余裕はなくてもありません。こちらで隊を先行させれば何とか……。途中の開拓村で、希望者を受け入れるという手もありますし。」

稟「後半の荊州北部も、それまでに物資の確保を行えば不可能ではないと思います
が。」

純「……そうか。」

華琳「……ふむ。」

その様子を見た劉備と北郷は、

劉備「あの……、曹操さん？曹和さん？」

北郷「……。」

不安な顔で見ている。

華琳「……いいわ。そこはこちらで何とかする。」

純「けれどその十三万の足手まとい、例え一人でも賊へと墮としたら、生きて俺達の領を出られないと知れ。いいな？」

劉備「もちろんです！ありがとうございます！」

華琳「それから通行料は……、そうね、関羽でいいわ。」

その言葉に、

劉備「……え？」

北郷「ちよ、ちよつと待ってくれ！それは……っ！」

劉備と北郷の表情は、安堵から一変、驚愕に染まった。

純「やはりそうか……。」

純は、こうなると思ったのか、別段驚きもしなかつた。

華琳「何を不思議そうな顔をしているの？旅芸人でも関所で通行料くらい払うわよ？」

当たり前でしよう。」

劉備「え、でも、それって……！」

華琳「それをこちらにこれだけの難事を押しつけておいて、まさか一銭も払わずに通れるとも思っていたの？ 冗談よね？」

北郷「け、けど……！」

華琳「それに、貴方達の大切な十五万が無事に生き延びられるのよ？ もちろん、ここから追撃に来るだろう袁紹と袁術はこちらで何とかしてあげましょう。」

劉備「でも……！」

華琳「その代価をたった一人の將の身柄であがなえるというなら……、安いものだと思わない？」

関羽「……桃香様。」

劉備「それは……。」

劉備「そう……ですね。」

華琳「……。」

そして、

劉備「ありがとうございます、曹操さん。」

と言った。これには、

北郷「桃香っ!？」

諸葛亮「桃香様っ!？」

張飛「お姉ちゃん!」

北郷達は驚きの声をあげた。しかし、

劉備「・・・でも、ごめんなさい。」

華琳「あら。」

劉備「愛紗ちゃん是我的大事な妹です。鈴々ちゃんも朱里ちゃんもご主人様も・・・、他の皆も、誰一人欠けさせないための、今回の作戦なんです。」

劉備「だから、愛紗ちゃんがいなくなるんじや、意味がないんです。こんな所まで来てもらったのに・・・、本当にごめんなさい。」

そう言つて、劉備は頭を下げた。

華琳「そう。流石、徳をもつて政事を成す劉備だわ。・・・残念ね。」

関羽「桃香様・・・、私なら。」

劉備「言つたでしよ?愛紗ちゃんがいなくなるんじや、意味がないつて。朱里ちゃん、他の経路をもう一度調べてみて。袁紹さんか袁術さんの州境あたりで、抜けられそうな道はない?」

諸葛亮「・・・はい、もう一度洗い直してみます!」

そして、諸葛亮が地図を広げてもう一度安全な道がないか調べようとした時、

華琳「劉備。」

劉備「・・・はい？」

純（・・・まずい！）

華琳「甘えるのもいい加減になさい！」

と一喝したのだった。

劉備「・・・っ！」

華琳「たった一人の将のために、全軍を犠牲にするですって？寝惚けた物言いも大概にすることね！」

劉備「で・・・でも、愛紗ちゃんはそれだけ大切な人なんです！」

華琳「なら、その為に他の将・・・張飛や諸葛亮、そして十三万の貴女を慕う民が死んでも良いと言うの？」

劉備「だから今、朱里ちゃんに何とかかなりそうな経路の策定を・・・！」

華琳「それが無いから、貴女達は今、ここにいますのしょう？・・・違うかしら？」

劉備「・・・そ、それは・・・。」

華琳「諸葛亮。」

諸葛亮「はひっ！」

華琳「そんな都合の良い道はあるの？」

諸葛亮「そ．．．それは．．．」

華琳「郭嘉。大陸中を渡り歩いたあなたなら分かるわよね？どう？」

その問いに、

稟「ありません。」

稟は即答した。

稟「まず十三万の民を連れた時点で、現実的ではありません。とはいえ、一番安全な経路を使ったと仮定して、追跡を振り切りつつの行程であれば．．．そうですね」

稟「目的地に一万も辿り着ければ、御の字ではないでしょうか。それは、曹操軍一の精鋭である純様の部隊でも、同じでしょう。」

劉備「．．．つ。朱里ちゃん．．．」

諸葛亮「．．．」

劉備「そんな．．．」

稟「旅というのはそれほど過酷なものなのですよ。それは、一から兵を集めて挙兵したあなた方も十分ご存じなのでは？」

劉備「．．．」

華琳「現実を受け止めなさい、劉備。あなたが本当に民の為を思うなら、関羽を通行

料に、私達の領を抜けるのが一番なのよ。」

華琳「それでも民の脱落は出るでしょう。けれど、こちらはその民を受け入れる余裕もあるわ。耕す土地も与えられる。」

関羽「桃香様、私の事は大丈夫ですから……。」

劉備「曹操さん……だったら……。」

華琳「それから、あなたが関羽の代わりになる、などという寝惚けた提案をする気なら、この場であなただを叩き斬るわよ。それこそ十三万の民全てを道に迷わせる行いだわ。それに、国が王を失ってどうするつもりなの？」

劉備「……！」

華琳「それから、天の御遣い北郷一刀、貴方もよ。……まあ、貴方が我が弟より秀でている自信があるのであれば、言うくらいは許してあげるけれど？」

北郷「ぐっ……。」

まさに口を開こうとしていた北郷が齒噛みするように押し黙った。もし華琳が釘を刺していなかったら、関羽の代わりを、劉備の代わりを申し出たことだろう。

華琳「……どうしても関羽を譲る気はないの？」

劉備「……。」

華琳「まるで駄々っ子ね。今度は沈黙？」

劉備「……。」

華琳「いいわ。あなたと話していても埒が明かない。……勝手に通って行きなさい。」

劉備「……え？」

華琳「聞こえなかった？ 私達の領を通って良いと言ったのよ。……益州でも荊州でもどこへでも行けば良い。」

春蘭「華琳様！」

華琳「ただし。」

劉備「……通行料ですか？」

華琳「当たり前でしょう。……先に言っておくわ。あなたが南方を統一した時、私と弟は、必ずあなたの国を奪いに行く。通行料の利息込みでね。」

劉備「……。」

華琳「そうされたくないなら、私達の隙を狙ってこちらに攻めてきなさい。そこで私と弟を殺せれば、借金は帳消しにしてあげる。」

劉備「……そんなことは。」

華琳「ない？ なら、私と弟が滅ぼしに行つてあげるから、せいぜい良い国を作つて待つていなさい。」

華琳「あなたはとても愛らしいから……、私の側仕えにして、存分に可愛がつてあ

げる。」

劉備「……。」

華琳「純、霞。劉備達を向こう側まで案内なさい。街道の選択は純に任せるわ。」

純「良いのですか姉上、俺を案内役にして。」

華琳「麗羽達なら、純がいなくても十分に戦えるわ。逆にここで純を使う方が無駄なよ。」

純「そうですか。稟、道の選択を頼む。」

稟「はっ。」

純「焰耶と霞は俺と一緒に劉備軍の先頭。星。」

星「ここに。」

純「お前は、劉備軍の後ろから脱落者が出たら俺に報告してゆっくり来い。」

星「はっ。」

華琳「それでは私達は戻るわよ……劉備、あなたがした選択……、間違っていないければ良いけれどね。」

劉備「……間違つてなんかいません。それを、絶対に証明して見せますから！」

華琳「良い返事だわ。……帰るわよ！」

そう言い、華琳達は自分達の軍に戻り、純の部隊と霞の部隊は劉備軍の案内に向かっ

たのだった。

その道中、

劉備「・・・あの、魏延さん。」

焰耶「何でしょう？劉備殿。」

劉備「魏延さんは、どうして曹操さんと曹和さんの所にいるのですか？魏延さん程の人なら、沢山の人を助けられたと思うんです。」

焰耶「：私の主君はお館です。私があのお方に仕えている理由は、お館の理想を：、夢を叶える為です。」

劉備「しかし、曹操さんと曹和さんは武力を持って人を従えようと。」

焰耶「力を持つことは、良いことだと思いますが。」

劉備「いいえ、違います。力を持っていても笑顔にはなりません。力を持っているから戦をするのです。」

焰耶「なら、どうしろと？」

劉備「皆が手を繋ぎ、話し合えば平和な世の中になります。」

焰耶「なら、どうして劉備殿は武力を手に入れたのですか？」

劉備「それは・・・、困っている人を助けたかったからです。」

焰耶「それなら武力を使わず、話し合えば良かった。なのにあなたは、黄巾党の時も武力で倒した。」

劉備「違う!!黄巾党は罪も無い人達を襲った!!だから・・・!!」

焰耶「なら、反董卓連合の時はどうだった。あなたは董卓と話し合うこともせず連合に参加した。」

劉備「それは、董卓さんが都の民を苦しめてる悪い人だと聞いたから!!けど違かった!!違うなら、話し合えば良かったのに!!なら、魏延さんはどうなのですか?あなたの主である曹和さんの夢を叶える為に罪の無い人を殺すのですか?困っている人がいても手を差し伸ばさないのでですか?そんなのおかしいです!!本当なら魏延さんは私とご主人様の所に来て欲しかった。そしたら沢山の人を助けられた。笑顔になれた。なのに・・・」

その時、

焰耶「いい加減にしろ!!」

劉備「・・・っ!?!」

焰耶が我慢の限界を迎えたのか、劉備に怒り、その鬨気を劉備に向けたのだった。

焰耶「私やお館、そして華琳殿が好きで人を殺していると思うのか？困っている人を助けられないと思っているのか？それは大間違いだ!! 私達は仙人ではないのだ。全ての人を助けるなんて事は出来ないのだ!!」

劉備「だ、だから、皆で手を取り合って、話し合っていけば平和で皆が笑顔に・・・」

焰耶「手を取り合ったら良いのか？」

劉備「・・・え？」

焰耶「手を取り合ったら良いのか。・・・なら、私が苑州のとある村で賊に襲われた時、あの村の村長が救援を求めた時、どうして誰も手を差し伸べてくれなかったのだ!!」

劉備「それは・・・」

焰耶「あの戦は、お館が助けてくれたから何とかなかった。とはいえ、犠牲者も出た。差し伸べてくれたら、犠牲になった村人は助かったのか？残された者達は悲しい思いをしなくて済むのか？答えろ、劉備!!」

劉備「そ、それは・・・」

その時、

霞「ちよ、焰耶!!どないしたん!?!お前らしくもないで!!」

稟「そうです、焰耶。いくら劉備殿の言葉が甘いとはいえ、あなたがここまで怒るこ

とではありません。」

そう言つて、霞と稟は焰耶を抑えようとしたのだが、あまりにも膨大な闘気となつていたため、2人は中々近づけなかつた。すると、

純「焰耶、口を慎め。相手は国の主でもあるのだぞ。」
と純も止めた。

焰耶「・・・申し訳ございません。少し頭を冷やして参ります。」

そう言つて、焰耶はどこかに行つた。

霞「ちよ、焰耶！」

稟「焰耶！」

純「俺が行つて来る。後は任せた。」

そう言つて、純は焰耶が向かつた先に行つた。その時、
ドスツ

劉備が倒れてしまったのだつた。焰耶の闘気にあれだけ間近に受けていたから、闘気が消えて緊張が途切れたのである。それを見ていた関羽と張飛が急いで駆けつけた。

張飛「お姉ちゃん！」

関羽「・・・駄目だ。完全に気を失っている。しかし、あれ程の闘気を。」

霞「悪く思わんでくれ。一度だけ焰耶が話したんや。『あの戦の時、私は偶然あの村に

いて、村の人達と一緒に戦った。お館が救援に駆けつけてくれたおかげで、村は救われた。とはいえ、犠牲者も出た。私がつとしっかり指揮をしていれば、あの者達は生きて、これから太平の世が来たときには、村の皆で畑を耕し、飯を食い、寝るといった、当たり前前の生活が出来たのではないかと。だから、あの者達の無念の思いを背負い、お館を、華琳殿を、そして皆を助けるために人を殺す。いつか太平の世になるように。』って
言つてたんや。」

関羽「魏延殿はそのような思いで戦つていたのか・・・。」

霞「焰耶はな、根っこはメツチャ優しい奴なんや。だから、今の劉備を見て腹が立つたんとちやうんかな。」

張飛「けど、お姉ちゃんをこんな風にさせるなんて、許せないのだ。」

関羽「しかし鈴々、今回は桃香様が悪いと私は思うぞ。」

張飛「愛紗!!愛紗もあんな奴の味方なのか!!」

関羽「話を最後まで聞け。人はそれぞれ違う思いを持つている。触れたくない過去も。しかし、桃香様はその過去に触れてしまった。それはどうしようもない事実だ。」

張飛「けど・・・!!」

関羽「人には忘れたくても忘れられない過去があるというのだよ、鈴々。」

関羽がそう言つて悲しい顔を見ると、張飛は何も言わず華琳と純の領を通つたのだつ

た。

一方、焰耶が激怒している時、

北郷「あの、趙雲さん。」

星「ん？何ですか、北郷殿？」

北郷は、一緒に並んでいる星に声をかけたが、星は何故呼んだか察したのか、不機嫌そうに北郷を見た。

北郷「あの・・・、今からでも良いから、魏延さんと一緒に俺達の軍に入らないか？」
そう言つて、北郷は星を勧誘した。

星「・・・何故ですか？」

そう言つて、星は目を細めながら北郷を見つめた。

北郷「桃香はとても素晴らしい人だ。絶対に全ての人を笑顔にし、平和にしてくれる。それに、俺のいた世界の歴史では、趙雲さんと魏延さんは劉・・・」

その時、

星「巫山戯るな!! 天の御遣い!!」

そう言つて、星は殺気を出して北郷の首筋に槍を向け、威圧した。

北郷「え……? 趙……」

星「貴様のいた世界の歴史で私と焰耶はどうなっているのか知らないが、私は私、焰耶は焰耶だ!! 例え我が主である曹子元に出会わなくても貴様に出会わなくても、私は誰かと同じ道を行く!! それは焰耶も同じ事!!? 今そなたは客人ゆえ、何もせぬが、次はな
いぞ!!」

そう言つて、星はその場を後にしたのだった。その時北郷は、

北郷「どうしてだよ……!! 何で、俺の思い通りに……!! 俺は天の御遣いなんだぞ!! くそつ!! くそつ!! あいつだ、あいつのせいだ!! あの疫病神め!! 殺してやる……殺してやるぞ……曹和めえ!! あいつを殺せば全ての人が救われる!! 俺は、天の御遣いなんだ!!」

憎悪の目をしながら、そう喋つたのだった。

一方焰耶は、

焰耶「はあく。私はどうして……。」

頭を冷やすために、馬から降りて川辺の大きな石に座っていた。そこへ、

純「焰耶。」

焰耶「……お館。」

純がやって来た。

焰耶「劉備軍の案内をしていたのでは？」

純「それは霞と稟に任せた。焰耶。」
すると、

焰耶「お館!？」

馬から降りて、純は焰耶を抱き締めた。そして、

純「お前は優しくして強い武人だ。けど、そんな思いで武器を振るい、兵を指揮していたとは知らなかった。申し訳なかった。だから……んちゅ……。」

焰耶に口付けをしたのだった。その口付けは唇をそつと撫でるだけだったが、今の焰耶には心安らぐ口付けだった。

純「その思い、俺にも分けてくれ。俺も、お前の思いを共有する。だから、全部自分1人で背負うな。」

焰耶「はい……。ありがとうございます……。お館。」

そう言って、焰耶は涙を流しながら純を抱き締め返し、暫くそのまま過ごした。そして、馬に乗り、急いで霞達の後を追った。

そして、劉備達一行は、無事に華琳と純の領地を通り抜けたのであった。

48話

純達が劉備達一行を送っている最中、華琳達は進軍して来るであろう袁家の軍勢に対しての軍の配置をしていた。

桂花「華琳様。兵の配置、完了しました。」

華琳「そう。皆も、桂花の指示に従ってちょうだい。」

春蘭「はっ！」

季衣「分かりましたー！」

すると、

桂花「しかし、良かったのですか、華琳様？」

華琳「どうかしたの、桂花？」

桂花「純様に道案内をさせて。確かに我が軍は精鋭ですが、純様がいるとないので兵の士気に関わります。」

と桂花は、華琳にそう言った。

華琳「そうね。でもね、桂花。私の精鋭が、純がないから戦に負けるなんて事があつてはいけないの。確かに純は呂布を倒した程の実力でもあるから、大陸一の武将よ。だ

けど、我が軍には優秀な将が大勢いる。いつまでも純、純と純に甘えるわけにはいかないの。分かった？」

桂花「はい。浅はかな事を言つて申し訳ございません。」

華琳「別に良いわ。その代わり、この戦必ず勝つわよ。」

桂花「はっ！あなた達、急ぎなさい！袁紹は短気だから、劉備達の撤収の報を受けた途端に動くわよ！」

そして、作戦が始まった。

袁紹本陣

文醜「麗羽様麗羽様麗羽様——！」

袁紹「むにや・・・、何ですの、明日になさい・・・。」

文醜「二度寝してる場合じゃありませんよ！大変です！劉備達が陣の撤収を始めたつて報告が入つたんですよ！このままじゃ逃げられちゃいますよ——！」

それを聞いた袁紹は、

袁紹「……なあんですつてえ！真直さん！真直さんはもう起きていらつしやいますの!？」

目が覚めて田豊を呼んだ。

田豊「もちろんですよ。今斗詩に追撃部隊を編成させています。……なんですが」

袁紹「何ですか？」

文醜「何か劉備達とあたいらの間に、曹操の軍が割り込んできてるみたいなんですよね……。ね……。」

袁紹「はあああああ!?何ですか、火事場泥棒がもう一人増えましたの!？」

田豊「いえ。曹操は劉備を守るように動いているようですし……。劉備が救援を出したのではないかと。」

袁紹「許せませんわ!!猪々子さん、向こうが陣の展開を終える前にさっさと追撃をお掛けなさい!！」

文醜「だから今準備させてますつてば!あ、美羽様はどうしましょ。」

袁紹「起きてこなければ放っておくだけですわ!劉備の首級はこちらで一人占めですわよ!！」

文醜「うつわ。ここに来てそこまで……。」

袁紹「何か言いました?！」

文醜「いーえ、別にー。」

田豊「ほら猪々子、さっさと行くわよ。向こうの軍師はどうせ桂花でしょうから、こちらもあの穴掘り小娘の性格を元に作戦を立てておいたわ。」

文醜「あー。あの男嫌いのー。」

田豊「そうそう。あいつの性格からするとね・・・」

一方曹操軍は、

香風「風ー。敵の先鋒が見えたー。」

風「数はどのくらいいる？」

香風「・・・分かんない。多分、多い。」

風「桂花様からは、数が分からなくても問題ないと言われたが・・・。純様と焰耶がない分、私がつかりしなければ。総員、攻撃準備！」

風の声と同時に、部隊の全員が弓矢を構えた。すると、月明かりの中、夜の中を動く袁紹軍らしき集団が見えた。

風「連中の掲げた松明を狙え。・・・撃てっ！」

相手に気取られないように、号令は小さなものであったが、振り下ろした腕に合わせ、数百の矢と風の気弾が天に放たれ、一斉に敵陣へと降り注いだ。

袁紹軍

文醜「ん、どしたー？夜なんだから、静かに動けー。」

袁紹軍兵士A「文醜様！敵の奇襲ですっ！敵の数は不明！ただし降り注ぐ矢の数からするに、かなりの大人数の様子！」

文醜「どこの軍だよ！まさか曹操か曹和か!？」

顔良「文ちゃん。もしかして、曹操さんと曹和さんに待ち伏せされたんじゃ・・・。」

文醜「待ち伏せて、真直の言った通りか！」

顔良「だつたら文ちゃん、真直ちゃんの作戦通り、一気に突撃する？」

文醜「んー。・・・でもこれ、いつもみたいに突撃ーってやつたら、思いつきり反撃食らうやつじゃね？」

顔良「それはまあ・・・、そんな気しかないわね。でも、文ちゃんが珍しい。」

文醜「あたいだって戦場の空気くらい読むってば。それに兵がこんだけビビってりや、突撃したってたかがしれてるしなあ。」

文醜「まあいいや。全軍転進！いちいち曹操と曹和なんか相手にすんな！別の所から劉備達を追い掛けるぞーっ！」

そして、袁紹軍は文醜の命令で撤退していった。

曹操軍

曹操軍兵士A「楽進様。敵が引いていきました。」

楽進「凄いな、桂花様の予測は・・・。」

香風「夜の奇襲と突撃は、周りが見えないから怖い。」

風「よし。では我々は、このまま本隊と合流する！」

曹操軍兵士A「はっ！」

一方沙和達は、

栄華「沙和さん。敵の追撃軍、確認出来ましてよ。」

沙和「ありがとなの！なら、皆弓の準備をするの！」

季衣「うー。弓って、苦手なんだけどなあ・・・。」

栄華「季衣さんは、手近にある大きな岩を放り投げろと言われていませんか？」

季衣「あ、そっちの方がいいや。・・・とりあえず、敵部隊の方に思いつき投げたら良いんだよね？」

沙和「なの。今回は、矢もとにかく敵のいる方に飛ばせば良いって言われたのー。」

季衣「なら・・・、よっと！」

栄華「・・・いつ見ても、そんな大きな岩を抱えられるのが信じられませんかね。私、一番軽い弓を引くので精一杯ですのに。」

季衣「慣れたらどってことないよー。沙和ー、もう投げていい？」

沙和「もうちよっと待つの！」

曹操軍兵士B「敵陣先端、射程圏内に入りました！」
沙和「よし。それじゃ、総員、てーっ！なのー！」
そして、沙和の命令の下、一斉に矢が放たれた。

袁紹軍

袁紹軍兵士B「文醜様！また敵の矢です！それに、何やら巨大な岩まで飛んできて……

！」

文醜「なんだそりゃ!？」

顔良「敵の新兵器とかじゃないの!?!文ちゃん！」

文醜「だーもうっ！向こうは慌てるどころか万全じゃねえか。斗詩、別の道つてある？」

顔良「うん。多分、もう二箇所くらいなら……。」

文醜「じゃあそっちだ！総員、もっかい転進！矢と岩が飛んでくる前に急げーっ！」

曹操軍本陣

曹操軍兵士C「夏侯淵様から伝令です！曹操隊の一撃を受けて、袁紹の追撃軍が引き返したとのこと！夏侯淵様は楽進様達と合流、次の作戦に向かうそうです！」

華琳「これで三度目・・・、見事な采配だわ、桂花。」

桂花「文醜の思考は単純ですから、あれの性格を知っていれば、動きを読む事は難しい事ではありません。」

桂花「それに軍師の田豊も机上の理屈を振りかざすばかりで、兵の心情を汲む事を知りません。」

桂花「闇の中を降り注ぐ矢の恐怖を理解して策を与えていけば、こうはならなかったでしょうけれど・・・ふっ。」

華琳「そう。それで次はどう動くのかしら？」

桂花「彼女の我慢に四度目はありません。次は相手を見ずに突っ込んで来るかと。」

華琳「・・・なるほどね。」

桂花「袁紹の主力はそれでカタが付くでしょう。後は秋蘭達が予定通りに動いてくれ

れば、今夜は上々かと。」

袁紹軍

文醜「だああ……っ。もう、曹操と曹和の軍、どんだけ展開してるんだよ……！」

顔良「これだけ街道を封鎖してるんだから、十万はいるんじゃないかなあ……。」

文醜「もういいいっ。次は一気にぶち込む！真直も突っ込めって言ってたし、知らん！」

顔良「もう。文ちゃんつてば、知らんじゃないよ！落ち着いてよう。」

文醜「元々あたいは、こういうチマチマしたのつて大っ嫌いなんだよ。それにほら、意外と、相手は何百しかいなかったとか、そういうオチだったりさ。」

顔良「……流石に無いと思うけど。」

文醜「するかも知れないじゃん。だから、次は……。」

袁紹軍兵士C「報告！前方に敵部隊を発見！」

文醜「よし！なら突撃するぞ！突撃ーっ！」

顔良「だから、ちよつと文ちゃあんっ！」

曹操軍

華命「敵部隊、撤退していくつすよ！」

春蘭「なんだ、もうか。まだひと当てしかしておらんぞ。」
すると、

華琳「ふふつ。次は嫌でも全力で戦ってもらおう事にするわよ、春蘭。」

華琳が現れた。

春蘭「ああ、華琳様！このような所にまで……。」

華琳「袁紹はこの一撃で懲りたでしょうから、今日は攻めてこないはずよ。後は秋蘭だけねど……。」

桂花「華琳様。今伝令が来まして、袁術の陣への夜襲、成功したそうです。袁術軍は袁紹軍を追うように、徐州北方に逃亡したとのこと。」

華琳「そう。なら問題ないわね。春蘭。」

春蘭「はっ！こちらでも撤収させます。」

真桜「総員、撤収や！さっさとずらかるでー！」

華琳「さて、ひとまず今夜は何とかなったけれど……。これに勝ち残れなければ後はないのは私達も同じ……。か。恐らく次は袁家の二面作戦。結局純を頼ってしまうわね。」

と、華琳はそう呟いたのだった。

49話

陳留・玉座の間

純「……ほお、やはり敵軍が集結しているか。」

秋蘭「はい。どうも袁紹と袁術の両軍が、官渡に兵を集めているようなのです。」

栄華「徐州の制圧は予定通りに進んでいますけれど、沿岸部はまだ完全ではありませんから……。袁術達には、そこと海路を利用された形ですわ。」

純「どうやら姉上の予想は外れましたね。」

華琳「ええ。あなたの予想通りね。」

華命「でも、兵士の数は倍になるっすよ！」

風「指揮系統が整っていないと、ただ人が増えるだけになりますけどねー。」

桂花「うまく連携が取れなかった場合、互いの足を引っ張り合って、むしろ味方に不利になる事の方が多いわ。連合や黄巾の時を覚えていてしょう？」

純「こちらとしてはやりやすくなった。」

華琳「ええ、二面作戦を取らなくて良い分ね。」

季衣「・・・数が増えたのに、楽になる・・・？」

流琉「あはは、分かってない顔だね、季衣。」

季衣「そういう流琉は分かっているの？」

流琉「うん。純様と秋蘭様に色々教わっているもの。」

季衣「・・・うー・・・どういう意味ですか、春蘭様あ。」

春蘭「うむ。二面作戦を取らなくて良くなった分、こちらにとつては楽になったということだ。」

純「・・・どう楽になったんだ？言ってみろ。」

春蘭「そ、それは・・・、焰耶、頼む！」

焰耶「私ですか！」

春蘭「そうだ！」

焰耶「・・・はあ。最初の作戦だと、季衣と流琉は別々に行動する予定だったけど、今度は敵が一つに纏まってくれたから、季衣と流琉は共に戦えるようになったわけだ。」

焰耶「二人が組めば、一人で戦うより楽で強いであろう？」

季衣「あー。そういうことなんだー。」

焰耶「その反対に、敵は不仲同士が共同で戦うことになるから、連携が取れない分、倒しやすくなるかもしれないってことだ。」

流琉「不仲同士って、季衣と張飛さんみたいにですか？」

焰耶「そうだ。季衣と張飛が組んで、流琉の時みたいに戦いやすいと思うか？」

季衣「無理！ありがと、焰耶の説明、すつごく分かりやすかった！」
すると、

春蘭「お、お前……。」

春蘭は焰耶を驚きの表情で見ている。

焰耶「その目は何ですか？私も武芸の鍛錬だけでなく、兵法も学んでいるのです。将は馬鹿では務まりませぬ故。」

春蘭「うっ……。」

純「はあ……、春蘭、お前も少しは焰耶を見習え。」

華琳「そうよ春蘭。もしかしたら、もうあなたより強いかもしれないわよ。」

春蘭「……は、はあい。」

純「ともかく。……兵を集結させて戦えるというなら、こちらに負ける要素は何もねーな。ただ、唯一警戒すべきは……。」

秋蘭「……孫策の一族ですか。」

純「そうだ。袁術の主力には春蘭、お前に当たってもらおう。第二陣の全権を任せるから、孫策が出て来たらお前の判断で行動しろ。」

純「季衣、流琉は春蘭の補佐に回れ。」

春蘭「御意！」

季衣「はいっ！」

流琉「分かりました！」

華琳「純、麗羽に相對する第一陣はどうするのかしら？」

純「はい。栄華に任せます。」

栄華「お、お兄様、私ですか？」

純「行軍中は輜重隊を任せるが、戦闘の間は指揮を取れ。官渡なら、あれが出せるだろう。」

栄華「・・・はい。かしこまりましたわ。」
すると、

霞「ちよいちよいちよい！何で栄華やねん。袁紹とやるなら、ウチがやりたいわ。」

霞が待ったをかけた。

純「ほお、随分と張り切っているな、霞。」

霞「まあな。反董卓連合ん時の借りやらなんやら、色々あるからな。」

華琳「純、どうする？」

純「・・・分かった。なら指揮は霞に任せる。栄華は補佐に付け。他に誰の補佐が欲しい？」

霞「それなら、風達三人がええなあ。焰耶、貸してくれへん？」

焰耶「それは構わないが・・・、お館、よろしいですか？」

純「元々入れようと思っていたから構わねーよ。焰耶は、華命達と一緒に本陣に詰めてくれ。」

焰耶「御意。」

純「星も頼めるな？」

星「少し残念ですが、かしこまりました。」

純「どこかで暴れる機会はきつとある。それまで、その闘気は内に秘めておけ。」

焰・星「はっ!!」

桂花「というわけで、第一陣にはこちらの秘密兵器の講義を受けてもらおうわよ。霞も良いわね？」

霞「・・・なんや？どんな兵器なん？」

桂花「秘密兵器は秘密兵器よ。それ以上はまだ教えられないわ。」

霞「うー・・・あんまり面倒なのは、勘弁して欲しいんやけど。」

純「そもそも第一陣はその運用と護衛が目的の部隊だ。敵部隊との直接戦闘は、第三陣の秋蘭と香風が当たれ。」

霞「ええーっ！なんでやねんっ！」

秋蘭「承知しました。」

香風「はい。」

霞「うわー・・・貧乏くじ引いたあゝ・・・。ならウチ、普通に第三陣に入つときや良かったやん・・・。」

純「話を最後まで聞かずに勇み足を踏んだのはお前だぞ。今さら変更はしねーぞ。」

華琳「ふふ、そうね。純の言う通りよ。」

霞「あうう・・・しゃあないかあ。」

純「官渡という立地からも、相手の指揮権は袁術ではなく麗羽にある。桂花は麗羽の軍師の考え方を予測して、基本戦略を立ててくれ。」

桂花「でしたら、一つ策があります：：将を何人が回していただきたいのですが。」

純「構わん。誰が良い？」

桂花「はい。柳琳と華命、それから香風の三名を。」

純「分かった。三人も良いな？」

命・柳・香「分かったつす！／分かりました！／はい。」

純「稟と風は、桂花を補佐し、広い戦場をくまなく把握出来るようにしてくれ。」
風「分かりましたー。」

稟「了解です。」

純「他の皆も戦の準備を整えておけ。相手はどうしようもない馬鹿だけれど、それでも河北四州と、江南を治める袁一族だ。慢心していると、足を掬われるぞ。姉上。」

華琳「ええ。これより我らは、大陸の全てを手に入れる！皆、その初めの一步を勝利で飾りなさい。良いわね！」

こうして、戦に向けての準備が始まった。

苑州・官渡

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

文醜「うわ、何すか麗羽様このお立ち台。」

袁紹「おーっほっほっほ！素晴らしいでしょう。これだけ大きな櫓があれば、私の威光もより遠くまで届くのですわ！おーっほっほっほ！」

文醜「そんなことのために……」

顔良「違うよ、文ちゃん。これ、本当は上に弓兵を昇らせるために作ったの。」

文醜「弓兵……？ああ、なるほどな。矢を射るんなら、高い所からの方が有利だもんな。でも、どこからこんな資材調達してきたんですか。」

田豊「私が頑張つて用意したに決まつてるでしょ！麗羽様、別働隊も、予定通り出発致しました。」

袁紹「結構ですわ。真直さん、今回は大活躍ですわね。」

田豊「ふふん。私達軍師が本気を出せば、こんなものですっ！ああ、策を弄し、直接対決をする前に敵陣に致命的な一撃を加える……なんて軍師らしい仕事！」

田豊「私、今間違ひなく輝いているわよね！」

袁紹「真直さんも本気を出したようですし、これで我が軍の勝利は間違ひなしですわ！おーっほっほっほ！」

顔良「それはいいですけど麗羽様ー！そこから曹操さん達の様子、見えませんかー？」

袁紹「しつかりはつきり見えますわよ！ウチや美羽さんの所に比べて……多くありませんわねえ。この人数なら、まさに勝つたも同然ですわ！おーっほっほっほ！」

顔良「じゃあ、何人くらいいますかー？後、陣形はどんな感じですかー？」

袁紹「沢山ですわー！なんだかばーっとなんでいますわよー！」

文醜「……斗詩。悪いことは言わないから、その辺の兵士を昇らせた方がいいぜ。」
顔良「……うん。そうするよ。」

顔良「真直ちゃんも珍しく機嫌が良いけど、それが逆に心配だなあ……大丈夫かな。」

曹操軍

官渡に辿り着いた華琳達が見た物は、辺りを埋め尽くす袁一族の連合軍と、巨大な櫓の列だった。

華琳「……あの櫓は厄介ね。あそこから陣形を読まれたり、矢を射かけられたりしてはたまらないわ。」

純「その為の秘密兵器ですよ、姉上。」

桂花「そうです。真桜、用意は出来ているわね?」

真桜「完璧や!任しとき!」

秋蘭「……純様、袁紹が出て来ました。あの櫓も一緒です。」

華琳「……動くの!?あの櫓は。」

純「無駄な所に手を掛けてるなあ……あいつは。」

華琳「……まあいいわ。行って来るから、準備をしておきなさい。いつでも攻められるようにしておいて。」

桂花「御意！」

そして、華琳と純は袁紹と対峙した。

袁紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

華琳「……そうして見下されると、なんだか無性に腹が立つわね。」

純「あはは……。」

袁紹「華琳さん、高い所から失礼致しますわよ。純さんも、ゴメン遊ばせ。おーっほっほっほ！」

華琳「笑うだけしか能が無いのかしら？随分と毛並みも悪くなっているようだし、もう年ではなくて？」

袁紹「なあんですってえ！誰が目尻に小じわの目立ってきたオバハンですってえ！」

華琳「……流石にそこまでは言っていないわよ。」

純「どんな耳してんだよ、つたく……。」

袁紹「だまらっしやい！たかが宦官の孫の分際で生意気ですわよ！純さんと違って！」

純「・・・姉上、俺も宦官の孫なんですけどね。」

華琳「ええ、そうね。けど、その宦官の孫の千ちよつとの手勢に、この間良いようにされていたのはどこのどなたかしら？」

袁紹「・・・へ？」

華琳「あら。気付いていなかったの？それは失礼。名門袁家の一族の目は、家柄と役職しか見えない節穴だったのを忘れていたわ。」

純「・・・はあ。」

袁紹「な・・・な・・・な、な、なななな・・・っ！」

袁紹「良いですわ！ここであなたを叩き潰して、この櫓の上からそのクルクル髪を吊してあげますわ！」

袁紹「最初はびよんびよん元気に撥ねているでしょうけれど、そのうち元には戻らなくなってしまうでしょうね！そしてその横で、純さんと婚礼を・・・おーっほっほっほっ！」

純「俺、流石にコイツと婚礼は遠慮するわ・・・。」

華琳「残念。その前にあなたを打ち倒して、河北四州と袁術の江南、丸ごと頂く事にするわ。だから、そんな光景が見られるのは、あなたの歪んだ妄想の中だけになるでしょうね。」

袁紹「本性を現しましたわね、性悪小娘！でも残念ながら、この大陸に覇を唱えるのはこの私、袁本初ですわっ！」

華琳「本性を現したのはどちらだか。まあ良いわ。さっさと私達の徐州を出て行って、南皮を明け渡しなさいな。」

袁紹「わ、私達の・・・私達の徐州ですって・・・!?純さんだけならまだしも、この徐州は、この私の物ですよ！」

純（あ、俺は良いんだ・・・。）

袁紹「猪々子さん、斗詩さん！櫓を用意！弓兵に一斉射撃をお命じなさいっ！」

華琳「あら残念。撃ち方なら、こちらの方が・・・」

その時、

ドカーン!!

袁紹「・・・へ？」

華琳「・・・少し早かったようね？」

純「そうですね。」

豪快な音が響き、櫓を一つ破壊したのだった。

第一陣

栄華「おーっほっほっほ！おーっほっほっほっほ！」

沙和「栄華様が壊れたの……」

栄華「う、うるさいですわね……。お姉様とお兄様の手前遠慮していましたけれど、一度やつてみたかったですの。」

霞「確かに、全然違和感ないな……。で、どうやった？」

栄華「……なかなか悪い気分ではありませんわね。クセになつてしまいましたそうすわ。」

栄華「コホン。それはともかく、大成功ですわね、真桜さん！」

真桜「せやろ？流石ウチの最高傑作や！ホンマ大将に感謝や！」

凧「真桜。投石機の次弾装填、終わったぞ！」

真桜「よっしゃ！沙和、照準はどないや！」

沙和「距離良し！方向良し！目標、次の櫓に合ってるの！」

真桜「ほんなら、もういつちよ、撃てーいつ！」

ヒュー……ドカーン！！

霞「命中や！これで半分くらい潰せたな。後半分、気合入れて行きいつ！」

真桜「それはええけど、姐さんと栄華様も手伝うてえな。この石、結構重いねんて！」
霞「えー。ウチ、箸より重い物持った事あらへんもーん。当たったかどうか見たるか
ら、な？」

栄華「私も無理ですわ……。そういうのは、力自慢の皆様にお任せ致します。」

真桜「……。」

霞「ほら、凧を見てみい！黙々と働いて……。ええ子やなあ。後でアメちゃん買うた
るさかいな。」

凧「……出来れば、ご飯の方が。」

栄華「なら、今回は特別に宴会の予算を出して差し上げますわ。もう一息、頑張つて
下さいまし！」

霞「ほらほら、次は照準合わせえ！向こうの一番奥の櫓、あれにするで！いっこ倒
しや、宴会のごちそうがひと皿増えると思い！」

沙和「照準、合わせたの！」

霞「なら、撃てーっ！」

真桜「ちよつと、ウチの台詞ー！」

本陣

ドカーン!!

袁紹「……えーと。」

華琳「残念。自慢の櫓は、役立たずのようね。」

袁紹「あ……、あんなの卑怯ですわっ! あんな遠くからでつかい岩を飛ばすだなんて、どんな妖術を使っただんですの!」

華琳「そんな物は使っていないわ。ただ、私の自慢の弟と、少しだけ賢い子がいただけのことよ。」

袁紹「ま、まあ……こんなものは序の口ですわ。本命は……」

その時、

華琳「……何?」

本陣後方から動きがあった。

袁紹「あらあら、華琳さんの陣の後方からですわね。私の別働隊が、少々おいたをしてみましたようですわ。」

袁紹「賤の悪い子達で、申し訳ありません。おーっほっほっほ!」

その様子を、

華琳「……。」

純「……。」

二人は冷めた様子で見ている。

曹仁隊

袁紹軍兵士A「撤退、撤退ーっ！」

華命「そつちのやる事なんかお見通しっす！弓隊、あっちの方を狙うっす！撃てーっ
！」

袁紹軍兵士B「うわっ！まずい、退け、退けえっ！」

柳琳「あんな所に伏兵がいたの……!?姉さん、よく分かったわね。」

華命「何となくそんな感じがしたっす！それより、このまま一気に敵の奇襲部隊を追
い払うっすよ！」

柳琳「うんっ！誰か、お姉様とお兄様に迎撃成功の連絡を。鎗矢をお願いします！」

曹操軍兵士A 「了解です！ 鎗矢、放てーっ！」

本陣

袁紹 「・・・なんですよ、あの鎗矢は。」

華琳 「ああ、その騾の悪い連中を、私の隊が打ち破ったようね。全く、自分の所の兵
くらい、自分で騾けておきなさい。」

純 「あはは・・・。」

袁紹 「な・・・なんですよってええええ!!」

すると、袁紹軍の後方からも変化が現れた。

袁紹 「ちよ!?! 今度は我が軍の後方ですって・・・っ! まさか!」

徐晃隊

袁紹軍兵士C 「撤退、撤退ーっ！」

香風 「・・・あつた。糧食。」

曹操軍兵士B 「徐晃様。火を放つてよろしいですか？」

香風 「・・・うん。もつたないけど、やって。」

曹操軍兵士B 「はっ！糧食と補充の矢に火をかける！森には燃え広がらないよう注意しろよ！」

香風 「シヤンは追撃する。あとよろしく。」

曹操軍兵士C 「了解です！」

本陣

袁紹 「か、か、かかか・・・華琳さんっ!!!」

華琳 「ああ。これらの作戦を計画したのは純だから、別に謝らないわよ。」

袁紹 「くうう・・・っ！なら、この決着は正面からつけさせていただきますわ！」

華琳 「はいはい。」

純 「・・・おい、そう言っている間に、自慢の櫓もお前のが最後だぞ。」

袁紹「ちよっ！まさか！」

袁紹「ひやあああああああああああーっ！」

純「あ、落ちた。」

華琳「あら。三公を輩出した名門汝南袁氏の当主が、随分とはしたない声を。」

袁紹「お、おのれおのれおのれーっ！後で泣かせてあげますから、覚えてらっしゃい
！」

華琳「はいはい。それが自分にならないようにね。」

袁紹軍本陣

田豊「麗羽様！後方の輜重兵が襲撃を受けて・・・！」

袁紹「分かっていますわ！」

田豊「それに、曹操軍の後方を叩きに行った韓猛も、どうやら失敗らしくて・・・。」

袁紹「ですから、それも存じていますわ！」

袁紹「あのクルクル小娘：この私に、純さんの前で私にこれだけの恥をかかせて：
絶対に許しませんことよ！」

袁紹「総員、攻撃の用意を！礼儀を知らない野犬の群れを、我が名門に仕えるあなた達で存分に躡けて差し上げなさい！よろしくて！」

曹操軍本陣

桂花「お疲れ様でした、華琳様、純様。」

華琳「後で真桜には褒美を与えておくように。あの投石機は大したものだわ。純の発案でしょ。」

純「はは。まあ、ただの思いつきですけど……。」

桂花「承知致しました。曹仁隊・徐晃隊の両部隊は、そのまま遊撃に回しております。」
華琳「あれは少しやり過ぎな気もしたけれど……麗羽相手ならあれくらい分かりやすい方が良いでしょう。貴女への褒美も後で取らせるわ。」

桂花「はいっ！」

華琳「純もね。」

純「ありがとうございます。」

華琳「純、皆に言葉を。」

純「はっ。皆、これからが本番だ！向こうの数は圧倒的。けれど、協力も連携も知らない、黄巾と変わらぬ烏合の衆だ！」

純「血と涙に彩られた調練を思い出せ！あそこで培われた団結と連携をもってすれば、この程度の相手に負ける理由などありはしない！いいな！」

純・紹「全軍、突撃！」

そして、官渡の戦いの、河北の覇者を決める最後の決戦が始まった。

香風が入った。これには、

季衣「ちよつと香風、僕達の戦いの邪魔しないで……っ！」

季衣は文句を言ったが、

柳琳「季衣さん、流琉さん！部隊から突出しすぎです！お二人は春蘭様の補助だったでしょう！」

柳琳の言葉に、

季衣「え……？あつ！ほんとだ、いつの間に。」

自身の今いる状態に気付いたのだった。

文醜「いつの間に……。」

顔良「……いや、文ちゃん。一応私達の動きは、真直ちゃんの指示だったからね？
作戦通りだからね？」

季衣「ならどうしよう。僕らが退がったら、いっちー達が……。」

香風「ここはシャンがやる。」

柳琳「周りの敵は私と姉さんで……あら、姉さん？」

香風「華侖様は、もう戦ってる。」

華侖「ここはあたし達に任せるっすー！早く退がるっすよ！」

文醜「何だあ？あたいと斗詩の二人を、このちびっ子その二、一人で相手にするって

か？」

香風「不足？」

文醜「いいや。・・・上等！」

季衣「なら・・・いつちー、またね！」

文醜「おう！また美味しいもん食いに行こうなー！」

流琉「柳琳様、ここはよろしくお願いします！」

柳琳「・・・よろしいのですか？あの二人を見逃して。」

文醜「十分戦ったしなー。それに・・・、あたいと斗詩を組ませてくれるっつーんなら、それはそれで楽しいってもんだ！」

顔良「もう・・・っ。でも油断しちやダメだよ、文ちゃん。」

文醜「当然！なら、行くぜ！」

香風「・・・来い。」

柳琳「ならこちらも行きます。姉さん！」

華侖「分かつてるっす！」

その時、

曹操軍兵士A「申し上げます！西の方角より、騎馬の群れとみられる一団が！」
と言う知らせが入った。

柳琳「えっ!?!どこの騎馬隊ですか?」

曹操軍兵士A「それが、砂煙が多く、よく見えません!」

香風「・・・何だろう?」

華命「柳琳。」

柳琳「私もよく分からない。袁紹さんの方もよく知らないみたいね。」

そう言つて、顔良と文醜の様子を見ると、

文醜「斗詩ー。何だあの騎馬の群れは?」

顔良「分からない。真直ちゃんから聞いてないし・・・。」

顔良、文醜も知らない様子だった。

柳琳（私達の味方かしら。それとも・・・。）

すると、次の知らせで、その正体が分かった。

曹操軍兵士B「騎馬隊の正体が分かりました!旗は馬の旗印!西涼の馬一門です!」

華命「えっ!?!」

柳琳「西涼の!?!」

香風「・・・!?!」

その先頭には、

翠「西涼の馬騰が娘、马超推参!!今こそ、友である曹子元を助けるため、袁紹軍と袁

術軍を攻撃する!!お前ら、西涼の騎馬隊の力を袁紹と袁術に見せつけるぞ!!」

楼杏「翠さん、あまり前に突出しすぎないように。」

馬超が立っており、袁紹軍に突っ込もうとしていた。

顔良「ぶ、文ちゃん!!」

文醜「ああ!!麗羽様が危ない!!退いたら攻撃されるし、退かなかつたら本陣が危ない

!!どうすりゃ!!」

顔良と文醜は、予想外の出来事に混乱したのであった。

袁家本陣

田豊「ちよっ!?何でそこで西涼が!?まさか、曹和が・・・!?」

魯肅「ひやわわ、こつちも予想外ですよー!まさか、西涼が来るなんてー!」

袁紹軍兵士A「田豊様、本陣が踏ん張りきれません!!」

田豊「ああもう、どうすればいいのー!!」

その横で、

袁術（・・・どう考えても、もう負け戦なのじゃ。のう、七乃。）

張勳（そうですねー。そろそろ逃げた方が良いかもしれませんよ、お嬢様ー。）

袁術と張勳がこそこそと逃げようと話していた。

袁紹「何か仰いまして！」

袁術「いや、別に何も言っていないのじゃ。のう？」

張勳「はいー。言ってますーん♪」

袁紹「ああもうっ！これだけの戦力差があれば華琳さんなんかチツチキチーのすばーんだと思いましたがの！それに、何故西涼の田舎者が華琳さんに味方を・・・真直さん？」

田豊「ですからそれが分かってたら何とかしてましたし何とかなつてたなら何とかなつてたんですよー！」

魯肅「・・・だいぶ訳が分かんなくなってますよう。」

袁術「七乃。ぼちぼち逃げるとするのじゃ。」

張勳（はい、お嬢様。殿はいつも通りに孫策さんにお任せで良いですか？」

袁術（うむ。そうと決まったら、さっさと孫策に伝令を送って撤退するぞ。）

張勳「分かりましたー。包さーん。私達は撤退するので、孫策さんに殿を任せるって伝令、お願いしますねー？」

魯肅「分かりまし：：つて、えっ?! いやちよ、美羽様、七乃様っ?! ええええええ：：つ
!!!」

袁術「我が袁家の為に働けるのじゃ、光栄である! それでは任せたぞよー!」

魯肅「えええ、本気ですかあ．．．それって孫策さんだけじゃなくつて、包も切り捨てじゃないですかあ．．．そんなあ．．．」

袁紹「やっぱりここは、一旦下がつて戦力を立て直して．．．しかし、三公を輩出した我が名門袁家がそんな．．．。いえ、負けてしまつてはなおのことご先祖様に申し訳が．．．。」

袁紹「そうですわ! 美羽さん達に立て直しの時間稼ぎを押しつけ．．．もとい、お願いして．．．!」

そう思った袁紹は、袁術を読んだが、

袁紹「美羽さーん、一度兵を退いて、陣形を立て直しますわよ。ですからその間の．．．つて、あら?」

袁紹「美羽さん? 美羽さーん!」

袁術はいつの間にかいなくなっていた。

曹操軍第二陣

春蘭「はああつ！」

孫策「くつ……！流石夏侯元讓……天下に響く勇名は伊達ではないということね！」

春蘭「当然だ！しかし、貴様も江東の虎の娘とはよく言ったものだ！なかなかやる！」
孫策「いつまでも誰かの娘って言われるのも癪なんだけどね。ま、袁術なんかの食客でいるうちは仕方ないけど。」

その時、

魯肅「あ、黄蓋さん！あそこ、あそこですー！孫策さん、いましたよー！」

魯肅と黄蓋がやって来た。

黄蓋「策殿お！本陣の袁術から連絡が来た！撤退するゆえ、殿を務めろと！」

孫策「……そんな暇、あるわけないでしょ！この状況を見ろっていうのよ……全く。」

しかし、

春蘭「……ふむ。」

それを見た春蘭は、

孫策「……え？ちよつと夏侯惇、どういう……？」

劍を下ろしたのだった。

春蘭「どうした。撤退するのだろうか？」

孫策「……見逃してくれるってこと？」

それに対して春蘭は、

春蘭「貴様は黄巾の時の借りがある。いい加減返しておかねば、私の股間に関わるのだ。」

そう言ったのだが、ある一部の言葉のせいで、

魯肅「それ、沽券の間違いじゃないですか？股間じゃ完全に痴女ですよ？」

魯肅に突つ込まれてしまったのだった。これには、

春蘭「……。」

黄蓋「……。」

孫策「……。」

場がしらけてしまったのだった。……カッコいい雰囲気だったのだが。

春蘭「う、うるさいっ！言ったよな、私そう言ったよな！」

魯肅「ひやつ、ひやわわ！すいません、すいません、言いました、言いました——！」

春蘭「と、とにかく、撤退するならするがいい！十数えるうちに視界から消えねば、追撃を仕掛けるぞ！」

孫策「……そう。ならその返済、ありがたく受け取らせてもらうわ。……行きましよう、祭。」

黄蓋「うむ。さらばだ夏侯元讓。」

魯肅「し、失礼しまゝす。」

そう言つて、孫策達はその場を後にしたのだった。

春蘭「……。」

季衣「春蘭様——！」

春蘭「季衣、流琉。無事だったか。」

流琉「はいつ。あの騎馬は……？」

春蘭「後で話す。とりあえず部隊をまとめろ。追撃の用意に掛かるぞ。」

季衣「分かりました！」

春蘭「しかし、西涼が我らに味方するとは……。」

流琉「はい。私も驚きました……。」

季衣「あの马超は、純様と仲が良いみたいですね。」

春蘭「そのようだったな……。」

本陣

桂花「袁術、袁紹とも、こちらが押し切れそうですね。」

純「そうだな。袁術の側は撤退を始めているようだしな……。榮華、麗羽が動いたら、そちらの追撃はお前に任せるぞ。」

榮華「承知致しましたわ。」

華琳「袁術側の追撃は、予定通り春蘭に任せるのよね？」

純「はい。あいつなら上手くやるかと。」

稟「念のため、伝令を出しておいては？春蘭様の事ですし、戦に夢中になって忘れているかもしれません。」

桂花「私も稟の意見に賛成です。」

純「……。そうだな。春蘭に全権を任せられた事、もう一度伝えておいてくれ。」

風「袁紹側も撤退を始めたようですよー。」

榮華「でしたらお兄様、行って参ります。お姉様も。」

純「ああ。秋蘭にもよろしくな。」

華琳「任せたわよ。」

栄華「出られるものは続きなさい！この大戦の総仕上げ、私達の手で果たしますわよ！」

そう言つて、栄華は出撃したのだった。

華琳「しかし、まさか西涼が味方に付くなんて……。これも、以前の反董卓連合で話した事かしら。」

純「ええ。その通りですよ、姉上。」

華琳「あなたは本当飽きさせないわね。」

純「恐縮です。」

桂花「稟……。」

稟「私もここまでとは思っておりません。」

風「……ぐう。」

稟・桂「「寝るな!!」」

風「……おおっ!?!西涼という予想外が起きて、つい……。」

稟「はあ……。」

桂花「全く……。」

その頃、孫策は袁術の後背を突き、袁術を撃退したのだった。その様子を見ていた春蘭達第二陣は、

季衣「春蘭様あ。」

春蘭「何だ。」

季衣「袁術の追撃、しなくて良いんですか？」

春蘭「せんでいい。奴らが華琳様と純様の領土に逃げ込まんよう、見張っておれば十分だ。」

流琉「春蘭様。本陣から、追撃の催促が来てますけど・・・、どうしましょうか？」

春蘭「それは純様のご命令か？それとも華琳様か？」

流琉「いえ、稟さんです。」

春蘭「なら捨て置け。」

流琉「良いんですか？」

春蘭「私は純様から第二陣の全権を預かっているのだ。純様か華琳様のご命令、この場合は純様だな。そのご命令が無い限り、どう動くかは私の自由だ。」

これには、

季衣「良いのかなあ・・・？」

季衣もそう思ったのだった。

本陣

稟「何と……！」

稟は、春蘭が追撃命令を無視したことに驚いていた。

稟「純様！春蘭様がこちらの追撃命令を聞かず、待機しているようです！」
純「……。」

稟「この機会を逃しては袁術を討てません！純様の御名において追撃のご命令を！」
純「いや、その必要はねーよ。」

稟「ですが……！」
純「春蘭には全権を預けてある。あいつが最善と判断したんなら、それが最善なんだろう。」

稟「は、はあ……。」

すると、

桂花「純様、偵察から連絡が入りました。孫策が袁術を裏切り、背後から攻撃を仕掛

けているそうです。」

桂花から、孫策が袁術を裏切ったとの報告が届いた。

純「春蘭は？」

桂花「こちらの陣営に迷い込んだ兵を捕まえるくらいはしていますが、それだけです。」

純「そつか……。ふつ、これで春蘭も気が済むだろうよ。」

華琳「純。やはりあなたは、これを狙ってたのね。」

純「ええ。借りを返すには、最良の機会だったと思いますよ。」

華琳「ええ、そうね。」

すると、

華琳「純。」

純「はっ。」

華琳「麗羽を蹴散らしたら、一気に南皮まで進撃するから、その先鋒隊を率いていきなさい。」

純「おつ、良いんですか？」

華琳「ええ。あなたも、暴れたかったですよ。この中から、武將を好きに連れて行きなさい。」

と、華琳は純に南皮攻略を任せただった。

純「かしこまりました。では、霞！焰耶！星！進撃の準備をする！直ぐに支度しろ！」
焰耶「御意！」

星「かしこまりました！」

霞「ホンマか!？」

純「ああ。三人とも、存分に暴れて見せろ！」

焰耶「はっ!!今回の戦闘に出れなかった分暴れさせていただきます!!」

星「腕が鳴りますな!!この槍捌き、見事主に見せて参ります!!」

霞「ヨッシャー!!!純、おおきに〜♪」

純「では姉上、これにて。ああ後、西涼の皆の対応、頼みました。」

華琳「ええ、分かったわ。」

純「行くぞ!!一気に南皮を攻略し、河北四州を我らの物にするぞ!!」

先鋒隊兵士「!!おおう!!」

そして、純率いる先鋒隊は出陣したのであった。そして純達が出撃した後、栄華達が帰ってきて、華琳に報告した。

華琳「・・・そう。麗羽達は逃がしたの。」

栄華「・・・申し訳ございません。こちらの想像以上に素早い相手だったもので・・・。」

華琳「まあいいわ。ここから兵を集めて南皮に向かったとしても、もはや間に合いませんでしょう。栄華はここに残って、凧達は他の制圧を援護なさい。」

栄華「はい。」

凧「はっ。」

華琳「それと、あなたが馬超ね。後、皇甫嵩殿。」

翠「ああ。あたしが馬超、字は孟起だ。よろしくな。」

楼杏「皇甫嵩よ。」

華琳「今回の援軍、感謝するわ。あれで一気に袁紹・袁術を打ち破れたわ。」

翠「これはあくまで、あたしの判断だ。感謝するまでもねーよ。」

楼杏「そういうことね。」

華琳「そう。今後ともよろしく頼むわね。私の真名は華琳よ。」

楼杏「私は楼杏よ。」

しかし、

翠「すまないが、あたしは曹和殿の命令しか従わないって決めてる。だから曹操、あなたに真名を預けねーよ。」

その回答に、

春蘭「き、貴様ー!!」

桂花「なっ!？」

栄華「お姉様に何てことを・・・!!」

春蘭と桂花、そして栄華が激怒したが、

華琳「やめなさい、春蘭、桂花、栄華。」

華琳が止めたのだった。

春蘭「か、華琳様・・・。」

桂花「し、しかし・・・いくらなんでも」

栄華「お兄様の命令しか従わないとしても、あの態度は・・・。」

三人とも、それぞれそう言ったが、

華琳「いいからやめなさい。」

そう言つて、華琳は三人を止めた。

華琳「別にそれで構わないわよ、馬超。馬騰は息災かしら。」

翠「ああ。母さんは、未だに元気だ。」

華琳「そう。改めて、よろしく頼むわね。」

翠「ああ!!」

華琳「さて、軍を撤収させるわよ。半数は私と共に南皮へ進撃、とは言つても、やることはないかもしれないけど。残りは栄華と共に、戦後の処理を任せるわ。」

榮華「かしこまりましたわ。」

華琳「それから・・・孫策の動きはどうなっている？」

桂花「はい。袁術の本隊を撃破した後、冀州方面に向かう姿を目撃した兵がおります。恐らく来た時と同様、海路を使うか徐州を抜けて、江東に戻るのではないかと。」

華琳「そう。流石にここから追うのは不可能でしょうね。・・・春蘭。」

春蘭「はっ・・・。」

華琳「今ここに純はいないけど、何が言いたいかは分かるわね？」

春蘭「は。孫策を見逃した事、いかような処罰でも・・・。」

華琳「あなたに第二陣の権限を与えたのは純よ。・・・次にあれと刃を交えるときには、もう曇りはないわね。」

春蘭「私はあ奴への借りを返したに過ぎません。この後に奴と交える刃は、全て華琳様と純様の意志によってのみ振るわれるでしょう。」

華琳「なら良いわ。今純が南皮攻略の指揮をしているから、直ちに出陣して、純と共に見事制圧してごらん下さい。」

春蘭「はっ！」

すると、

翠「曹操。すまないが、あたしも行くぜ。」

と翠も出撃すると言ったので、

華琳「ええ、構わないわよ。春蘭、良いわね。」

春蘭に伝えた。

春蘭「はっ！馬超と共にすぐに純様と合流し、河北四州を華琳様と純様の領土に組み込んでご覧に入れましょう！」

そして、春蘭と翠の部隊は、純の部隊と合流し、河北四州を支配下に置いたのだった。

51話

陳留・城下

店主「へいお待ちー。」

秋蘭「さて、こんなものですかね。」

純「ああ、そうだな。」

純と秋蘭は、今陳留の城下で食材の買い出しをしている。その訳は、昨日純が言ったある一言がきっかけだった。

回想

純「なあ、秋蘭。」

秋蘭「はい、何でしょう？」

純「いきなりでわりーんんだけど、お前の手作り料理食べてーな。」

秋蘭「突然どうしたんですか？」

純「いや、何か唐突に食いたくなつた。」

秋蘭「ふふっ、そうですか。では、何を食べたいですか？」

純「そうだな。お前の飯は最高に美味いからなあ。うーん・・・。」

そう言つて、純は少し考え込んだ。そして、

純「そうだ、焼売。」

秋蘭「焼売ですか？」

純「ああ、焼売食いてー。お前、出来るよな？」

秋蘭「ええ、作れます。」

純「なら、一緒に食おうぜ。ダメ、かな？」

そう言つて、純は秋蘭の顔をのぞき込んだ。すると、

秋蘭「・・・はい！構いません！」

と秋蘭は嬉しそうな顔をした。

純「よっしゃ!!なら、早速仕込みの材料買いに行こう!!」

秋蘭「はい。」

回想終了

そして、2人で一緒に乾物屋に行き、仕込みの材料を買った。その時の秋蘭は、純に
久し振りに料理をせがまれた事で、普段より気持ち弾んでいたのだった。それが他の
材料を買いに純と一緒に往つてる今でも、その気持ちは続いていた。

純「秋蘭、荷物は俺が持つよ。」

秋蘭「え、しかし・・・良いのですか？」

純「構わねーよ。ほれっ。」

そう言つて、純は荷物を持つた。

秋蘭「ありがとうございます。」

純「気にすんな。さて、次は皮の材料だな・・・。」

そして、材料の買い出しを終えたのだった。

厨房

純「さて、始めるか。」

秋蘭「はい。」

そして、厨房に着いた2人は、焼売を作った。

純「秋蘭、皮の練り具合、こんなもんで良いか？」

秋蘭「はい。その程度です。」

純「分かった。なら、今度は肉を切るな。」

秋蘭「はい、お願いします。」

そう言った秋蘭だったが、秋蘭の手元には、さっきまでピチピチと跳ねていた筈の大きな川エビが見事なむき身に変わっていた。

しかし、もちろんそこで秋蘭の手は止まらず、表皮をむいた大量のタマネギを端から真つ二つにし、みじん切りにした。

秋蘭「純様、肉はどんな調子ですか？」

純「ああ、これでどうだ？」

秋蘭「完璧な大きさです。今度はそれを三つに分けて、タマネギと一緒に混ぜて下さい。」

純「了解。」

そう言つて、純は肉をタマネギと一緒に混ぜた。

純「秋蘭、食器は？」

秋蘭「用意しました。純様、どんな塩梅ですか？」

純「ほい、これ。もう少し混ぜた方が良いよな？」

そう言つて、純は肉を見せた。

秋蘭「そうですね、お願いします。」

そして、第一陣を練り終え、現在純は第二陣に突入していた。第一陣の方は、

秋蘭「……。」

秋蘭のワンアクションで、あつという間に見事な焼売に大変身した。しかも、

純（俺の大きさに合わせてるな……。）

純に合わせて、普通よりも大きい焼売だった。

純「そろそろだな。」

秋蘭「はい。」

すると、

純「何か、本当に夫婦みてえだな、俺達。」

そう純が言うと、

秋蘭「はい……。」

秋蘭は幸せそうな顔でそう言った。すると、秋蘭の動きが少し加速し、先程の倍近い速さで焼売が並べられた。

秋蘭「さて、蒸しますね。」

純「ああ。」

すると、

純「秋蘭、お前も食おうぜ。」

秋蘭「え、しかし……良いのですか？」

純「良いんだって。だって、お前と食いてーし。それに……俺達……恋人……だろ?」

そう言って、純は少し恥ずかしそうに言った。それを見た秋蘭は嬉しかったのか、秋蘭「……はい!!」

そう言って、純に抱き付いた。そして、焼売が出来上がり、2人で一緒に食べた。

純「……流石秋蘭。また上達したな。」

秋蘭「光栄の至り。」

そう言つて、秋蘭は喜色満面の笑みを浮かべた。それを見た純は、

秋蘭「あつ・・・。」

秋蘭の頭を優しく撫でた。すると秋蘭は、純に寄り添うようにくつついた。

純「はは。どうした、秋蘭？」

そう言つて、純は秋蘭の顔をのぞき込んだ。

秋蘭「いえ、少し、このままで。」

すると、秋蘭は顔を真っ赤にしながらそう言つた。そして、2人で仲良く焼売を食べたのだつた。

5 2 話

稟は廊下を歩いてふと外に目を向けると、純がいつもいる中庭の木の下で寝てはいないが横になっていた。

稟（今日は軍議の筈。何をしておられるのか・・・。）

そう思った稟は、中庭に出た。

稟「純様、このようなどころで何をしていらつしやるのです？軍議ではないのですか？」

そう言つて尋ねると、

純「あんな退屈な会議、俺が出る必要ねーよ。」

と言つた。これには、

稟「な・・・何たる怠慢・・・！」

と、眉間にしわを寄せて言つた。

純「今回の軍議、姉上も同席していねーんだ。無論お前も。重要性など、たかが知れている。」

稟「っ・・・ああ言えばこう言う、そのような甘言で。」

と稟はそう言つて純に説教しようとした。すると、

純「甘言？へえ、嬉しいな。俺の言葉で稟も、少しは甘い思ひをしたんだな。」

そう言つて、純は稟にくつついた。

稟「わつ、わつ、わ．．．!?純様あ。」

純「相変わらず面白いな、お前．．．。下らねー経過報告なんかより、お前を構つて
いる方がずっと面白いよ。」

稟「どこに触っているのですかあ、純様っ!?」

純「どこだと思ふ？」

稟「もう．．．純様は．．．。」

そう言つて、稟は純の抱擁に身を任せた。

純「それだよ．．．お前はいつも一生懸命だから面白いんだよ．．．ふっ。」

稟「ふあ．．．っ!?耳につ、お、おやめ下さい。」

純「えーっ、何でー？」

稟「そ、その．．．。」

その様子を見た純は、

純「ふっ．．．その目、たまんねーな。」

純「さらに力づくで、俺の物にしようかな。」

稟を見てそう言った。

稟「立場を利用して……そ、それは暴君の振る舞いですっ！人心が離れ……っ」
そう言ったが、

純「……ふっ。」

稟「は、離れ……離れて……」

稟は段々抵抗が緩くなり、更に純に身を預けてしまった。

純「そんな言い方しなくてもいいだろう。俺は稟の事が好きなんだ。愛してるんだ。だから、時にはからかうようなことを言うし……」

純「いつも、一緒にこうしたいと思ってるんだぞ。」

稟「はっ、は……は、う、上に立つ者が色に狂うなど、それこそ傾国のひやうんっ
!？」

純「相変わらず可愛い声だな、稟。」

稟「い、今のは違います！純様が、私の……」

純「稟の……どこを触ったんだ？」

稟「お、お、お尻、を……」

純「ふっ、よく言えたな……」

そう言った純は、

純「でもさ、稟？俺がお前に捉われて政務と軍務が手につかなくなる事と、お前で満
足して普段の倍の政務と軍務をこなすこと・・・どちらがこの国の為になると思う？」

純「俺の筆頭軍師であるお前の見解を聞きたいな。」
と稟に尋ねた。

稟「ずるい、です・・・そのような聞き方。」

稟はそう言つて純の顔を見上げて、右手で純の頬に手を添え、左手で純の背中に手を
回した。

純「ふつ、お前のその顔が一番好きだな・・・そうやって気弱に俺を見上げてくる目。」

稟「・・・恐ろしいお方です、純様は。」

純「・・・恐ろしいのが気持ちいいんだろ？」

稟「・・・もう、純様は・・・。」

そう言つて、純に口付けをした。純も稟の唇を受け入れ、互いにきつく抱き締め合ひ
ながら、そのまま身を任せただった。

5 3 話

純「さてと、警邏に行くか・・・。」

純は今、警邏に出ようとしていた。その理由は、午前の仕事を一通り終え、たまには
と思ひ、街に出て警邏しようと思つたのだ。すると、

焰耶「お館、焰耶です。入つても宜しいですか？」

純「焰耶か。良いぞ、入れ。」

焰耶「失礼します！」

と言ひ、焰耶が部屋に入った。

純「悪いな、無理して警邏に付き合つてくれつて言つちやつて。それにお前、午前は
兵の調練だつたら？」

焰耶「いえ、とんでもありません。お館のご命令であれば、何なりと。」

純「ははつ、そうか。では、今日はよろしくな。」

焰耶「はっ!!」

そう言つて、純と焰耶は共に警邏に出たのだつた。

陳留・城下

町民A 「あ、曹和様だー!!」

町民B 「曹和様ー!!」

純と焰耶と一緒に街を出て暫くすると、町民達が皆純を見て、声をかけた。

町民C 「曹和様、こんにちは。」

純 「ああ、調子はどうだ？」

町民C 「はい、今日も元気です!!」

純 「そうか。でも、休むときはしっかりと休めよ。」

町民C 「はい!!お気遣い、ありがとうございます!!」

純がそう言うと、町民は嬉しそうな顔をし、去って行った。

焰耶 「相変わらず慕われていますね。」

純 「まあ、彼らとは長い付き合いだしな。彼ら無くして国は成り立たねーし、互いに助け合い、互いを信頼し合う。それが国なんじゃねーかな。」

焰耶 「そのお心、敬服致します。」

純「はは。でも、お前も良くやっている。警備でも、よく警備兵を纏め、何かあった時はすぐに現場に駆けつけ、解決し、民を助けている。戦でも、臨機応変の策に通じて、よく兵を統率している。それにその場の状況や地形を見て考え、計略通りにやっている。この前の河北四州平定の時、壺関での戦でお前の助言がなければ平定に時間がかかった。感謝している。」

そう言つて、純は焰耶の頭を撫でながら褒めた。

焰耶「い、いえ、私は大したことをしておりません。私の兵が頑張つたおかげです。」と、焰耶は顔を真っ赤にしながらそう言つた。その姿は、いつも凜々しく兵を纏め、その武勇を大いに振るう魏延將軍ではなく、魏延と言う一人の少女の姿であつた。

純「そうか。では、これからも頼りにしているぞ。」

焰耶「はっ!!」

純「さて、もう良い時間だし、詰所に戻ろうか。」

焰耶「そうですね。では戻つて報告を……」

すると、

??「純様ーっ!!」

後ろから、聞き慣れた声が聞こえて、純と焰耶は振り返つた。

純「風達か、お疲れ。」

凧「お疲れ様です、純様、焰耶。」

真桜「おつー、大将、焰耶。」

沙和「純様ー、焰耶ちゃん、お疲れなのー!」

焰耶「凧はともかく、真桜と沙和はちゃんと警邏したろうな?」

真桜「ちちちつ。分かつたらんなあ、焰耶。凧がおるのに怠けるわけにはいかんやろ。」

沙和「なのー!」

焰耶「・・・はあ。」

純「まあ、真面目にやつてるようだな。よし、これから詰所に戻って報告だろ。その後、一緒に飯食おうぜ。良いか、焰耶?」

焰耶「あ・・・、もちろんです。」

すると、焰耶の雰囲気が変わった。しかし、変わったのは焰耶だけではない。

凧「焰耶。今日は、純様と一緒に警邏を?」

焰耶「そうだ。お館からの頼みでな。」

凧も雰囲気が変わった。これには、

真桜「ああ、やつぱりこうなつてもうたか・・・。」

沙和「なのー。凧ちゃんと焰耶ちゃん、基本は仲良いけど、どうしても譲れない物が

あるから仕方ないのー。」

真桜と沙和は苦笑しながら2人の様子を見ていた。純も、

純「・・・そうか。全く・・・。」

察したのか、その様子を真桜と沙和同様、苦笑しながら見ていた。

真桜と沙和の言う通り、生真面目で義理堅い所など、似通っている部分のあるこの2人の仲は決して悪くない。それどころか、むしろ良好と言っても良いくらいであった。・・・ただ、とある理由により、そこに純がいなければの場合に限るが。

焰耶「・・・風。例えばどんなことがあっても、お館の右に控えるのは私だぞ。」

風「それは勝手にしてくれ。純様は左目を失っているため、私が控えるのは左で構わない。」

焰耶「っ！揚げ足を取ったな！」

風「私は事実を述べたまでだっ！」

と、人の行き交う道のだ真ん中で、焰耶と風は互いに火花を散らしていたのだった。

54話

純「さてと・・・、仕事も一段落したし、秋蘭のトコに行くか・・・。」

仕事を一段落終えた純は、秋蘭の部屋に向かつて、1人廊下を歩いていた。すると、

純「おっ。」

真つ直ぐに続く廊下を、霞が歩いているのを確認した。

純「霞〜！」

霞「ん？」

純が呼ぶと、霞はキョロキョロと辺りを見回した。

霞「お。」

そして、純の姿を認めると、彼女は跳ねるようにして純の元に走ってきたのだ。

霞「純や〜ん！偶然やな〜。」

純「ああ。」

霞「こんなところで、なにしてんの？どっか行くん？」

純「ああ、ちよつとな。秋蘭に呼び出されて、あいつの部屋に行くところだ。霞は？」

霞「ウチは本日の業務終了したからな。何しようかなー・・・って。」

純「ブラブラしてるとどこか。」

霞「ブラブラちゃうよ！・・・仕事を探してるねん。」

と言い、霞の視線はフラフラとしていた。

純「そうか・・・。まあ、そういうことにしとくか。」

霞「おおきに！純のそーいうところ、めっっちゃ素敵やと思うで♪」

純「・・・悪びれねーな。誉めても何も出ねーぞ。」

霞「あ、可愛くない。そーいうところは好かんわ。」

それを聞いた純は、

純「なんでだよっ!!」

と、霞に裏拳を入れたのだった。

霞「あはは!!ノリえーなあ!!」

純「はは。そんじゃあ、俺秋蘭のトコ行くわ。」

しかし、

霞「ああつ、ちよつと待って!!」

霞は、純の服の袖を握って止めたのだった。

純「何だ、どうした？」

霞「あんな、純は秋蘭のトコ何しに行くん？」

純「何しにつて？」

霞は、

霞「楽しいことがあるんちゃうん？」

そう言つて大きな猫目を更に丸め、興味津々といった様子で、純の顔を覗き込んだ。

霞「なあなあなあ、隠さんと教えてえな。」

純「・・・お前、よっほどヒマなんだなあ。・・・まあ、一人で来て下さいって言われたから、茶か何かだろう。」

霞「『一人』で？」

純「ああ、一人だ。まあ、いつもの事だよ。」

霞「『一人』で『部屋』く？『いつもの事』く？」

純「ああ、そうだが。」

すると、

霞「はっはーん・・・。」

霞の目が、にやりと細めた。

純「何だ？」

霞「・・・それはアレやろ、ア・レ。」

と言った。

純「……ふっ、そうかもな。」

霞「せやつてー!!純と秋蘭は、もう皆が羨ましがる程仲ええんやからー!!」

純「あはは。」

その時、

霞「……なあなあ、純。」

霞が純の耳元に近づき、囁いた。

純「ん?何だ?」

すると、

霞「あ、あのな……その……えっと……。」

いつもの霞と違って、顔を赤くして、もじもじとしながらはつきりしない。

霞「うーんと、えーつと……あの……。」

純「どうしたんだ?霞らしくねーぞ。」

と純は霞の頭をポンポンと撫でて促した。

霞「やー……せやかて、しやーないやんかー。」

純「良いから、遠慮せず言ってみな。俺と霞の仲だろ?」

そう言うと、

霞「……うん……えっと、その……笑わへん?」

と霞はしおらしく言った。

純「笑わねーよ。ほら、言ってみな。」

それを聞いた霞は、

霞「その・・・そういうのって、どんな気持ちなん？」

と、顔を赤くし、もじもじしながら尋ねた。

純「それって・・・、男女の営みか？」

それを聞いた霞は、

霞「こくん」

と頷いた。

霞「や、あのな・・・ウチ、そういうコトに、あんま免疫無いねん。」

霞「あんまっちゅーか、全然。全く。」

純「全然無い・・・ってコトは、恋をしたこともない・・・とか？」

すると、

霞「こくん」

また霞は頷いた。

純「・・・そうなんだ。」

霞「せや。ウチは元々、武官の生まれの家やんか？せやから子供の頃からずうつと、武

芸一筋でやってきてん。」

霞「何の疑問も持たんと、それを極めることだけを考えた。」

霞「そんで氣いついた時には、軍に仕官してて・・・あれよあれよつちゆう間に、一軍を任せてもらえるようになって・・・ほんで今やから。」

純「そっか・・・。」

霞「けど、最近純を見ると、胸がかあつと熱くなるんよ。それと、一緒にいると楽しいし、ドキドキするし、他の女の子と一緒にやと、何かモヤモヤしてしまうんよ。」

純「・・・。」

霞「けど、この気持ちが一番に恋かどうかも分からん。だから純、ウチに恋をよく教えて欲しい!!」

純「俺が?」

霞「せや、お願い・・・。」

そう言つて、霞は純の服の裾を掴んで、上目遣いに見つめた。

純「じゃあさ、今度時間があるときに、少し二人つきりで過ごしてみるか。」
すると、

霞「ホンマか!! やったー♪いよつ、純すつてきー!」

霞の表情がぱあつと明るくなった。

純「まったく、相変わらず調子良いな。」

霞「へへ。それで、二人つきりで過ごして、それでどうするん？」

純「それはお楽しみな。」

そう言つて、純は霞の頭を優しく撫でた。

霞「そつかー。へへ、楽しみにしてる。」

そう言つて、霞は嬉しそうな顔でびよんびよんと跳ねた。

純（コイツにもこんな悩みがあつたんだな・・・）

そんなことを思っていると、

霞「・・・あ、そうや。」

ふと霞がはつと何かを思い出し、

霞「純、秋蘭に呼ばれてたんやね。」

純にそう言つた。

純「ああ、そうだったな。」

霞「ゴメンゴメン、引き止めてもて。はよ行きや！秋蘭待ちくたびれてるかもしれへ

んで。」

純「ああ、じゃあまたな。」

霞「うん！ウチとは次回つちゆうことで！楽しみにしてるでえ。」

純「ああ、分かった。」

霞「おーきに！ほな、またなー♪」

そう言い、純と霞は別れたのだった。その時、霞はスキップしながら廊下を歩いていったのは内緒である。

55話

焰耶「兵の皆に負担を掛けてしまっている……。どうにか出来ないか。」

官渡の戦いで勝利した華琳と純は、河北四州に加え徐州に馬一門の涼州を新たに手に入れその広大な領地を支配下に置いた。

しかし、その反動で直面した緊急の課題は、兵力不足であった。その課題解決のために、凧と沙和にはいつも以上の強行ペースで新兵の育成を任せただったが、2人には警備隊の仕事もあるため、その疲労を焰耶は心配した。しかし、

凧『私達に出来ることは任せておけ。ただ、時々で良いから、純様にも詰所に顔を出して欲しい。』

沙和『なの！真桜ちゃんも、もうひと月くらい詰所に純様が来てないってぼやいてたの。』

と言った。

焰耶（ここまで勢力が拡大したのだ。周りも警戒するわけだ。翠達がいなかったら、もっと負担が掛かっていた……。）

そんなことを考えていると、

香風「焰耶。」

香風が焰耶の服を引つ張っていた。

焰耶「おお、香風か。この前の并州の遠征の話の話を聞くんだったな。確か、栄華様の護衛で行ってたんだったな？」

香風「・・・うん。風達のお話が終わるの、待ってた。」

焰耶「そうか。では、昼を食べながらで良いか？」

香風「それでいい。ご飯もいっしょ。」

そして、焰耶は香風と一緒に食堂へ向かおうとしたその時、

霞「何やっとなねん！」

真桜「せやかて、これだけは譲られへん！」

霞と真桜の言い争いの声が聞こえた。

焰耶「・・・。」

香風「・・・焰耶。」

焰耶「・・・ああ。行くしかあるまい。」

そう言つて、焰耶と香風は声のする方へ向かったのだった。

焰耶「・・・何やってんだ？2人とも。」

真桜「ん？ああ、焰耶と香風か。」

香風「ケンカ？」

霞「2人ともええ所に来た！ちよつとウチの話、聞いてくれへん？」

焰耶「別に良いが・・・霞、朝の軍議で、昼には稟と幽州の州境の警備に出ると言つてたはずだが？」

香風「うん。向こうで、稟が準備してた。」

霞「それにも必要な事なんや！稟の奴は待たしとつたらええ！」

焰耶「・・・そんな大事な事なのか？」
すると、

霞「せや！これ、見てみ！」

霞がいつも使っている圓月刀を焰耶に見せた。

香風「おー。ぴかぴか。」

焰耶「うむ。そう言えば、この前の遠征で・・・」

霞「せや。折れてもうたから、真桜に新調してもらてん！」

焰耶「そう言えば、私の鈍砕骨も傷んでしまったから、真桜に新調させたな。前より使いやすくなつたし、強度も増した。星も翠も槍を新調したら扱いやすくなつたと喜んでいたな。」

真桜「ホンマか！そりや嬉しいわ！柄も刃も材料ぜんぶ一から見直して、組み合わ

せ方も強度が出るように工夫しとる。姐さんが少々乱暴に使うたかて、絶対に壊れたりせえへんよ!」

焰耶「では、何が問題なのだ? 私同様、武器が扱いやすくなつたのなら良いことじゃないか。」

香風「・・・重くなつた?」

霞「んー。ちつと重うなつた気はするけど、そこは不満やない。勢いも付くし、振り回した時の釣り合いも取れるしな。具合は前よりええくらいや。」

霞「こんだけ回せるようになりや、それこそ空かて飛べるかもな。」

香風「ほんと!」

霞「え、なんや? そこ、そないに食いつくところか?」

香風「空が飛べるの・・・だいじ。ホントに飛べる?」

霞「い、いや・・・ホンマに飛べるんかは、よう分からんけど。」

香風「・・・ざんねん。」

霞「まあそれはええ・・・ええけどな!」

焰耶「・・・けど、何だ?」

霞「この龍の角が一本増えとるのはどないなつとんねん! 説明してもらおか!」

焰耶「・・・龍の角?」

そう言つて、焰耶は圓月刀を見た。

霞「せや！せつかく関羽の圓月刀と並べてエエ具合になるようにしとつたのに、台無しやないか！どないしてくれるんや！」

焰耶「・・・いつからそんなこだわりを？」

霞「反董卓連合んに、華雄を一発でノシた将がおるて聞いてな、どんな奴かつてずーつと気にしててん。」

霞「で、こないだ益州に案内した時色々あつたけど、その間関羽と少し話してな。これがまたエエ奴でなー！」

焰耶「そう言えば、霞は関羽と何か話してたな。」

霞「元々ウチも似たような武器使うてたから、ならちつと合わせてみようかつて言うてやつてみたんやけど・・・」

霞「ごつつお気に入りやつたのに、それをなー！まだ半年も経つてへんのに、お前なー！真桜ー！」

真桜「せやかて強化したんやから、角増やさんと強そうに見えるんやろ！」

霞「何が強そうにやー！いじらんでも十分強いやねんから関係ないやろ！はよ直しやー！」

真桜「直さへん！十倍強うなつたら、十倍強う見えんとアカンやろ！どうしてもそこ

直せつちゆうんなら、牙の数を倍にさせてもらうで！」

霞「アホかーっ！そんな直すて言わんわ！もつと台無しやろ！」

焰耶「……はあ。」

香風「……焰耶。」

焰耶と香風は、特に焰耶は少し呆れてしまっていた。その時、

風「あー。焰耶ちゃん、こんな所でご休憩ですかー。」

稟「あの一、焰耶。霞を見ませんでしたか……？」

稟と風がやって来た。

焰耶「……今真桜と言いつてる。大丈夫なのか？」

稟「……まあ、暫くなら構いませんよ。純様と曹操殿は、今面会の最中ですから。」

焰耶「面会？朝廷の使者か？」

風「それは先程済みまして……。今は関羽さんにお会いしますよ。」

すると、それを聞いた霞は、真つ先に玉座の間に駆け、焰耶達もそれに続いて行つたのだった。

玉座の間

霞「・・・おお、ホンマや。ホンマに関羽がおる。」

燈「静かに。挨拶中よ。」

その玉座の間には、関羽の他に厳顔がいた。

関羽「曹孟徳殿、曹子元殿。先日は大変お世話になりました。」

華琳「到着の報は純と燈、そして霞から聞いていたし、こんなに早く礼状を寄越さなくても良かったのよ。まだ旅装も解き終わっていないでしょうに。」

関羽「無事な到着を、きちんとした形で報告したいという、桃香様とご主人様の強いご意志でしたから。」

純（それ、本当か・・・？焔耶にあんなに怒鳴られて気絶してしまつたし、北郷の方も星に何か言われてからおかしかったと聞いたし・・・？）

華琳「相変わらず劉備には甘いよね、関羽。」

関羽「周りが厳しいですから、少しくらいは。こちらが親書となります。」

そして、関羽は親書を渡した。

華琳「・・・そう。」

焔耶「・・・あの副官、確か・・・」

燈「嚴顔。益州州牧、劉璋殿の部下ね。恐らく劉備様が華琳様と純様に使者を出すと
言うから、お目付役として付けられたのでしょね。」

焰耶「劉備も益州に入ったばかりだ、そのくらいは仕方ないか。」

その間、華琳は手紙の封を切り、紙に記された文に内容を目で通した。そして、純にも手紙を渡し、純も劉備の手紙に目を通した。そして、

純「返事は数日中にしたためるから、今日は退がりな。部屋は城内に用意させているが……。」

関羽「お心遣い、痛み入ります。ですが急な訪問でしたし、既に城下に宿を取らせましたので……本日は、これにて。」

純「そうか。ならば、手紙を用意したら使いを向かわせる。」

関羽「はっ。お待ちしております。」

そして、関羽達は悠然と礼をしてその場を後にした。

霞は関羽の後を追ひ、稟は呆れながら霞の後を追ひ掛けたのであった。

純「姉上、大丈夫ですか？」

華琳「ええ、いつもの頭痛だから、大丈夫よ。」

純「まあ、なんでかは察しがつきますが……。」

風「おやおや。お医者様をお呼びしましょうか？」

真桜「それとも、そんな手紙やったん？」

華琳「医者は結構よ。」

純「手紙は・・・興味があるなら好きに見な。」

そう言つて、純は手紙を真桜に渡した。それを覗き込むように焰耶も見てみたが、その内容を見て、

真桜「何というか・・・。」

焰耶「こやつの中のはどうなってるんだ・・・。」

呆れかえつてしまった。

焰耶「しかし、城下に宿を取つたという事は、視察のためか？」

純「恐らくな。」

華琳「別に構わないわ。見られて困る物はないし。」

純「そうですね。それより稟、これから霞と幽州だろう？ 関羽を引き留めても視察の邪魔だろうし、そろそろ迎えに行つてきな。」

稟「了解です。・・・それでは行つて参ります。」

そう言つて、稟はその場を後にした。

華琳「・・・ふう。」

香風「華琳様、まだ頭痛い？」

焰耶「休まれては？」

華琳「そもも言つてられないわ。」

真桜「あのよう分からんお手紙の返事をどうするか？」

華琳「そちらも頭が痛いけれどね。先程、都の大長秋から使者が来たのよ。」

純「司隸をあげるでしたね。」

華琳「ええ。」

焰耶「・・・何と!？」

真桜「はああ・・・っ!?司隸つて、あの朝廷のお膝元かいな。」

純「正確には、司隸の警護と維持管理の権限だな。いずれにしても、これを受ければ司隸に公然と兵を入れられるようになるな。」

焰耶「それで、お館と華琳殿はその話を受けますか？」

華琳「もちろん受けるわ。」

純「反対か？」

焰耶「いえ、ただ・・・」

燈「・・・人は今よりもっと足りなくなるわね。」

真桜「それに、周りからめっちゃ警戒されると思うんですけど。」

風「朝廷には新たな天子様がおりますが、その天子様を好き勝手にするとか、専横を

働くとか、都を陳留に移すんじゃないかとか、色々言われる可能性も出て来ますねー。」

焰耶「遷都なさいますか？」

純「・・・遷都はしねーよ。」

華琳「ええ。守ってあげる分には構わないけれど、権力争いはあの壁の中でして欲しいわ。」

華琳「それに、あのいざこざに付き合うくらいなら、劉備の文通相手でもしていた方がいくらかマシよ。」

真桜「どんだけ都嫌いやねん、華琳様。」

純「あはは・・・。それでは姉上、俺は書類の整理がありますので、これにて。」

華琳「ええ、分かったわ。」

そう言つて、純はその場を後にした。

5 6 話

純の部屋

純「悪いな、手伝わせちゃって。」

栄華「良いんですの、お兄様。お兄様は、私達が遠征に出ている間に仕事全てを引き受けたのですから。」

柳琳「はい。これくらいは当然です。」

秋蘭「風達は一部焰耶がやっていると見え、栄華、私に柳琳……こちらは季衣と姉者の分か。軍師達の分を除けば、ほぼ全てではありませんか。」

栄華「流石に引き受けすぎではありませんの？」

純「しよーがねーだろ。俺も本当は遠征に出たかったが、姉上にこのような雑務をさせる訳にはいかねーしな。」

秋蘭「……そうですか。」

純「それに、この手の書類はまあ分かるしな。」

と純は述べた。純がやっている雑務を、ちやうど遠征から帰ってきた秋蘭と柳琳、そ

して栄華が純の部屋にやって来て、仕事を手伝っていた。

栄華「人不足の影響、ここに極まりですわね……。遠征部隊は、翠さんと楼杏さんが加わったから何とかかなりますけど……。」

純「本当だったら楼杏を残そうか迷ったんだけど、翠の事を考えたらな……。」

栄華「そうですね……。」

柳琳「稟さんが、出自を問わない各地の人材の発掘に力を入れていると言っていますから……。それが軌道に乗るまでの辛抱ですわね。」

純「まあ、確かにあいつは各地を旅してだし、その辺のツテはあるだろうな。」

と純もそう言った。すると、

流琉「皆さん、お茶の用意が出来ましたよ。お仕事、少しお休みになつては如何ですか?」

栄華「あら流琉さん、気が利きますのね。」

流琉がお茶を持ってやって来た。

純「栄華、そっちの都市計画と予算案、おかしな所はあったか?後、張三姉妹の陳留と司隸での公演の件も。」

栄華「司隸の公演って……三人の都合、付きましたのね?」

純「まあ焰耶がやってくれたんだけどな。豫州公演が終わったから、次は河北四州か

徐州だ……って所を無理矢理にな。姉上も司隸を優先するようにと言つてたしな。」

秋蘭「はい。終わりが見えたとは言え、河北四州は落ち着いていません。……民の燻りは都の方が大きいでしょうし、張三姉妹で発散させた方が良いでしょう。」

純「そうだな。」

秋蘭「しかし、まさか司隸まで加わるとは思いませんでした。今、司隸は誰が回つているのですか？」

純「香風が行っている。元々都の回りの賊退治もしてたし、土地勘があるからと。」

栄華「嬉しい悲鳴……と言いたい所ですけど、それが本当の悲鳴になりそうで心配ですわ。」

その時、

流琉「……やっぱり凄いです、純様。」

と唐突に流琉が純を褒めたのだった。

柳琳「……どうしたの、流琉さん。」

流琉「いえ……純様は武人としての印象が強かったので、文官のやるお仕事もいとも簡単に裁いているのに驚いてしまいました。なんだか、華琳様みたいですよ。」

純「……そんなことねーよ。」

流琉「いえ、そんなことあります。」

純「政で姉上と比べたら、俺なぞ足元にも及ばねーよ。」

栄華「けれど、そう思うのも仕方ありませんわ。お兄様は、お父上である曹嵩様ご存命の時から戦の事は全て任されておりましたから。」

秋蘭「ああ。それに純様は、文官にも丁寧に接しますからな。」

純「お前らな……。」

桂花「そうです。私は、華琳様と純様に仕える事が出来て、幸せです。」

純「桂花、やめろ。入ってきたからには、益州の件だろ？」

桂花「はい、そうです。」

秋蘭「益州か……。この所、向こうの偵察も増えているのだろうか？」

桂花「ええ。問者からも、向こうも戦の準備をしてるって話が多いわね。」

桂花「益州全体でも、あの天の御遣いを筆頭に好戦派の意見が強いそうだし、あまり気乗りしていないのは関羽くらいではないかしら？彼女、話の分かる人だし。」

純「今日明日攻めてきてもおかしくねーな。つたく、姉上も大胆なことをするな。」

純「まあ、お前と風は、皆の遠征の予定を色々調整してくれてるけどな。」

桂花「はい。劉備や孫策に国境を越えられても、陳留に着くまでにこちらの戦力を集結できるようにしております。」

秋蘭「さて。では純様、私は柳琳とそろそろ出立の準備をしてきます。申し訳ありま

せんが……」

純「構わねーよ。十分助かった。すまんな、忙しい中。」

栄華「私はもう少し余裕がありますから、最後までお手伝いさせていただきますわ。……次は何をすれば宜しいのですか？」

流琉「でしたら、私もお手伝いします！」

純「ああ、だったら……」

そして、純達は残った仕事を片付けたのであった。

益州・諷陵

劉備「……はあ。」

北郷「こんな所にいたか、桃香。」

劉備「ご主人様……！愛紗ちゃんと桔梗さん、どうだった？」

北郷「ああ。曹操と曹和からの返事、受け取ってきた。」

劉備「そつか……。愛紗ちゃんは？」

北郷「城内を探してる。後で来ると思うよ。」

諸葛亮「それと、桔梗さんをお送りした時に、劉璋様から改めて曹操さんと曹和さんの攻略の相談をされたのですが……。」

劉備「え、それはこの郡の太守を任された時、お断りするって言ったよ？もちろん、曹操さんと曹和さんが攻めてきたら防衛は引き受ける約束だけど……。」

諸葛亮「益州を守る為に必要な事だそうです。曹操と曹和相手にこちらの力を示すことが出来たなら、益州州牧の座は譲っても構わないと。」

劉備「それは……。」

北郷「俺は劉璋の意見に賛成だ。力を示すより、いつそのこと……。」

桃香「ご、ご主人様……？」

北郷「俺の見る限り、今の曹操と曹和は周囲を守る兵は少ない。殺すには絶好の機会だ！」

劉備「ご、ご主人様！私が愛紗ちゃんを送ったとき、聞いてたよね？曹操さんと曹和さんの治めてる街がどれだけ平和か見てきて欲しいって。」

北郷「どうせあの2人が治めてる街は、圧政で怨嗟の声で満ち溢れてるに決まってる

!!あの2人を殺せば、全ての人が救われるんだ!!」

諸葛亮「ご主人様!それでは、桃香様の理想とはかけ離れております!それに、曹操さんと曹和さんの治めてる街には善政を布いているとの情報はご主人様の耳に入っている筈!」

北郷「そんなの嘘っぱちだ!!」

諸葛亮「桃香様!私がいいますに、ご主人様の曹和さんへの恨みは明らかに度が過ぎています!私的な憎しみや妬みは、筋違いという物です!恨みを募らせ、抑えが効かなくなれば自らを傷つけることに!ご主人様が恨みや憎しみに駆られ天下の民を顧みないのを私は臨みません!これは愛紗さんも同じ事を思っているはずです!」

北郷「うるさい!!朱里、お前も愛紗と同じ事を思っていたのか!!お前や愛紗の言葉なんか信用できるか!!」

諸葛亮「ご主人様!!」

その時、

白蓮「やめろ、北郷!!」

北郷「白蓮・・・!!」

白蓮がやって来て、北郷を止めた。

白蓮「朱里の訴えは口が過ぎたが、お前の事を思ってたんだぞ!!桃香もどうして

北郷を止めなかつたのだ!!」

劉備「そ、それは・・・!!」

北郷「黙れ白蓮!!朱里は、俺に意見したんだぞ!!」

白蓮「北郷!!」

諸葛亮「良いんです、白蓮さん。」

白蓮「朱里・・・!!」

劉備「・・・。」

北郷「桃香!!」

劉備「私は・・・」

そして、劉備はある命令を下したのであつた。

57話

隠密からある知らせを持って来た純は、華琳のいる玉座の間に行った。

純「姉上、宜しいですか？」

しかし、そこにいたのは華琳だけでは無く、桂花もいた。しかも、情事をしている真つ最中であつた。

華琳「純、どうしたの？」

桂花「んあ、華琳、様あ……。」

桂花「純様?……つて、純様あ!?!」

純「姉上、お取り込み中大変申し訳ございません。報告があります。」

華琳「良いわよ。桂花も、ちゃんと聞いておくのよ。」

桂花「ふあい……。」

純「劉備と天の御遣いが戦の準備をしているとの情報が入りました。狙いは十中八九、こちらだと思えます。姉上の思う壺ですね。」

華琳「そうね。あの二人の力は認めるわ。何せ、益州の劉璋の信を得たのだから。けど、やり方は容認できないわ。恐らく向こうもそうでしょう。」

純「はい、昔日の恩を忘れこちらの留守を狙って俺と姉上の首を獲りに来るでしょうね。その証拠に、隠密からの情報では、今回の戦は復讐と唱えておりますから。」

華琳「復讐？何を復讐するのかしら？」

純「それは俺もよく分かりません。天の御遣いが特にそう仰っておりますので。」

華琳「どうしようもないわね。しかし、とんでもない買い物をしたものだけ。」

その時、

桂花「徐州の時、見捨てておけば……。」

と桂花がそう言った。

華琳「それを悔いても仕方が無いわ。……さて、純。あの城の改修はどうかしら？」

純「既に完成しております。しかも、向こうには偽の設計図を奪わせました。間違いなくそこに来るかと。」

華琳「なら良いわ、潰すわよ。純、準備しなさい。」

純「既に焰耶と風に命じて準備を進めております。」

華琳「ふふっ、流石ね。」

純「いえ。ではこれにて。」

そう言つて、純は玉座を後にした。

華琳「桂花、準備を。」

桂花「御意！」

そして、華琳も準備を始めたのだった。その後、劉備達は純が改修した出城に向かっているとの情報が入り、華琳と純らは兵を率いてその出城に入ったのであった。

劉備軍

劉備「そう。曹操さんと曹和さんは近くの出城に移ったんだね。」

関羽「はい。そちらに手持ちの戦力を集中させているようです。」

劉備「そつか……。ご主人様、本当に曹操さんと曹和さんと戦わなくちゃいけないの……？」

北郷「ああ、俺達を散々こけにしたんだ。ここで討ち取らなきゃ、いつ討ち取るんだ。それに桃香だって、魏延にぼろくそに言われたじゃないか。」

関羽「しかしご主人様、あの場に私もいましたが、あの一件は桃香様に非がありました。魏延殿の発言も口が過ぎたかもしれませんが、魏延殿が全て間違っている訳ではありません。」

北郷「・・・何が言いたい、愛紗？」

関羽「魏延殿の言っていた事は、一人の意見として間違っていないと言っているのです。ご主人様、此度の出陣は我らに大義がありません。ましてや徐州での恩を仇で返すなど、不義の極みです！これでは、我らの理想とはかけ離れております!!」

すると、

北郷「愛紗!!お前は一体どっちの味方なんだ!!お前まで俺に意見するのか!!」

北郷はそう関羽に怒鳴ったのだった。

関羽「ご、ご主人様!!私はそういう意味で言ったわけじゃ・・・!!」

北郷「俺は天の御遣いなんだぞ!!俺の言っている事は全て正しいんだ!!俺に絶対逆らうな!!」

関羽「ご主人様!!桃香様も何か言ってお下さい!!」

しかし、

劉備「でも、力で従わせる曹操さんと曹和さんは絶対間違っていると思うし・・・。」
と劉備はそう答えたのだった。

関羽「桃香様!!」

その時、

張飛「愛紗、もう止めるのだ・・・!!もう桃香お姉ちゃんとお兄ちゃんに何言っても

無駄なのだ!!今諷陵で留守番している朱里の二の舞になるのだ!!」

鳳統「愛紗さん……!!鈴々ちゃんの言う通りです!!堪えて下さい!!」

張飛と鳳統が関羽を止めたのだった。

関羽「鈴々……!!雛里……!!」

関羽（私はどうすれば……!!）

これには、関羽は黙らざるを得なかったのであった。

出城

華琳「上手く嵌まったわね。」

純「はい、そのようですね。」

華琳「まず私が相手をするけど、その後は全てあなたに任せるわよ。」

純「了解しました。俺も付き合いますが、劉備の言動にムキにならないように。」

華琳「ええ、分かったわ。」

純「俺の不安はそこだけですよ。」

純は華琳が必要以上に熱くなり、冷静さを欠く事が無いよう釘を刺したのだった。そして、華琳と純は城外に布陣した。

華琳「よく来たわね、劉備。ちゃんと私達の寝首を搔きに来たところは褒めてあげる。・・・ようやくこの時代の流儀が理解できたようね？」

劉備「曹操さん、曹操さんのやり方は、間違ってます！隣にいる曹和さんですよ！」

華琳「・・・何を言うかと思えば。」

純「・・・。」

劉備「そうやって、力で国を侵略して、人を沢山殺して・・・」

劉備「それで本当の平和が来ると思ってるんですか？」

華琳「本当の平和・・・ねえ。」

純「・・・。」

劉備「そんな、力が物を言う時代は・・・黄巾党のあの時に終わらせるべきだったんです！」

華琳「なら、どうして貴方は反董卓連合に参加したの？あれこそ、袁紹達諸侯が力で董卓をねじ伏せようとした・・・ただの茶番劇だったじゃない。」

劉備「それは都の人達が困っていたからです！」

華琳「都の民に炊き出しをしたいだけなら、別に軍を率いる必要はなかったでしょう。」

それこそ、自分達だけで都に行けば良かったのよ。」

劉備「けど、それだけじゃ・・・意味が無いはずですよ！もっと根本的を何とかしないと！だから私達は、連合に参加して・・・」

華琳「それこそ、あなたの嫌いな武力を使つてね。」

劉備「・・・っ！」

華琳「官は腐り、朝廷も力を失っている。けれど、無駄なものは常にそこにあるの。それを正し、打ち壊すためには・・・名と力が必要なのよ。」

華琳「今、あなたが背負っているような・・・強く大きな力と、勇名がね。」

劉備「私の背中にあるのは、力なんかじゃない。志を同じくした・・・仲間です。」

華琳「同じ事よ。志を貫くためには力が必要。その力で全ての不条理と戦い、打ち壊し、その残ったものからでなければ平和は生まれえないわ。」

劉備「違います！ちゃんと話し合えば、戦わなくてたつて理解し合う事は出来るんですよ！」

純（じゃあ何でコイツは兵を率いてここに来てんだよ・・・。）

華琳「ならばあなたは どうして今、ここにいる？」

劉備「え・・・。」

華琳「話し合えば理解し合えると言うのなら、何故兵を率いてここに來ているのかし

ら？」

華琳「連合の時でも、虎牢関や汜水関に使者を送ろうとは言わなかったわよね。」

劉備「・・・っ！」

華琳「私達が先に攻め入ると言っていたから、話す必要は無いと見たのでしょうか？」

劉備「そ、それは・・・。」

華琳「力とはそういうものよ。相手が拳を握っていけば、怖くなつて殴り返そうと思つてしまう。」

華琳「殴られるかも、殴られるだろう、そして・・・殴られる前に、殴つてしまえ・・・とね。」

華琳「だから、私達は先に拳を示すの。殴つて、殴つて、殴り抜いて・・・降つた相手を、私達は慈しむわ。私達に従えば、もう殴られることは無いと教え込むの。」

劉備「そんな、無茶苦茶な・・・！そこまでずつと戦い続ける気ですか！」

華琳「そうよ。」

劉備「！」

華琳「話し合いで妥協できる程度の理想など、理想とは言わない。・・・城の一つもくれれば良いとか、貴方の理想の片手間で済ませられる条件だったのでしよう。」

劉備「そ、それは・・・！」

純（あいつらも軍を動かしているというのに、何故自分達が正しいと言い切れるんだ。俺はああいう輩は苦手だ。何せ、自分達が絶対に正しいと思ひ込んでいるからな……。理想を抱くのは否定しないが、矛盾も理解しねーと。）

華琳「けれど、私達の理想は貴方の片手間で済まないわよ。私達はどうかあれ、貴方を叩き潰す。貴方の大嫌いな、力と兵と命をぶつけて……。」

華琳「あなたが正しいと思うなら、今こそ私達を叩き潰しなさい。その時は、私達は貴方の前に膝を折る事でしょう。首を取るなり貴方の理想に従わせるなり、好きにすれば良い。尤も、天の御遣いは前者かもしれないけど。」

劉備「この兵力差で……曹操さんは本当に勝てると思ってるんですか？」

華琳「ふっ……負ける戦はしない主義よ。それに、私には最も信頼している弟がいるしね。」

劉備「曹操さん、曹和さん。もしここで降参してくれたら……貴方達の国は、貴方達に任せても良い、そう思っているんです。だから……降参して下さい。」

純（何言ってるんだコイツ……？）

華琳「……あらあら。平和が一番と言いながら、兵力を盾にこちらを恫喝するつもり？」

劉備「そ、そういうワケじゃ……っ！」

華琳「力ずくなのは嫌いじゃないわよ。．．けれど、そんな話は私達に膝を折らせてからにしないさい。」

劉備「どうしても．．．戦わないとダメですか？」

華琳「当然でしょう。私達が納得しないもの。そうしなければ、私達は明日にでも貴方を裏切つて、全力で貴方の城だけでなく、益州全域に攻め入るわよ。それでも良いのなら、貴方のしたいようになさい。」

劉備「．．．分かりました。戦いたくはないけれど、私は貴方達を叩き潰します。それで．．．納得してくれるんですよね？」

華琳「ええ、それで良いわ。純、行くわよ。」

純「はっ。」

舌戦は終わり、曹操軍と劉備軍は激突した。華琳は少数ながら巧妙に立ち回り善戦したが、圧倒的数の前に撤退し、純はその援護に移ったのだった。

純「自棄になるのを心配したのですが、大丈夫でしたな。」

華琳「あれだけ釘を刺されたら、大人しくするわよ。それより、後は任せたわ。」

純「お任せ下さい。姉上は急いで戻り、皆を集めて下さい。」

華琳「分かったわ。でも本当に貴方と焰耶、そして風だけで良いの？」

純「この城に五千の兵がいれば最低四ヶ月は持ちます。安心して下さい。」

華琳「……分かったわ。すぐ戻ってくるから、それまでに持ち堪えなさい。」
そう言つて、華琳は急いで撤退したのだった。

劉備軍は、華琳の軍を撤退させた勢いで、出城に迫つたのだった。

北郷「この兵力差で俺達に勝てると思つていいのか、アイツは!!ゼツテー殺してやる!!
幸いにも、この城の設計図は手に入れている。これでアイツは終わりだ!!」

劉備「そうだね。ここで倒せば、この国の民は全て救われる……。」
その際北郷と劉備は、憎しみで曇つた目をしていたのだった。

58話

劉備軍は、北郷と劉備の命令の下、城攻めを開始した。

それを見た純は、

純「馬鹿めが、まんまと俺の策に嵌まりやがって。鳳統がいるのにも関わらず、何故それを見抜けない。もしかして、意見を聞かなかったのか？」

焰耶「それはありえるかもしれません。なにせ、反董卓連合の檄文を真に受ける連中ですから。」

純「お前もハッキリ言うな。」

焰耶「いえ、それほどでも。」

風「しかし、劉備さん達には効いた様ですわ、必死に攻めてますよ。」

焰耶「華琳殿が戻ってくるのに早くて二ヶ月は掛かります。それまで持ち堪えましょう。」

純「ああ、そうだな。こんな所で負けるわけにはいかない。お前達の智勇が頼りだぞ。」

焰・風「はっ!!」

そう言って、焰耶と風はそれぞれ兵を指揮したのだった。一方の劉備軍は城攻めを開始しても手に入れた設計図と違い、また、城内の兵の連携に困惑し、上手くいかなかった。

北郷「どうなっている！俺達の知る城ではないぞ！」

劉備「どうして！」

鳳統「……恐らくですが、ご主人様が手に入れた設計図は偽物だったのかもしれないかもしれません。」

北郷「何だと!!」

劉備「そんな!!」

鳳統「流石は曹子元さんです。智勇を兼ね備えています。」

関羽「つまり、我らは掌で踊らされていたという事か。」

鳳統「……はい、そうなります。」

北郷「つつ、くそ!!卑怯者め!!」

その時、

劉備軍兵士A「大変です!!敵が城から出て参りました!!」
城から兵が出て来たとの知らせが入った。

関羽「数は!!誰が出撃した!!」

劉備軍兵士A 「数は五百!! 旗印は魏!! 魏延です!!」

北郷 「何だと!!」

その頃、

焰耶 「私について来い!! 昔日の恩を忘れた不義の軍を叩き潰すのだ!!」

焰耶が五百の兵を率いて、劉備軍の前線を崩していた。その攻撃に、

劉備軍兵士B 「うわーっ!!」

劉備軍兵士C 「た、助けてくれーっ!!」

劉備軍は混乱の渦と化した。

焰耶 「うおー!!」

劉備軍兵士D 「ギャーツ!!」

劉備軍兵士E 「な、何て強さだ!! に、逃げろーっ!!」

焰耶 「よし、かなり混乱しているな・・・」。

その時、

張飛 「待つのだ!! 鈴々が相手するのだ!!」

張飛が焰耶に声を掛けた。

焰耶 「お前が張飛か!! 中々の強者だと聞いたぞ!! 良いだろう、覚悟!!」

張飛 「行くのだ!!」

そして、焰耶と張飛の一騎打ちが始まった。両者は正面からぶつかり、二人の武器が、火花と金属音を周囲にまき散らした。

ガギン！ガギン！ガギン！

両者の対決は、最初は互角で進んだが、時間が経つと、

焰耶「ふっ、中々やるな!!」

張飛「はあ、はあ、そっちもなのだ!!」

張飛の方が息切れしてきたのだった。

焰耶「しかし、お前の体力は限界の様だな。」

張飛「はあ、はあ、そんなこと無いのだ!!」

焰耶「強がるのはよせ!!命取りだぞ!!はあっ!!」

ガギン！ガギン！ガギン！

そして、

張飛「あっ!?!」

張飛のバランスが崩れたのを焰耶は見逃さず、

焰耶「貫ったあ!!」

焰耶は鈍砕骨を振り下ろそうとした。その時、

ガチン！

焰・張「!?!」

関羽「大丈夫か、鈴々!!」

張飛「愛紗っ!?!」

関羽が間に入り、青龍圓月刀で焰耶の一撃を受け止めたのであった。

関羽「鈴々、動けるか?」

張飛「う、うん。けど、もう限界なのだ……。」

関羽「ここは私に任せろ!!」

張飛「けど、愛紗!!」

関羽「鈴々!!」

張飛「……分かったのだ、愛紗。」

そう言い、張飛は下がったのだった。

関羽「ここからは私が相手だ、魏延殿。連戦になるが、大丈夫か?」

焰耶「まだまだ行けるぞ、私は。」

関羽「そうか……。なら、参るっ!!」

そして、両者は激突した。焰耶は連戦であるにもかかわらず、疲れた様子は一つも見せず、関羽の攻撃をいなしていた。一方の関羽も、焰耶の攻撃をいなしており、両者一歩も譲らず互角の戦いだった。

ガギン！ガギン！ガギン！

焰耶「お前も中々やるな!!」

関羽「そちらもな!!」

焰耶「しかし、お前の刃には迷いが見える。」

関羽「な、何を・・・!?」

焰耶「お前、今の主である、劉備と天の御遣いの此度の出兵とそれ以前の行動に戸惑いを感じているのでは無いのか？義に厚いお前からしたら、此度の出兵は複雑この上ないであろう・・・、大義が無いからな。この武は、何のために振るっているのかと・・・。」

関羽「そ、それは・・・。」

焰耶「その様な迷いのある武など、私の敵ではない!!はあつ!!」

ガギン！ガギン！ガギン！

関羽「くうっ!!」

次第に関羽が押されていき、そして、

関羽「しまった!？」

バランスが崩れてしまい、隙が出来てしまった。

焰耶「関羽、覚悟・・・っ!？」

焰耶が鈍砕骨を振り下ろそうとしたその時、

張飛「させないのだ!!」

蛇矛が入ってきたのだった。

関羽「鈴々っ!!お前は撤退したのでは!!」

張飛「愛紗を一人置いていくこと出来ないのだ!!」

関羽「・・・すまない。」

そう言った関羽は、再び圓月刀を構えた。

焰耶「二人がかりか・・・。」

張飛「お前には、鈴々と愛紗の二人で行かないと勝てないのだ!!」

関羽「すまないが、覚悟して貰うぞ!!」

焰耶「流石に撤退したいところだが、厳しいな・・・。このままでは全滅だ・・・。」

その時、

「「わあーっ!!!」」

焰耶「何だ?」

張飛「何なのだ?」

関羽「分からぬ・・・。」

焰耶の後方、つまり出城の方面の様子が変わったのだった。すると、

純「焰耶を救うぞ!!俺に続けーっ!!」

純が先頭に立って、突撃してきたのだった。

劉備軍兵士F「う、うわーっ!! 曹和だー!!」

劉備軍兵士G「曹和が来たぞー!!」

焰耶「お、お館?」

張飛「にやにやー!? 十騎くらいしかいないのだ!」

関羽「たつたそれだけで、あの包囲網を突破したのか!」

これには焰耶だけでなく、関羽と張飛も驚いてしまった。

純「焰耶!!」

焰耶「お館!!」

純「急げ!! 撤退するぞ!!」

焰耶「はっ!!」

そう言い、焰耶も馬に乗り、純と共に撤退した。しかし、

純「マズいな・・・。」

焰耶「お館?」

純「まだ兵が残っている。このままではあいつらは死んでしまう。俺はあの兵を救いに行く!!」

まだ兵が残っているのに気付いた純は、一度戻ると言った。

焰耶「しかしお館!?! 敵兵のど真ん中ですよ!?!」

純「ソレがどうした!! 俺にとって、あいつらは共に戦ってきた同志だ!! 見捨てるわけにはいかねーよ!!」

そう言い、純は敵陣に突撃した。

純「うおーっ!!」

劉備軍兵士H「うわーっ!! 曹和だー!!」

劉備軍兵士I「軍神曹和がまた来たぞー!!」

そして、

純「お前ら、大丈夫か!!」

曹和軍兵士「曹和様!! ありがとうございます!!」

純「よし、撤退するぞ!!」

曹和軍兵士「はっ!!」

純は兵士全員を助け、出城に撤退した。

そして、出城に入ると、

焰耶「お館ーっ!!」

焰耶が純に抱き付いてきたのだった。

純「焰耶!」

焰耶「お館、良かったです!!」

と焰耶は泣きながらそう答えた。すると、

焰耶「あつ……。」

純「心配掛けたな……。」

そう言い、焰耶の頭を撫でたのだった。

風「純様……。」

純「風か……。濟まなかったな、無理を押し切ってしまった……。」

風「いえ……。無事で何よりですよ。」

と風も笑顔でそう答えた。

純「風、劉備軍の前線は？」

風「焰耶ちゃんと純様の活躍で、崩壊してます。恐らくですが、劉備軍の士気は最

悪の状態かと。」

純「そうか……。」

すると、

曹和軍兵士「曹和様はまさに天上のお方です!!」

と兵士達は皆拱手し、頭を下げたのだった。

純「このまま姉上達が来るまで守り切るぞ!!」

「はっ!!」

これにより、純の子飼いの兵の結束力はまた更に強くなったのであった。

59話

城の攻防戦が始まってから約一ヶ月が経過した。劉備軍は、最初の焰耶達の奇襲と連日の戦闘にもかかわらず未だに城は落ちず味方の被害が拡大するため、士気は最悪の状態になっていた。また、兵糧が残り少なくなり、状況を更に悪化させていた。

劉備軍武将A「兵達は食糧を調達するために、近くの山に野草を採りに行っています。しかし、それもすぐに尽きるでしょう。」

劉備軍武将B「兵達は皆、空腹にあえいでいます。」

劉備軍武将C「それに、連日の戦闘で疲労困憊です。逆に城兵の方も、おそらく我らと同じく疲労困憊だと思います。しかし、士気は更に上がるばかりです。」

関羽「・・・そうか。」

そして、関羽は疲労で疲れ切っている兵士の肩を叩いた。

劉備軍兵士A「関羽様・・・。」

関羽「すまないな・・・。」

関羽は、ただ一言そう言うしかなかった。そして、周りにいる兵士を見て皆疲れ切っていると感じた関羽は、

関羽「桃香様とご主人様は、この状況をどう思っておられるのだ・・・。」

関羽「城攻めが始まって、一ヶ月ほど経つ。しかし、状況は未だ変わらない。大義の無い戦であるにもかかわらず、ただ己の欲のために動いているとしか思えぬ。何が理想を叶えるだ。理想を信じ死んでいった兵達を何と思っているのだ・・・！」

と関羽は兵士達を見てそう呟いた。

関羽「桃香様とご主人様は、今何をしておる？」

劉備軍武将A「この数日、劉備様と御遣い様は本営の中で二人つきりになって酒を飲み、情事を重ねております。」

これを聞いた関羽は、

関羽「何、こんな時にか!？」

とただただ驚き、呆れてしまった。

劉備軍武将B「張飛様と鳳統様が何度もお諫めしておりますが、全く耳を貸しません。」

劉備軍武将C「加えて、口を開けば自身の理想の素晴らしさを語るのみで・・・。」

関羽「なんと言うことだ！」

そう言った関羽は、本営に向かったのだった。

劉備軍本営

劉備「ねえご主人様、何で城は落ちないんだろうね？」

北郷「それは多分、前線の兵士の気合と桃香と俺への忠誠心、そして愛国心と必勝の信念が足りないからだと思う。どんな状況でも、それさえあれば勝てるよ。」

劉備「そうだよね、ご主人様の言う通りだね。私とご主人様に対しての思いがあれば、城は簡単に落ちるよね。」

北郷「そういうことだ。それより、今日も飲もう。そして今夜……。」

劉備「もう、ご主人様ったら……。」

その頃、劉備と北郷は、酒を飲みながら現実逃避をしていた。そこへ、

関羽「桃香様、ご主人様、失礼します。」

関羽が本営に入ってきた。

北郷「おお、愛紗。」

劉備「愛紗ちゃん、どうしたの？」

関羽「どうしたのではありません!!我らは城を攻めて一ヶ月、連日の戦闘で被害は拡

大し、食糧も不足しております！それなのにお二人は、兵達を慰勞せず、かといって作戦も立てず、酒を飲み情事を重ねるとは！！こんな事をしていて兵達に申し訳が立つのですか！！」

そう言つて、器の中に入っている酒を投げ捨てた。

北郷「まあ愛紗、落ち着けよ。」

劉備「そうだよ愛紗ちゃん、すぐ頭に血が上るんだから。」

北郷「今俺達の兵は五万程いる。それに比べて城にいる曹和の兵はたかが五千。仮に曹操が救援に来て、俺達の兵の数には到底及ばない。つまり、この城を落として曹和を殺し、その勢いで曹操達を殺せば、この国は俺達の物。そうすれば、この国を圧政の苦しみから救う事が出来るのさ。」

劉備「そうそう。流石ご主人様！！」

そう言つて、北郷と劉備は聞く耳を持たない。すると、

関羽「兵達は飢えております！！それに、そんな都合良く上手くいくとは思えません！！加えて、曹操達が救援に来たら、我らは包囲されてしまいます！！」

関羽はそう怒鳴つて言った。

北郷「戦が苦しいのは当然だ！愛紗、それはお前も分かっているはずだ！苦しみに耐えられないなら、戦に勝てるはずが無い！！」

関羽「しかしご主人様!!桃香様!!お二人は、日夜酒を飲み、ただ情事を重ね己の欲を満たし、現実から目を背けるだけです!!兵達が苦しんでいても何とも思わないのですか!!」

北郷「愛紗、確かに兵達の中には、疲れと空腹を訴え、不満を持つ者もいる。けどそれは、気合と桃香と俺への忠誠心と愛国心、そして必勝の信念が足りないからだ!!そんな兵達は、処刑しろ!!鈴々にもそう伝えろ!!」

関羽「それで戦に勝てたら苦勞はしません!!それに、その様なことをしたら、我が軍は崩壊します!!」

北郷「愛紗、俺は天の御遣いなんだぞ。天であるこの俺に逆らうな・・・。」

劉備「そうだよ愛紗ちゃん、私達に逆らっちゃ、ダメだよ。」

北郷「さあ桃香、飲もう。」

劉備「うん、そうだね!」

そう言つて、二人は酒宴を再開した。それを見た関羽は、

関羽「・・・。」

複雑な表情を浮かべながら拱手して本營を出たのだった。

北郷「全く愛紗は、頭が固すぎる。」

劉備「ホントそうだよねー。本当は凄く良い子なんだけどねー。」

北郷（顔は可愛いのに、勿体ない・・・。）

劉備「ねえご主人様、この戦が終わったら、今度愛紗ちゃんと一緒に買い物に行こうよ。そうすれば、愛紗ちゃんも少しは可愛くなるんじゃないかな？」

北郷「そうだな、そうしようか。」

劉備「うん！」

そう言つて、再び酒を飲み始めたのであつた。

出城

純「さあ。」

曹和軍兵士A「ありがとうございます。」

純「すまん、連日の戦闘で苦勞を掛けるな。」

曹和軍兵士B「恐縮です、曹和様。」

純「さあ、食え。」

曹和軍兵士C「はっ、ありがとうございます。」

曹和軍兵士D「感謝します。」

純「ほら、水だ。」

曹和軍兵士E「ありがとうございます。」

その頃、純は兵士達と共に食事をしていた。

喜雨「純様……。」

そこに、喜雨がやって来た。

純「喜雨か……。すまん、お前まで戦闘に駆り出してしまつて……。」

喜雨「ううん、僕は全然構わないよ。それに、僕だけ安全な場所にいるのも嫌だし……。」

純「そうか……。もう暫く耐えてくれ。」

喜雨「うん……。」

その時、

純「何だ、この音は？」

遙か彼方から破裂音が木霊した。すると、

燈「純様。鎗矢をお願い致します。」

燈の音が聞こえた。

喜雨「母さん……！」

燈「喜雨……。」

焰耶「お館、今の音は……って、燈!? 今までどこにいたのだ!?」

燈「焰耶ちゃん、城なんだから、主が逃げるための出入り口の一つや二つあるわよ。」

焰耶「何と……!?」

風「おやおや、焰耶ちゃんも一本取られましたねー。」

燈「それより純様。先程のは、華琳様達が上げた我々への反撃の狼煙。こちらも、相應の返答を。」

焰耶「華琳殿が!? という事は……!?」

純「……分かった。鎗矢を放て!」

曹和軍兵士F「はっ!!」

そう言い、鎗矢を放った。すると、

焰耶「お館! 地平の向こうに大量の兵が!」

兵らしき集団が現れた。

風「さっきの鎗矢が反撃の合図だとすれば……」

風「旗印は、紫の旗色の曹を中心に、夏侯、楽、許、郭……それに紺碧の張と趙の旗。みんな、お味方ですねー。」

これには、

焰耶「何と・・・!? 華琳殿が救援に来るまでまだ時間が掛かるはずだ!」

喜雨「空でも飛ばない限り、間に合わない・・・!?」

純「稟か・・・」。

焰耶と喜雨は驚いたが、純はどうして早く救援が来たのか察したのだった。

曹操軍

華琳「間に合ったわね!!」

霞「うっしや!!」

稟「急いだ甲斐がありました」

星「そうだな」

霞「全くや。稟もええ道選んでくれたからやで!」

華琳「そうね。郭嘉、ご苦労だったわね」

稟「当然のことをしたままでです。それに、礼ならこの戦いに勝ってから言っ
て下さい。」

霞「なんや、つまらんやつちやなあ……」

星「まあ良いでは無いか。稟、この戦いに勝つたら、私が一杯おごろう。」

稟「はい。楽しみにしていますよ。」

霞「おつ！ウチもおごつたる！」

華琳「ふふ。霞、星、程々にね。」

季衣「華琳様！春蘭様！城の旗は健在ですよ！純様達はご無事です！」

春蘭「当たり前だ！我らの純様だぞ、そう簡単に負けるはずがあるまい！」

華琳「そうよ、季衣。純は、私が最も信頼する弟なのよ。」

季衣「はいっ！」

春蘭「だが窮地であることには変わりない！急ぎましよう華琳様！一刻も早く、純様を劉備の包囲網からお救いしましょう！」

季衣「ちよつと、春蘭様ー！そんなに急いじや、皆疲れちやいますよー！」

春蘭「ここまで持ち堪えた我らが精兵が、今さら疲れたなどと言うものか！」

華琳「もう、春蘭つたら……」

流琉「秋蘭様、城から反応がありました。あれは。」

秋蘭「うむ。城の側もこちらの動きに同調して、突撃を掛けてくださるのだろう。」

流琉「さすが秋蘭さま。全てお分かりなんですね。」

秋蘭「……すまん。今のは全て私の勘だ」

流琉「え……そうなんですか？」

秋蘭「だが、純様の事だ。ご健在である以上、こちらの動きを見れば全て理解して下さるさ。」

華琳「そういうことよ、流琉。」

流琉「そうですね。なら、こちらも……。」

華琳「ええ。郭嘉の作戦に従い、連中の背後から一気に叩きなさい！」

秋・流「はっ！／＼はいっ！」

真桜「しかし、ここまでよく持ち堪えとるわ。」

凧「そうだな、流石は純様だ。」

華琳「ふふっ、純だからこそ出来るのよ。」

沙和「そうなのー！沙和だったら、こんな大軍相手に勝てるか分からないのー！」

真桜「せやなー。」

沙和「もう接敵するのー！戦闘準備よーい！」

華命「純兄ーっ！お待たせっすー！」

香風「華命様、さすがにここからじゃ、聞こえない。」

華命「そんなことないっすよー。ほら、返事が聞こえるっすよ。」

香風「・・・ほんと？」

華侖「そう思えば、きつと聞こえるはずっす！頑張れば、きつと何でも何とかなるっす！」

華琳「ふふっ、華侖らしいわね。」

香風「頑張れば、空も飛べる？」

華侖「もちろんっすよ！空が飛べたら、ここから純兄の所までだつてひとつ飛びっす！」

香風「それ良い・・・！シヤンも頑張る！」

華侖「その意気っす！」

栄華「それにしてもお兄様、なんという無茶を・・・。」

柳琳「大丈夫よ、栄華ちゃん。お兄様の事だから、きつとこうなる事も予想済みだつたはずよ。そうですよね、お姉様？」

華琳「ええ、そうよ柳琳。」

栄華「そうですわよね・・・そうですわよね・・・。」

柳琳「ふふっ。なんだかいつもと逆みたい。」

柳琳「いつもは姉さんを心配する私を、栄華ちゃんが元氣付けてくれるのに。」

栄華「だつて、心配なんですもの。お兄様は、お姉様と同じくいつも完璧で・・・理

想の殿方で……それが、こんな敵陣に囲まれて……!!」

柳琳「なら、早くお兄様を助けに行きましょう。」

栄華「ええ、そうですね! 私達が行けば、あれしきの軍勢……!!」

華琳「そうよ、栄華。純は、簡単に死にはしないわ。だって、私の弟なんだから。」

翠「純殿、よくぞご無事で!!」

楼杏「翠さん、純さんは、そう簡単にやられないわ。」

華琳「そうよ馬超。純は、あのような輩にやられないわ。だって、私の自慢の弟なん

だもの。」

翠「そうだな。よし、奴らに西涼の騎馬隊の力を見せつけるぞ!!」

楼杏「ええ!!」

出城

焰耶「皆……。」

風「純様……。作戦はどうなさいますかー?」

純「この機を逃すわけねーだろ。」

純「焰耶、三千の兵馬を城門に集める!!俺が率いて出陣する!!焰耶も一緒に来い!!
は、残りの兵を率いて城を守れ!!」

焰耶「はっ!!」

風「はいー!!」

純「皆の者、ついてこい!!」

曹和軍兵士「はっ!!」

そして、純達三千の兵馬は、城門前に着いた。

純「よく聞け!!外にいる奴らは、徐州での恩を忘れ、この国を征服しようとした不義不逞の輩だ!!奴らには天の御遣いがあるが、天は奴らに味方しない、何故か!!それは恩を忘れ、この国を私利私欲で制圧しようとしたからだ!!その様な輩に、天は味方せぬ!!俺と共に突撃し、姉上達と共に、奴らを打ち払うのだ!!」

曹和軍兵士「おおーっ!!」

純「行くぞ!!残る力を全て怒りに変えて奴らを叩き潰せ!!突撃ー!!」

曹操軍

華琳「皆、戦闘準備は出来ているわね！」

霞「おう！待ちくたびれたわ！」

星「私もだ！」

華琳「春蘭と季衣、流琉で一気に突撃を掛け、劉備達の背後を叩きなさい！霞と星、そして秋蘭と柳琳はその隙を突き、崩れた相手を根こそぎ打ち砕くのよ！」

春蘭「はっ！」

季衣「分かりました！」

華琳「華命、香風、栄華は遊撃よ！自由に動き、奴らの動きを縛り付けなさい！」

華命「お任せっすー！」

凧「私達は援護に回る！二人とも、頼むぞ！」

真・沙「任しとき！／お任せなの！」

華琳「我らが目指すはただ一つよ！」

華琳「劉玄德を打ち払い、我が弟を救う事よ！」

春蘭「はっ！」

季衣「はいっ！」

秋蘭「はっ！」

流琉「もちろんです！」

華琳「全軍、突撃!!」

こうして、純の救出作戦が始まった。

60話

純「ふっ!!」

劉備軍兵士A「ぐはっ!!」

焰耶「はあっ!!」

劉備軍兵士B「ぐふっ!!」

純「焰耶、まだまだ行けるな!!」

焰耶「当然です!!」

純「よし!!お前ら!!お前らの怒りはこの程度か!!まだまだ力はあるはずだ!!今までの分全てを、奴らにぶつけろ!!容赦はするな!!」

純の発破に

曹和軍兵士「二「おおーっ!!」二」

曹和隊は更に勢いを増し、劉備軍を屠っていった。

関羽「く・・・っ。これが曹和殿の子飼いの兵の実力か!守りも強かったが、攻めに転じたら更に強い!奇襲が成功したのも納得だ!これに主力が加わったため、面倒になっただ!」

その様子を見た関羽は、悔しさに顔を歪ませた。

霞「関羽うううっ！見つけたでえっ！」

その時、関羽の目の前に霞が現れた。

関羽「貴様……張遼っ！」

霞「応！戦場で会うんは久し振りやし、忙しいとこスマンけど、一戦お相手願おうかつ
！」

そう言つて、霞は関羽に攻撃した。

関羽「くうっ！」

霞「どや……っ！飛龍圓月刀の一撃……っ！」

関羽「相変わらずやるな……！だが、今はお前を相手にしている暇は無いのだ！」

霞「そう言わんと、もつとちゃんと相手してえな！せやないと、ウチかて本気出せへ
んやろ！」

そう言つて、霞は関羽に更に猛攻を仕掛けた。

関羽「……ぐっ！この一撃の重さ……武器を変えたか。」

これには、関羽も以前戦った時との違いに気付いた。

霞「おお、分かるか！流石やなあ……。ま、ちつと前と変わつてもうたんやけどな。

ほら、こここのトゲトゲンとこ……。」

関羽「……そ、そうなのか。」

関羽（よく分からん……。）

霞「けど感じた通り、切れ味も強度も、前とは比べものにならへんで……!! いざ、尋常に……」

と構えたのだが、

霞「……と言いたいトコなんやけど、やっぱ止めるわ。」

関羽「……はっ?」

霞「そないな迷いのある武と戦うても、なーんもおもろくないねん。ほら、撤退せえ。」
そう言い、霞は得物を下ろした。

関羽「……全軍、撤退せよっ!!」

そして、関羽は撤退を始めたのだった。

香風「はああああっ!!」

星「せやあーっ!!」

香風と星も、大暴れしていた。

香風「……星、やっぱり凄い。」

星「香風も相変わらずだな。また腕を上げたな?」

香風「うん、頑張ってる。褒めて。」

秋蘭「香風と星が敵を抑えている間に、何としてもここを抜くぞ！槍隊、弓隊の斉射が終わり次第、前進！弓隊、撃てーっ！」

劉備軍武將A「うわーっ、何て強さだ!!退け!!退けーっ!!」

華琳達の援軍で形勢が逆転し、劉備軍は大敗を喫したのだった。

劉備軍本陣

張飛「雛里！右翼と左翼はもう退がったのだ！殿は、愛紗が任せろって！」

鳳統「分かりました。鈴々ちやんはこのまま、本陣の援護をお願いします！」

張飛「うう・・・春巻頭と怖いお姉ちゃんとの決着が付けられなかったのは残念だけど、しょうが無いのだ・・・。分かったのだ。」

そう言つて、張飛はその場を後にした。

劉備「どうして!?どうしてこうなるの!?何で、私達は勝てないの!?私達が正しいのに!!」

北郷「何でなんだ!?正義は俺達の筈なのに・・・!?何で!?俺は何も悪くない!!悪いの

は全て曹和なのに!!」

この時劉備と北郷は、揃って現実から目を背け、自身の過ちに目を向けなかったのだった。

出城

華琳「純! 良くやってくれたわ!」

純「ありがたきお言葉。しかし、それらは全て俺の部下の働きのおかげです。あいつらを労つて下さい。」

華琳「分かったわ。後で彼らにも労つておくわね。」

純「はっ! 感謝します!」

華琳「やれやれ・・・ようやく一息ね。」

純「そうですね・・・。姉上、とりあえず城内は、凧と喜雨達に任せ、追撃はやりた
い者が自分から言ってくると思うのでそれらに任せようと思います。」

華琳「ふふっ、良いわよそれで。」

純「ありがとうございます。しかし、稟のおかげにしては予想以上に早かったですね。」

華琳「それには訳があるわ。けどそれは、皆が集まってから話すわ。」

純「承知しました。」

華琳「特に秋蘭は、あなたのことを一番心配していたから、可愛がつてあげなさい。」

純「分かりました。・・・ふう。」

華琳「久し振りに疲れた顔してゐるわね。」

純「まあ、さすがに今回は疲れませんでしたね。」

そう言つて、純はその場に座り、城壁に背を預けた。

華琳「・・・そう。」

すると、

華琳「・・・。」

純「姉上・・・？」

華琳は純の頭を優しく撫でたのだつた。

華琳「本当にありがとうございます。おかげで、私はまたあなたに救われたわ。」

純「いえ、俺は大したことは・・・。」

華琳「それでもよ。本当にありがとうございます。」

純「……」

そのまま、純は暫く華琳に頭を撫でられていた。

そして、主だった者が皆やって来た。まず、

秋蘭「純様ーっ!!」

純「うおっ!?!秋蘭!?!」

秋蘭が、純に飛び付いた。

秋蘭「本当に、本当にご無事で何よりです!!」

そう言つて、秋蘭は純をきつく抱き締めた。

純「心配掛けたな……」

そう言つて、純は秋蘭の頭を優しく撫でた。

春蘭「じゅんざまー!!よぐぞごぶじでー!!」

純「はは!!泣くなよ、春蘭。」

桂花「純様、ご無事で何よりです。」

純「桂花も、よく姉上を支えたな。春蘭も。」

桂花「はっ!」

春蘭「ずずっ、はいっ!!」

純「それで姉上、皆とどうやって合流したのですか?霞と稟に至つては、幽州まで行つ

ていた筈では？」

華琳「それはね、燈が事前に手紙を出してたのよ。ごく近いうちに州境は間違ひなく破られるとね。」

純「へえ、燈が。」

燈「はい、私がやりました。」

純「つまり、この場にいる全員……」

華琳「ふふつ、そういうことよ。」

純「そうですか……。それより秋蘭、一旦離れな。」

純がそう言うと、秋蘭は一層強く抱き付き、胸に顔を押しつけて首を横に振った。

純「お、おい、秋蘭。」

華琳「もう少しそのままできさせておきなさい。あなたのこと、本当に心配してたんだから。」

純「……はっ。」

純「しかし、結論から言わせていただくと、皆命令違反と言うことですね。」

華琳「ええ、そういうことよ。けど、皆をどうするかは、あなたに任せるわ。」

純「俺がですか？」

華琳「ええ。軍の全権はあなたが握ってるもの。私が口を出す事では無いわ。」

純「分かりました。ならこの件は、今まで以上に働いて貰う事で償って貰うぞ。もちろん燈、お前も含めてな。」

燈「寛大なるご処置、感謝致しますわ。」

春蘭「ありがとうございます！ですが私にとって、純様のご無事が何にも勝る恩賞です！」

星「それで主、追撃部隊はどうしましょう。何名か、名乗り出ている者がいるのですが……。」

純「それは誰だ？」

星「季衣、流琉、霞の三名です。」

純「そうか……。」

春蘭「純様！私も是非追撃隊にお加え下さい！」

純「春蘭を入れるにしても……随分不安な面々だな。栄華か柳琳を入れ……いや、栄華も似たようなものだし、柳琳は他のことで任せたいからな……。」

すると、

華命「だったらあたしが行くつすーっ！」

と華命も名乗り出た。

純「……ああ。悪いが、星、お前が率いる。」

純「前線は春蘭や華命が十倍働くだろうから、後曲で押さえに回るだけで構わねぞ。」

星「私で宜しいのですか？」

純「ああ。お前にはそれが出来ると思つて任せたのだ、お前の好きにやれ。春蘭も華命も、星の指示にはしつかり従えよ。」

星「御意！」

春蘭「はっ!! 我らに戦を挑んだ者がどうなるか、しつかりと叩き込んで参ります!!」

華命「はいっす!! なら、行つて来るっす!!」

純「・・・押さえは任せたぞ、星。」

星「はっ。」

そう言つて、星と華命、そして春蘭は追撃の準備に掛かった。

純「宜しいですね、姉上。」

華琳「ええ、構わないわ。では、私は先に帰る準備してくるわね。それと純、あなたは陳留に戻つたら、暫く休暇を取りなさい。異論は認めないわよ。」

純「・・・御意。」

そう言つて、華琳らもその場を後にし、残つたのは純と純に抱き付いたままの秋蘭の二人だけとなった。

純「おい、秋蘭……」

秋蘭「怖かったです……。純様が死んでしまったら、どうしようかと思ひまして。」

純「何言つてんだよ、俺は簡単に死なねーよ。」

すると、

秋蘭「私、陳留に戻つたら暫く休暇を取ります。」

と言つた。

純「え!?!お前、休んでどうすんだよ!?!」

秋蘭「暫く純様と一緒にいます。既に華琳様から許可を貰っております。」

それを聞いた純は少し目を見開いたが、秋蘭の姿を見て、

純「……分かつた。」

そう言つて、秋蘭の背中に腕を回した。

秋蘭「……はい。」

そして、暫く二人はそのまま抱き合つたまま過ごしたのだった。

秋蘭の一日

秋蘭「・・・む、朝か。」

目が覚めると目の前には最愛の人の寝顔が見える。まず私はこのお方の顔をゆっくりと撫でたり、手を取って私の頬に当てる。そして、

秋蘭「・・・ふむ。」

私は純様の胸の上に寝転び胸に頬を当てたり、純様の右腕を自分の頬に当てたりする。これだけで私の心は満たされる。

そして、満足するまで一通り弄ぶと私は最後に

秋蘭「ん〜♪」

純様の頬に自分の頬を擦りつける。きっと私でも驚くぐらいにだらしのない顔をしているに違いない。この姿は、誰でも見せることは出来ない。

そして、満足するまで抱き締めたり擦りつけたりは、窓を開け、純様の頬を撫でて

秋蘭「純様、朝ですよ。」

そう声を掛ける。そしたら、

純「ん……おはよう、秋蘭。」

いつものように笑って目を覚ますのだ。私はこの優しい笑顔が大好きで堪らない。そして、

純・秋「ん……。」「

共に抱き合いながら口付けをするのだ。

純「さて、朝飯食おう。」

秋蘭「はい。」

そして、朝の準備に向かう。こここのところ戦は無く、穏やかな日々が珍しく続いている。

理由は、劉備は先の戦で撃退したので暫く動きは無いだろうし、孫策もまだまだ力を蓄えているところだ。

我等といえれば先の戦が終わって以来、内政などで力を蓄え次に備えている。変わらず忙しい日々だが穏やかなものである。

この日も、私と純様は休暇を取っている。先の戦で純様が獅子奮迅の活躍をしたからだ。あの戦は本当に怖かった。もし純様が死んでしまったら、そう考えるだけでゾツとする。そうなったら、私はこの世界で生きていけない。おそらく純様の後を追っていただろう。

けど、こうして純様は生きている。それだけで私は満足だ。

この日も、私と純様は街に出ている。その時、純様は立ち止まり腕を組む私の方を見た。すると、純様は私の左手を取り、青く綺麗な手袋をはめてくれた。

秋蘭「これは？」

純「だ。この間の戦でお前、左手を怪我してただろう？」

覚えてくれていた。凄く嬉しい。私が先の戦で焦るあまり無理な速射をしたときに怪我をしたのだ。それを覚えてくれていただけで無く、私の事を気遣ってこのような物まで用意してくれたのだ。

私は人目も気にせずその場で頬に口付けをした。嬉しくて周りの目など一つも気にならなかった。

秋蘭「ありがとうございます、嬉しいです。」

純「そっか……。良かった、喜んでくれて。」

そう言われ、私は純様の腕を組んだ。そして、そのまま私達は城に帰ったのだった。そして、夕食を済ませ、風呂に入った後、私達は部屋に入った。

そして、部屋に入るや私達は身体をぴったりとひつつくまで抱き合い、口付けを交わす。

そしてそのまま寝台に行き、お互いを求め合うのだった。

その際、私は純様の首筋を噛んだりしている、もちろん甘噛みでだ。

秋蘭「んく♪」

そうすると、

純「秋蘭・・・ん・・・。」

秋蘭「んっ！」

純様も私の首筋に噛んでくるのだ。でも、私にとっては至福だ。そして、そのまま抱き合ったまま、翌日を迎えるのだった。

61話

北郷と劉備らは、先の戦での敗北後、益州の諷陵に撤退した。その後、劉璋に戦の報告をしたのだが、

劉璋「こちらの力を示すどころか、大敗を喫したと聞いたぞ！劉備達は何をしておったのじゃ！」

と責められてしまったのだった。これを聞いた北郷は、

北郷「もう劉璋には我慢出来ない。奴を殺して、益州を俺達の手で治めてやる！」
と劉備に言った。

劉備「けどご主人様、そんなこととして上手くいくかなあ？」

北郷「桃香、俺達が生き残るにはこれしか無いんだ。これも全て皆のためだよ。」

そう北郷は劉備に言った。

劉備「そうか・・・そうだよな・・・うん、やろう。」

そう劉備は言った。そして、北郷と劉備は益州でクーデターを起こし、益州全てを手に入れ、劉璋を殺してしまったのだった。

そして北郷と劉備は、次は呂布を従わせようとしたが、何と、呂布らはクーデターの

混乱を利用して逃げてしまったのだった。嚴顔もいつの間にかいなくなってしまう北郷は驚いてしまったが、まあ大したことでは無いと思い、そのままにしたのだった。一方の呂布と嚴顔の行方だが、二人はそのまま益州を脱出し向かった先は、華琳と純のいる陳留へ向かったのだった。

陳留・玉座の間

華琳「何、呂布と嚴顔がこちらに？」

桂花「はっ、呂布には傍に陳宮がおります。如何致しましょう？」

純「姉上、まずは会ってみては如何でしょうか？」

春蘭「しかし、危険ではないでしょうか？」

純「それはないだろう。もしそうだったら、こうやって姉上に会おうとは思わないだろう。仮にそうだとしても、俺が返り討ちにするよ。」

と純はそう言った。

華琳「そうですね。桂花、二人を通しなさい。」

桂花「御意。」

そして、華琳と純は呂布と嚴顔に会った。

音々音「こちらは呂布殿、私は軍師の陳宮と言うのです。」

恋「コクツ」

桔梗「ワシは嚴顔と申す。」

純「つかぬ事を聞くが、何故俺達の下に参った？」

すると、

恋「……劉備達、約束守らなかつた。それにこのままだと兵士達が餓えちゃう。」

桔梗「劉備と天の御遣いは、我が主である劉璋様を何の理由も無く殺し益州を奪つた。

彼奴らは人道を外れた行為を行った。確かに我が主劉璋様は無能であつた。しかし、善良なお方でもあつた。益州を取るだけならまだしも殺すといった行為に我慢が出来ず、

あの二人から離れたのです。」

と言つた。

華琳「成程……。それで、あなた達はこれからどうするの？」

恋「恋は、兵士や恋の動物達がお腹いっぱい食べれたらいい。」

桔梗「ワシは劉璋様の仇と、その後の泰平の世を作るための手助けをしたい。」

それを聞いた純は、華琳と顔を合わせ頷いた。

華琳「分かったわ。あなた達の言葉、受け取ったわ。これからは、私と純の覇道の為、力を貸して頂戴。私の真名は華琳よ。」

純「俺の真名は純だ。」

恋「恋の真名は恋。」

音々音「ねねはねねですぞ。」

敵顔「ワシの真名は桔梗と申す。」

そして、曹魏に新たな戦力が加わった。

恋「純、今度恋と手合わせしよう。恋、強くなった。」

純「はは、そうだな、今度な。」

音々音「純殿、その左目なのですが・・・」

純「気にするな。お前のせいではない。」

音々音「しかし・・・！」

純「もう良い。」

と純はそう言った。すると、

音々音「分かったのです。けど、強いのは恋殿なのですよ！」

そう音々音は言ったのだった。

一方の北郷と劉備は、曹魏を倒すため、北伐を考えたのだった。

しかし、諸葛亮と鳳統、そして関羽が待ったを掛けた。益州を手に入れてからまだ日が浅く、先の戦で大敗をしているため、兵も民衆も心服していないので、今は内政に力を注ぐべきと言ってきた。

しかし、その意見に北郷と劉備は耳を貸さず、『全ては大陸の民の笑顔のため』と言い、強引に進めたのだった。

北郷（そうだ、俺は天の御遣いなんだ……。俺が全て正しいんだ……。曹和め……。覚悟しろ、この俺が正義なんだ……。）

劉備（この戦に勝てば、皆が笑顔になるのに、何でご主人様以外は分かってくれないの……!? 皆酷いよ……。）

とこの時北郷と劉備は心の中でそう呟いたのだった。そして、蜀軍は六万の兵を率いて侵攻を開始した。

陳留

劉備らが侵攻したとの知らせは、すぐに陳留にも届いた。

華琳「そう、劉備達が……。」

純「はい。その数およそ六万、おそらく奴らは祁山に来ると思います。」

この知らせに、

文官A「六万か……。」

文官B「結構な数だ……前の戦では勝ったとはいえ危なかった……。」

文官C「向こうには天の御遣いがあるしな……。」

一部は敵兵の数に驚き、不安になっていた。しかし、

純「皆、恐れることは無い。」

純がそう言い立ち上がった。

純「劉備は大徳を唱えているが、それは口先だけのもので私欲で益州を乗っ取り、大義の無い戦を引き起こし、大地を民を苦しめる暴君である！その者の側にいる天の御遣い北郷一刀は、劉備同様私利私欲でこの国を制圧しようとし、民を苦しめようとする不逞の輩！その様な者は天を自称するただの奸賊である！」

純「奴らは欲まみれだ。全てはこの大陸の平和のために邁進してきた姉上に、一体何の罪があるというのだ！奴らは、俺達を殺すことでその我欲に塗れた全く民達の大陸の事を考えない非情な政を行って、その私腹を肥やす為にこの国を制圧する事を目的とし

ている、正に屑共だ！」

純「劉備と北郷一刀は、兵法より見て此度、四つの過ちを犯している！敗北を招く失態だ！一つは、内と外に不安を抱えたままである事！内とは、謀反を起こして手に入れた国はまだ地盤が固まっておらず、文武百官の心が纏まっていない事。そして外は、南方未だ治まらず、南蛮といった後顧の憂いが残っているという事。戦が硬直すれば、奴らは成都を攻める！」

純「その二、奴らが進軍する北部は、険しい山々が連なっている。ここは大軍が通るには非常に難しい天然の要害、長所を捨てたも同然だ！その三、その道は物資兵糧の供給も難しいため、戦線を維持するのも難しい！その四、先の戦の敗北で士気が落ちているにもかかわらず強引な出兵をしている事！これら四つの失態により、敗戦は明らかだ！」

そして、純は華琳の方に振り返り、

純「姉上、俺が十万の兵を率い祁山へ赴き、一ヶ月で蜀を返り討ちにして見せます!!」
と拱手して言った。すると、

春蘭「流石純様、よくぞ仰いました!!」

秋蘭「純様と共に敵を討ちます!!」

華命「あたしも純兄と共に討つつす!!」

柳琳「私もお兄様と共に!!」

栄華「私もですわ!!」

季衣「僕も!!」

流琉「私も!!」

香風「シャンも!!」

焰耶「私もお館と共に!!」

星「私も主と共に!!」

霞「ウチも純と共に!!?」

凧「私もです!!?」

真桜「ウチもや!!?」

沙和「沙和もなのー!!?」

翠「あたしもだぜ!!」

楼杏「私も同じくです!!」

桔梗「ワシもですぞ!!」

恋「コクコク!!」

桂花「私もです、華琳様!!」

稟「私もです!!」

風「風もですー!!」

音々音「ねねもですぞー!!」

全員揃って拱手して言った。すると

華琳「よく言つたわ、純。」

と言い、絶を取って、自身が座る玉座の手すりの一部を切り捨て、

華琳「今日より、私の前で弱音を吐いた者は皆、こうなると思いなさい!!」

そう言つた。それに曹魏の文武官は、

「「御意!!」」

と拱手して言った。

華琳「純、あなたに曹魏の全軍の統括を任せるわ。十万の兵馬を率いて、蜀を迎え討

ちなさい!!」

純「御意!!」

華琳「また、皆も知つての通り、軍の全権は純に任せてあるわ。皆、私ではなく純に

従いなさい!!」

「「御意!!」」

その言葉に、純を含め皆拱手したのだった。そして、純は十万の兵馬を率いて祁山へ

劉備軍を迎えるのであった。

一方、江東の孫策達は、

孫策「ねえ、冥琳。今回の曹操と劉備、正確には曹和と劉備の戦、どっちが勝つと思
う？」

周瑜「私に聞いてどうする、雪蓮。決まっている、勝つのは曹和だ。」

孫策「やっぱり冥琳もそう思う。」

周瑜「ああ。まずこの戦、劉備達には大義が無い。ただ私欲に塗れている。それに、ま
だ足下が固まっておらず、先の戦の敗北の傷が治っていないのにもかかわらず、劉備達
は出兵しようとしている。これでは確実に負ける。」

孫策「そうねー。なら、私達は曹操と共に大陸の平和を願うというのはどうかしら？」

周瑜「そうだな。それが、我が江東が発展できる唯一の策だ。劉備と組んだら、我ら
は共倒れだ。」

孫策「そうね。それに、蓮華もきつと曹和を気に入るわ。後思春も。」

周瑜「そうかもしれないな。蓮華様と思春は、曹和の活躍を耳にするのが好きだから

な。」

孫策「シャオもきつとね。あ、後梨晏も祭も粹怜や他の子達もね。」

周瑜「そうだな。」

孫策「そうよー。これは私の勘がそう言ってるもの!!」

そう言つて、その後孫策は皆に今後の江東の発展のため曹魏と手を取る事を伝えたのだった。

6 2 話

魏軍と蜀軍は、共に祁山に到着し、それぞれ陣を構えた。

魏軍本陣

秋蘭 「純様、蜀軍の陣が展開していきます。」

純 「そうか。劉備達もか？」

焰耶 「まだ・・・いえ、出て来ました！天の御遣い北郷一刀も一緒です！」

純 「まずは舌戦か・・・。何人か付いてこい。」

焰耶 「はっ！」

霞 「ウチも行くでっ！」

星 「私も行きます!!」

翠 「あたしも行くぜっ！」

純「分かった。残る皆は敵の陣形に応じて配置を調整しておけ。秋蘭、稟、風、判断は任せるぞ。」

秋・稟・風「二「御意。」二」

そして、純は馬に乗って行き、劉備と北郷に向かい合った。

純「また侵略してくるとはな、劉備、北郷。」

劉備「曹和さん……。」

北郷「曹和……。」

純「何故我が国に侵略した！我らに何の恨みがあるというのだ！」

劉備「曹和さん、やっぱりあなたとこの場にはいないあなたの姉の曹操さんのやりかたは間違っています!!力で制圧して、人を殺して!!だから、あなた達を倒すためにここに来たんです!!」

純「それで、お前達はどうやってこの大陸に平和な世を作るのだ？」

劉備「皆で話し合い、手を繋ぐ。それで、平和な世の中になります。」

純「先の戦で姉上も言っていたが、なら何故兵を率いてここまで来たのだ？話し合うなら、兵など必要なのではないのか？」

劉備「そ、それは……。」

純「それに話し合うなら、使者を送るという手もあるな。何故それをしなかったのだ

？」

劉備「え、えつと……。」

北郷「お前、桃香を……！」

純「口を慎め北郷一刀!!」

北郷「何っ!?!」

純「この場は貴様の出る幕ではない!!」

北郷「何だどっ!?!お前、俺を誰だと思ってる!!」

純「天の御遣い北郷一刀だろ?」

北郷「そうだ!!俺は天の御遣いなんだぞ!!」

純「それがどうした?」

北郷「な、何……!?!」

純「その肩書きがなんだと言うのだ。お前は劉備の臣下だろう?臣下が出しやばって口を出すな!!」

北郷「くっ!!」

純「それで劉備、何故それをしなかった?」

劉備「……。」

純「何も言えないのか……。お前、自分の言っている事と実際にやっている事の矛

盾に気付かねーのか？」

劉備「え……？」

純「お前、話し合うと言いながら、先の戦同様兵を率いているし、国を侵略している。お前、自分のやっていることを自覚しているのか？」

劉備「いいえ！私とご主人様の理想には、一切の矛盾はありません！！私達の理想が絶対なのです！！間違っているのはあなた達です！！」

純「……そうか、ここまで言っても通じないか……。なら、話は終わりだ、行くぞ！！」

そう言つて、純はその場を後にし、魏軍に戻った。

北郷「行くぞ、桃香！！俺達の理想が絶対だという事を証明しよう！！」

劉備「そうだね、行こう！！」

劉備達も、蜀軍に戻った。

純「全軍戦闘態勢に入れ！！己の友、思い人、家族を、そして我が姉であり、霸王である曹孟徳を守るため、侵略者である蜀の軍勢を叩き潰せ！！曹魏の牙門の下、各員奮励努力せよ！！」

そう言い、兵を鼓舞した。

魏軍兵士「「おおーっ!!」」

そして、馬上で太刀を抜き、

純「弓隊、撃てーっ!!」

そう命じたのだった。純の命令で、秋蘭を始めとした弓隊全員が、蜀軍に向けて矢を放った。すると、多くの矢が蜀の陣営に届き、

蜀軍兵士「「ぎゃーっ!!」」

多くがその矢の餌食となった。それと同時期に、

真桜「凧！沙和！照準はどないや！」

凧「問題は無い！」

沙和「距離良し！方向良し！目標、蜀軍に合ってるの！」

真桜「よっしゃ！なら、撃てーいっ!!」

投石機も発射され、蜀軍は多くの被害を受けた。

劉備「戦車（兵を乗せて運ぶ馬車）隊突撃!!」

それを見た劉備は、戦車隊を突撃させた。

北郷「行けーっ!!」

それに対し魏軍は、

純「盾隊、前へ!!」

大きな盾を持つてゐる盾隊を前に出し、槍を構えながら防御の構えを取った。そこに突撃していく蜀軍の戦車隊だったが、

魏軍兵士「ふん!!」

蜀軍兵士「うわーっ!!」

盾に止められその反動で宙に放り出された蜀軍の兵士は、

蜀軍兵士「ぎゃーっ!!」

すぐに魏軍の槍の餌食となつた。その際、霞と星が率いる騎馬隊が劉備軍の奇襲のため、準備を進めていたのだった。

その間も、魏軍と蜀軍との間には激しい戦いが続いていた。

純「戦車隊、進めーっ!!」

魏軍兵士「おおーっ!!」

蜀軍「ぎゃーっ!!」

とは言え、戦いは数と質と士気において魏軍が上であつたため、魏軍が優勢であつた。対して蜀軍は、先の戦での敗北とクーデターによつて、兵士の心は全く纏まつておらず、士気もあまり良くなかつたのだった。

純「騎馬隊、歩兵隊、進めーっ!!」

春蘭「行くぞ、翠!!」

翠「ああ!! 錦馬超の槍の冴えを、劉備達に焼き付けてやるぜ!!」

焰耶「我らの力を劉備に見せつけるのだー!!」

春蘭と翠、そして焰耶が先頭に立って、騎馬隊と歩兵隊を率いて突撃していった。

劉備「騎馬隊進め!!」

それを見た劉備は、騎馬隊を突撃させた。

関羽「……行くぞ!!」

張飛「……応なのだ!!」

その際、関羽と張飛は、複雑な表情を浮かべながら騎馬隊を率いて突撃していったのだった。

そして、両軍の騎馬隊が激突したのだが、不利な状況は変わらなかった。それを見ていた北郷は、

北郷「桃香、剣を!!」

桃香「え!? う、うん。」

劉備の剣を取って、

北郷「この役立たずが!!」

蜀軍兵士A「ぎゃーっ!!」

蜀軍の兵士を斬り殺したのだった。

北郷「こうなりたくなければ、魏を曹和を殺せ!!」

劉備「ご主人様の言う通りだよ!!進めーっ!!」

そう言つて、蜀軍を強引に突撃させたのだった。その様子を見ていた霞と星率いる奇襲部隊は、

霞「突撃ー!!行けーっ!!」

星「義は我らにあり!!行けーっ!!」

そう言つて、劉備軍に奇襲を掛けた。春蘭と翠、そして焰耶の武勇、そして霞と星の巧みな指揮により、蜀軍は益々劣勢になつていき、陣営は乱れに乱れていったのだった。

関羽「くっ!!このままでは・・・鈴々、無事か!!」

張飛「無事なのだ!!けど、このままじゃ全滅なのだ!!」

関羽「ああ!!どうすれば・・・!!」

この様子に、関羽と張飛は顔を歪ませたのだった。蜀軍の本陣でも、状況が悪化したのを見た鳳統は、

劉備「装甲隊、突撃だよ!!歩兵隊、進めーっ!!」

鳳統「桃香様、どうかお止め下さい!!我が軍は乱れております!!やはりここは、退却すべきです!!」

劉備にそう言ったのだった。しかし、

北郷「何を言ってるんだ、雛里!!ここは攻撃を続けるべきだ!!」

北郷が首を突っ込んでそう言った。

劉備「そうだよ!!ご主人様の言う通りだよ!!私達は何にも間違つてないのに、ここで退いたら向こうが正しいって事になっちゃうよ!!」

北郷「そうだよ!!こんな状況、気合でどうにかしろ!!」

鳳統「ご主人様!!桃香様!!」
すると、

鳳統「あれを見て下さい!!魏の騎馬隊が、既に我が軍の中軍を破りました!!今すぐ退却を!!」

と鳳統は、そう訴えた。

鳳統「早く!!お願いです!!」

劉備「嫌だ!!」

北郷「ここは退かないぞ!!」

しかし、劉備と北郷は全く耳を貸さないので、

鳳統「すいません!!二人をお願いします!!」

近くの兵士を呼んで、退却させた。

劉備「嫌ーっ!!」

北郷「離せ!! 離せーっ!!」

そして、

関羽「退却!!」

張飛「退却なのだ!!」

関羽と張飛も、本陣の様子を見て退却をしたのだった。こうして、魏軍と蜀軍の最初の戦いは、魏軍の大勝に終わった。

魏軍本陣

春蘭「初戦は我らの大勝だな!!」

翠「ああ!! 武器も沢山奪ったしな!!」

と春蘭と翠は、初戦の大勝に喜んでいた。

純「確かに喜ばしいことだ。しかし、蜀軍もまだ本国に撤退していないし、劉備と北郷はまだ生きている。油断はするなよ。」

春蘭「はっ!!」

翠「分かつてる、純殿!!」

純「うむ。秋蘭、兵達に勝利を喜ぶのは良いが、気を緩めてはならぬと言っておいてくれ。」

秋蘭「はっ。」

純「皆の奮戦のお陰で、初戦は勝った!しかし、まだ気を緩めてはならん!戦はこれからだ!劉備達を倒し、陳留にいる姉上に勝利を届けよう!!」

「「御意!!」」

純の言葉に、将は皆奮い立ったのであった。

蜀軍本陣

北郷「クソツ!!曹和の奴め!!」

その頃、北郷は初戦の敗北の悔しさのあまり、周りの物に当たり散らしていた。

北郷「あの極悪人め!!絶対許さない!!」

劉備「そうだねご主人様!!また人を沢山殺して!!」

北郷「ああ!!奴は人間じゃない!!残虐な奴め!!」

鳳統「ご主人様、桃香様、どうか怒りを静めて下さい。」

北郷「大体雛里!!何故退却させた!!もし退かなかつたら、俺達が勝っていたかもしれないじゃないか!!」

劉備「そうだよ!!雛里ちゃん酷いよ!!」

鳳統「いいえ、我が軍の陣営は完全に乱れておりました!!あのままでは、我が軍は今より多大な犠牲が出ていたかもしれません!!だから、退却させたのです!!」

北郷「うるさい!!そんなの、気合でどうにかしろ!!」

鳳統「ご主人様!!」

その時、

関羽「ご主人様!!雛里を責めるのはお止め下さい!」

張飛「そうなのだ!お兄ちゃん止めるのだ!!」

関羽と張飛が入ってきて、北郷を止めたのだった。

北郷「愛紗、鈴々……。」

関羽「先程の戦い、もしあのまま戦闘を続けていたら、我が軍の被害は甚大なものとなっておりまして!!雛里の判断は何一つ間違っておりません!!」

北郷「そんなの、気合でどうにかできる!!」

関羽「そんなのでは戦況は覆りません!!ご主人様、いい加減現実を見て下さい!!」

張飛「そうなのだ!!お兄ちゃんも桃香お姉ちゃんも、いい加減夢ばかり見るのは止めるのだ!!」

北郷「・・・るさい。」

関・張「?」

北郷「うるさいうるさいうるさい!!俺は何も間違っていない!!俺は正しいんだ!!俺が正義なんだ!!いちいち俺に口答えするな!!」

関羽「ご主人様!!」

張飛「お兄ちゃん!!」

劉備「そうだよ愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、ご主人様は何も間違っていないんだよ!!何で分かってくれないの!!二人とも、最低だよ!!」

関羽「桃香様!!」

張飛「桃香お姉ちゃん!!」

この言葉に、関羽と張飛は絶句してしまった。この一件以降、蜀軍の雰囲気は更に悪くなってしまったのであった。

63話

戦いが始まってから半月が経過し、依然として魏軍が優勢であった。しかし、蜀軍も不利とはいえ、鳳統の策で何とか持ち堪えており、両軍暫くにらみ合いが続いた。それが暫く続き、月が変わり季節は夏になった。

蜀軍本陣

鳳統「ご主人様、桃香様。我が軍は、風土の馴染まない戦地での生活に体調を崩す兵が出てきています。酷暑で水源が枯渇し、汚水を飲むため、疫病が蔓延しています。」

鳳統「昨日私が愛紗さんと視察に行きましたら、感染した兵が多く見られ、2つほどの陣営がやられており、その影響で兵士は厭戦気分になっております。よって、ここは成都に撤退するべきかと。」

劉備「……愛紗ちゃんもそうなの？」

関羽「私も雛里の意見に賛成です。今の状態で戦に挑んだら、我が軍は敗北します。」

北郷「・・・皆も同じ意見なのか？」

北郷のその発言に、

張飛「兵達もお休みを取れば、絶対に元気一杯になると思うのだ・・・。」

張飛もそう言い、他の将も張飛と同じ反応をした。しかし、

北郷「今ここで退けば、俺達の正義が負けたと世間がそう言い、兵の士気も大きく下がると思うぞ。」

北郷「それにこの暑さが辛いのは、魏も同じじゃないのか？この暑さに気合で勝てば俺達の勝ちだ。」

劉備「そうだよ、ここで退いたら私達の理想が叶わないよ。だから、全軍撤退しないで、山林の茂みに移し、谷川沿いに留まって、秋になったら兵を進めよう。」

と聞かず、むしろ山林の茂みに陣を移すと言った。それを聞いた鳳統は、

鳳統「それは駄目です!!確かに山林の茂みに入れば、酷暑を避けることは出来ます!!しかし、敵に火攻めの絶好の機会を与えてしまいます!!それにここ最近酷暑の影響で雨が降っておりません!!その状態で火攻めを受ければ、我が軍は火鉢同然です!!」

と反対し、

関羽「私も雛里の意見に賛成です!!もし山林に我が軍全てを移したら、魏は必ず火攻

めを行います!! そうなれば、我が軍は一巻の終わりです!!」

関羽もその意見に賛成した。しかし、

北郷「大丈夫だよ。そんなの、曹和が気付くはず無い!! もう俺と桃香が決めた事だ!!」

劉備「そうだよ、ご主人様の言う通り!! 私とご主人様の考えに逆らわないで!!」

と言い、全く耳を貸さなかったのだった。これには、

関・鳳「……」

関羽と鳳統は、複雑な表情を浮かべたのであった。

魏軍本陣

純「それは確かな情報か？」

稟「はい。私の隠密によりますと、蜀軍は現在陣を林に移動したとの事です。」

稟「縦横数十里程の長さで陣を構えております。」

純「移したのは一部か、それとも全軍か？」

稟「全軍です。蜀軍本陣も、林の中に。今は夏です、秋になってから戦うつもりだと

思います。」

それを聞いた純は、

純「……そうか。蜀軍は、これで必ず負ける。稟、皆を集めてくれ。」

稟「はっ!!」

そう言い、稟に皆を集めるよう命令した。

純「この戦が始まってもうすぐ一ヶ月が経つ。皆、この厳しい戦いの中よく戦ってくれた。しかし、それももうすぐ終わる。」

秋蘭「それは何故でしょうか？」

純「蜀軍は、現在この酷暑と風土と疫病の影響で2つ程陣営がやられている。ただでさえ兵の心が纏まっていない状況だ、更に士気は落ちる。この蜀軍の損失は、大徳を唱えておきながら私利私欲で戦を起こし、大地と民を苦しめた天からの怒りに等しい!!」

この発言に、

春蘭「はっはっはっは!!流石純様!!」

秋蘭「そういうことですか……!!」

焰耶「六万の蜀軍が、不義で病人の群れに成り果てたんですね!!」

凧「成程・・・!!」

真桜「流石大将や!!」

沙和「スゴイのー!!」

霞「よう言うたでー、純!!」

星「流石です、主!!」

翠「純殿、流石だぜ!!これで勝てる!!」

凧「・・・ぐう。」

凧「寝るな!!」

凧「・・・おおっ!?純様の凄さについ・・・。」

凧「全く・・・。けど、凧の言う通りですね。」

諸将は皆、純に賛辞の言葉を言った。

純「病だけに留まらねーぞ。皆、目の前の山林を見る。」

と純は皆に山林を見るよう指を指した。

純「乾いた薪が、竈に積み上げられたも同然。後は火を用意するだけで、蜀軍は、無残な目に遭うだろう。そしてこの炎は、天地が裂けんばかりの勝利の炎となるだろう!!」

この言葉に皆の心は最高潮に昂ぶり、

「はっ!!」

皆揃って純に拱手し、益々敬服したのであった。そして、それぞれ準備を進めたのだった。

そして夜、

秋蘭「鎗矢を合図とし、蜀軍の軍営に火攻めを仕掛け、敵軍が乱れるのを見て、中へと突撃する!!」

春蘭「純様の命だ、逃がすな!!とことん追え!!恐怖を劉備と北郷の心に刻み込ませろ!!」

魏軍兵士「御意!!」

焰耶「肝に命じろ!!この戦、必ず勝つ!!」

魏軍兵士「必勝!!!必勝!!!必勝!!!必勝!!!」

霞「勝つて、ウチらにとって大切な人を守るんやー!!」

星「大義は我らにあり!!」

翠「あたし達は、純殿と共にあり!!」
魏軍兵士「曹和様と共にあり!!」

魏軍本陣

純「……真桜、鎗矢を放て!!」

真桜「了解!!」

純の命令で、鎗矢が放たれた。

それを見た秋蘭は、

秋蘭「火を点けろ!!」

そう命令し、兵達は、矢や投石器の石に火を点け構えた。

春・秋・焰・霞・星・翠「攻撃開始ーっ!!!」

そして、大量の火矢と火の点いた石が一齐に蜀軍陣営に向けて放たれた。そして、蜀

軍陣営は一気に火に包まれた。

蜀軍武将A「逃げるな!!火を消せ!!急げ!!」

消火活動しようとするが、尽きること無く火矢などが来るのと、山林の茂みの中にあるため、中々火が消えなかった。その間も、魏軍は容赦なく火矢と火の点いた石が放たれるため、被害はどんどん広がっていった。

春蘭「一気に攻め入る!!蜀軍を殺せ、突撃ーっ!!」

秋蘭「行くぞーっ!!」

焰耶「うおーっ!!」

霞「行くでーっ、皆ーっ!!」

星「この槍の錆としてくれる!!」

翠「奴らを殺せーっ!!」

そして、魏軍は一気に蜀軍陣営に向かって突撃した。

一方の劉備と北郷は、目が覚めると火が点いてる事に呆然とした。その時、

関羽「ご主人様!!桃香様!!」

関羽が入ってきて、

関羽「火攻めを仕掛けられました!!火の勢いが強く、多大な犠牲が・・・」

火攻めを食らった事を言った。これには、

劉備「・・・火攻め？」

北郷「どういう事だ？」

劉備と北郷は呑み込めなかった。

関羽「はい!!陣屋は全て林の中!!私と雛里の懸念通り、魏軍は火攻めを仕掛けました!!私がここに駆けつけたときは、既に火の海でした!!」

それを聞いた劉備と北郷は、

劉備「・・・っ!!」

北郷「・・・クソツ!!」

剣を持つて外に出ようとした。

関羽「ご主人様!!桃香様!!お待ちを!!」

そして、外を見ると、

蜀軍兵士A「うわーっ!!」

蜀軍兵士B「あちーっ!!あちーよーっ!!」

蜀軍兵士C「た、助けてくれーっ!!」

阿鼻叫喚とした様子が映し出されていた。

春蘭「私に付いてこい!!蜀軍を皆殺しにしろ!!」

秋蘭「皆殺しだーっ!!」

焰耶「蜀軍を皆殺しにしろー!!」

霞「皆殺しやーっ!!」

星「容赦するなーっ!!」

翠「うおーっ!!」

関羽「ご主人様!!桃香様!!早く馬に!!」

それを見た関羽は、早く馬に乗って逃げるよう言ったが、二人は聞こえないのか、呆然としたまま歩いて行つた。それを

関羽「ご主人様!!桃香様!!早く馬にお乗り下さい!!私が何とかお守り致します!!」

関羽は必死に言つた。途中、

張飛「お兄ちゃん!!桃香お姉ちゃん!!早く馬に乗るのだ!!」

蜀軍武将B「早く馬に!!」

蜀軍武将C「早くお乗り下さい!!」

その時、

北郷「魏軍は何て、何て言つてんだ．．．?」

劉備「何て言つてんの、愛紗ちゃん?」

と言つた。

関羽「ご主人様、桃香様．．．。」

北郷「魏軍は何て言ってるんだと聞いてんだ!!」

北郷は、言わない関羽に怒鳴りつけるようにまた言った。

関羽「・・・魏軍は叫んでいます。口々に、我が軍を皆殺しにしろと・・・!!」
これには、関羽はそう答えた。それを聞いた劉備と北郷は前に進み、

北郷「俺は退かない!!」

劉備「私も!!」

関羽「ご主人様!!桃香様!!」

北郷「全軍に伝えろ!!今こそ決戦の時!!曹和を討てーっ!!」

劉備「魏を殺せーっ!!」

そう叫ぶように言った。

関羽「ご主人様!!桃香様!!早く馬に!!」

張飛「そうなのだ!!」

関羽と張飛らは必死に止めたが、

北郷「離せー!!」

劉備「離して!!」

北郷と劉備は振りほどいて、

北・劉「行けーっ!!」

と剣を抜いて言い、突撃しようとした。それを見た関羽は、

関羽「ご主人様と桃香様をお守りせよっ!!」

と命令した。それに蜀軍兵士は二人の盾となり、二人は死なずに済んだ。しかし、それでも攻撃が続いたので、盾となった兵は全滅した。

それを見た関羽は、前に立ち圓月刀を振るって敵兵を倒していった。

張飛「愛紗!!」

関羽「鈴々!!早くお二人を!!私も後で行く!!」

張飛「分かったのだ!!」

そう言つて、関羽は魏軍の兵士を倒していった。

北郷「曹操と曹和を殺せーっ!!」

劉備「魏を皆殺しだーっ!!」

北郷「曹操と曹和を殺せーっ!!」

張飛「お兄ちゃん!!桃香お姉ちゃん!!」

その間も、張飛は二人を抑えていき、何とか退却した。

そしてこの戦いは、蜀軍の完全な敗北に終わり、先の戦以上の大きな損耗を受けたのだった。

64話

魏軍本陣

春蘭「二度に渡つて蜀の軍勢を撃破するとは、流石純様です!!」

焰耶「はい、お館は英雄です!!天下に誇れる名将です!!」

純「そんなことねーよ。」

霞「謙遜せんでえーのに!!」

翠「そうだけ、純殿!!」

凧「流石純様です!!」

真桜「流石大将やでー!!」

沙和「そうなのー!!」

皆の賞賛の言葉に

純「先人達と比べたら、俺なんか足元に及ばねーよ。それに、この戦を決断したのは姉上だ。姉上の英断無くして、俺達は勝てなかつた。姉上こそ、真の英雄だ。」

純達は再び拱手してそう言った。

純「姉上、奥へ。」

華琳「ええ。」

そして、純は華琳を奥の椅子に座らせた。

華琳「純、劉備と北郷一刀は？」

純「はい、僅かな兵と共に逃げた模様です。奴らの本拠成都に向かったと思われません。」

華琳「何故追撃しなかったのかしら？」

華琳のその質問に、

純「此度の戦の目的は魏の防衛です、侵攻ではありません。それに此度の敗北で、蜀の兵は殆ど失い国力を大いに消耗しました。されど、蜀は天然の要害。今無理に攻めては、我が軍が被害を受けます。」

華琳「成程……。」

純「それに、あの劉備と北郷の事です。暫くすれば、また無理な北伐をするやもしれません。油断は出来ません。」

純「ですが、今後のことは既に考えておりますので、ご安心を。」

純はそう答えた。

北郷「クソツ!!クソツ!!クソツ!!どうして何だ!?正義は俺達の筈なのに!?俺は天の御遣いなのに!!クソツ、アイツらのせいだ!!曹和め・・魏の奴らめ・・皆殺しにしてやる・・!!そうすれば、皆が笑って暮らせる世界になるんだ・・!!そして桃香も、元に戻れるんだ・・!!」

北郷は周りの物に当たり、虚ろな目をしながらそう呟いたのだった。

65話

成都

諸葛亮「ご、ご主人様、今何と・・・!!」

北郷「もう一度、魏を攻めると言っただ。」

諸葛亮の疑問に、北郷はそう答えた。

諸葛亮「ご、ご主人様、それは駄目です!!我が軍は二度も魏に敗北し、主力の兵を失いました!!この状態で魏を攻めたら、また同じ目に遭います!!」

関羽「朱里の言う通りです!!ご主人様、今の我らの状態では、魏に勝てません!!ここは内政で力を戻し、守りを固めるのが肝要かと・・・!!」

しかし、

北郷「そんなの気合と忠誠心、そして必勝の信念があれば、どうって事は無い!!」

関羽「ご主人様!!」

北郷「愛紗、朱里、もう決めた事だ。天である俺に逆らうな!!」

しかし、北郷は聞く耳を持たなかった。これには、関羽と諸葛亮、そして鳳統は何も

言えなかった。

そして、北郷は再び北伐に向かった。

陳留・玉座の間

華琳「そう、蜀がまた攻めてきたのね……。」

純「はい、その数およそ十五万。前回の倍以上です。現在陳倉城を包囲しております。」

華琳「あなたの予想通りね。それで、陳倉には誰が守っているのかしら？」

純「焰耶が数千の兵と共に守っております。俺自ら十万の兵を率いて援軍に行きま
す。」

華琳「間に合うかしら？」

純「ご心配なく。陳倉は俺の命で既に修築、増築をしております。それにあの城を守っているのは焰耶です、そう易々と落ちません。それに情報によると、蜀軍は数は多いですが、食糧をあまり携帯できておりません。故に、俺が到着して戦闘になったとし

ても撃退が可能かと。」

華琳「分かったわ。それに軍の事は全てあなたが握ってる、あなたに任せるわ。」

純「御意！ではこれにて。」

そう言い、純はその場を後にした。そして、純は十万の兵を率いて陳倉に向かった。

陳倉城

魏軍兵士A「魏延様、敵が雲梯を使って城に侵入しようとしております!!」

焰耶「火矢を使って雲梯を焼き尽くせ!!」

魏軍兵士A「はっ!!」

まず蜀軍は、雲梯を使って城に侵入しようとしたが、

蜀軍兵士「「ぎゃーっ!!」」

火矢によって焼かれてしまい、兵も焼死してしまった。

魏軍兵士B「衝車を使って城壁を突き破ろうとしております!!」

それに対し、蜀は衝車を使って城壁を破ろうとした。

焰耶「ならば、石臼はあるか!!」

魏軍兵士B「ございます!!」

焰耶「それを縄で縛り上げて上から投げつける!!急げ!!」

魏軍兵士B「はっ!!」

そして、大量に縛り上げた石臼を城壁の上から投げ、

蜀軍兵士「うわーっ!!」

衝車を押しつぶして破壊した。

焰耶「うおーっ!!」

蜀軍兵士A「ぎゃーっ!!」

焰耶自身も、鈍砕骨を振るって敵を倒していった。

焰耶「一人も城に入れるな!!死守しろ!!敵兵を皆殺しにしろ!!」

焰耶「必ずお館が援軍として参る!!それまでに、何とか持ち堪えるんだ!!」

魏軍兵士「おおーっ!!」

焰耶は兵を鼓舞し、蜀軍の猛攻を退けていた。

蜀軍本陣

北郷「この城を守っているのは、魏延だろうか？」

鳳統「はい、そうです。」

北郷「桃香をぼろくそに非難した最低な奴だ。この城を落とし捕らえることが出来たら、この世に生まれた事、そしてこの俺と桃香に逆らった事を後悔するほどの恥辱を味あわせ処刑してやる!!」

鳳統「しかしご主人様、城を攻めて二十日以上経っていますが、一向に落ちる気配がありません。」

鳳統「加えて、我が軍の兵糧が尽きかけております。このままでは兵糧が尽き、我が軍は崩壊します!!」

北郷「だったら、一気呵成に攻めるぞ!!」

関羽「しかしご主人様、陳倉城の立地は険しく、周囲に多くの兵を置く事は出来ません!!」

北郷「心配ない!!この俺が前線に来れば、そんなの関係ない!!」

関羽「ご主人様!!」

北郷「うるさい!!俺が前線に来れば、あんな城落とすことが出来る!!」

しかし北郷は、根拠の無い自信を言い関羽の言葉に全く耳を貸さなかった。その時、蜀軍兵士A「申し上げます!! 敵の援軍が参りました!! 旗は青に曹の旗印!! 曹和です!!」

純が陳倉の援軍で来たのが伝えられた。

北郷「何?! クソツ!! なら、迎え撃てーっ!!」

すると、北郷は蜀軍全軍に攻撃の命令を下した。

陳倉城

魏軍兵士C「申し上げます!! 曹和様が援軍として参りました!!」

焰耶「それは本当か!？」

魏軍兵士C「確かです!! あちらに!!」

焰耶「よし!! これでもう安心だ!! 皆、お館が援軍に参った!! この機を逃さず、城から出て蜀軍を撃破するぞ!!」

魏軍兵士「「おおーっ!!」」

魏軍

純「よし、間に合ったな!!」

秋蘭「城も無事ですな。」

純「ああ!!」

凧「流石焔耶だ、あのような大軍勢相手によく……。」

真桜「ホンマやで……。大将もスゴイけど、焔耶も焔耶や……。」

沙和「沙和には無理なのー!!」

翠「ああ、流石純殿の臣下だぜ!!」

春蘭「焔耶、よく守った!!」

霞「今助けたるからなー!!」

星「主、蜀軍を撃破し、焔耶を助けましょう!!」

純「当然だ!!皆、準備は良いな!!」

春・秋・霞・星・凧・真・沙 「「「「はっ!!」「」」」」

純「春蘭と翠は一気に突撃を掛け、蜀軍を背後から叩け!!」

春・翠 「「はっ!!」」

純「霞と星はその隙を突き、崩れた相手を徹底的に打ち砕け!!」

霞「了解や!!」

星「承知!!」

純「凧、真桜、沙和は遊撃だ!!好きに動き、奴らの動きを縛り付けろ!!」

凧・真・沙 「「はっ!!」／はっ!!／はいなのー!!」「」

純「俺達の目的はただ一つ、蜀軍を撃破し、陳倉にいる焔耶達を救うことだ!!」

純「全軍、突撃ー!!」

そして、純の率いる十万の魏の兵と陳倉にいる焔耶の兵が一斉に蜀軍に猛攻を仕掛け、蜀軍はまた惨敗を喫したのだった。

北郷（何故なんだ!?何故俺達は勝てないんだ!?正義は俺達なのに・・・!!俺達が正しいはずなのに・・・!!何で皆味方しないんだ・・・!!）

その際、北郷は撤退しながら心の中でそう言ったのだった。

一方純達は、

純「焔耶、よく守ってくれた!!」

焰耶「はっ!! ありがたきお言葉!!」

純「お前の奮戦、見事だった。対蜀方面の戦線はお前とここにいる翠に任せる。頼りにしているぞ!!」

焰耶「はっ!! ご期待に応えられるよう、全力で頑張ります!!」

翠「純殿の期待に見事応えてみせるぜ!! なあ、焰耶!!」

焰耶「ああ!!」

この抜擢に、焰耶と翠は拱手して答えた。こうして対蜀戦線の総司令官は、焰耶と翠に任命されたのだった。

66話

陳倉での勝利から暫くが経った。先の戦で大きな損害を受けた蜀だったが、北郷はまた北伐を再開した。

しかし、焰耶と翠の率いる魏軍が散々に破った。その報告を聞いた純は、

純「そうか、焰耶と翠がやってくれたか……。」

と言った。

秋蘭「はい、侵攻してきた蜀軍を返り討ちにしたそうです。」

稟「私の隠密によりますと、今回蜀軍が侵攻した道は隘路が多く行軍の難しい地形でした。にも関わらず蜀軍は軍を二つに分けて挟撃を仕掛けようとしてました。」

稟「それを見た焰耶は、蜀軍の作戦は失敗すると読んで、翠と共に前方の蜀軍本隊に全力を傾けました。」

稟「その結果、蜀軍本隊は支えきれず、大崩れしました。」

純「成程……。今回の蜀の敗因は、隘路の多い地で挟撃という作戦を取った事と、己の策が成功すると信じ切っていた事だ。」

秋蘭「それはつまり……？」

純「うむ。まず挟撃という作戦だが、この作戦は、連携が非常に重要となる。連携を取る相手は自身が非常に信頼している者であり、心を通わせている者でなくてはならない。そして、その作戦を実行する地形は、ある程度行軍が出来る場所でなくてはならない。北郷は、兵と心を通わせておらず、ただの駒としか見ていない。将足る者、兵と心を一つにしないでなくてはならない。そうしなければ、本当の信頼は生まれず、勝てる戦も勝てない。」

純「それと、己の策が成功すると信じるのも確かに大事だが、絶対ではない。戦場は、千変万化の生き物だ。盤面の通りまたは兵法通りに上手くいくとは限らない、その時の状況に応じて変えなければならない。それを理解しなければ、どの戦場に行っても同じだ。」

と、純は曹魏全軍の総帥に相応しい雰囲気と言った。それを見た秋蘭と稟は、
秋・稟「英明です!!」

と言い、拱手しながらひれ伏したのだった。

それから数日後、焰耶と翠が戦勝報告をしに純の元に来た。

純「よく来たな、焰耶、翠。」

焰耶「ご無沙汰しております、お館。」

翠「久し振りだな、純殿。」

純「久し振りだな。それと、報告は聞き及んでいる。お前達は、侵攻してきた蜀軍を散々に打ち破ったと聞いたぞ。大儀だった、お前達に対蜀戦線を任せて正解だった。」

それを聞いた二人は、

焰耶「ははっ!! ありがたきお言葉!!」

翠「期待に応えられたのなら、何よりだぜ!!」

と嬉しそうな表情をしながら拱手した。それを見た純は満足げに頷き、

純「うむ、引き続き頼むぞ。」

と言ったのだった。

一方蜀の方は、度重なる遠征の度に莫大な税金を取られ、そして兵に駆り出されていき多大な犠牲を払うため、国は大きく疲弊していた。

また、北郷と今引きこもり状態になっている劉備は「皆で笑える世にしよう」、「戦はいけない事」などと常に言っているが、口で言っている事と行動があまりに矛盾しているため、蜀の人々は離れ怨んでいた。

しかし、

北郷「何故だ!? 何故なんだ!? 正義は俺達なのに!! 俺は天の御遣いなのに!! 何故勝てな

「いんだ!?何故皆味方してくれないんだ!？」

「当の本人は、全く悪いと思っておらず、むしろ自分の行動は間違っていないと思ってるのだった。」

67話

蜀は、四度の北伐の失敗から国境の防備を固めたが、主力の兵を一気に失ったため、再軍備を整えるまで時間と莫大な金が必要となった。

その為、民衆から更に税を取らなければならず、民衆の不満は上がり上がっていった。その事を諸葛亮は北郷に言ったのだが、

北郷「そんなことはありえない!!蜀の民衆全て、俺と桃香の事を慕っている!!デタラメを言うな!!」

と耳を貸さなかった。加えて当の本人は、四度の北伐失敗以来桃香の部屋に籠もり、彼女と共に過ごしながら自分達の理想を語り、政務を諸葛亮に、軍務を関羽に押しつけたのだった。

北郷「俺は桃香と酒、そして素晴らしい理想があればそれで良い。それだけで、世の中は救われるんだ……。」

魏・稟の部屋

稟「そうですか、蜀はもうそんな状態ですか。」

美花「はい、蜀国内の不平不満は日々高まっております。」

稟「分かりました。しかし、あなたに隠密を任せて正解でした。」

美花「いえ、私はただ稟さんのために働いてるまでです。」

稟「それでもです。では、この情報を純様に伝えますね。」

美花「はっ。」

そして、稟は純の部屋に向かった。

純の部屋

純「ほう、もう蜀はそんな状態にまでなったのか。」

稟「はい、蜀を滅ぼすなら絶好の機会かと。」

純「うむ、この機を逃してはいかんな。すぐ姉上に言おう。」

稟「はっ！」

純「それと稟……」

そして、純は稟にある事を伝え、自身は蜀の状況を華琳に伝えるため、玉座に向かったのだった。

玉座の間

華琳「そう、蜀はそんな状態なのね。」

純「はっ、今こそ蜀を攻め滅ぼす絶好の機会かと。それに、対蜀方面を任せている焰耶と翠を含め、ここにいる秋蘭と星、そして霞に風、真桜に沙和らに軍勢を整えて三ヶ月経ちました。皆士気が高まっており、これまで攻められた分の借りを返そうと氣勢を上げております。」

純「実を申しますと、俺は既に蜀方面の焰耶と翠に命を下しました。『先に蜀の国境に進軍せよ』と。騎馬隊や歩兵など合わせて十万の兵を率いさせ進ませています。」

と純はそう言った。この発言に、

桂花「純様、何故その様な真似を!？」

栄華「そうですねお兄様、それは越権行為ですよ!!」

華琳の横にいた桂花と栄華はそう純に言った。

純「桂花、栄華、忘れるなよ?俺は曹魏全軍の大都督だ。」

桂花「しかし、そのような大事を勝手に決めてはいけません!!」

栄華「そうですねお兄様、そういつたのはお姉様の判断を仰ぐべきですわ!!」

純「忘れるな?大都督の権限は絶大だ。時には独断も許される。」

桂花「しかし・・・!!稟、あなたも何か言いなさいよ!!」

しかし、

稟「私の主は純様であつて、曹操殿ではありません。私は、純様の意見に従います。」

と稟はそう言った。

桂花「・・・風は!？」

風「風も稟ちゃん同様、純様に従います。」

桂花「あなた・・・!」

栄華「秋蘭さん達も何か言つて下さい!!」

秋蘭「私の主は今でも純様だ、純様に従う。」

星「済まぬが、私もだ。」

霞「ウチは純を信じるだけや。」

凧「栄華様、桂花様。申し訳ありませんが、自分は純様の臣下であります。なので、純様に従います。」

真桜「ウチもや。」

沙和「沙和もなの。」

秋蘭達も、稟と同じ事を言っただった。

栄華「秋蘭さん……！」
すると、

華琳「それで構わないわ。純、あなたに全てを任せるわ。曹魏の全兵馬を率いて蜀を討ちなさい!!」

と華琳は純に言った。

純「はっ!!」
その時、

桔梗「お館様、ワシも加えて下さい!!亡き劉璋様の仇を討ちたいのです!!」

桔梗も仇討ちのため戦線に加わりたと言った。これを聞いた純は

純「……分かった、共に行こう。皆、行くぞ!!」

秋・星・霞・凧・真・沙・桔「「「「はっ!!」」」」
!!」」」」

そう言つて、純は秋蘭達と一緒に玉座を後にした。

桂花「華琳様、宜しいのですか！」

栄華「いくらお兄様とはいえ、流石に……！」

華琳「良いのよ、私は軍の事は全て純に任せているもの。純がそうすべきと判断したのなら、それを聞き入れるまでよ。」

桂花「華琳様……。」

華琳「それに、私は信じているの。純は期待を裏切らない、今までだつてそうだったもの。必ず蜀を平定できるわ。」

栄華「お姉様……。」

華琳「あなた達は、純を信じないのかしら？」

桂花「いえ、その様なことは!!」

栄華「ただお兄様の独断に驚いてしまい……!!」

華琳「構わないわ、春蘭達は驚かなかつたようね。」

春蘭「はっ、私は純様を信じたままでです。」

華命「あたしもつす!!」

柳琳「私もです。」

季衣「僕も！」

流琉「私もです！」

香風「シャンも！」

楼杏「私も同じくです！純殿を信じます！」

恋「コクコク!!」

音々音「ねねもですぞ！」

華琳「そう……。なら、私達は信じて朗報を待ちましょう。」

と華琳は言った。

そして、純は二十万の兵を率いて出陣し、焰耶と翠の蜀方面軍と併せて三十万の兵となつて蜀に攻め入つたのであつた。

68話

魏が蜀の地に攻め入ったとの知らせが、成都に届いた。

北郷「魏が国境に進軍している!？」

諸葛亮「はい、その数十万。そして、後から曹和さん自ら率いている兵合わせて三十万の大軍です！」

北郷「クソツツ!! 卑劣な奴め!!」

諸葛亮「ご主人様、今すぐ守りを固めましょう!!」

しかし、

北郷「・・・いや、その必要は無い。」

と言った。

諸葛亮「な、何故ですか!？」

北郷「ある策を思いついた。これで曹和は、魏は終わりだ。」

そう言った北郷は、諸葛亮の耳元でこの策を言った。

諸葛亮「しかしご主人様、この策は成功するとは思いません!あの二人の仲はどんな剣でも斬ることは不可能です!!」

そう言つて、諸葛亮は策に反対したのだが、

北郷「うるさい!!俺がやれと言つたらやれ!!俺は天の御遣いだ!!成功しないわけがない!!」

と言い、耳を貸さなかつた。やむを得ず、諸葛亮はその策を実行した。

北郷「これで曹和は・・・魏は終わりだ・・・」

北郷「ざまあみろ曹和・・・。天に逆らうお前が悪いんだ・・・はっはっはっは!!」
その時、北郷は暗い部屋の中で一人高笑いしていたのだつた。

北郷が思いついた策は、一言で言えば『離間の計』である。この策で、華琳と純の仲を切り裂き、その隙に魏を攻め滅ぼそうと考えたのである。

早速、魏の国内である噂が飛び交つた。その内容は、

『曹和は大軍を率いて蜀を平定しようとしているがそれは表向きで、本当は曹操を倒して魏を支配しようとして企んでいる』

といった内容だつた。北郷はこの噂を流して純を陥れようとしたのだ。この噂は魏の国内だけでなく、純の率いる大軍にも流したので。

しかし、

陳留・玉座の間

華琳「純が、弟がその様なことを企む人じゃないわ!!このような小細工に惑わされる者は斬るわ!!桂花、皆にそう伝えなさい!!」

桂花「御意!!」

魏軍

純「姉上はそのような噂を真に受ける方じゃない。稟、それに惑わされる者は即刻斬り捨てると、全軍にそう伝えておけ!!」

稟「はっ!!」

と両者はそう言つて噂を一蹴した。

これにより、純を失脚させる事に失敗した北郷であつた。

北郷「何でだ!?何でなんだ!?何で俺の思い通りにいかない!?何でだ!?!」

その時、北郷は一人部屋の中でブツブツと呟いていたのだった。

その一方で、純達率いる二十万の兵は、焰耶と翠の率いる十万の兵と合流した。

純「焰耶、翠、蜀の国境の城を大分落としたそうだな。よくやった。」

焰耶「ありがたきお言葉!!」

翠「純殿の期待に応えて何よりだぜ!!」

純「そうか。頼りにしているぞ。」

焰・翠「はっ!!」

純「それで今後の作戦だが、お前達はこのまま剣閣の方向から成都に向かって進軍しろ。俺は陰平の方向から成都に向かって進軍する。」

焰耶「それはつまり……」

翠「成都で最後合流するって事か。」

純「そういうことだ。蜀内部は乱れているが、まだ油断は出来ない。陰平の方向には張飛が、剣閣には関羽がいる。この二人が、蜀の軍を支えていると言っても過言ではない。よって、二手に分かれて各個撃破する。」

焰・翠「はっ!!」

純「焰耶、翠、剣閣にいる関羽は、蜀内部で最も人望が厚い。それに、彼女率いる兵の士気も高く精強だ。また、剣閣は天険の地であるため、攻略が非常に難しい。厳しい

戦いになるかもしれないが、お前達なら出来ると信じているぞ。」

その言葉に、

焰耶「はっ!! お館のご期待に応えられるよう、尽力します!!」

翠「焰耶と一緒に手柄を立ててやるぜ!!」

焰耶と翠はやる気がみなぎった表情で拱手したのだった。そして、純の率いる二十万の兵は陰平へ、焰耶と翠の率いる十万の兵は劍閣に行き、成都に向かって進軍したのであった。

張飛軍

副官A「張飛様、魏軍が参りました!!」

張飛「分かったのだ!!」

副官A「しかし、この戦は我らにとって不利です。先の戦で、我らの国力は……。」

張飛「仕方ないのだ。もう鈴々達には何も出来ないのだ。お兄ちゃんと桃香お姉ちゃんは大変な事になってしまったのだ……。」

副官A「張飛様……。」

張飛「でも、鈴々は愛紗を残して死ねないのだ……。何があっても生き残るのだ!!」
そう言つて、張飛は空を見上げたのだった。

関羽軍

副官B「関羽様、魏軍が参りました!!」

関羽「そうか……。」

副官B「関羽様、いかに劍閣が天然の要害とはいえ、この戦は不利です。」

関羽「そんなことは分かっている。しかし、私にはもうどうすることも出来ない……。」

関羽「もうこの国は、守る価値は無い……。ご主人様と桃香様は変わってしまった……。」

副官B「関羽様……。」

関羽「けど、私はこの国の武人だ。武人としての使命に従うまでだ。」

関羽「しかし、鈴々を残して死ぬことは出来ない。だから、例えどんなことがあつても生き残る!!お前も、無駄死にはするなよ。」

副官B「はっ!!何とか生き延びてみせます!!」

そう言つて、副官は関羽に拱手したのだった。

69話

純率いる本隊は、張飛軍と激しい戦いを繰り広げていた。

純「全軍進めーっ!! 目指すは成都だ!! その障害は全て排除しろーっ!!」

魏軍兵士「こおおーっ!!」

純が自ら前線に立ち太刀を振るった。その姿に、

秋蘭「純様に続けーっ!!」

星「主に遅れを取るなーっ!!」

霞「ウチらも負けてはアカンでーっ!!」

凧「行くぞ!! 真桜、沙和!!」

真桜「当然やっ!!」

沙和「沙和も頑張るのーっ!!」

桔梗「ワシも遅れは取らぬっ!!」

魏軍の士気は一気に上がり、張飛軍はどんどん押されていった。

張飛軍

蜀軍兵士A「張飛様!!第二陣が破られました!!これ以上は持ち堪える事が出来ません

!!」

張飛「分かったのだ!!」

そして、

副官A「もうこれ以上は持ちません!!退却を!!」

張飛「悔しいけど、分かったのだ!!皆、退却するのだ!!」

そして、張飛軍は持ち堪えることが出来ず、成都に向かって退却したのだった。

一方、焰耶と翠率いる十万の兵も、劍閣にいる関羽軍と激戦を繰り広げていた。

焰耶「流石関羽だ、兵の統率もしっかりしているし、この劍閣の地を上手く活かしている。」

翠「ああ。だからといって、こちらが負けるわけにはいかねーよ。」

焰耶「ああ。ここを突破し、お館の軍と合流する!!」

そう言い、自ら前線に立ち攻勢を強めていった。そして、関羽軍は次第に不利になっ

ていった。

関羽軍

関羽「くつ、流石に持たないか・・・！」

副官B「関羽様、これ以上は持ちません！退却を!!」

関羽「分かった!!皆、退却だ!!」

そして、関羽軍も成都に向かって退却した。そして、純率いる本隊と、焰耶と翠が率いる別働隊は、破竹の快進撃で成都まで進んでいった。

ここまで楽に進めた理由は、主だった陣や城、そして砦は、北郷の四度にわたる北伐が原因で莫大な金と人を失い、修復が出来なかつたからだ。

本隊と別働隊はそこを悠々と進んでいき、そして、遂に成都まで辿り着いた。

成都・魏軍

純「成都是完全に包囲した。攻撃は明日行おう！」

秋蘭「とうとうここまで来ましたね。」

星「これで終わりますな。」

霞「ああ、せやな。」

焰耶「お館と華琳殿の理想が叶う……。」

翠「ああ、純殿のために……。」

凧「ようやく終わるんだ。」

真桜「ああ、やつとや。」

沙和「沙和ももう一踏ん張りなのー。」

桔梗「劉璋様、もうすぐですよ……。」

稟「はい、後もう少しで、蜀は滅びます。」

純「そうだな。だが、最後まで油断をするな。皆、気を引き締めてかかれ！」
と純は皆を引き締めたのだった。

成都・蜀軍

関羽「お呼びでしょうか？」

北郷「よくものこのこと帰ってきたな、愛紗！鈴々！」

北郷「魏軍を防げず、尻尾を巻いて逃げ帰ってきたそうじゃないか!!」

張飛「お兄ちゃ・・!!」

それを聞いた張飛は反論しようとしたが、関羽に抑えられた。

関羽「力及ばず、大変申し訳ございません。」

と関羽は頭を下げ謝罪した。

北郷「お前には失望したぞ!! ったく、折角兵を与え、大任を任せたのに!!」

北郷「蜀の民も兵もだ!! 全く使えない!!」

この発言に、

関羽「ご主人様、理解しておいでですか？」

と言った。

北郷「何？」

関羽「ご自分の発言を、理解しておいでか!!」

とまた関羽は北郷にそう言った。

北郷「な．．．!? な．．．!? 俺は天の御遣いなんだぞ!! 俺は何をしたって良いんだぞ!!」

関羽「否!! 国の基盤は民、民無くして国はない!! 大義のない戦を起こし、私利私欲で動き、民を蔑ろにするなど愚の骨頂!! それで、どうやって国にいや、大陸に明日がありましょう!!」

張飛「愛紗．．．。」

諸葛亮「愛紗さん．．．。」

鳳統「．．．。」

北郷「あ、愛紗．．．つけ上がるな!! い、今まで、お前の手柄に免じて我慢していたんだが、もう我慢出来ない!!」

その時、

劉備「そうだよ、ご主人様！」

北郷「!？」

劉備が入ってきた。これには、

関羽「桃香様!」

張飛「桃香お姉ちゃん!」

関羽と張飛は驚きのあまり、目を見開いたのだった。

諸葛亮「桃香様は、二、三日前に復帰致しました。」

それを見た諸葛亮は、二人にそう説明した。

劉備「聞いたよ愛紗ちゃん!! 酷いよ!! 恩知らず!!」

劉備「ご主人様、愛紗ちゃんに何を言っても無駄だよ!! 私達のこと分かってくれないんだもの!!」

北郷「おお、桃香!!」

劉備「愛紗ちゃんを牢に閉じ込めちゃえば良いんだよ!! そうすれば、もう誰にも私とご主人様に逆らわないよ!!」

北郷「おお、そうだな!!」

それを聞いた諸葛亮達は、

諸葛亮「お待ち下さい!! 愛紗さんは我が軍の要!! 今愛紗さんを牢に入れますと、兵が動揺します!! それでは、今成都を囲んでいる魏軍に勝つことは出来ません!!」

鳳統「そうです!! 愛紗さんの発言は口が過ぎましたが、忠心に言ったのです!! どうか牢に入れるのを撤回して下さい!!」

張飛「お兄ちゃん!!桃香お姉ちゃん!!」

と必死に諫めた。

北郷「うるさい!!俺に逆らうな!!さもないと、お前達も牢に入れるぞ!!」

劉備「そうだよ!!何で皆分かってくれないの!?!皆酷いよ!!」

と北郷と劉備は耳を貸さなかった。そして、

劉備「愛紗ちゃん、最低だよ。」

劉備はそう言い残した。そして、関羽は牢に閉じ込められたのだった。

70話

翌日、純達率いる魏軍は、成都を攻める準備をした。

稟「純様。」

純「ああ、星と霞は左翼、凧と真桜、そして沙和は右翼へ回れ。」

星「はっ!!」

霞「了解や!!」

凧「はっ!!」

真桜「了解や!!」

沙和「はいなのー!!」

純「俺と秋蘭、焰耶と翠に桔梗は共に中央突破だ。」

秋蘭「はっ!!」

焰耶「御意!!」

翠「腕が鳴るぜ!!」

桔梗「了解した!!」

稟「それと純様、劉備と北郷は劉璋から蜀を奪い、四度も戦を起こし敗北した影響で、

まだ人心を心服させておりません。二人に不満を持つ民を扇動し、内側から門を開けさせましょう。」

純「良い策だ。稟、直ちにやれ。」

稟「はっ!!」

純「皆、よく聞け!!長く続く乱世に、楔を打ち込む!!蜀を滅ぼし、新たな泰平の世を作る!!」

純「その為に、今ここで蜀の明日を断つ!!皆、己の全てを賭け、奮励努力せよ!!」

魏軍兵士「「「おおーっ!!」」」

そして、馬上で太刀を抜き、

純「掛かれー!!」

そう命じた。純の命令で、左翼と右翼の隊が一斉に突撃した。最初は成都の蜀軍も必死に防戦し、左翼と右翼の軍勢を近づけさせなかった。

戦いは一進一退の攻防だったが、純は稟から提案された策を実行した。

その結果、策は上手く嵌まり、成都の中で民の暴動が発生し、蜀軍に襲いかかったのだった。

蜀軍は困惑し、諸葛亮や鳳統が暴動を抑えようとしているが、暴動の規模が大きく抑えることが出来ず、遂に成都の城門が開かれた。

秋蘭「純様！」

純「よし！なだれ込め！蜀軍の兵は民の暴動にも対処せねばならぬ身だ！その隙に打ち破れ！」

その一言で、純の率いる中央部隊は一斉に成都に突撃した。勢いそのまま敵軍を打ち砕き、

純「ふっ！」

蜀軍兵士A「うわーっ!!」

純「はっ！」

蜀軍兵士B「ぎゃーっ!!」

純は最前線で太刀を振るい敵を切り伏せていき、

秋蘭「ふっ！」

蜀軍兵士C「うっ!!」

秋蘭「はっ！」

蜀軍兵士D「がっ!!」

秋蘭は餓狼爪で敵を射抜き、

焰耶「はあーっ！」

蜀軍兵士E「グハッ!!」

焰耶「おりゃーっ!!」

蜀軍兵士F「ぎゃーっ!!」

焰耶も鈍砕骨で敵を潰し、

桔梗「はっ!」

蜀軍兵士G「うわーっ!!」

桔梗「はあっ!」

蜀軍兵士H「グハッ!!」

桔梗は豪天砲で敵を吹き飛ばしていった。

純「劉備と北郷だ!!あの二人の首を取れ!!」

魏軍兵士「「おおーっ!!」「」

蜀軍は、どんどん追い詰められていった。

一方、張飛は牢の中を走って行き、ある部屋に辿り着いた。

張飛「迎えに来たのだ、愛紗!」

それは、関羽が入っている牢だった。そして、関羽を出したのだが、関羽の言葉に驚いてしまった。

張飛「本気なのか、愛紗!?!」

関羽「ああ、私は本気だ。」

張飛「けど愛紗、もう蜀は・・・」

関羽「そうだな、もう蜀は終わつたも同然だ。」

張飛「だつたらなんでなのだ!? 愛紗だつたら降参しても命は取られなくて済むのだ
!」

関羽「そこまでだ、鈴々。お前の気持ちは嬉しい。けど私は、この蜀の武人なのだ。」

関羽「私はこの国と共にする義務がある。」

それを聞いた張飛は、

張飛「愛紗、まさか・・・。」

何をするのか察したのだった。そして、髪を結び、圓月刀を持つた関羽は、

関羽「行くぞ、鈴々。」

鈴々「・・・うん。」

そう言ったのだった。

その頃城内では、純が一人大暴れしており、

蜀軍兵士I「う、うわーっ!! 魏の軍神には勝てねー!!」

蜀軍兵士J「ば、バケモノだー!! コイツは千でも万の兵相手でも勝てねー!! 逃げ

ろーっ!!」

純の周りには、蜀の兵の死体で溢れていた。その勢いでどんどん奥へ進んで行くと、

純「……関羽か。」

そこに関羽が現れた。すると、

魏軍兵士A「うわーっ!!」

一人の魏の兵士が倒れたのでそこを見ると、

張飛「来い！鈴々が相手するのだ！」

張飛が魏の兵士を引き付けていたのだった。

純「……どくつもりはねーよーだな？」

関羽「……はい、覚悟を！」

そう言い、関羽は圓月刀を構えた。それを見た純も、

純「……。」

太刀を構えた。

関羽（何て覇気だ……！並の将だったら、呑み込まれてもおかしくない……！）

そして、

関羽「はーっ！」

まず最初に関羽が先制攻撃をした。それを見た純は、

純「ふっ！」

受け止めつついなし、太刀を振るった。

関羽「はっ！」

それを見た関羽は、何とか受け止めたのだが、

関羽（くっ・・・流石曹和殿だ・・・!!軍神の異名も伊達じやない!!）

と実力の差を痛感していた。一方の純も

純（あの時から成長したようだな・・・。）

関羽の成長を実感していたのだが、

純（だが、まだまだ俺には及ばねーな!!）

と感じ、

純「はあっ!!」

更に猛攻を仕掛けた。

ガギン！ガギン！ガギン！

関羽「くううっ!!」

これには、関羽は完全に防戦一方となった。そして、一旦距離を取って離れた。

関羽「はあ、はあ、はあ。」

純「どうした、関羽？この程度か？」

関羽「くううっ!!」

その時、

魏軍兵士「「おおーっ!!」「」

星「皆、あと一息だ!!」

霞「まだまだ暴れるでー!!」

魏軍がどんどん増えていった。それを見た張飛は、

張飛「愛紗!」

関羽を呼んだ。それを聞いた関羽は頷き、奥へと戻っていった。

純「待て!」

それを追った純だが、

張飛「鈴々が時間を稼ぐのだ!!」

張飛が足止めをしたのだった。

一方関羽は、劉備と北郷がいる部屋に向かった。その劉備と北郷は、

劉備「ねえご主人様、今私達の軍はどうなってるのかな?」

北郷「何とかなってると思うよ。こんな状況、気合と忠誠心、そして信念でどうにかなるよ。」

劉備「そうだね。さあ、飲もう!」

北郷「ああ、そうだな!これは勝利の美酒だ!」

完全に現実から目を背け、二人一緒に酒を飲んでいた。するとそこへ関羽が参った。

北郷「愛紗か……。」

劉備「愛紗ちゃん、敵は全滅出来たの？」

それを見た二人は、関羽に尋ねた。

関羽「遺憾ながら、私達の敗北です。」

それに対し、関羽は敗北である事を二人に伝えた。しかし、

北郷「何？馬鹿な事を言うな!!」

劉備「そうだよ愛紗ちゃん、嘘ついちゃ駄目だよ!!」

北郷「刺し違えてでも何とかしろ!!一人につき一人刺し違えるか、気合と忠誠心、そして信念があれば、最後には勝利するんだ!!」

と二人はそう言う始末だった。

関羽「我が軍はほぼ全滅。最早戦況を、覆すのは不可能でしょう。」

それに対し、関羽はハッキリとそう言った。それを見た劉備と北郷は、改めて本当だと気付き、

北郷「だったらすぐ逃げるぞ!!」

劉備「そ、そうだね!!早く逃げよう!!」

逃げようとした。

関羽「どこへお逃げになるのですか?もう完全に取り囲まれ、逃げる事は叶いませ

ん。」

関羽「敵に捕らえられれば、磔の上に晒し首。その様な死に様は、お二人は嫌でございましょう。」

関羽「潔く自ら命を絶つのが宜しいかと。」

関羽「懣越ながら、お二人は私が介錯を務めさせていただきます。」
と関羽は立ち上がって言った。

一方純の方は、

純「ふっ！」

張飛「くうっ!! やっぱり強いのだ!!」

張飛を圧倒していた。するとそこへ、

星「はあっ!!」

星が参戦した。そして、

星「主!ここは私が!」

星が引き受けると言った。

純「頼むぞ!」

それを見た純は、奥へ進んだ。

張飛「待つのだ!」

星「お前の相手は私だ！」

張飛が追おうとしたが、星に止められてしまったのだった。

一方の関羽達は、

北郷「い、嫌だ!!嫌だ!!」

劉備「嫌だ!!嫌だよ!!」

北郷「まだ死にたくない!!俺達は悪くない!!」

劉備「そうだよ!!悪いのはあの人達だよ!!何で私達が負けて死ななくちゃいけないの
!?!」

北郷「俺は天の御遣いなんだ!!俺は全て正しいんだ!!」

劉備「そうだよ!!ご主人様がこの世界の全てなんだよ!!酷いよ愛紗ちゃん!!」

そう言つて、北郷と劉備は段々壁際に追い詰められてしまった。

関羽「これまで散々民を大地を苦しめてきたのです!!その罪を認め、潔く果てるべき
です!!」

北郷「嫌だ!!嫌だ!!俺は何も悪くない!!俺は正しいんだ!!」

劉備「そうだよ!!愛紗ちゃん最低だよ!!」

関羽「ならば、私自らお二人をお送りすることで、最後の務めとさせていただきます
!!」

そう言って、関羽は圓月刀を振り上げた。

北・劉「ひいつ!!」

その時、

ガシツ

関羽「!?!」

誰かに止められたので振り返ると、

関羽「曹和殿!?!」

北・劉「!?!」

純が圓月刀を握っていた。

純「関羽、お前が全ての罪を背負う必要はねーよ。」

関羽「えっ!?!」

純「確かに今までこいつらのした事は許される事ではない。しかし、お前達の兵を殺し、その家族を苦しめたのは俺だ。」

純「だから、お前が背負おうとしている罪は全て俺が背負う。お前が苦しむ必要はない。」

関羽「しかし・・・!!」

すると、

純「もう良いんだ、よく頑張ったな。」

と純は関羽の頭を優しく撫でて言った。

関羽「……ぐす……っ……はい!!」

すると、関羽は涙ぐみながら返事をし、後ろに下がったのだった。

純「さて……何か言い残す事はあるか、お前ら？」

そして、純は太刀を振り上げそう言った。

北郷「曹和……お前だけは……お前だけは、俺が殺す……!」

劉備「あなたに殺された兵士と皆の憎しみを知れつ!!」

北郷「お前と曹操が理想のために踏み躪ってきた者達と天の御遣いであるこの俺に頭を下げて詫びながら死んでゆけ……!!」

と北郷と劉備は憎しみの目を込めて純にそう言った。

純「呆れたな……この期に及んでまだそんな事を……」

純「さらばだ、妄執の王と天を詐称する者よ。乱世でなく泰平の世に生まれていれば、名君としての幸福な生があつたかもな。」

そして、

北・劉「……地獄に落ちろ、曹和。」

最期に二人はそう言い遺して、

ザシユツ

純に斬り捨てられたのだった。

純「蜀を支配していた、劉備と北郷は死んだ。戦は終わりだ。関羽、それで良いな？」

関羽「はい、それで構いません。」

すると、純は関羽に対して、

純「関羽、後を追って死ぬのは俺が許さねーぞ。」

そう言った。それに関羽は凶星だったのか、

関羽「!!」

目を見開いたのだった。

純「確かに、お前はあの二人の暴走を止めることは出来なかった。臣下としての責任は大きい。しかし、お前は二人と違って、しっかり罪から目を背けず、それと向き合ってきたんだ。だから、お前が死ぬ必要は無い。」

純「生きる。生きて、この大陸のために力を貸してくれないか？」

そう言つて、純は関羽を真つ直ぐ見つめそう言った。それを見た関羽は目を閉じ考えた。

そして、目を開け、

愛紗「姓は関、名は羽、字は雲長、真名は愛紗です！何卒、よろしくお願いします!!」

圓月刀を置き、跪き、拱手した。

純「そうか、分かった。俺の真名は純だ。よろしく頼むぞ、愛紗。」

愛紗「はっ!!」

純「さて、戦が終わったことを皆に伝えるぞ。」

愛紗「はっ!!」

そう言つて、北郷と劉備の首を取つてその場を後にした。そして、魏と蜀の兵士が戦っている場に行き、

純「劉備と北郷は死んだ!!戦は終わった!!この戦、我ら魏の勝利だー!!」

と首を掲げて言つた。それを見た魏の兵士は、

魏軍兵士「おおーっ!!」

勝利の雄叫びを上げたのだった。

秋蘭「純様・・・!!」

星「主・・・!!」

霞「おっしやー!!流石純やーっ!!」

凧「うおーっ!!」

真桜「流石大将やーっ!!」

沙和「やったのー!!」

焰耶「お館ー!!」

翠「流石純殿だぜー!!」

桔梗「お館様……!!劉璋様、見ておられますか……?これで益州は、安らかに
りますぞ!!」

秋蘭達もそれぞれ喜びの雄叫びを上げたりなどそれぞれ嬉しさを表現した。

張飛「愛紗……。」

諸葛亮「愛紗さん……。」

鳳統「愛紗さん……。」

愛紗「お前達、大丈夫だ……。これからの世を作るため、共に頑張ろう。」

愛紗はそう言って、張飛達を励ました。

そしてこの日を以て、蜀は完全に滅んだのであった。

71話

劉備と北郷のいた蜀を滅ぼした後、純は暫く成都に残り、戦や重税などで荒れ果てた蜀の復興に努めた。

まず純は、こういつた高札を成都の街に出した。

- 一・みだりに人を殺す者
 - 二・みだりに物を盗む者
 - 三・みだりに流言を放つ者
- 以上。その一つを犯す者は斬罪に処す。

魏軍大都督曹和

これにより、魏軍はこの軍令をしっかりと守った。また、北郷と劉備が生きていたときに無理な遠征や再軍備などで莫大な税を取られていた民だったが、純は彼らにかけられ

ていた税を緩くしたりした。それに加え、治安も悪化していたので、犯罪を犯す者には容赦なく嚴罰に加えたりした。

それだけでなく、純は共を連れて自ら成都の民の様子を見て、時には声をかけたりした。これにより、成都の民は、皆心服したのであった。

そして、成都の治安と民心が治まったと感じた純は、

純「成都もある程度落ち着いてきたし、陳留に戻るか。」

稟「そうですね、成都の民も治安も、大分落ち着いてきましたし。」

秋蘭「そろそろ帰らないと、皆が寂しがりますからね。」

純「ああ、皆に陳留に引き揚げる準備をしろと伝えてくれ。また、引き揚げの件を姉上にも遣いを送っておいてくれ。」

秋・稟「御意。」

純達は、大軍を率いて陳留に戻った。そして、一同は無事陳留に到着すると、

「「曹和様、万歳!!」」

「「曹魏、万歳!!」」

先頭を進む純の耳に、そんな声が無数に届いた。そう、陳留の民が、皆総出で純達魏軍の凱旋を見に来たのだ。それは奥に進めば進むほど益々大きくなっていき

純「こりやスゲーな・・・。」

それを見た純は苦笑しながらそう言った。

秋蘭「はい、恐らく華琳様がやったのでは？」

すると、純の横にいる秋蘭は、華琳がやったことではと言った。それに

純「ああ、実に姉上らしい。」

と純はそう言った。そして、純は馬上で右拳を掲げ挙げた。その姿は正に、魏の軍神に相応しい姿だった。それを見た民は一斉に沸き、純を激賞するため、声を枯らして叫んだのだ。純は掲げた右拳を、今度は振り返り返りざまに後方へ向け、将兵達を示した。すると、民達の賞賛の聲が、一斉に彼らに向いたのだった。

「「魏軍、万歳!!」」

「「讚えんかな、真の兵士達を!!」」

「「讚えんかな、勇敢なる兵士達を!!」」

それらの声を聞いて、自然と純の頬が緩んだ。

純（こいつらの働きが無ければ、勝てなかつたんだ。真の英雄はこいつらだ・・・。）
すると、

秋蘭「ふふっ。」

秋蘭が横で声を上げて笑ったので振り返ると、

秋蘭「本当に純様は変わららず私達の事を考えてくれますね。」

と秋蘭は言った。

純「当然だ、お前らの働き無くして此度の勝利は無かつたからな。お前らが真の英雄だよ。」

秋蘭「ありがたきお言葉。」

そう言うのと、秋蘭は純と轡を並べて、寄り添つたのだった。

そして、純達は玉座の間に入った。

純「姉上、この純、蜀を平定し、只今帰還致しました。」

純は、玉座の間に入って、すぐに跪き拱手しながら言い、純と一緒に遠征に行った他のメンバーも一緒に跪いて拱手した。

華琳「よくやったわ、純!!」

純「はっ! 全ては皆の働きのお陰です! その槍働きに相応しい恩賞を皆に賜って下さい!」

華琳「分かつたわ。将兵には、それ相応の恩賞を与えるわ。」

純「はっ!!」

華琳「皆、蜀は滅び、泰平を脅かす者はいなくなつた!! これから先、孫呉と共に民が安らかに暮らせる泰平の世を築こうではないか!!」

華琳の言葉に、

「はっ!!!」

純を含め、皆拱手して言ったのだった。それから暫くして、孫策が魏に参るとの知らせが入ってきたのだった。

7 2 話

雪蓮「久し振りね、華琳。」

華琳「ええ、同盟を組んだとき以来ね。」

冥琳「すまない華琳、雪蓮がどうしても行くと聞かなくてな。」

華琳「別に良いわ、気にしてないし。」

雪蓮「ぶーぶー、二人ともひどーい。」

華琳「それで、何しに魏に来たのかしら？蓮華と思春もいるようだし。」

雪蓮「あなたの弟君に会いに来たのよ、蜀を平定した弟君にね♪」

華琳「・・・そう。それで、蓮華と思春も自分と同時に紹介しようと思った訳ね。」

華琳「でも残念ね。つい二ヶ月前に、純は北方に行ったわ。」

雪蓮「北方？何故北方に行ったのかしら？」

それを聞いた冥琳は、

冥琳「・・・烏桓だな？」

とそう言った。

華琳「そうよ。彼らが北方を攻めてきたから今その討伐に出かけたわ。恐らく、鮮卑

らも関わつてるやもしれないけど。」

雪蓮「あら、それは残念ね。でも華琳、そこまで心配してないようね。」

華琳「当然よ。だって、私の弟なんだから。例えどんなことがあつても、烏桓ら北方の異民族を平定出来るわ。」

雪蓮「へえ、余程信頼してるのね。」

冥琳「そうだな。」

すると、

蓮華「華琳、あなたと曹和殿は、昔からそういつた信頼関係だったのかしら？」

と蓮華は尋ねた。

華琳「いいえ、私と純は仲が良くなかつたわ。むしろ、私が一方的に嫌つていたわ。」

それに対し、華琳はそう言った。

雪蓮「そうなの!？」

冥琳「反董卓連合の時も、今までの情報を聞いても信じ難いな。」

華琳「貴女達から見たらそう見えるでしょうね。でも、本当の事よ。」

蓮華「・・・詳しく聞かせてくれないかしら？」

雪蓮「あつ、私も気になるわ♪」

冥琳「私も気になるな。」

思春「……私もです。」

華琳「良いわ。」

そう言つて、華琳は過去の純との関係について雪蓮達に話した。

華琳「……という事よ。」

雪蓮「……そう、そういつた事が。」

冥琳「父君の死がきつかけだったとはな。」

華琳「ええ。それ以来、私は純との関係が良くなつたわ。けど、秋蘭は別だった。」

雪蓮「夏侯淵が？」

華琳「ええ。あの子、初めての主が純だったのよ。それ以来、純に絶対の忠誠を誓つていたの。」

華琳「それと同時に、純の事を愛していたわ。それもあつて、私のせいで純の心に傷を負つたと思ひ、私に対して……」

回想

秋蘭「これまで散々純様の心を傷つけ、辛い思いをさせておいて、今頃許して欲しいなど虫が良すぎます!! 私は、純様の命令のみ従います。しかし曹操殿、あなたの命令には従いません!!」

回想終了

華琳「・・・と言われたわ。」

雪蓮「そうなのね・・・。」

冥琳「ふむ・・・。」

蓮華「・・・思春、あなたは夏侯淵の気持ち分かるかしら？」

思春「はっ、蓮華様は雪蓮様にあのような仕打ちを受けておりませんが、夏侯淵の気持ちは分かります。」

華琳「それにあの時は、秋蘭だけじゃなく、兵の殆どが私に従わなかったのよ。」

雪蓮「そうだったの!？」

冥琳「それは流石にキツいな・・・。」

華琳「ええ。けど、私はそれらを全て受け入れたわ。その上で、純に軍の全てを任せ
たの。将兵全て純の命令に従うようにね。」

雪蓮「・・・そう。」

冥琳「それで、主要な戦には弟に全ての指揮権を与えていたのか。」

華琳「ええ、そうよ。」

蓮華「・・・凄いわ。」

思春「蓮華様？」

蓮華「そういったのを受け入れて信頼するなんて、普通は出来ないわ。」

華琳「あら、それでも無いわよ。純は、元々私を差し置いて曹家を継ぐなんて考えな
かったもの。」

雪蓮「そうなの？」

華琳「ええ。まだお父様が生きていた時、お父様の誕生日会でこういった事を言った
のよ。」

回想

「曹嵩様、誕生日おめでとうございます!!」

曹嵩「うむ、皆ありがとう。今日は天気も良く、実に良い日だ。美酒に美味しい料理で溢れている。一緒に盛り上がりたもうではないか!!」

「御意!!」

曹嵩「さあ、わしと共に、この杯を飲み干そう。」

そして、曹嵩は誕生日会に集まった人と一緒に酒を飲んだ。

曹嵩「後ほど、武将達には弓比べを文官達には賦比べを行う。弓比べのやり方は簡単じゃ。あそこに二つの的がある。百歩以内に矢を放ち、的の中心に命中出来たら良い。その中で、わしが誰が良かったかを決める。賦比べも同様じゃ。」

そう言い、曹嵩は皆と一緒に美味しい料理と美酒を楽しんだ。

暫くして、弓比べが始まった。

兵士「おう!!おう!!おう!!」

これには、回りの兵士達は盛り上げるため声を上げた。

春蘭「はっ!」

まず最初に春蘭から行った。

春蘭「はっ!!」

春蘭自身、弓は劍と比べて得意ではないが、無難に矢を的に当てた。
秋蘭「ふっ!!」

次の秋蘭は、元々得意武器であるため、こともなげに命中させた。

華侖「ほいっす!!」

続く華侖は、二人ほどの腕は無いが、春蘭同様無難に命中させた。

そして、

純「はっ!」

純の番が来て、純は馬を走らせた。

純「はっ!」

その時、純の声を聞いた曹嵩は、身を乗り出した。

家臣A「曹嵩様、曹和様です!二本の弓をつがえています!」

純「はあっ!!」

純は二本の弓を構えた。そして、

純「はあっ!!」

矢を放ち、二本とも的のど真ん中に命中させたのだった。この瞬間、純は弓を掲げて喜びをアピールし、兵士達も大喜びした。

家臣A「矢はどちらもど真ん中に命中しました!!どうやら弓比べの一番は、若君です

ね!!」

それを見た家臣は、純の弓の神技に興奮していた。

純「どうだ!! やったぞ、どうだ!!」

その間も、純は当てた喜びを兵士達にアピールしており、兵士達も

兵士A「流石曹和様だー!!」

兵士B「流石俺達の大將だぜ!!」

兵士C「一生ついてきます!!」

自分の事のように喜んでおり、

春蘭「おお!! 流石純様だ!!」

秋蘭「ああ、そうだな。」

華命「流石純兄っすー!!」

春蘭と華命は大喜びし、秋蘭は普段通りに振る舞っていたが、自身の主の姿に喜んでいたのであった。

曹嵩「中々やるな、流石純だ!!」

家臣A「はい!!」

これには曹嵩も、喜びの表情を浮かべていたのであった。

そして、弓比べが終わり、

曹嵩「此度の弓比べ、一番は純じゃ!!純、前に出よ。」

純「はっ!」

そして、純は曹嵩の前に移動した。

曹嵩「中々の腕だ、流石じゃ。」

純「お褒めに預かり、恐悦至極です、父上。」

曹嵩の言葉に、純は拱手した。

家臣A「曹嵩様、曹和様の武は、他の追隨を許しません。」

曹嵩「うむ。純よ、お主は将来何になりたいのじゃ?」

純「俺は将来、衛青と霍去病のような將軍になり、戦場にて功を立て、賊を一掃し、苦

しむ民を水火より救う。他には何も望みません。」

曹嵩「つまりは、将来大將軍になりたいのじゃな?」

純「はい!」

曹嵩「では聞こう、如何にして大將軍になれると思う?」

純「功あらば賞し、罪あらば罰す。兵と苦楽を共にし、武器を持ち共に戦い何事にも

恐れず!」

この言葉に、

曹嵩「やはり純は大將軍になれる器じゃ!」

家臣A「如何にも！」

純「ありがとうございます！」

曹嵩は非常に嬉しそうに言ったのだった。そして賦比べでは、華琳が圧倒的な才を見せ、曹嵩を大いに喜ばせたのだった。

回想終了

華琳「……といった事よ。」

雪蓮「へえ、弟君は衛青と霍去病になりたかったのね。」

冥琳「だが、あの二人に勝るとも劣らぬ将だと私は思うぞ。」

華琳「ふふっ、そうね。それと、お父様があのような誕生日会を開いたのには訳があるわ。」

雪蓮「そうなの？」

冥琳「……恐らくだが、華琳と曹和の仲の改善を図ったのでは？」

華琳「そうよ、流石周公☒ね。お父様は、私と純の仲を改善させようとしたのよ。」

雪蓮「そうだったのね……。」

華琳「けど、私はこの思いに気付かず、お父様の苦勞を無駄にしてしまったわ……。」

雪蓮「華琳……。」

華琳「けど、今は違うわ。私は純を信じ、純も私を信じている。だから、純にもしもの事があつたら、私は命を絶つわ。」

と華琳は真つ直ぐな目でそう言った。これには、雪蓮と冥琳は、魅入ってしまったのだった。

蓮華「やつぱり凄いわ。けど、それに比べて私は……。」

思春「蓮華様……。」

その時、蓮華は純と比べて劣等感を抱いたのであつた。

73話

その頃、北方では純率いる魏軍と、烏桓との激しい戦いが展開されていた。

最初、烏桓の奇襲があつたが、純の冷静な指揮とその武勇で戦線を保ち、烏桓の軍勢は撤退に追い込まれた。

秋蘭「純様、敵は退却していきます！我が軍は攻撃を凌いだ様でございます！」

純「敵を徹底的に追撃しろ！引き続き俺も戦闘に加わる事とする！」

秋蘭「はっ!!」

それを聞いた純は、敵を追撃し、半日間烏桓との激しい戦闘を繰り広げた。

純「ふっ！」

烏桓族A「うわーっ!!」

純「はっ!!」

烏桓族B「ぎゃーっ!!」

その戦闘でも、純の武勇は凄まじく、太刀を振るうだけでなく弓を使うなどして烏桓族を倒していき、段々と烏桓を追い詰めていった。

活躍したのは純だけでは無い。

春蘭「はああっ!!」

烏桓族C「うわーっ!!」

秋蘭「はっ!!」

烏桓族D「グハツ!!」

焰耶「でりやあああ!!」

烏桓族E「ぎやーっ!!」

霞「うおりやああ!!」

烏桓族F「ぎやーっ!!」

星「はあっ!!」

烏桓族G「グフツ!!」

春蘭や秋蘭、焰耶と霞、そして星も烏桓相手にその武勇を見せ、目覚ましい活躍をしていたのだった。

しかし、とある村に到着した時、ある事に気付いた稟が純にこう進言した。

稟「烏桓に打撃を与えましたが、我が軍の兵馬は疲れ切っております。」

純「うむ。」

稟「さらに、これ以上追撃をするのは難しいです。ここで一旦追撃を止めるべきでは？それに何かあつて曹操殿に何を言われるか・・・。」

しかし、

純「稟、それは違うぞ。」

と純は言った。

稟「どういう事でしょうか？」

純「軍を率いたからには、ただ勝利に専念するべきであり、陳留にいる遠くの者この場合は姉上だな、その姉上の言うことを聞くべきではない！」

稟「は、はい……。」

純「奴らは、まだ遠くまで逃げていない。命令に従つて敵を放置するのは、奴らに立て直す機会を与えているのと同じだ！これを放置すれば、奴らは立て直し、他の異民族と結託してまたこの地を攻めてくるぞ！それでは、姉上の目指す世は決して来ねーぞ！」

稟「わ、分かりました！」

純「敵を更に追撃する事にする！遅れた者は斬ると伝えておけ！」

稟「ははっ!!」

純「皆、共に行くぞ!!」

春・秋・焰・星・霞・稟「二二二ははっ!!二二二」

そして、純は更に烏桓を追撃し、先の戦闘と合わせて烏桓を数万騎討ち取る壊滅的な

打撃を与え、丘力居は降参し、純は烏桓を従えたのだった。

この勢いで、純は更に烏桓と手を組んでいた鮮卑を攻め、鮮卑を烏桓同様壊滅的打撃を与え従えた。この知らせを聞いた匈奴は、

単于「烏桓だけじゃなく、鮮卑にも勝ち、平定してしまうとは!?これが曹操の弟であり、魏の軍神と恐れられている曹和の実力か!?!」

匈奴族A「如何なさいますか?」

単于「そんなの決まっている!!我らではあの軍は太刀打ちできぬ!!降伏のみじゃ!!」

と単于はそう言い、鮮卑は服従し、それに続いて羯、氐、羌も純に服従し、北方は純の手により完全に平定されたのだった。

その後、北方の全ての異民族は、純を見て

「「真の強き王である!!」」

と言い、純に心酔したのは内緒である。

戦後、

純「此度の戦、厳しかったとはいえ、よく戦ってくれた!皆のお陰で、北方は平定できた!今回の恩賞だが、通常で決められた倍の数字を皆に出す事としよう!」

と純はそう言った。これを聞いた諸将は感激し、将だけでなく兵士達も諸手を挙げて大喜びし、純と将兵との間の結束は益々強くなったのであった。

そして、純達魏軍は陳留に向けて帰還したのだった。

74話

北方を平定した純は、陳留に帰還した。それを迎えたのは

栄華「お帰りなさいませ！お兄様！」

栄華だった。

純「ただいま、栄華。・・・別に、何もここで出迎える必要はねーぞ。」

栄華「遣いも受けましたし、見張りから遠くにお姿が見えたと報告がありましたので・・・いてもたってもいられなくて、お姉様に許可を貰って来たのですわ。」

栄華「ああ・・・数ヶ月見ない間に御髪もお衣装も砂だらけで。お風呂とお召し物の支度をさせていますから、お姉様に報告した後、すぐにお使い下さいまし。それから孫呉の皆様にお会いになってからが良いかと。」

純「ありがとうございます。孫呉の皆が来てるんだな？」

栄華「はい、お兄様が北方の遠征に行っている間に。」

純「そっか・・・。」

栄華「それはそうと、お兄様は流石ですわ！お兄様は数ヶ月前、北方の異民族の討伐に行き、私の懸念を余所に『向かうところ敵なし』との知らせが頻繁に届き、立て続け

に勝利したのですわ！」

栄華「お姉様は特に心配しておりませんが、皆様は心からお喜びですわ！」

純「ふつ、ありがとう。けど、全ては皆の奮戦のお陰でもある。皆がいたからこそ、北方は平定出来たんだ。」

栄華「ふふつ、やはりお兄様はお兄様。何も変わりませんわ。」

純「さて、お前の言う通り、風呂に入ってから孫呉の皆に会おうとしよう。」

そして、純は後ろを振り返って

純「お前達も、そうしろ。」

と言った。

春蘭「はっ！承知しました！」

秋蘭「御意。」

焰耶「はっ！」

星「御意。」

霞「了解や。」

稟「はっ。」

そして、純達は陳留の街に入った。

陳留・玉座の間

純は玉座の間に入ると、

純「姉上、ただいま戻りました。」

と言ひ、跪いて拱手し、それに続いて春蘭、秋蘭、焰耶、星、霞、稟も続いて跪き拱手した。

華琳「純、今回の活躍は既に私の耳に入っている、良くやったわ!!」

純「春蘭、秋蘭、焰耶、星、霞が奮戦し、稟が策を授けてくれたお陰でもあり、俺の手柄ではありません。」

華琳「そんなこと無いわよ。」

純「またこれは、姉上の英断のお陰でもありません。姉上の英断無くして、北方の平定はありませんでした。」

純「全ては姉上含め皆の力です。我が将兵には、姉上が直々に労つてくれる事を願つております。」

それを聞いた華琳は益々感激し、

華琳「分かったわ。純、本当にありがとう。」

と言ひ、席を立ち上がり、純に近づき頭を撫でたのだった。

純「ところで姉上、栄華から孫呉の者が来たとお聞きしましたが。」

華琳「ええ、あなたに会いに来たのよ。」

純「それだけの理由で、わざわざ孫呉から参つたのですか？」

華琳「あなたは相変わらず鋭いわね。恐らくそれは口実よ、蓮華と思春、孫権と甘寧
なんだけど、その子達とあなたを交流させたいのよ。」

華琳「あの二人、特に蓮華はあなたに憧れていると同時に、劣等感を抱いているから。
純「・・・成程。では、まず身体を清めてからお会いしましょう。」

華琳「そう、分かったわ。では、二人に關してはあなたに任せるわ。孫策と周瑜にも
後で会い、真名を交換しておくのよ。貴女達も、身体を清めておきなさい。」

純「承知しました。ではまた。」

そう言ひ、純はその場を後にし、他の皆も、その場を後にしたのだった。

純の部屋

身体を清めた純は、自分の部屋に戻っていた。すると、蓮華「曹和殿、孫権です。入っても良いでしょうか？」蓮華がやって来た。

純「良いぞ、入りな。」

蓮華「失礼します！」

そう言い、蓮華は純の部屋に入った。

純「初めましてだな、俺は曹和、字を子元、真名は純と言う。よろしくな。」

蓮華「会って早々真名を!?!良いんですか!?!」

純「ああ。もう既に姉上と交換しているんだろう? だったら、俺も真名を預けねーのは不公平だろ?」

蓮華「わ、分かりました……。私は孫権、字を仲謀、真名を蓮華です！」

純「後、そう堅苦しくしなくても良いぞ。」

蓮華「わ、分かり……。いや、分かった。」

すると、

純「うん、それで良い！」

純は笑顔でそう言った。それを見た蓮華は、

蓮華「／＼／」

顔を真つ赤になつてし俯いてしまったのであつた。それを見た純は、

純「ははっ、顔真つ赤だぞ!!」

と言ひ、蓮華の顔を下から覗き込んだりして、

蓮華「ちよ、ちよつと・・・!!」

蓮華は益々顔を赤らめたのだつた。そして、二人はお茶を飲んで楽しい話や面白い話をして仲を深めていった。

蓮華「何か、聞いていたのと全然違うわね・・・」

純「ん?」

蓮華「ああ、別にあなたが變つて訳で言つたんじゃないわ!!ただ、あなたは戦において適格な采配を行い、最前線でその武勇を振るひ、兵と苦樂を共にするつて聞いているから。」

純「ああ、兵と苦樂を共にしたり、戦では最前線に立つてこの太刀を振るつているのは確かだよ。」

蓮華「それは、亡き父君と話した事?」

純「姉上から聞いたんだな。まあ、俺の目標は衛青と霍去病みたいな將軍になりたくて、その二人のようになるにはこうあるべきだと感じた事を父上に言つたんだ。」

蓮華「どうしてそう思ったのかしら？」

純「戦で必要なのは、己の武勇や策略、優秀な将や兵の練度だけじゃない。大事なのは将兵と心を一つにする事だ。確かに武勇は必要だが、それを活かすために兵を動かさなきや勝てない。策略も、兵の事を考え、策が成功しなかった場合も考えなきや意味が無い。優秀な将も兵の練度もそれをしつかり統率しなきや意味が無い。」

純「それらをちゃんとやらない将は将ではない、ただの馬鹿だと俺はそう思っている。」

蓮華「純……。」

純「まあ、これはあくまで俺の持論だな。」

蓮華「いえ、立派な考えだと思っわ。」

純「……そっか。」

蓮華「それに比べて私は……。」

純「蓮華？」

蓮華「純、あなたは孫呉についてどれくらい知っているのかしら？」

純「ああ、孫文台が基盤を作って、孫策が大きくして育て守っているという感じかな。」

蓮華「ええ、そうよ。……私は、いずれは雪蓮姉様の後を継いで、呉の王となるわ……。」

正直、呉をどんな国にしたいか、どんな国にするべきなのか、私は迷っている。」

純「……。」

蓮華「元々私は、霸道なんてもものに興味はなかったわ。私はただ、孫呉の民達が幸せに暮らせばそれで良かった。」

すると、

純「……別にそれで良いじゃねーか？」

純は蓮華の本音を聞いてそう言った。

蓮華「え？」

純「お前は、亡き孫文台と孫策の背中を無理に追い求める必要はねーと思うぞ。お前は、あの二人と比べて劣等感を抱いてるのかもしれないねーが、お前はお前だろう。だって、お前は自分を信じて自らの道を進めば良いんだよ。」

蓮華「……純。」

純「それに、そんなお前でも信じ慕っている者はいらぞ。そうだろ、甘寧？」

蓮華「え!!？」

すると、部屋の扉が開き、思春が出てきたのだった。

蓮華「し、思春!?! どうしてあなたが!?!」

思春「蓮華様の護衛です。」

蓮華「いつから!?!」

思春「最初からです。」

蓮華「そ、そう……。」

純「甘寧、お前は蓮華の事を信じているか？」

思春「はいっ！私は蓮華様なら、孫呉をより発展し、民を幸せにしてくれる事を信じております！」

純「ほら、そんなお前でも、信じ慕ってくれる者はいる。甘寧だけじゃない、孫策と周瑜、そして孫呉の皆も、お前を信じ慕っているんだ。もっと自分に自信を持って。」

それを聞いた蓮華は、

蓮華「……ええ……分かったわ……。純……ありがとう……。」

と口元を抑え涙を流しながらそう言ったのだった。

そして、蓮華は落ち着きを取り戻し、

蓮華「何かごめんなさい、情けない姿を見せてしまったわね。」

純「良いんだよ、俺は気にしてねーから。」

蓮華「そう……。ふうー……。なんだかスッキリしたわ。」

純「そっか、それは良かった。」

蓮華「ええ。それで、あなたと夏侯淵について聞きたいんだけど。」

純「えっ!!」

蓮華「華琳から聞いたわ。あなたと夏侯淵、非常に仲睦まじいと聞いたけど、詳しく聞きたいわ。」

純「ああ、まあ・・・。」

純（コイツって、普段こういう性格なのか・・・？吹っ切れたんだな・・・。それよ、姉上は何を話したんだ・・・!?!）

蓮華「どうなの、興味があるわ。思春もそうでしょう？」

思春「・・・多少興味があります。」

蓮華「ねえ、どうなの？」

純「あ、あははは・・・。分かった分かった、まず秋蘭を呼んでからで良いか？」

そう言って、純は秋蘭を呼んで、蓮華と思春に秋蘭との馴れ初めを話した。その際秋蘭もそうだが、お互いに真名を交換したのであった。

7 5 話

雪蓮達が曹魏に滞在して二ヶ月が経った。

雪蓮「それじゃ、またね♪華琳、純！」

華琳「ええ、元気で。」

純「またな。」

雪蓮達は、曹魏の皆と交流を深め、互いに真名を交換した。

その際焔耶と交換するとき、このようなやり取りをした。

雪蓮「あなたの活躍、よく聞いてたわ。今あなたと戦をしたら孫呉はどうなるか…。」

冥琳「そうだな、雪蓮。焔耶、成長しようだな。」

焔耶「私は、お館に会えたから今がある。もしお館に会えなかつたら、私は今頃野垂れ死んでいた。だから、お館に感謝している。」

雪蓮「…そう。母様も恐らく、あなたの成長を草葉の陰から見ていると思うわよ。」

焔耶「そうだと良いな。」

冥琳「ところで焔耶、お前は紫苑を知っているか？」

焔耶「知っているが、孫呉に仕えているのか？」

冥琳「ああ、今は我ら孫呉の重鎮として仕えている。お前の活躍を自分の事のように喜んでいたぞ。」

焰耶「……そうか。なら、紫苑に伝えてくれ。互いに、大陸の明日のために頑張ろう。そして、会う機会があつたら酒を飲もうと。」

冥琳「分かった、紫苑に伝えておく。」

そう言つて、雪蓮達は曹魏を後にしたのだった。

それから暫く経つたある日の事だった。

秋蘭「ん？」

その日、秋蘭は廊下を歩いていた。その時、ふと中庭を見ると

純「……。」

純がいつもいる中庭の木の下で寝てはいないが横になっていた。

秋蘭（いつもの純様と雰囲気が違う……。）

そう思った秋蘭は、中庭に出た。

秋蘭「純様……？」

そう言つて声をかけると、

純「……ああ、秋蘭か……。」

純は元氣ない返事をした。

秋蘭「中庭に目を向けたら純様が見えましたので……どこか体調が悪いのですか？元気が無いようですが……。」

純「……そんなことねーよ。……ちよつと考え事してたんだよ。」

そう話す純だったが、やはり元気が無かった。そう思った秋蘭は、純の横に座った。

秋蘭「何を考えてたんですか？」

そして、秋蘭はそう尋ねた。

純「大したことじゃねーんだけどな。……戦が終わっただろう……。」

そう言った純は、一度言葉を止め、すうつと目を細めた。

純「泰平の世になったら……俺はどうしようかなあつて思つてな。」

純「平和になつたとは言え、まだ基盤が固まつていねーし、不穩分子の影もあるし、やるべき事が無いわけでは無い。しかし、それは俺がやらなくても出来る事だ。」

純「飛鳥尽きて良弓蔵められ、狡兎死して走狗煮らるつて言うだろ？余程のことが無い限り、官渡や蜀との戦いは、もう起きる事はねーだろうな……。俺や姉上が、いや、民が最も望んでいた世だからそれで良いんだが……。」

秋蘭「純様……。」

純「姉上には国を治める才がお有りだ、姉上はそれで構わない。桂花達軍師は、文官の仕事があるからな。」

純「俺に出来る事は、幼い頃の目標だった、衛青や霍去病のように戦場で功を立て敵を斬り殺す事しかねーよ。」

秋蘭「しかし、純様は蜀を平定した後、一時期ですが蜀の民を安んじました。純様にも、華琳様同様国を治める才があります。」

その時、秋蘭は蜀を平定した後の事を言つて純をフオローしたのだが、

純「そんなのは、姉上だったらもつと良い方向に民を安んずる事は出来たよ。俺は戦においては、姉上に勝てる自信はある、しかし政に関しては、俺は姉上に到底及ばねーよ。」

純はそう返したのだった。

純「ありえぬ事だが、姉上が用済みだと判断したら、俺は韓信元帥の様に肅清されるやもな……。」

それを聞いた秋蘭は、

秋蘭「そんな事、私が決してさせません!!」
と怒鳴つたのだった。

純「秋蘭?」

秋蘭「もし華琳様がその様な事を純様に命令したら、私が華琳様を……。」

純「秋蘭!」

秋蘭「!!」

純「それ以上は言うな……。」

秋蘭「……大変申し訳ございません。しかし、私にとって、純様はかけがえのないお方なのです!!それは私だけじゃ無く、焰耶や稟、風、霞、凧、真桜、沙和、そしてこの曹魏の兵達も同じ思いです!!」

秋蘭「その様な事、二度と言わないで下さい……。でないと、私が私でいられなくなりです……。」

そう秋蘭は涙を流して述べたのだった。

純「……。」

すると、純は身体を起こすと、秋蘭の頭を撫で、抱き締めた。

秋蘭「……!!」

純「……ありがとう。お前がそう言ってくれるのは、スゲー嬉しい。……けどな」
純「武官は、平和になれば役目を終える。平和なのは勿論良いことだ、望んでいた事だからな。けど、武官として戦場で武を振るい、功を立てる事は、俺にとって非常に大切な事で、俺の存在意義でもあるんだ。」

純「平和は良いことなんだが……正直俺は、自分を見失ってしまいそうでな……。」

秋蘭「純様……。」

その時、秋蘭は純の右手に、そつと自身の左手を伸ばした。指先が触れると、一瞬小さく震えたが、指を絡めたら純は握り返してくれた。

秋蘭「……純様は、そういうお考えなのですか……。」

純「ああ……、スマンな。」

秋蘭「謝ることではありませんが……。」

その時、ある事を思いついた秋蘭は

秋蘭「純様、如何でしょう？これまで経験した戦を、何か物語として書き記すというのは？」

こう純に言った。

純「物語!?今までの経験を？」

秋蘭「はい。初めて戦に出たときから今に至るまでの事を全て物語のような形で書き残すのです。」

純「おお!!それ良いな!!経験したって事は、今だったら北方平定までだな。」
すると、純は反応し、食いついたのだった。それを見た秋蘭は目を細めて微笑みながら

秋蘭「はい。そこまでの事を物語のように書くというのも面白いかもしれません。」
そう言った。

純「確かに面白そうだ!!」

純「ありがとな、秋蘭!!お前のお陰で、胸が軽くなった!!それだけじゃ無い、まるで戦に出る時みてーな気分になったぞ!!」

秋蘭「ふふっ、それを聞いて安心しました。」

純の様子を見た秋蘭は、安心した笑みを浮かべ、自分のことのように嬉しくなったのだった。

余談だが、純は自身が経験した戦を物語形式で纏め出版し、これは魏だけでなく、大陸全体で大ヒットしたのであった。

76話

夜、とある部屋

秋蘭「ぐ……かは……ッ。」

秋蘭「ごほ、げほ、ごほっ！」

とある部屋で、秋蘭が一人辛そうにむせていた。

秋蘭「……うう……。」

秋蘭「ま……まだだ……。この程度の事で朽ちるなよ……。私の体……。」

秋蘭「決して純様に寂しい思いをさせてなるものか……！」

秋蘭「私は……純様と共に……。」

そう、秋蘭は一人眩いたのだった。

翌日、純の部屋

この日、純は一人自分の部屋で刀の手入れをしていた。その時、秋蘭「純様、秋蘭です。入って宜しいでしょうか？」

純「秋蘭？ 良いぞ、入れ。」

秋蘭「はっ。」

秋蘭が純の部屋に来た。

純「どうした、何か用か？」

すると、

秋蘭「純様、本日何か予定がありますか？」

と尋ねてきた。

純「いや、今日は特に予定は無いな。何で？」

秋蘭「もし宜しければ、一緒に出かけませんか？」

純「え？ 俺と？」

秋蘭「はい、最近一緒に出かけていないので。」

と秋蘭は言った。

純（そう言われて見れば、最近秋蘭と出かけてねーな・・・。）

その際、純はそう思っていた。

秋蘭「あの……駄目、でしようか？」

すると、秋蘭は上目遣いで純にそう答えた。

純「ううん、良いよ。行こう。」

それを見た純は、秋蘭の頭を優しく撫でて、そう答えた。すると、

秋蘭「はい!!」

秋蘭は柔らかい笑みを浮かべそう答えたのだった。

純「それじゃあ、行こう。」

秋蘭「はい!」

すると、秋蘭は純の腕を組み、一緒に街に出かけたのだった。そして、二人で買い物したり、商品を見たりした。買い物がある程度終わると、

純「飯にすつか。」

秋蘭「そうですね。実は私のオススメの店があるのです。今日はそこに行きましょう。」

純「ほう、それは興味があるな。では、行こうか。」

秋蘭「はい。」

そう言い、共にその料理屋に行った。その店は、大衆向けではなく、少し高級な個室の店だった。

しかし、高級という事だけあって料理は美味く、二人で舌鼓を打ち、ゆつくりする事が出来た。そして、食べ終わると、

純「なあ秋蘭、今度は俺の秘密の場所を案内してやろうか。」

秋蘭「純様の秘密の場所ですか？」

純「ああ、これは俺しか知らない場所なんだ。特別にお前に教えてやる。」

秋蘭「ふふつ、分かりました。ではお願いします。」

純が秋蘭に秘密の場所を教えると言い、秋蘭と一緒に行った。

その場所は、少し高い丘で、静かで風がとても心地良い場所だった。

純「俺さ、たまにここで昼寝してるときあるんだよ。」

秋蘭「確かに、ここは静かで風が気持ち良いですね。」

純「だろ。けど、ここの良い所はそれだけじゃねーんだ。」

秋蘭「？何ですか？」

純「もうじき夕方になるから、その時分かるよ。」

そう言い、秋蘭は純と一緒に夕方になるまで待った。

そして、夕方になり、

純「これだよ、秋蘭。」

と言った。するとそこには、夕日で赤く染まった街があった。

秋蘭「・・・綺麗。」

純「だろ？この景色を見つけたとき、スゲー気に入っちゃったんだよね！だから、これは俺とお前だけの秘密な！」

秋蘭「私と純様のですか？」

純「ああ！」

それを聞いた秋蘭は、純に抱き付いて胸に顔を埋めたのだった。

そして、暫く経った後、

純「・・・帰ろっか。」

秋蘭「・・・はい。」

そう言つて、二人は城に帰つたのだった。

そして、その日の夜も、二人は一緒に部屋に行き、寝台で互いを求め合つたのだった。そして、

純「秋蘭・・・大丈夫か？腹・・・痛くねーか？」

と純は秋蘭の体を心配した。

秋蘭「大丈夫ですよ、純様。私もヤワではありません。」

純「そっか・・・。」

そう言うと、純は秋蘭の髪をそつと撫でた。すると、秋蘭は嬉しそうに微笑んで、手

元に頭を寄せ、

秋蘭「純様……。」

と甘える声を出したのだった。すると

秋蘭「……純様。」

純「ん？」

秋蘭「一つ聞いても良いでしょうか？」

純「どうした？」

秋蘭「純様は、後悔した事がありますか？」

秋蘭はそう言つて純に尋ねた。

純「後悔つて……何？仕事の失敗か？」

秋蘭「いいえ。」

純「なら、ねーな。俺は今の人生に後悔なんてねーよ。」

純「今も、お前との間に子供が出来れば嬉しいのになーって思つてるくらいだからな。」

と純は言つた。

秋蘭「ふふ……そうですか。」

その答えに、秋蘭は穏やかな笑みを浮かべただけけれど、少し寂しい顔をしていたの

だった。

秋蘭「……今までの戦の事です。」

秋蘭「知っているとありますが、私は兵に、戦場で死ねと言いつけてきました。」

純「ああ、知ってるよ。」

秋蘭「だがそこで死んだ者達は……死んだ後、どうなるのでしょうか。」

と秋蘭は純に言った。

純「……。」

秋蘭「……すいません、詮無い事を聞きましたね。」

すると、

純「秋蘭が言いたくねーんならいいけど……。」

純「そんな後悔なら、俺もたくさんしてるぞ。」

と純は言った。

秋蘭「……。」

純「あの時、俺がああやって指揮していれば、あの兵士は死なずに済んだのではないのか。もしくは、あのような怪我をせずに済んだのではないか。戦が終わった後、俺は常にそう考えていた。」

秋蘭「純様……。」

純「でも、例え俺が死んでも、他の誰かが死んだとしても・・・それであの戦乱の時代が止められたんだったら、それはきつと意味があつた事なんだと俺は思つてる。」

純「そうじゃなきや・・・死んでつた者達は、浮かばれねーよ。」

秋蘭「・・・そうですか。」

純「秋蘭もさ・・・聞いて欲しい事があつたら、遠慮しなくていいからな？何でも聞いてやるから。」

秋蘭「・・・はい。」

純「・・・そんじゃあ、寝よつか。」

秋蘭「はい・・・。」

そう言つて、二人は一緒に抱き合つたまま眠りについたのであつた。

77話

玉座の間

この日、玉座では今後の予定などについて話し合った。そして、一通りの連絡が終った後、話題が上がったのは、不穏な報告だった。

純「・・・盗賊？」

風「はい。今あの手この手で勢力を拡大させており、魏と呉の国境近くにある廃棄された砦を拠点にして近隣の村々を襲っている」と。

稟「このまま放置しておく、更に被害が拡大します。今すぐ討伐した方が良いでしょう。」

桂花「私も二人の意見に賛成です。すぐに討伐しましょう。」

純「そうだな、すぐに討伐部隊を派遣しよう。」

純「姉上、相手は賊とはいえ、我が曹魏の領土を踏み荒らしている不届き者です。ここではどんな賊相手でも容赦しないという姿勢を改めて見せるべきかと。」

華琳「分かったわ。それに曹魏の大都督はあなたよ、全てあなたに任せるわ。」

純「御意。では、誰か行きたい者はいるか？」

すると、

春蘭「はっ！では、私が行きます！」

季衣「春蘭様が行くなら、僕も……！」

華命「あたしも行くっすー！」

春蘭と季衣、そして華命がまず手を上げた。

しかし、

流琉「ちよつと、季衣は書類が溜まってるでしょ！」

季衣「あうう……。」

柳琳「姉さん、姉さんも仕事が溜まってるでしょ！」

華命「うう……。」

流琉と柳琳に止められてしまったのだった。

純「ならしよーがねーな、二人は駄目だ。」

季衣「うう……。」

華命「じ、純兄……。」

純「お前らはいつかかな。補佐には秋蘭と焰耶を付ける、秋蘭、焰耶、良いな？」

焰耶「はっ！」

しかし、

秋蘭「・・・。」

秋蘭はどこかぼうつとしていた。

純「秋蘭？」

焰耶「秋蘭様？」

秋蘭「いえ・・・何でもありません。姉者の補佐です、了解しました。」

しかし、純がもう一声かけると、秋蘭は反応し、補佐の件を了承したのだった。

純「お前、大丈夫か？」

秋蘭「大丈夫です。少しぼうつとしていただけです、ご安心を。」

純「・・・そうか。」

純「それで良いか、春蘭？」

春蘭「はっ！お任せ下さい！秋蘭と焰耶も頼むぞ！」

秋蘭「うむ。」

焰耶「お任せ下さい！」

純「宜しいですね、姉上？」

すると、

華琳「ええ。けど、その出撃する将に関して、私からも提案しても良いかしら？」

純「何でしょう？」

華琳「純、あなたも出陣しなさい。」

と言った。これには、

純「え、俺ですか!？」

純は驚いた。

華琳「ええ、あなたも久し振りに戦場に出たいでしょ。最近書類仕事ばかりだったから、たまには息抜きしなさい。」

華琳「それに、野に離れた春蘭の手綱を確実に取れるのはあなただけだし、何より、秋蘭が従うのはあなただけだもの。」

と華琳は言った。

純（はあ・・・この人には敵わねーな・・・）

これには、純も心の中でそう呟きつつも少し頬を緩めたが

純「分かりました。賊討伐、俺も出陣致します。」

すぐに顔を引き締め拱手し言ったのだった。

華琳「春蘭と秋蘭も、まあ秋蘭はいつもの事だけど、全て純の命令に従いなさい。」

春蘭「御意！」

秋蘭「御意。」

華琳「純も、頼むわね。」

純「分かりました。風、街の治安は真桜達と共に任せたまぞ。」

風「はっ！お任せ下さい！」

華琳「栄華、桂花。純率いる討伐部隊の兵糧の準備をしなさい。」

栄・桂「はっ。」

純「では、解散！」

そして、朝議は解散となった。その数日後、純達は兵を率いて賊討伐に出陣したのであった。

78話

純達は数日前の朝議で出てきた賊討伐に出陣していた。

焰耶「お館、そろそろ例の盗賊がいる地域です。」

純「ああ、そうだな。焰耶、悪いが、偵察を少し多めに出せるか？」

焰耶「既にいつもの倍は出しておりますが、もう少し出しますか？」

純「いや、もう出してくれてるんなら良いよ。ありがとう。」

これには

春蘭「少し心配しすぎではありませんか、純様？」

春蘭は警戒しすぎではないかと言った。

純「お前の言う事も分かる。しかし、相手はあの手この手で勢力を大きくしている盗

賊だ、油断は出来ん。」

しかし、純は油断は出来ないと言ったのだった。

春蘭「成程。用心に越した事はないですね。」

秋蘭「ふむ……。」

その時、

魏軍兵士A「魏延様！……つと、曹和様も！報告です！」

焰耶「どうした！」

兵が慌てた様子で駆けつけてきた。その報告を聞いた純達は、ひとまず部隊の行軍を止め、臨時の軍議を開いたのだった。

純「……目の前に盗賊団の宿営か。」

魏軍兵士A「はっ。旗がありませんでしたし、装備も振る舞いもバラバラでしたので……他国の軍という可能性は低いかと。」

純（そもそも他国の演習が魏に入るなんてねーし、仮にあったとすれば事前に俺の所に相談が来る。呉の軍ではないしな。）

焰耶「どうしますか、お館？」

純「……敵の数は、我が軍より多いよな？」

春蘭「はっ。しかし練度も低い感じだと偵察が。」

純「数が多ければ、減らせば良いだけの事だ。」

純「策は極めて単純だがな。」

そう言い、純は皆に作戦を伝えて行動に移った。

魏軍本陣

焰耶「お館。攻撃準備、終わりました。」

純「……うむ。ご苦労、焰耶。」

純達本隊は、敵の陣を望む小高い丘に構えた。しかし、純は険しい表情をしていた。

焰耶「……何か気になることも？」

純「何か、上手く行き過ぎてる気がする……。」

焰耶「その気持ちは分からないでもありませんが……相手は用兵を学んでいるわけでもないでしょうし、杞憂かと。」

純「だと良いがな……。」

魏軍兵士B「曹和様、夏侯淵様からの遣いで、部隊の配置、完了しましたとの事です。」
純「分かった。下がれ。」

魏軍兵士B「はっ！」

魏軍別働隊

魏軍兵士C「夏侯惇様！夏侯淵様！本隊から、いつでも攻撃しても良いとの事です！」
春蘭「分かった！」

秋蘭「うむ！」

そして、

秋蘭「弓隊、構え！」

秋蘭「撃てーっ！」

秋蘭の合図で、弓隊が一斉に矢を放った。

魏軍本隊

焔耶「……始まりましたね。」

純「うむ……。」

そして、

焰耶「お館、敵が動き出しました！」

敵が弓の攻撃により、動き出した。

純の作戦はシンプルなもので、秋蘭率いる弓隊で敵陣を攻撃し、そこからいぶり出した賊を春蘭率いる部隊と純率いる本隊で一気に叩くというものだった。

焰耶「思ったより多く出てきましたね。」

三度目の弓の攻撃が治まった頃、盗賊団の陣から出てきたのは、それぞれバラバラな装備をした連中だった。彼らはそのまま、春蘭と秋蘭達がいる場所とは反対側へと逃げ出していった。

焰耶「偵察兵の予想以上に統率が取れていないようですが……どうします、お館？」

純「……この機を逃してはならんな。総員……」

その時

「「わあーっ!!!」」

本陣後方から鬨の聲が聞こえたのだった。

焰耶「な、何だ!？」

すると、

魏軍兵士D「た、大変です!!後方から敵の奇襲を受けました!!」

後方より奇襲を受けたとの連絡を受けた。

魏軍別働隊

秋蘭「今の所は順調か・・・。」

春蘭「秋蘭、突撃して良いか!!」

秋蘭「うむ。遠慮無く行ってくれ。」

春蘭「ならば行くぞ!!総員、突・・・」

その時、

魏軍兵士E「た、大変です!!本隊が、敵の奇襲を受けました!!」

春蘭「何!?!」

秋蘭「!?!」

本隊奇襲の報告を受け、

春蘭「秋蘭!純様の救援に向かおう!」

秋蘭「ああ、分かった!!」

春蘭「お前達、ここは任せたぞ!」

副官A「はっ!!」

本隊の攻撃を副官に任せ、春蘭と秋蘭は純達魏軍本隊の救援に向かった。

魏軍本陣

本隊の方は、敵の奇襲により、多少の動揺を受けた。

焰耶「うおーっ!!」

盜賊団兵士A「グフツ!!」

焰耶「くっ、お館の嫌な予感とは、こういう事だったのか!!」

焰耶「皆、落ち着け!!奇襲部隊は見る限り大軍では無い!!円陣を組んで攻撃を防ぎ、お館を守るのだ!!」

「「おおーっ!!」」

しかし、焰耶の鼓舞により持ち直し、迎撃態勢を取ったが、苦戦をしていた。

焰耶「くそっ、どうすれば・・・!!」

その時

ズバツ、ザシユツ

盗賊団兵士B「ガハツ!!」

盗賊団兵士C「グハツ!!」

純が前線に立ち、敵を斬り殺した。

焰耶「お館!?!」

そして、

純「総員、聞けえい!」

純は戦場全体に聞こえるほどの大声を出した。

魏軍救援部隊

春蘭「……っ!」

秋蘭「……っ!純様!?!」

魏軍本隊

純「我が名は曹子元！魏の軍神にして、曹魏の大都督を預かる者である！」

純「浅ましき野盜共よ！それに与して曹魏の領と民を脅かす名も知らぬ地の兵共よ！
貴様らの相手はこの俺が引き受けてくれよう！」

純「我が首が欲しければ・・・大陸全土に魏の軍神曹子元を討ち取ったという名を轟かせたければ、遠慮無く掛かってこい！」

その名乗りを聞いて、一人の賊兵が純に立ち向かったが

純「ほう、一番乗りは貴様か！だがっ！」

ズバツ

純にあっさり斬り殺された。

純「二人、三人でも良いぞ！一人一人ではどうせ相手にならねー！」

ズバツ、ザシュツ、ズバツ

そして、純は相手をどんどん斬り殺していった。

焰耶「この機を逃すな！態勢を整え、敵を返り討ちにするぞ!!」

「「おおーっ!!」」

魏軍救援部隊

春蘭「流石純様だ・・・。」

秋蘭「うむ。たった一言で、我が軍の動揺を完全に鎮め、逆に敵を動揺させた・・・。」
純の叫び声を聞いて、場の空気が変わり、魏の兵士の気迫が増していった。

春蘭「総員、一気に切り開き、本隊に合流して共に敵兵士を叩くぞ!!」

「「「おぉーっ!!」」」

魏軍本隊

魏軍兵士F「魏延様、態勢整いました!!」

焔耶「分かった!!行くぞ、我らも続くぞー!!」

「「おおーっ!!」」

ザシユツ、ドシユ、ズバツ

純「脆い脆い！それが先程まで我が曹魏の精銳を怯ませた者共の実力か！」

秋蘭「純様!!」

すると、春蘭と秋蘭率いる部隊が合流した。

純「秋蘭か・・・良く駆けつけてくれたな！ならば・・・」

その際、敵兵が純の前に立つたが、

秋蘭「・・・純様の前に立つな!!」

秋蘭があつさりと敵を射抜いたのだった。

秋蘭「純様、少し目立ちすぎたではありませんか？」

純「構わねーよ。それで我が軍の態勢が立て直せるのであれば安いものだよ。」

春蘭「純様!!」

純「春蘭も良く駆けつけてくれた！」

春蘭「はっ！」

焰耶「お館、態勢整いました!!」

純「分かった！皆、このまま一気に叩くぞ！」

春蘭「はっ！」

焰耶「はっ！お館！」

秋蘭「・・・はっ！・・・ぐっ。」

しかし、秋蘭の動きが少し鈍っていた。

純「秋蘭、大丈夫か？」

秋蘭「はい、大事ありません。」

その時

ドシュ!!

秋蘭「・・・何？」

前から飛んできた流れ矢が、秋蘭の肩口に突き刺さり、秋蘭の体は、ゆっくりその場に崩れ落ちたのだった。

春蘭「え・・・。」

焰耶「し・・・秋・・・蘭・・・様・・・？」

純「秋蘭！・・・秋蘭っ!？」

それを見た純は、慌てて秋蘭に駆け寄った。

純「秋蘭っ！」

秋蘭「だ・・・大丈夫です、純様・・・。」

春蘭「秋蘭!？」

春蘭も続いて駆け寄ると、そこでは既に純が秋蘭の体を抱き起こしている所だった。

秋蘭「大丈夫だと……言っている……。姉者。」

肩に矢が一本刺さっただけで、少なくとも致命傷には至っていないのだが、秋蘭の顔色は驚くほど青ざめ、弱々しく見えたのだった。

春蘭「まさか……」

純「春蘭！」

春蘭「は、はい……。」

その時、春蘭は純に言われる前に毒という言葉を喉の奥に飲み込んだ。その一言を言えば現実になってしまうような気がしたためだ。

魏軍兵士G「夏侯淵様！」

魏軍兵士H「そ、そんな……夏侯淵様が……。」

焰耶「ちい……っ！ 怯むな！ このまま押し返せ！」

焰耶「我らが夏侯淵將軍が、この程度で倒れるものか！」

兵の動揺を見た焰耶は、動揺を鎮めようとした。

秋蘭「あ、ああ……そうだ、それで良い。」

秋蘭「純様、姉者。私は……平気です。それよりも……このままでは、戦線が崩れてしまいます。」

純「ああ。任せておけ。秋蘭も傷は浅いぞ……。」

秋蘭「分かっております……。自分の体の事は……。一番、自分が……。」

秋蘭「……。分かって……。おります。」

純「それ以上喋るな……。秋蘭……。ッ！」

秋蘭「……。ああ、そうですか。」

その際秋蘭は何かに気付いたのか、青ざめた表情で、ほんの少しだけ悟ったような笑みを浮かべた。

秋蘭「ふふ……。純様。耳をお貸し下さい。」

純「な……。何だ？もう喋るな……。秋蘭。」

秋蘭「あのですね……。」

そう言つて、秋蘭は何か話そうとしたので、純は秋蘭の口元に耳を寄せた。

純「……。」

秋蘭「……。」

純「……。」

秋蘭「……。」

純「！……。そうか。」

もうちゃんとした声も出ないのか、秋蘭の口元に耳を寄せて話を聞き終えた純は、少

し驚いた表情をした後小さくポツリと呟いた。

春蘭「じ、純様……？」

そして、

純「……春蘭。」

春蘭「は、はい……。」

純「秋蘭の事を頼む。」

春蘭「わ……分かりました。」

春蘭は静かに言葉を紡いだ純の代わりに、そのままぐったりとしている秋蘭の体を抱き留めた。

純「……。」

そして、自身が最も大切にしている人の体を春蘭が支えたのを確かめると、純は無言で一步を踏み出して

ズバツ、ザシュツ、ドシユ、ザン!!!

春蘭「……え？」

その瞬間、目の前の敵はそれだけで斬り伏せられてしまったのだった。

焔耶「お……館？」

純「……。」

ズバツ、ザシユツ、ドシユ、ザン!!!

いつもの敵を怯えさせ、味方を安心させる声も、強烈な覇気を出す事もなく。水を打ったように穏やかな雰囲気のまま、純は周囲の敵を斬り伏せていった。

純「……。」

ズバツ

それはいつも通り、流麗な舞を舞っているような攻撃だったが、その一撃一撃は速く、鋭く、一切の迷いも感じられない動きだった。

その姿は、静かで目が離せないような神々しさを感じさせるような光景だった。

その時、

秋蘭「……姉、者……。」

春蘭「し、秋蘭……っ!」

秋蘭「純様は……どうだ?」

秋蘭は春蘭に純の様子を尋ねた。

春蘭「あ、ああ……戦ってるぞ。今までに見た事が無いくらい、強くて……魏の軍神という名に相応しい立派な姿だ……。」

秋蘭「そう……か……。」

その時の秋蘭は、どこか視点が定まらなくなっており、純の勇姿が写っているのかい

ないのかは分からなかった。

けど、春蘭の言葉を聞くだけで、秋蘭は満足そうに頷いた。

春蘭「もう喋るな、秋蘭……。救護が来るまで静かにしろ！」

春蘭は叫びながら秋蘭に言った。

焰耶「攻めろ！攻めろ！攻めろ！お館に続け！この流れを……。絶対に止めるんじゃない！」

一方戦場では、純の無双に続いて魏軍が一気に盛り返し、戦況は決したのだった。

春蘭「秋蘭……。もう戦況は決した……。我らの勝利だ。秋蘭の傷もすぐに手当てして貰えるから……。な？」

その時

秋蘭「うむ。……。姉者。」

秋蘭「……。私は、純様……。の……」

秋蘭は戦場に似つかわしくない程の静かな口調で春蘭に何か伝えようとしたが、秋蘭はゆっくりと目を閉じてしまった。

春蘭「秋……。蘭……。？」

春蘭が呼びかけても、秋蘭は目を閉じたまま答えなかった。

焰耶「秋蘭様……。くっ。」

春蘭「おい秋蘭、何寝ているんだ……。我らの勝利だ……。秋蘭……。」

春蘭「起きろ秋蘭!! 純様の、我らの勝利だぞ……。!!」

春蘭がいくら呼びかけても、頬を叩いても

秋蘭「……。」

秋蘭は目を開けなかった。

春蘭「秋蘭ーっ！」

そして、春蘭の泣き叫ぶ声が響いたのであった。

79話

陳留

稟「……お帰りなさいませ、純様、焰耶。」

純「ああ。ただいま、皆。」

焰耶「……ああ。」

短くも激しい戦いを終えて、陳留に帰還した純達を迎えてくれたのは、帰還の報告を受けて集まってくれた稟、風、桂花、香風、榮華だった。

稟「報告は早馬で聞きました。予期せぬ戦いだったようですが……まずは、お疲れ様でした。」

純はいつも通りだったが、焰耶の顔を見てか、稟の表情は芳しくなかった。

純「うむ。少し前に戦った連中の残党が野盗化したのだった。……首領格らは、一部に任せて連行してくれている。」

桂花「……はい。既に第一報は早馬で受け取っていますから。」

香風「後は、任せて下さい。」

本来敵の首領格の尋問は純達の役目だったのだが、彼らを前にしたら、特に純が何を
してしまうか分からなかったため、純は一部に任せただ。

純「すまんな、嫌な仕事を押し付けてしまつて。」

稟「構いません。情報の把握は我々の役目ですから。」

香風「……うん。秋蘭様のためにも……絶対に、ここで終わらせる。」

栄華「それよりもお兄様。……秋蘭さんの事は。」

純「それはまあ……姉上は？」

栄華「……もちろんお姉様もご存じですわ。奥でお待ちの筈ですけど。」

純「そうか……。」

焰耶「……栄華様。華侖様のお姿が見えませんが。」

栄華「……あの子は先に秋蘭さんの所に行きましたわ。」

焰耶「……そうですか。」

桂花「純様。華琳様へのご報告は……。」

純「ああ、分かつてる。……その件も併せて、すぐ行くつもりだ。」

栄華「焰耶さん。あなたも、ご報告に行くつもりですか？」

焰耶「そうですか……。」

栄華「お兄様はともかく、あなたはそれでお顔でお姉様にお会いになるおつもりですの

「？」

焰耶「それは……。」

栄華「……。」

焰耶も栄華の言いたいことは分かるのだが

焰耶「なら、どうすれば宜しいのでしょうか？」

と焰耶は言った。

栄華「そんなの、決まっているでしょう!!」

それに対し、栄華は焰耶に一喝した。その時、

風「ぐー。」

風が眠ってしまったのだった。

稟「つて、風!こんな所で寝ないで下さい!」

桂花「そうよ、風!」

風「おおつ……いやあ、あまりに空気が重いもので、つい眠くなってしまいました。」

焰耶「……。」

風「おや。無事に作戦も終わったのに元気が無いですねー? 焰耶ちゃん。純様はいつも通りですが。」

焰耶「……無事つて。」

稟「焰耶……。」

風「おやおや。主君にとつて良い事なんですよ。もう少し喜んで如何ですか？
純様はいつも通りですが、心はとてもお喜びですし。」

焰耶「風……。」

その時、

秋蘭「純様。荷物の整理、終わりました。」

秋蘭が春蘭達と一緒にやって来た。

純「秋蘭、お前何やってんだ！腹の赤子に悪いだろ！」

秋蘭「大丈夫です。ここ数日はつわりも落ち着いていますから。」

栄華「大丈夫ではありませんわ！お兄様の言う通りです。まずはご自分の体を大事に
なさらないと……もうお一人の体ではありませんのよ？」

秋蘭「だから……。」

華侖「そうつすよ。純兄に言わなかつたんすけど、演習の時も、つわりひどくて大
変だつたんすよね？」

柳琉「そうですね、秋蘭さん。栄華ちゃんの言う通りです。」

流琉「そうですね。あの時みたいな重いつわりがまた起きたら……本当に大事にし
て下さい！純様が心配しますよ！」

秋蘭「あ、ああ……。」

あの戦の後、従軍していた医者の方に担ぎ込んだ純達に告げられたのは、毒矢どころか、秋蘭のお腹に純との間に出来た新しい命が宿っているという報告だった。

純「まあ俺も、あの時耳元で言われてびっくりしたんだけどな……。」

稟「しかし秋蘭様、どうして我々に妊娠の事を秘密に？別に隠すような事でもないでしょうに。」

秋蘭「一応書物で見てもいいが……まさか私にこのような事があるなど思わんだろう。確かに私は純様とよく一緒にいたのだが……。」

桂花「そういう問題ではないわよ。城や街の医者にかかるなりしても……。」

秋蘭「そのようなものに頼らずとも、自分の体の事くらい私が一番よく分かって……」
春蘭「……いなかっただから、今回みたいな騒ぎになるのだろうか！純様がどれだけ

心配した事か！」

流琉「そうですね。お陰で私達も、報告を聞いた時はどれだけ驚いたか……。」

秋蘭「……う、うむ。すまん、姉者、流琉。そして、純様……はあ。」

稟や桂花だけでなく、春蘭や流琉に怒られて、流石の秋蘭も溜息を一つついた。

季衣「……そう言えば何かあったの？純様。なんだか言い合いしてたみたいけど。」

純「ああ、それは……。」

栄華「そうですね。聞いて下さいまし！お兄様はともかく、焰耶さんが、この顔でお姉様に会いに行くのと仰いますのよ？どう思いました!?」

栄華の話の聞いて、皆焰耶の顔を見たら、

秋蘭「ないな。」

季衣「うん。ないね……。」

華命「焰耶、ひどい顔つすよ?」

柳琳「焰耶さん、流石にその顔でお姉様に会うのは……。」

流琉「ですね……。」

焰耶「いや……ああ……うん。分かってるんですよ?」

春蘭「……何だ、まだ二日酔いが抜けていないのか?だらしない。」

そう。純達は、秋蘭の妊娠祝いで昨日酒を飲んでおり、純はさほど飲まなかったのだ

が焰耶はついつい飲み過ぎてしまい、二日酔いの頭を抱えていたのだ。

焰耶「何で皆はそんなに元気なのですか?お館と秋蘭様はともかく、春蘭様は私と同じくらい酒を飲んでた筈では。」

春蘭「あの程度の酒で参る方がどうかしているだろう。情けない。」

稟「……そもそも城に戻る前に祝宴という点がおかしいのですよ。城に戻るまでが戦なのですよ。」

栄華「まったく、お兄様とあろうものが、常識を疑いますわよ！」

純「俺だつて普通はしねーけどさ……秋蘭に子供が出来たつて分かつたら、ついな……。」

稟「ついじやありません！」

華侖「えーつ。純兄達、宴会したんすか？羨ましいつすー！」

栄華「そこは羨ましがる所ではありませんわよ！華侖さん！」

柳琳「そうよ、姉さん！」

焰耶「大声出さないで下さい……あいたた。」

風「おや。焰耶ちゃんもとんとんして欲しいですかー？」

焰耶「流石にやめてくれ。頭に響く……。」

華侖「あ、だつたらあたしがやるつすー！とりやー！」

柳琳「ね、姉さん！」

焰耶「や、やめて下さい！」

そう言つて、焰耶は華侖のチョップを避けていた。すると、

華琳「……何？いつまでも報告に来ないと思つたら、何をしているの、あなた達は。」

華琳がやつて来た。

純「姉上。」

春蘭「華琳様！」

純「申し訳ございません、姉上。ちよつと秋蘭の事で色々話しておりました。」

華琳「・・・成程。流石の純も、嬉しそうですね。けど焔耶、あなた水でも被つてきなさい。」

焔耶「・・・はい、華琳殿。」

華命「ねえねえ。純兄は知らなかったようつすけど、華琳姉えは、秋姉えの事知つてたんすか？」

華琳「純も知らなかったんだから、私を知るわけないでしょう？」

純「秋蘭も、軍医に担ぎ込まれて初めて知つたのだからな。」

焔耶「それは一体・・・？」

純「秋蘭は、昔つから医者嫌いだからな。」

そのまさかの新情報に、

流琉「・・・え？」

焔耶「そうなのですか!?秋蘭様・・・。」

と揃つて顔を秋蘭に向けた。

秋蘭「・・・別に医者が好きな者などおらんだろう。」

すると、秋蘭はぶいと顔を背けたのだった。

純「俺には、ちよつと体調が悪いだけで医者を呼ぼうと言う癖にな。肝心な時に自分が行かぬーんだから……。」

季衣「僕も食べ過ぎた時に、医者に行けつて言われた事が何度か……。」

流琉「……季衣が食べ過ぎたなんて言ったら、秋蘭様じゃなくてもお医者さん呼ぼうかつて言うと思うよ？」

焰耶「……季衣でも食べ過ぎる事なんてあるのか……？」

季衣「焰耶、僕の事なんだと思つてるの……いくらでも入るわけじゃないんだよ……？」

この発言に

稟「え……。」

春蘭「なんだと……？」

季衣「ちよつと……皆!？」

皆驚いてしまった。

純「とは言え、秋蘭は後の事は良いから、安静にしろ。」

華琳「そうよ。つわりが落ち着くまでは暫く掛かるわよ?……だったわよね、風。」

風「そうですねー。もう一月もすれば落ち着く筈ですから、それまでは油断すると……。」

春・秋「……うっ。」

そう言った途端、秋蘭は顔を青ざめたのだった。

純「秋蘭、厠はあつちだ。背中、さすってあげるから。」

秋蘭「は……はい。申し訳ございません。」

純「焰耶、お前に報告を任せるから、顔を洗って報告しろよ。では姉上、これにて。」

焰耶「はっ。」

華琳「ええ。暫くは秋蘭の傍にいてあげなさい。」

純「はっ。」

そう言い、純は秋蘭と共にその場を後にした。

春蘭「……。」

焰耶「……何故春蘭様まで青い顔してるんですか。二日酔いですか？」

春蘭「いや、秋蘭があんな顔をしていたからな……つい……。」

稟「双子ならともかく、そこまで似なくても良いでしょうに。」

華琳「とりあえず、純と秋蘭には休みを取らせるわ。純の仕事に関しては、焰耶、あ

なたがやりなさい。」

焰耶「はっ。」

華琳「季衣、流琉。」

季・流「はいっ。」

華琳「秋蘭が復帰するまでは、二人で秋蘭の仕事を引き継ぎなさい。」

季衣「はい！」

流琉「分かりました！」

華琳「さて、話はここまでよ。焰耶、改めて今回の件の報告をなさい。桂花と郭嘉も

同席するように。」

焰・桂・稟「はっ！」

凧「純様、秋蘭様！おめでとうございます！」

真桜「おめでとー！」

沙和「おめでとうなのー！」

その日の夜、城で開かれたのは、純達の無事の帰還と秋蘭の妊娠を祝う祝宴だった。

純「ああ、ありがとう、三人とも。」

真桜「けど、報告を聞いてホンマびつくりしたわ・・・。」

凧「そうですよ。私も驚きました。」

秋蘭「皆にも心配を掛けたな。だがあの程度、かすり傷に過ぎん。」

矢には毒が塗られておらず、医者話でも傷跡を残さずに治ると言われたのだ。

凧「秋蘭様も女性なのですから、もっと体の事は大事にして下さい。・・・自分のよ
うになつては・・・。」

純「凧も十分魅力的だぞ。」

凧「じ、純様!? 秋蘭様の前で、そのような・・・。」

秋蘭「私も凧は魅力的だと思ふが?」

それを言われた凧は

凧「あ・・・あうう・・・し、失礼しますっ!」

顔を真っ赤にしてその場を後にしたのだった。

沙和「ああ・・・凧ちゃん、待ってなのー!」

真桜「なら大将、秋蘭様、また後でなー!」

そう言い、沙和と真桜は凧の後を追ったのだった。

華命「秋姉え! おめでとうっすー!」

栄華「改めて、おめでとうございますわ。」

霞「おめでとさん!」

秋蘭「うむ。三人もありがとう。」

三羽鳥と入れ替わるように霞達もやって来て、お祝いの言葉を述べた。

栄華「・・・お加減、よろしくありませんの？顔色が少し悪いようですけれど。」

秋蘭「大丈夫だ。純様や皆にもこれから心配を掛けるが、すまん。」

華命「そんなの気にしなくていいですよ！それより、お腹触っても良いっすか、秋姉え
！」

秋蘭「ふふ、構わんが、まだ膨れてもいないぞ？」

華命「気分の問題っすー。」

すると、華命はそのまま嬉しそうに秋蘭の腹にそつと手を触れてみせた。

華命「・・・あれ、何か動いた気が。」

栄華「気のせいでしょう。ねえ、秋蘭さん。」

秋蘭「うむ。流石に気が早いぞ。」

霞「・・・けど、やっぱり秋蘭が最初に身籠もったかあ。いつも純と一緒にやったか
らな。」

秋蘭「正直、一番驚いているのは私だよ。・・・まさか妊娠してるとは思わなかった
からな。」

純「俺も驚いたよ、流石に。」

霞「せやろな。」

栄華「ほら、華侖さん。あまり触ってばかりいても、秋蘭さんに迷惑になるでしょう？」

華侖「うー。．．．それじゃあ秋姉え、赤ちゃんおつきくなったら、また触らせて欲しいっすー！」

そう言つて、霞達はその場を後にし、残つたのは純と秋蘭の二人だけになった。

純「つたく、気が早えーんだよ、アイツは．．．」

秋蘭「しかし．．．良いものですね、純様。こうして皆に祝福してもらえんというの
は。」

純「そうだな。少しは実感、湧いてきたか？」

秋蘭「まだつわりがあるだけで、そこまでは殆どないですが。まあ．．．時間がなん
とかしてくれるでしょう。」

純「俺もそう思う。けど．．．」

秋蘭「ん？純様も触りますか？」

純「え、良いのか？」

秋蘭「当然です。ここに宿っているのは、純様と私の子ですよ。」

純「そうか。なら．．．」

そう言つて、純は秋蘭の腹を触つた。

秋蘭「ん……。」

秋蘭は擦ったような顔をしたが、拒むことなく、寧ろ幸せそうな表情をしていた。

秋蘭「純様……。」

純「ん？どうした、秋……！」

すると、純は秋蘭に呼ばれ顔を向けると、秋蘭に口付けをされたのだった。

そして、

秋蘭「大好きです、純様。」

と言った。それを聞いた純も、

純「俺も、大好き。」

そう返して口付けをしたのだった。

最終話

陳留・城内

華琳「あら、純。」

純「ああ、姉上。・・・隣町の視察ですか？」

華琳「ええ。今日の時間しか取れなかったのだけれど・・・純こそ随分と早いのね。」
純「ちよつと兵の視察に向かおうかと思ひ、そのついでに秋蘭に会いに。」

栄華「そうですね。お兄様は相変わらずお優しいですわ。」

純「それでもねーよ。アイツも大分身重になつてきたから、様子を見てやらんと。」

華琳「そう。まあ、秋蘭が唯一素直になれるのはあなただけだね。」

純「恐れ入ります。では姉上、俺はこれにて。姉上も道中お気を付けて。栄華もな。」

華琳「ええ。」

栄華「ありがとうございますわ。」

そう言つて、純は華琳達と別れた。

そして、純は秋蘭の部屋に着いた。

秋蘭の部屋前

純「秋蘭、俺だけど、入って良いか？」

秋蘭「はい、どうぞ。」

そう言われ、純は部屋の中に入った。そこには、大分お腹が膨れた秋蘭が椅子に座っており、身の回りの世話を命じられている流琉も一緒にいた。

仕事に行く前に秋蘭の部屋に行き、顔を合わせるのがここ最近の純の日常だった。

秋蘭「おはようございます、純様。」

流琉「おはようございます、純様。」

純「おはよう。今日の調子はどうか？」

秋蘭「はい、体調は問題ありません。」

純「相変わらず早起きだな。無理して早く起きなくても良いんだぞ。」

秋蘭「そういうわけではありませんが・・・普段純様と一緒にいるときも早く起きて

いるので、その時と同じくらい起きないと気持ち悪いのです。」

純「・・・そっか。」

すると

流琉「そういえば、妊娠なさる前は、いつも純様と一緒に過ごしていたのですか？」

と言った事を聞いた。

秋蘭「流石にいつもではないが、殆ど純様の部屋にいたな。」

純「まあ、幼い頃から寝食をずっと共にしてきたからな。」

流琉「へえ・・・。」

純「今の染みついた習慣を変えるのは難しいもんな。」

秋蘭「はい、そうですね。」

純「でも、最初の頃と比べたら落ち着いてきたな。」

流琉「そうですね。最初の頃は、つわりが酷かったですからね。」

流琉「一時は食事の匂いですら駄目で、重湯しか食べられなかったですから。」

純「そうだったな。あの時は本当に心配したよ。」

秋蘭「その間、純様と流琉は私の身の回りの世話をしてくれ、感謝しております。」

純「別に大したこととしてねーよ。」

流琉「わ、私はただ、当然の事をしたまでです！」

秋蘭のお礼に、純は照れくさそうに言い、流琉は顔を真っ赤にして謙遜した。

純「それじゃあ、俺、兵の視察に向かうから。秋蘭、また後でな。」

そう言つて、純は秋蘭を優しく抱き締めた。

秋蘭「はい、また後で。」

それに秋蘭も、幸せそうな表情でそう答えた。

純「流琉も、秋蘭を頼むぞ。」

流琉「はい、お任せ下さい！」

そして、純は秋蘭の部屋を後にした。

流琉「相変わらず純様と秋蘭様は仲が良くて良いなあ……。」

秋蘭「ふふつ、流琉にもそのうち良い縁があるさ。」

流琉の言葉に、秋蘭は笑つてそう言ったのだった。

そして、純は視察が終わつて書類を纏めた後、真っ先に秋蘭の部屋に向かった。

秋蘭の部屋

秋蘭「この子を身籠もつて、色々な事に気付きました……私、本当に幸せです。」

純「きっとその子も、秋蘭と同じように幸せだと思ってきてくれるよ。」

秋蘭「そうでしょか・・・そうだったら良いのですが・・・。」

純「産まれてくる子、どっちだろうな。」

秋蘭「男か女かって事ですか？」

純「ああ、秋蘭はどっちが良い？」

秋蘭「私はどちらでも構いません。男でも女でも、私と純様の子には変わりありませんから。」

秋蘭「元気に産まれてきてくれるなら、どんな子でも愛おしいと思う、それは純様も同じお思いの筈。」

純「ああ、そうだな・・・。」

そう言つて、純は微笑む秋蘭の元へ歩み寄ると、膨らんだお腹を優しく撫でた。

純（この温もりの向こうに、俺と秋蘭の子がいる・・・。）

そう思うだけで、純の胸の中は幸せな気持ちで一杯になった。

純「早く会いてーな。」

秋蘭「はい、私もです・・・。」

その時、

秋蘭「あ・・・。」

純「どうした？また赤子が腹を蹴ったのか？」

秋蘭「ちがつ・・・これは・・・うあ・・・」

秋蘭の表情が変わった。

純「秋蘭っ!?!どうした!」

それを見た純は、しやがみ込んで秋蘭の手を握った。すると、秋蘭は力一杯純の手を握り返してきた。

さつきまで穏やかだった表情が苦痛に歪み、額に脂汗がにじみ出していた。

秋蘭「あうっ、あああ・・・じ、純様・・・」

純「誰がいるかっ!!」

純の声に

流琉「純様、どうかなさいましたか!?!」

季衣「純様!秋蘭様!」

秋蘭の部屋の前の扉に立っていた流琉とその場に偶然いた季衣が入ってきた。

純「季衣!すぐに産婆を!そのまま城の皆と視察に出ている姉上に伝えて回るんだ!

秋蘭が産気づいた!」

季衣「は、はいっ!」

純「流琉は出産の準備を!段取りは聞いているんだろ?」

流琉「わ、分かりました！」

純の命令を聞き、季衣と流琉は部屋を出て行った。その音を聞きながら、純は秋蘭の顔をじつと見つめ、すがるように握られた手を両手で包み込んだ。

秋蘭「はあう、あつ・・・はあはあ・・・純様・・・うつああつ・・・。」

純「ここにいる、ちゃんとここにいなからな！」

秋蘭「・・・二人して、会いたいなんて言うから、この子が気を利かせてくれたのかもしれませぬね。」

純「だとしたらきつと、秋蘭みたいな優しい子なんだろうな。」

秋蘭「そうかもしれませぬね・・・うぐうつ・・・。」

辛そうな様子を見た純は、

純「・・・その体勢じゃ辛いよな、今寝台に連れて行くから。」

秋蘭「お願いします・・・。」

握っていた手を離し、秋蘭の体をそつと抱き抱えそつと寝台に寝かせた。そして、床に膝をついて再び秋蘭の手を握った。

純「すぐに産婆がやって来る、大丈夫だからな。」

秋蘭「はい・・・うつ、ああつ・・・。」

純「秋蘭・・・！」

苦しそうにしている秋蘭を見て、純は握る手を強めた。

秋蘭「ああうつ、ああつ．．．んぐうつ．．．」

純「秋蘭っ！」

秋蘭「純様．．．うつ、ああ．．．」

その時、

流琉「産婆さんをお連れしました！」

流琉が産婆とその助手を連れて部屋に入ってきた。

純「秋蘭、産婆が来てくれたぞ！」

秋蘭「そうですか．．．ならば後は私が頑張るだけですわ．．．」

純「ああ、俺も傍に．．．」

すると、

秋蘭「駄目です．．．純様は外に出ていて下さい．．．」

と秋蘭は純にそう言った。

純「しかし．．．」

秋蘭「お願いです．．．痛みでどうにかなってしまう前に．．．」

秋蘭「泣いたり叫んだりしている姿を．．．見られたくないの．．．」

純「秋蘭．．．」

秋蘭「お願いです……純様……」
それを聞いた純は、

純「……分かった。部屋の外にいるから。出産が終わるまで、ずっとそこにいるから。」

と秋蘭に言った。

秋蘭「ありがとうございます……何より心強いです……」

その時、純は気持ち以上の何かを伝えるように、一度だけ強く握ると、立ち上がって秋蘭の手を放した。そして、

純「愛してるよ、秋蘭……」

秋蘭「私も、愛してます……」

とお互いにそう言った。そして、

純「……秋蘭を頼む。」

と純は産婆にそう言つて部屋を後にしたのだった。
部屋を出ると、

春蘭「純様っ！」

純「春蘭……」

春蘭が息を切らしてやって来た。

春蘭「はあはあ・・・今つ、季衣から聞きました・・・秋蘭が産気づいたって・・・。」

純「ああ、ついさっきな・・・とりあえず、落ち着け、走ってきたんだろ？」

そう言われた春蘭は、その場で深呼吸した。

春蘭「・・・それで、純様はどうして部屋の外にいますか？」

純「秋蘭が、そうして欲しいって・・・。」

春蘭「そうですか・・・。恐らくアイツは、出産に苦しんでる姿を純様に見せたくなかつたんですよ。」

純「・・・そうか。」

春蘭「・・・秋蘭、大丈夫でしょうか？」

そう言い、純と春蘭は部屋の扉を見つめた。すると、

流琉「あ、お二人とも・・・。」

部屋の扉が開いて、流琉が出てきた。

純「流琉、秋蘭の様子は・・・。」

流琉「今は少し落ち着いています。陣痛には波がありますから。」

春蘭「それはどのくらい続くのだ？」

流琉「少しずつ痛みの間隔が短くなつて、それから出産ですから・・・。」

流琉「すぐに出産となる場合もありますが、人によつては丸一日、それ以上掛か

る事もあるとか……。」

純「陣痛が丸一日も続くのか？」

流琉「個人差があるのでなんとも言えません。ですが、秋蘭様は初産ですから、恐らく時間が掛かるのではと、産婆さんが仰っていました。」

純「……そうか。」

流琉「出産には時間が掛かります。秋蘭様には私達がついていきますから、皆さんには別室で休んでいただいで……。」

純「いや、ここにいる……ここにいさせてくれ。」

流琉「純様……。」

純「秋蘭と約束したんだ。せめて少しでも傍にいたいから……。」

春蘭「私も純様と一緒にいる！」

流琉「お二人とも……分かりました、きつと秋蘭様も心強いと思います！」

そう言つて、流琉は一礼をし、清潔な布を取りに行つた。

そして、日が傾き始め、夕方になった。人の出入りが慌ただしかったのは最初だけで、後は秋蘭の体が出産の準備を整えるのを待つだけだった。

その間純と春蘭との間には会話が無く、そのせいか秋蘭の苦悶の声が良く聞こえるのだった。

その声が聞こえる度に、純は自身の心臓が鷲掴みにされるような気持ちになった。その時、

華琳「凄い顔してるわね……。」

声のする方に振り返ると、華琳がいた。

純「姉上っ！」

春蘭「華琳様っ！」

華琳だけでなく、

栄華「私もですわ。」

華命「あたしもっすー！」

柳琳「私も来ました。」

曹一門皆が来ていた。

純「お前らも……。」

華琳「知らせを聞いて、仕事を一部の人に任せて来たのよ。」

純「そうですか……。」

すると、

華琳「純……心配しなくても、秋蘭なら大丈夫よ。信じなさい。」

と華琳は純を真つ直ぐ見つめてそう言った。

純「・・・はっ。」

純も華琳の言葉にそう言った。そして、曹一門皆秋蘭の部屋の前で秋蘭の出産を待ったのだった。

そして、日も完全に沈んだ。動きがあつたのは、日が沈んですぐの宵の口だった。秋蘭の痛みを訴える間隔が、どんどん短くなつていったのだ。

流琉曰く、

流琉「いよいよです。」

と言ひ、皆の顔に緊張が走つた。

流琉「とは言え、どれくらい時間が掛かるのかは分かりません。・・・皆さんも無理をせず、お休みになつて下さい。」

そう言ひ、流琉は厨房へと足早に歩いて行つた。

純「いよいよか・・・。」

そう言つて、純は祈るように目を閉じた。扉の向こうから、痛みを耐える秋蘭の声か聞こえた。それは少しずつ間隔が短くなり、同時に激しさを増していった。

純（秋蘭・・・。）

すると、秋蘭の声がまた一段と大きく、激しくなつた。それを聞いている純は、とても辛くなつた。まだ自分が傷つけられているほうがマシだと思つてしまふ程、秋蘭の声

は痛々しかった。

そして、永遠とも思える長い時間に、部屋の外でじっと待つ純達の所にまで、秋蘭の絶叫の音が響いたのだった。そして、暫くの沈黙の後、

「・・・オギャー、オギャー！」

産声が聞こえた。

純「これ・・・赤子の・・・。」

華命「そうっす！絶対そうっすよ！」

華琳「・・・ふう。」

そして、流琉が出てきて、

流琉「産まれましたっ！元気な・・・元気な男の子ですっ！」

そう言った。

「「「いやったー!!!」」」

すると、純含め、皆が喜びの声を上げたのだった。

純「秋蘭は？秋蘭も大丈夫なんだよな。」

流琉「はい！大変お疲れではありますが、産婆さんが仰るには、今の所母体にも問題

は無いと！」

純「良かった・・・本当に良かった！」

純「秋蘭に会えるか？」

流琉「少々お待ち下さい、今確認して参りますっ！」

そう言い、流琉は一度部屋に戻って産婆と確認を取った。そして、確認を終えて部屋を出ると、

流琉「このまま秋蘭様が落ち着かれていれば、大丈夫だそうです！」

と言った。

純「・・・分かった！」

そして、少しして産婆から入って良いと告げられて、純は部屋に入った。

秋蘭の部屋

部屋に入ると、寝台に穏やかな表情で横になっている秋蘭と、産まれたばかりの赤ん坊が、瞼をきゅつと閉じて眠っていた。

純「秋蘭、お疲れ。良くやったな。」

秋蘭「純様・・・こんな格好で申し訳ございません。」

純「気にするな。・・・この子が、俺とお前の・・・」

秋蘭「はい……私達の子です。」

それを聞いた純は、

純「そうか……そうか……。」

と涙を堪えながらそう言った。

純「……秋蘭。」

秋蘭「はい……。」

純「俺さ……色々考えてたんだ……出産が終わったお前に何を伝えようかって……。」

秋蘭「はい……。」

純「でもこう、いざその瞬間になるとき……考えてた事が全部どっかに飛んで行っ

ちやつて……。」

純「一つだけしか残らなかった……聞いてくれるかな。」

秋蘭「はい……。」

すると、頬に涙を流しながら

純「ありがとう、秋蘭……。」

秋蘭「純様……。」

純「産みの苦しみを乗り越えてくれてありがとう……元気な子を産んでくれてありがとう……。」

純「俺を、この子の父親にしてくれてありがとう……。」
そう秋蘭に言った。すると、

秋蘭「それは私の台詞です……。」

秋蘭「私を、この子の母親にしてくれてありがとうございます……純様の子供を産む事が出来て、本当に幸せです。」

と秋蘭も涙を浮かべながらそう言った。

純「秋蘭っ……。」

それを聞いた純は、益々涙が止まらなくなつた。安心や、幸せといった、そういう温かな気持ちで胸が一杯になつて言葉にならなかつた。

それを見た秋蘭は、自らの手で純の手を優しく包み込んだ。

純「秋蘭の手は温けーなあ……。」

秋蘭「純様の手も温かいですよ……。」

そう言い、お互い幸せそうな笑みを浮かべたのだつた。

純（——お前が傍にいてだけで）

秋蘭（あなたに寄り添うだけで——）

純（——幸せが溢れてくる）

秋蘭（安らぎを感じる——）

純（——いつも傍にいて欲しい）

秋蘭（あなたと共に生きたい——）

純（——お前と笑い合いたい）

秋蘭（あなたと喜びを分かち合いたい——）

純（——お前の事を思うと）

秋蘭（あなたの事を考えると——）

純・秋（胸の中がこんなにも温かくなるのだから——）

完